
魔法先生ネギま 魔法と転生だ！メダロット

ハーヴェイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま 魔法と転生だ！メダロット

【Nコード】

N3202V

【作者名】

ハーヴェイ

【あらすじ】

女神のミスで死亡して転生者になり、能力をもらって少し変わったネギま世界へ行くことになりました。さまざまな能力や前世のネタを駆使して面白おかしく生きていこうと決めた転生者はどのような物語を紡いでいくのだろうか…

これは、「魔法先生ネギま！ 魔法と転生と友達と・・・」のリメイク版です。

プロローグ（前書き）

リメイク開始！！

プロローグ

そこは何もない空間で辺り一面真っ白だった。

自分は確か病院で死んだはずだけど…

そんな事を思いながらボケ々としながら辺りを見回してみるとそこには機械的なデザインの人が立っていた。

「そろそろ起きてくれんない…」

そんな声が聞こえてきた

あたりを見回してみる。

「どこどこ？」

目の前に

機械でできた甲冑

ブースターをつけた剣のようなもの

小ぶりの盾を持った…

なんでノエル？

なぜかそこには、メダロットnaviの隠し機体であるVAL型メダロットのノエルがそこにいた。

だが、本物のメダロットならこんなに大きいわけではない。

本来、メダロットは全長1m程である。

だが、目の前のノエル（仮）は150当たりあった。

「いや、この姿は趣味だから…」

趣味っておい…

てゆうか、あんた誰？

もしかして、まんま戦乙女とかいうオチなのかな？

ヴァルキユリア

「違うわよ、どっちかっていうと女神ね」

女神と来たか…

女神様もメダロットやるんだなあ…

と、思っていると…

「いや、まじめに聞いてくれない？」

サーセンwwww

で原因は何？

「いや、寿命の書類をミスしちゃってさ病死する人の書類とあんたの書類を間違えちゃたんだよ」

はあ、中学上がってから一気に体が悪くなったけどそのあたりからか…

「その通り」

でそのミスを解消するために、二次小説とかであったような転生をするの？

一応、聞いておこう

「それもあるし、ほかの神々もやってたからね、メダロットだけじゃ飽きてきたし・・・」

お前、それでいいのか？

「いいのよ」

はあ、

で、なんか能力とかもらえるの？

テンプレ道理ならもらえそうだけど...

「あげられるわよ、ほしい能力は何、エクス約束されたカリバー絶対勝利の剣？、基本能力チート、斬魄刀もあるわね、それとも直死の魔眼、まあデバイスだろうがなんだろうが大抵の奴なら用意できるけど・・・」
色々あるな・・・

ゲーム以外の能力もありかな？

「ええ、ゲームだけじゃなくてアニメや小説、漫画からも可能よ」

じゃあ・・・

能力は、練磨チートとfate/extraの赤セイバー
キヤス狐の技と術、後、装備と宝具ね。後は東方の霊夢の感と物造
りのスキルと黄金律をBくらいと頭脳がほしいな

このくらいかな。

「その反動として初期能力は一般並みにしておくよ。でも、珍しい
わね。ほかの転生者は投影や王の財宝とかの宝具や仮面ライダーと
かの能力を4、5個よこせとか言ってくるんだけどなあ？」

あんまり多いと使わなくなるかもしれないし、このくらい
でちょうどいいのよ

「それだとつままないな？」

じゃあどうしようと

「そつだ、フリゲで見つけたあれをつけよう」

神様もインターネットやるんだ。

何をつけるつもりなのかしら？てゆうか、付けるような能力あるの
かな？

・
・
・

包丁さんのうわさで出る万能包丁さんの包丁、あるいは、ムーン
ライトオワタの魔王リリアの力くらいしか思いつかない…

「ジョジョの奇妙な旅の七人目のスタンド使いがおもしろくてね、あなたにスタンドを授けようと思うの。」

何それ？
でもスタンドか。

ありがたくもらうけどいったい何をつけるの、スタープラチナ星の白銀？

「いや、あなただけのスタンドをつけるわ。その方が面白そうだし、転生したての頃は発現しないけど、そのうち覚醒するから。あつ覚醒したときにそのスタンドの能力を教えてあげるから。後、転生する世界案だけど…」

すっかり忘れてたZ E

そういえば、何の世界に転生するの？

「あなたには魔法先生ネギまに行ってもらいます」

あれか…それなりに好きだったな赤松ワールド
でもあれ死亡フラグ満載なんだよな

「少し、世界をいじってあるからそこんところよろしく
いじった？何したこの女神。」

「その内わかるわよ。原作ブレイクもOKよ。それじゃあ……上からくるぞ気をつける……！」

……！！

そういつて視線を上の方に向けるが何もなく…

下に穴が開いた。

「じつめーん 下だったー!」

おiiiiiiiiiiii…!!!

「さてさて、これからはどんな物語を紡いでいくのかな…」

そう言い放ち、私の視界はブラックアウトした。

「生ま…は…カ、今…女…だ」

そんな声が聞こえてきたが、

「あ…ナ…も子…恵ま…とは…いの」

どうやら私は無事に転生したらしい。

さて、私の親はどんな人なのだろうな…

「名は私がつけよう。この子の名はハクカじゃ、ハクカ・スプリングフィールド」

What?

スプリングフィールド?てことは・・・

「おんぎゃーーーーー!!! (主人公組かよーーーーー!!!)」

病室にハクカの絶叫が響き渡った。

プロローグ（後書き）

ところどころおかしい点があると思いますが、基本的な流れは同じだと思います。

プロローグ？

ハクカ・スプリングフィールド

それが今の私である。

現在は3歳で容姿は金髪のショートでオッドアイである。…どうしてこうなったorz

ちなみに今は原作通りウェールズのネカネ姉さんの所に預けられ、そこで暮らしていた。

しかし、村のみんなは妙な視線で私を見ている。それも何か恐れているような…

私の母である「災厄の魔女」の面影があるからであろう。

それに、兄であるネギは幼いにもかかわらずかなりの魔力を持っているから、私にも期待していたらしいが、カケラ程しかない魔力に落胆の色を隠せないようだ。

そんな感じで、あたしは「落ちこぼれ」、「英雄の搾りカス」と認識されたらしい。

…ガキになに期待してんだかあの狂信者どもは

と、考えていると…

「どーしたの、ハクカ？」

「えっなにが？」

「いや、なんか怖い顔してたから、何かあったの？相談に乗るよ。」

私の兄であるネギ・スプリングフィールドは、原作と違ってあまり父さん、父さんと言わなくなっていた。幼馴染のアンナさんから

もよくしてもらっている。

「いや、もし未来に兄さんがハゲたらいやだな〜と思っただけよ」

「ハゲないよ！？ずっとふさふさだからね!？」

「大丈夫ですよ、ネギ兄様。そうならないように育毛剤を作っ
てあげますから」

「ハゲること前提なの!?!?!?!」

と、こんな感じでボケたり簡単な鍛錬（ランニングや素振り）を
したりと割と楽しい日々を過ごしていた。

そんなある日のことである。

なんか嫌な予感がする

悪魔襲撃の日までまだまだ時間があるはずなのに…

「ネカネ姉さん、ちょっと散歩に行ってくるね」

あたりを警戒しておくことにしよう。

「わかったわ、夕飯までには帰ってきなさいよ」

そういつて町の方へと出かけて行った。

さて、いったい何が起こったのかな

町に行つて適当にぶらついていたら、妙な気配を感じた。殺気見たいな気配である。

人気のない路地裏に誘導されたみたいだ。

「で、なんか用？」

来た道の先からロープをまとつた細身の男が現れた。

「お前のような落ちこぼれがいると英雄の息子の名が穢れるんでな、正義のために死んでもらうぞ」

そう言い放ち、杖を構えてきた。

どうやら正義（笑）の魔法使用のようだ。

「正義が人殺ししても良いわけ？」

無駄だと思うけど聞いておこう。

「貴様の存在は災いを呼ぶからな、早いうちに駆除しておいたほうがいいだろう！！」

「戯言はやめろよ、どうせどっかから依頼されて金のためにやっているんだろ……」

「よくわかつたな、お前を殺せばそれなりの金を用意してくれるらしいぜ」

つまりは、元老院あたりか。

「正義が聞いてあきれね……」

「ほざきやがれ、氷の精霊、26頭、集い来りて、敵を切り裂け、魔法の射手・連弾、26矢！！」

「つく」

とつさに障壁を張り飛来してくる氷属性の魔法の矢を何とか防ぐことができた。

だが…

「おいおい、何安心してんだ。おれ一人だけだと思っただか？」

ハクカの視線が前方の魔法の矢に集中していたため背後から現れた小太りの男に気づくことが出来なかった。

「死ねや糞ガキ、魔法の射手・炎の矢・3矢」

くそ、間に合わない！！

障壁の展開も間に合わず、直撃してしまった。

「ぐあつ！！？」

放たれた魔法の矢が右足と左肩に当たってしまい、肉の焼けるようなおいと激痛に襲われた。歯を食いしばり、痛みに耐える。

「へへへ、後はとどめを刺すだけだな」

男たちは下種な笑みを浮かべ、勝利を確信した。

「死体を残すなよ、こいつには行方不明になってもらうからな」
「んじゃ、転移の方は任せたぞ」

小太りの男がトドメを刺そうと近づいてきた。

こんなところで死ぬのか？

まだ、3年くらいしか生きていないのに？

ふざけるな！！！！

私は生きる。そのために、目の前の敵を殺す！！

「死んでたまるかああああああ！！！！」

そう叫び、頭に浮かんだ言葉を唱えていく

「其の物は、人に非ず、物に非ず、その身は、主の剣であり、盾である。わが、背後に立つ者は人形なり」
スタンドひとかた

その声に応えるかのように、目の前に金の髪、緑の目に赤いドレスを着た少女が現れ、右手にある赤い剣で小太りの男の片腕を切り裂く。

男の腕が宙に舞い、ポトリと地面に落ちた。

「ぎゃああああああああああああ！！！！俺の腕がああああああ！！！！」

スタンドは切り落とされた部位を抑える男に近づき

『黙れ、下郎！！！！』

紅い剣を振り下ろし、その首を断ち切る。

そして、もう一人の敵に狙いを定める。

・
・
・

細身の男はいきなりの出来事に理解できずにいた。

自分よりはるかに弱い存在に同僚を殺された。相手は、ただのガキ
と思っただが奇妙な魔法を使う悪魔なのか？

自分は正義の魔法使いだ！！正義が負けるはずがない！！

「せつ正義が負けるはずがないんだああ！！」

そう叫ぶ男の胸に同僚を切り裂いた紅い剣が胸に突き刺さり絶命し
た。

〈 SIDE ハクカ 〉

初めて人を殺した。でも、今はそんな事にかまっていられない…

細身の男が死体処理のため使うはずだった強制転移が暴走してしま
った。

このままではどこかに飛ばされてしまうようだ。とりあえずいくつ
かの選択肢を思いつくが…

- 1・パーフェクトなハクカ様はなんとかして範囲外まで逃げる
- 2・誰かが助けてくれる。
- 3・ムリ 現実是非情である。

1、足打ち抜かれてるし、スタンドで何とかしようにも操作に慣れ
ていなし、王家の魔力でもない限り不可能。

2は、人除けの結界が張ってあるため、助けは見込めない。
ということ…

答えは3、答えは3、答えは3

こんなことなら遠慮なしにチートステータスをもらっとけばよかつ

たな・・・
もっとネギをいじり倒したかったな…

血を流しすぎて、薄れる意識の中そんなことを考えていた。辺りが白い光に包まれていった。

そして、ハクカ・スプリングフィールドはウエールズの地から姿を消した。

＼ SIDE 秋葉原 亜土夢 〵

今日は久しぶりに休暇を取ることができたので孫と一緒に買い物に出ていた。
普段はあまりかまってやれないから今日一日は目いっぱい遊んでやる。

「おじちゃん、こっちこっち!!」

孫の笑顔はまるで太陽のようだ。大きくなったらきつと美人になるんだらうなあ…

・・・今、親ばかりだったやつちよつと来い。

そんなこんなで、夕方になっていった。

「今日は楽しかったよおじーちゃん」

「ああ、ごめんな苗いつも一人にできて…」

両親に先立たれ、一人にできてしまってさみしい思いをさせてしまっているの…

「大丈夫、友達もいるし、それにへべレケのおじちゃんも遊んでくれるからさみしくないよ。」

へべレケ…あとでOHANASHIする必要があるようだな。

「あれ、おじーちゃん今何か光らなかった？」

「すまん、見てなかった。どの辺が光ったのだ？」

「その路地裏あたりなんだけど…ちよつと見てくる…！」

そついつて苗は走っていった。路地裏をのぞいたと思ったらあわてて戻ってきた。

「おじーちゃん！！大変、女の子が血を流して倒れてるの…！！」
「なに！？」

そこには、年端もない少女が怪我をしていた。
肩を何かで撃ち抜かれ、足も負傷していた。急いで救急車を呼び、応急処置を施した。

「君、大丈夫か…！」

買ったものの中にあつた包帯などで止血をしておいた。

「……う……」

「大丈夫だからね、もうすぐ救急車が来るから」

苗が少女の手を握り励ましていると救急車が来た。

「苗、おじいちゃんは、この子と一緒に病院に行くが苗はどうする？」

「一緒に行く!!」

頑張れよ、お嬢ちゃん……

プロローグ？（後書き）

一応言っておきますが、秋葉原 亜土夢はメダロット博士のことで、苗はメダロット博士の孫であるナエさんです。

次回は、今後についてです。

プロローグ？（前書き）

今回でプロローグは終了です。

プロローグ？

目が覚めるとなんか女神がいた真っ白空間で寝転がっていた。
え〜と．．．たしか私は正義（笑）の魔法使いに襲撃にあつて殺害
してどっかに飛ばされて…

「はい、さっさと起きてね〜」

その言葉をとりあえず体を起こした。

あれ？女神さん、身体がブロッソメールに見えるんですが…

「いや〜イメチェンって奴よ、いつまでも同じ格好だと飽きるから
ね」

そうですか．．．ところでなんでまたここに？私はまた死んだんで
すか？

「大丈夫、生きてるわよ」

じゃあなんでここにいるの？

「あなた、スタンドが覚醒したじゃない、だからその能力の説明と
か色々な話をしないとね」

あれスタンドなんだ…
ていうか…

「すっごい中二な呪文だったわね」

言わないで無我夢中だったんだから。
ていうかあれ、あなたが仕込んだんでしょ…

「よくわかったわね、死にかけたら緊急覚醒するように設定したんだ。ついでに呪文もね。スタンドの方はあなた自身の能力よ。私はただ覚醒を促しただけ。呪文の方は、スタンドの呼び名がないからこうすればいいかな〜って思って作ったんだ」

さいですか。

で、どんなスタンドなの？名前は能力とか聞いて決めるわ。

「一言で表すなら着せ替え人形ね、その着ている服でジョブを決める…なりきりダンジョンみたいなものよ。ちなみに、出てきたときは「紅の暴君」っていう服なの。能力はまんま赤セイバーね。で、人間サイズで出てきたけど普通の人形サイズで出すことも可能よ。小さい分複数の人形を出すことができて、それぞれ違う服を着せることが可能よ。その分、弱くなるわ。っとこんな感じよ。後、自分の技能を移すこともできるから。スタンドの制御はあなた次第ね」
なるほど、汎用性の高い能力だね。でもそれって億安の兄が使ってたスタンドに似ていない？

「気にしない、気にしない。あつちは現代兵器や物理系の攻撃だけでこつちはそれに加えて魔法による補助や敵の弱体化も可能なの。で…名前は決まったかな？」

着せ替え人形…複数…軍団…

決まった。このスタンドの名前は、

一人形の軍団（ドール、ズ・レギオン）

「…いいんじゃない。そんな感じでも、あらゆる戦場に適應できる人型の軍団」

ほかの服とかはどうすれば？

「基本はイメージして着せたり、作ったものを素体に着せて、ならしていけば登録されるってな感じだから」

おk把握

「それじゃあ起こすから。右手にお玉を！左手にフライパンを！横たわりし者に正義の鉄槌を！！」

おい、ちょっと待て。その技は…

「秘技！！死者の目覚め　！！！！」

ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！

・
・
・
「ウギヤ　！！」

はっ！？ここはどこ？私はムスカ大s…じゃなくてハクカ…最後の「カ」しかあってねえよ。

あの女神は…もう少し優しく起こしてくれよな…

「知らない天井だ」

目を覚めると、見覚えのない病室のようなところだった。
今の状態をチェックしてみよう。

ここはどこ？……どっかの病院、窓から見た景色は、ビルやコンビニなどが日本語で書かれているあたり日本の可能性が高い。

なんでここにいるか？……正義（笑）の魔法使いの転移魔法の暴走でどこかに転送したみたいだ。

怪我とかはどうなっている？……魔法ではなく、普通に縫ってある。

今の格好は？……包帯グルグル巻きにされているミイラ男みたいな格好だ。あっ！この場合はミイラ女か…

と、考えていると、

「目が覚めたかね？」

部屋のドアからデコから後退気味の黒髪に丸メガネと白衣の人がいた。

隣には、同じく黒髪で幼い少女というか幼女がいた。

「苗、先生を呼んできてくれ」

「わかった」

そういつてナエとよばれた少女は出て行った。

「さて、君は何者かな？」

雰囲気が変わった。

穏やかな雰囲気からピリピリしたような空気になった。

「魔法…君の怪我はこの言葉に関係があるのではないか？」

その質問に驚きながら首を縦に振った。

「やはりか…」

「あなたも関係者なんですか？」

「元…な、今は科学者だよ」

そう話していた内に、さっきの少女と医者らしき人が来た。

「連れてきたよ」

「おおご苦労様。ああそうだ、これからこのこと大事な話があるから、少し待合室で待っていてくれないか？」

「わかった！」

そういって苗と呼ばれた少女は出て行った。

「ちなみに、こやつも関係者だ」

「おい、秋葉原やっかい事はパスじゃぞ」

そういって、医者のような人は顔をしかめた。

「とりあえず、名前とか、ここに飛んだ理由とかを聞いておこうか。」

「

「わかりました」

「名前はハクカと申します。苗字のほうは、勘弁してください。そのせいで襲われたんで…ここに飛ばされた理由ですが、簡単に言うてしまえば汚点の解消ですね。」

「汚点だと？」

「はい、一応、魔法使いとしてはそれなりの知名度がある家柄なんです。しかし、私は魔力がまったくといっていいほどないんです。そのため、周りからは落ちこぼれ扱いでしたよ」

「やはり、腐っておるな。魔法使いの連中は…」

「ああ、こんなガキになに期待してるんだか理解できんな」

そう言ってくれるとうれしいな。ほかがこんな一般常識のある考えを持つてくれれば…

「続けます。わたしには兄がいるんですが、その兄は、魔力が桁外れに多いのでそれに比べられたんでしょう。兄との関係は良好でした。周りの期待を受けた兄なんです、そのそばにいる落ちこぼれを疎ましく思ったのでしょうか…襲撃を受けてあのざまですよ」

「こつゆう時は両親が守るべきではないのか？」

「表に出られない事情があって、二人とも蒸発しました」

母親が『災厄の魔女』だしね、これがそばにいたら即排除に向かうだろうな…

「襲撃者はもう殺しました。たぶん私も死亡扱いか、行方不明扱いでしょうね」

あの肩どもを雇ったのは元老院がだろうし、ほぼ確定だろう。

「なら、これからどうする？」

「今後の事は決まってるませんね…」

黄金律があるから生活は何とかなるけど、日本だと関東魔法協会があるからな…派手な行動をすれば即御用だろうし、年齢詐称薬も手に入れなきゃバイトもできないからな…

「住むところもないのなら、家に来るか」

そう、秋葉原と呼ばれた人が言った。

「え〜と、本気で言ってるんですか？」

「ああ、こんな子供を放り出すのは気が引けるからな」

「何格好つけてるんだ秋葉原、どうせ、ナエちゃんをさみしくさせたくないからこの娘っこを利用するんじゃない。この爺バカが」

「爺バカじゃないから、ただ苗がかわいすぎるだけなんだよ、このロリコンが!!!」

「だめじゃね〜か…」

これはあれだな、【喧嘩するほど仲がいい】ってやつだろ。ほほえましいやり取りに思わず笑みがこぼれる。

「あはははははは、仲がいいんだねあなたたち」

「よくないわ、てゆうかそっちが素の口調か」

「ええ、そして、その申し出を受けていいかい？」

「もちろんだとも」

「そっちが利用するならこっちも利用させてもらっよ」

「うむ、そういえば苗字はどうする？」

スプリングフィールドを名乗るわけにはいかないし…

「あんと同じでいいよ」

「わかった。戸籍の方は頼んだぞ、へべレケ」

「仕方ないのう。小娘、名前はどつする？」

「漢字にするよ、文字は、白い花って書いて白花でお願いするね」

そうして新しい生活が始まった。

プロローグ？（後書き）

次回からは小学生時代のことなどを書いていこうと思います。

第1話 騒がしかなひなた旅館（前書き）

なんかカオスになったかも…

第1話 騒がしかなひなた旅館

「白花く朝だよ」

そういつて、妹を起こす作業が私の朝の日課。
低血圧らしく、この子は朝は苦手のようね。

「おはよ〜ナエ姉…ZZZ」

「ほら、早く起きて、顔洗ってきなさい。早くしないと朝ご飯抜くよ」

「それだけは勘弁してナエ姉え、朝を抜くとマジできついんだから」

そういつて、飛び起きて洗面所の方へと向かった。

「そういえばさ、今日の朝ごはんはなんなの？」

「サケの切り身に味噌汁、後サラダってところよ」

「それじゃ食卓に乗り込め ^^」

そういつて食卓の方へと走っていった。

ご飯は逃げないんだからもう少し落ち着けばいいのに…

・
・
・
「御馳走様でした」

「はいお粗末さまでした」

朝食を終えて学校へ行く準備をしていると、

「シロちゃんくナエちゃんく一緒に学校に行こ〜」

「ちゅちゃん、少し待っててくれい」

私は準備できたが、白花ちゃんはまだ準備ができていなくてドタバタしていた。

「おはよう、千雨ちゃん」

「うん、おはよう苗ちゃん」

3分くらいしたら、白花ちゃんが来た。

「ごめん、おそくなって…」

「いやそんなに待ってないし、それじゃ行こうか」

ちなみにおじいちゃんは研究所で徹夜らしい。

・

・

・

秋葉原家に来て学校に通い始めて大体3か月がたちました。その間、物造りスキルを使いダオライマの魔法球を作り上げた。外見はNaviのクラスターに似せて作り、内装は和風の道場ブロックやリゾートブロックに研究ブロックを上層に造り、下層に平原や砂漠、雪山、火山などが存在しており、野生の生物も多々存在している。一日1時間設定にしてあり、鍛錬はそこでやっている。師事する人は神鳴流であるが今は体力づくりをやっている。魔法の訓練にスタンドの制御は魔法球の中で訓練している。苗姉さんには低血圧と言って、疲労をごまかしに使っている。ホントダヨ、ネボスケジャナイヨ…

後になって気付いたが、秋葉原つてメダロット博士の苗字じゃん。そういえばあの女神「いじった世界」って言っていたな。ということとは、メダロット系も出すのかな？

後、原作キャラである長谷川千雨と友達になれた。シロちゃんと呼ばれるようになった。私は千雨のことをちくちゃんと読んでいるがな。

今はこの学校に通っているけど、引越したりするのかな？

「おいつす!! 白花」

「おはよう白花ちゃん」

そんなことを考えていたらクラスの友達の宵闇 黒炎と白壁 白間に行き会った。

最初に見たときは驚いたよ…だってメダロット4の四天王の人が普通にいるんだもの。

「おはようさん。お二人ともそれとコクエン…声が小さい!! もう

「丁…」

「「おiiiiiiiiいつす!!!!!!」」

「仲いいね二人とも…そのネタはどこで見たの？」

「この間やってたド〇フでやってたんだ。ビデオにとってあるから今度遊びに来た時に見してやんよ」

面白いよねド〇フ。

この二人はなんていうかコクエンは暴走しているけどハクマがみんなのブレーキみたいな感じなんだよな…

「あつ白花おはよ…!!」

「おはよう、白花」

「おはようキノコ、シュリ」

活発そうな方の女の子は原作ではリバティーズを率いた舞茸 キノコに、そのキノコと犬猿の仲である赤金 朱里。

「そういえば今日は理科のテストが返ってくるんだよねエ…今度こそ…」

「あら？キノコ、私より低い点を取るのが嫌なのでは？」

「と言いつつも、二人とも引き分けが多いんだよ…それに喧嘩するほど…」

「何か言った!?!」

イエ、ナンデモアリマセン。

「ふん！そんなこと言っているけどあんたはどつなのよこのフマツザコンがあー!!」

「誰がフマツザコンどころか…!!!!」

うわ…朝っぱらから乱闘の予感…

「お前ら朝っぱらから何やってんだ?」

声のする方を見ると闇雲 ミズチが呆れたような表情でやってきた。

「どうでもいいが、このまま喧嘩してたら学校に間に合わなくなると思うが…」

「う、確かに…仕方ないわね。勝負はお預けよシュリ!!」

「命拾いしましたねキノコ!!」

5人の中でミズチもストッパー役ってな感じなんだよね。

こんな登校風景が日常茶飯事なんです。

「ハイじゃあ、日直、今日は…白花ちゃん、号令をおねがい」
「起立、着席、礼」

ドタガタガタドガシャン！！

あれ、どうしたんだみんな一斉に崩れ落ちて？

「は、白花ちゃん…起立、礼、着席でしょう」

ヤベ、タマオ先生が泣きそうになってる。

「すみません先生…昨日見たド○フのネタの方が浮かんでしま
つて…」

「お、お前なあ…」

ごめんねミスチ、だっふんだ！！

色々あって、テストが返ってきました。

「さあ、シュリ！一体何点よ！！」

「同時に見せるわよキノコ！！今度こそ私の勝ち星を挙げてやるわ
！！！」

いや〜テストや体育の測定系の時は毎回こんな感じになるんだよな。
面白いけど…

「グ、58点が…なあ、白花。今度はどっちが勝つと思う？キノコ
に10円」

「また、同点だと思うよコクエン。ちなみに私は86点」

「よし、98点。ハクちゃんって何気に上位をキープしているよね。
私はシュリちゃんに50円」

「君たち、賭け事はやめようよ…」

「同点に100円…」

「ミスチ君まで!?!」

この混沌としたクラスでハクマが唯一の良心なんだろう…

「どうだ…92点!?!」

「これなら…92点!?!」

また同点か…

これでお互いテストは32回中7勝7敗18分けになったな…
同点の多いってすごくない?

「つく、またか…」

「今日こそはと思ったのに…」

悔しそうにしている二人だけど私はやるべきことをしないと…

「はい残念でした、二人とも」

「チツクシヨ　!?!」

「あちゃー外れたか」

私とミスチが勝ったみたいだな…まあ、本当に金をかけているわけ
じゃないけどね。給食のおかずくらいだよ掛けているのは…

そんなこんなで学校が終わって下校中…

「そつえば、この後は何する?」

千雨ちゃんが話題を振ってきたが…

「特にすることがないね」

そう悩んでいると、第3者が介入してきた。

「オース、なにやってるんや?」

「こんにちはハクちゃん、千雨ちゃん、ナエちゃん」

後ろを振り返ると元気が有り余っているような褐色の少女とおとなしそうな黒髪の少女がいた。

「あっカオラにしのはぶさんこんにちは」

私たちはこんにちはとあいさつを返した。

この二人はラブひなに登場した。紅い月になると容姿が変わるの王女と将来とある先輩に恋をする少女である。

「これから何をしようか相談してたところなんです」

「ほんなら家に来てみるかいな?」

家っていうと……

「ひなた荘のことですか?」

「そや、そこなら暇をつぶせそんな物もそれなりにあるで?」

「二人はどうする?」

「じゃあそこでもいいじゃないの?」

「では、お邪魔させていただきます」

「決まりやな、ほないこか」

そういつて、私たちはひなた荘へと向かった。

「とうちやくく」

「じゃあ私は着替えてくるね。カオラも着替えてきなよ」

ほくいといつて部屋に向かっていった。

「少し待っててね！」

私たちはロビーで待つことにした。

ロビーに行くと黒髪のポニーテールをした私の師匠がいた。

「おや？お前たち」

「ちくす、シッショーこんにちは」

「こんにちは、素子さん」

私の剣の師匠（予定）である京都神鳴流剣士の青山 素子さんである。

「なんか白花が発したのがすごい不穏な感じだったが…」

「気にしたら負けですよ師匠」

紙忍者なんていなかった！！

「今日はどうした？稽古の日じゃないはずだが…」

「カオラたちから遊びの誘いがあったんで来ました」

「肝心の二人はどう」おまたせく！！」「来たようだな」

そこには私服姿の二人がいた。

「それじゃあ失礼しますね」

「ああ、ゆっくりしていつてね」

そういつて、その場を後にした。

「白花がく捕まえて、白花がく画面端、バースト読んで！まだ入る。白花がく近づいて、白花が決めた　！！！！」

とある歯車な格ゲーで小足から余裕の人を再現してみた（笑）。

「あ、ありえんわく全然手が出せず負けてもった。こうなったらこのぷ○ぷよファイバーで勝負や！！」

「なんのおちくちゃんパス！！」

「落ちゲーなら任せるー（バリバリ）」

「やっっちゃって！！」

一部抜粋

1P：カオラ「郷土の重みを知れ　！！」
「くらいやがれ！！」
「ほざきやがれ！！」
「私は摂政だぞ！！」
「ほざきやがれ」
「お茶くれ！お茶！！」
「お茶を！！」
「思い知れ！！」
「思い知れ！！」
「思い知れ！！」
「ちよ！ちよ！超！超必殺！飛鳥文化アタツクウ！！」
「あつ！よけられた」

2P：千雨「速攻魔法発動、狂戦士の魂！！」
「さあ、いくぜ！！」
「ドロー！モンスターカード！！」
「ドロー！モンスターカード！！」
「ドロー！モンスターカード！！」
「ドロー！モンスターカード！！」

『ドロー！モンスターカード！』 『ドロー！モンスターカード！』
『ドロー！モンスターカード！』 『ドロー！モンスターカード！』
『ドロー！モンスターカード！』 『ドロー！モンスターカード！』
『ドロー！モンスターカード！』 『ドロー！モンスターカード！』
『ドロー！モンスターカード！』 『ドロー！モンスターカード！』
『ドロー！モンスターカード！』 『ドロー！モンスターカード！』
『ドロー！モンスターカード！』 『ドロー！モンスターカード！』
Oは何処DA
！！！！！！！！！！

ボタンキユー 『もう勝負はついたのよ…』 2P、Win

結果

「ぬぐぐあそこでミスらなければ…」
「15連鎖で余裕でした(ドヤ)」

ちなみに、ナエ姉としてのぶさんは、普通に本を読んだりしていた。

「いや〜遊んだ遊んだ」
「遊ばれてもうたグスツ」
「いやwwwwwwごめんねwww」
「ウザ、そのしゃべり方相変わらずウザいね」

Oh...千雨も毒を吐くようになったな…
近い将来の性格の前触れかな。
そんな時、千雨が部屋の隅にあった一つ目の印が入った箱に目が留
まったようだ。

「カオラ〜あの箱の中見ていい？」
「ええよ、それはこっちに来る前に故郷で拾った石なんやけど…」
「

石ねえ… ippitaidon「わ、きれいに六角形になってるね」六角

形…

「私もみていいかな」

「ええよ、ガラクタかもしれないし」

ほい、と一枚渡されたが間違いない、これは六角貨幣石つまりメダルであると確信した。

メダロット博士、六角貨幣石、これだけの素材があるのなら、月のマザーも存在してそうだな…
そんなことを考えていたら…

「シロちゃん？どうしたのぼうつとして…」

千雨の声に現実に戻る。

「んっ珍しい石だなんて思ってね」

「ほんとにね、きれいに六角形になってるんだもの…あ、この石は葉っぱみたいな模様がある」

「欲しいならあげるで」

「いいんですか？」

私は思わず聞き返してしまった。

「そんなかわし、その石のこと何かわかったら教えてやー!」

その辺はすっかりしてるな…

「わかったよ、何かわかったら連絡するねカオラ」

そんなこんなで時間が過ぎていって夕方になった。

「暗くなり始めたし、そろそろ帰るね」

「そやな、また今度遊ぼうや」

「では、また会いましょう。」

「さよなら」

「また来てくださいね」

「またねー」

「楽しかったですよ。」

「ありがとうございます」

千雨とも別れて帰路に着くと

「その石が気になるの白花？」

「うん、何かを感じるような気がするんだよな。まあ、後でゆっくり調べますか」

「なんだか楽しそうね、あっそうだ、今日のご飯は何にするの？」

「本日のメニューは、カレーでございます」

「おじいちゃんも今日は帰ってくるし、久しぶりにみんなで食べられるね」

うんと答えて家に着く。

これからやることは多い、メダルのことであるしなくちゃな…

第1話 騒がしかなひなた旅館（後書き）

今回は小学校での日常やメダルの発見などを書きました。

次回から、メダル組はしゃべることが出来ます。体はありませんがね。

メダロット5（漫画版）のオメガ状態です。

第2話 新たな出会い、そして親友の別れ・・・(前書き)

メダルが出来ました！。

第2話 新たな出会い、そして親友の別れ・・・

最近ではまほネットで魔法球内に作った転移符と攻撃用のお札と回復のお札を販売してみた。従来の転移符より安価でそれなりの性能を誇っているらしく、結構人気の品となっていた。

ちなみにこれは、キャス狐の「呪相・炎天」や「氷天」の劣化品であり、本来の威力のお札は広域殲滅魔法（燃える天空など）並みの威力を持っており、販売している札はだいたい「奈落の焰」や「闇の吹雪」の威力を持っている。

転移符は神からもらった知識で作った。恐るべしキャス狐の力。それで、通帳が見たこともない数字になっていたので一瞬夢かなと思った。黄金律恐るべし…

先日いただいた六角貨幣石をおじいちゃんの所で解析したところ、やはりメダルだった。

で、そのあと、人工知能を作り上げて対話ができるように、USBメモリを改造してメダルをはめ込めることで対話ができるようにして1年がたった。

キン グ ク リ ム ゾ ン

現在、3枚のメダルを作り上げたのだが…

『お嬢、早く起きてください』

そう、鋭い女性の声で起こそうとしていると、

『わあ、これが寝坊助というやつですね』

おっとりした少女の声で起こそうとしているメダルたちである。
ちなみに名前は上から

トモエ

ナビコ

もう一枚作成中だが、まだ完成してないので省略

「あら？またこの子たちに起こしてもらったのかしら？」

「うんまあ…一応起きれるようになってきたよ。」

『そのセリフは、私たちから起こされないようにしてから言うて
ください。』

『確かに、私たちが起こさないときは寝坊確定ですからね…』

メダルに叱咤される主人ってなんかシユールな光景だと思っ。

「わかった、わかったそれより、さっさとご飯食べて出かけようね」

「『』あなたが一番遅れてるのよ。(ます)です『』」

三人(?)でツツコむな。てゆうか息ぴったりだなおい

「それは、長年起こしつづけてきたからね、なんとなく合うのよ。」

『私たちもなぜか合うような感じがするんです。』

『マスターのこれに関しては共通の認識があるからではないですか
？』

ぐへえ…い、いかん、何か話題を変えなければ。

「そ、そういえばカオラに報告したらさ、「どうせならロボットの脳にしてみたらええんとちゃう」って意気込んでいたよ。」

『さらに、おじい様やへべレケ博士も乗り気でしたし、これなら近いうちに体ができるかもしれないね。』

よし、話題をそらすことに成功だ。

と、そんな時呼び鈴が鳴った。

「こんにちはーシロちゃん、ナエちゃん遊びに来たよー」

「どうぞー」「上っていいよ千雨ちゃん」

「邪魔します。」

『いらつしゃいませ千雨様。』『いらつしゃーい千雨ちゃん』

ちなみに、千雨はこの2体のことを知っている。

初めて見たときは「お、お、お化け〜」と言ってへたり込んでいたが、事情を説明したらなんか納得いったみたいだ。

その理由が「シロちゃんが関わってるなら仕方ないね。」ということだが、ほかの人がやっていたらどうなんだと聞いてみたが、

「ひなた荘の住民以外はあり得ないと思うけど…」確かに、あそこは最近雷やら爆発やらが起きていてたびたび消防車が通るのをよく見かける。

ついでに言えば、ナビコの名付け親で、ナビコはよくなっている。

「しかし、よくできているよね。この子たち」

「作り物でも、意識を持っているならそれは人と同じ魂を持っていると思うんだけど。」

「ああ、九十九神みたいな感じ？」
「そうそれ。」

『そのような風に言われるとうれしいですな。』

「その喜ぶ感情とかは、作られたからではなく自然に出てくるもの
だと思っただけれどね」

ナエ姉さんいいこと言っな…

「そついえばさ、シロちゃん神鳴流を本格的に習い始めたんだって
？」

どこからその情報を…

「私が話しちゃった。」

ナエ姉さん…まいつか

「習っているっていうか盗んでいるの方が正しいかもしれないな。」
「盗む？」

「よく言っじゃないか。技術は盗むものってさ」

「ああ、そういう意味か…でもそつゆうのって結構きついんじゃないの？素子さんのメニューなら私でも大丈夫だけど…」

「大丈夫大丈夫、鶴子さんがこなければ何とか生き残れるし」

「生き残るって、結構危なくない…」

神鳴流の方は、それなりに使えるようになった。

「その分だと、浦島さんはすごいよね、女子とはいえ、リンチされ

たり、斬鉄閃を食らってもぴんぴんしてるし、ああいうのを不死身
っていうのかな？」

「それはないと思うけど……」

そんなこんなで夕方になったが…

「今日はありがとね。」

「いやこっちも楽しかったよ。」

「またいつでも来てくださいね。」

そういつていると、千雨の表情が少し沈んだがした。

「うん……また…ね」

「どうしたの、千雨元気がなさげだけど？」

「え！？いや、なんでもないんだ…」

「嘘だね。大体千雨が嘘つくとすぐくわかりやすいんだもの。」

表情とか、挙動不審になっているようにね…

「うん、かなわないなシロちゃんには…」

顔をあげて静かに話し始めた。

「実は親の転勤で引越すことになったの。」

……！

「ちなみに、どこなの。」

「麻帆良ってところなんだ。もしかしたらもう会えないんじゃない
かと思うとつらくてね、だから今日お別れを言おうかと思って…」

そういつて、顔が下に落ちていくにつれて涙ぐんできた…

「残念だけどさ、そんなネガネガしたことは受け付けないよ。たとえ離れていても私たちは友達だよ。」

「私もね、たとえ離れていても二度と会えないわけじゃない。もし辛くなったら連絡の一つも入れてくれればうれしいかな。」

「う、グス、あ、ありがとう、二人とも」

「泣くな泣くな私は笑っている千雨の方が好きだぞ。」

その言葉に千雨は笑ってくれた。

「うん、ありがとう。それじゃあね」

「見送りには絶対行くからね。」

そして、千雨が帰った後、

『マスター相談があります。』

「どうした、ナビコ…」

『実は……』

「おkこりゃ徹夜だな…さてとこっちもやっときますか」

そういつて私は電話を手に取った。

・
・
・
・

引っ越し当日

「今日は見送りありがとうね。ナエ、それに先生も」

「うん、でもやっぱりさみしくなるね。」

「向こうに行っても体には気を付けるのよ!」

タマオ先生は泣きそうな顔でそういつてくれた。やっぱりこの人はいい先生だな…

「そういえば、シロちゃんは？また寝坊？」

「なんか徹夜で作っていたけど…」

「でも千雨ちゃんよかったの？クラスの人たちに知らせなくても…」「いいんです。タマオ先生。みんながいと別れがつらくなるので…」

クラスの人たちには内緒にしてあり、この事は千雨が引っ越した後わかる事だったが…

「おいコラ！千雨！黙って転校するなんて水くせえぞ!」

「コクエン！？それにみんな…」

そこにはコクエン、ハクマ、キノコ、シュリ、ミズチがいた。

「昨日、白花ちゃんからみんなに電話があつてねそれで千雨ちゃんが転校するって聞いたんだよ」

シロちゃん…あの子は全くこっちの都合なんてお構いなしね…

「まったくあんたは…私たちも友達でしように…見送り位させてちようだいよ」

「あら、珍しく気が合いますねキノコ。黙っていくなんて私たちが

信頼されていないみたいじゃないですか…」

確かにこの二人が気が合うとか明日は嵐かな…

「まったく…変に遠慮するもんじゃないぜ」

「ハハハ…ごめん皆それとありがとう」

そんなこんなで話し込んでるうちに、準備ができたみたいだ。

「おい、呼んだ張本人はまだ来ねえのか？」

「来ないなんてさみしいね。」

「来るだろ。あのバカは、どうせ寝坊でもしたんじゃないか？」

「きつと来るよあの子は約束はきちんと守」ごめん遅くなっちゃった。「ほらね。」

全力疾走したせいか、肩で息をしている白花の姿があった。

「おせえぞ白花!!」

「だいぶ遅かったけど、また寝坊かなシロちゃん。」

「その通りよ白花ちゃん。こういう事に遅刻しちゃダメでしょ!」

周りからきつちり叱られてんなシロちゃん…

千雨はいたずらっぽく笑っていた。

「ち、調整をしてたら遅くなっちゃて、ごめん、マジごめん。」

調整？

「何の調整してたの？」

コレっと言って白花はUSBメモリを差し出した。

「引越すちゅちゃんにプレゼントにね…本人も望んでいるし。」

それは、ナビコのメダルが入ったメモリであった。

「いいの？ナビコは私と来ても。」

『自分で考えた結果、千雨ちゃんと一緒にいたいからマスター、いえ、元マスターにお願いしまして。』

「マスター設定を変えたりして大変だったよ。おかげで徹夜しちゃって。もう…」

「ふふ、ありがとうシロちゃん。」

「もし、PCを買ったならつなげるといいよ。セキュリティとかの管理能力もすごいんだから。」

車のクラクションの音が鳴っていたのでそろそろ出るらしい。

「じゃあ、そろそろいかないかね。」

「さよならは言わないよ。だから…」

「うん、じゃあ…」

「また会いましょう親友。」

・
・
・

私は去っていった車が走り去ったほうをいつまでも見つめていた。

学校で初めての友達と一緒に遊びまわった親友…

「でも、よかったの？」

「なにが？」

「白花なら、もつとすごいの渡しそうだったんだけど…」

「わかっていないね、あれは普通のよりかなり強化されてるから、ウイルスとか迷惑メールとかを一括管理することができるまで強化したんだから。それに、あの子なら千雨を一人にいないだろうしね。」

さみしくないと言えばうそになるが、そんな遠くないうちに会えそうな気がする。そしたら、ナビコのパーツとかも考えておくべきだな。

そんなことを思いながら、帰路についた白花たちであった。

第2話 新たな出会い、そして親友の別れ・・・（後書き）

そっだ、京都に行こう・・・そんなわけで次回は、京都でちょっとした修行です。

第3話 神鳴流の乱(前書き)

予告通りに京都へGO

第3話 神鳴流の乱

「海が見たい、人を愛したい、怪獣にも心はあるのさ！レミ○アの
カリスマ懺悔室何故消して「バカやってるんじゃありません」アベ
シッ！！」

はい、京都駅前でそんなことをやっていたらゴスツと開幕の一発を
もらいました。秋葉原 白花です。

今回は、鶴子さんが「そや、京都に行こか白花」てな感じで連れら
れて神鳴流の道場で稽古をするために来ました。

「とりあえず、道場の方は昼過ぎ辺りに顔を出すからそれまで観光
でもしてきいや」

と言って、鶴子さんは地図を渡してどこかへ行ってしまった。とり
あえず清水寺にでも行ってみますかな…
え？金？十萬くらいあれば十分でしょう…

「此処が有名なI can flyスポットか…絶景、絶景」

下の竹の柵は飛び降りた人を確実に刺すために用意したのかな？
まあ文化遺産から飛び降りるバカはそういないでしょう。

しばらくして、清水寺を後にし、昼飯を早めに食べておこうと思い
ガイドマップを片手におすすめな飲食店を探していると…

「少し剣術がうまいからって調子に乗ってんじゃねえよ！この忌子
が！…！！」

その声がした方を見ると、路地裏で金髪の少女一人に対して、高校生くらいの男子2、3人当たりが囲んでいるのが見えた。しかも、人払いの結界まで用意しており、関係者が一般人を襲っているようにしか見えない図になっていた。関係者で剣術という事は神鳴流か？こんな下種も存在しているんだな。とりあえず助けますかな。

「おらどうして「らんらんるー」ぐへえ！」

「ドナ〇ドはいじめっ子を見るとつい飛び蹴りしちゃうんだ！」

おお、つい手が出ちまった…いやこの場合足が出ちまったかな…

「何や、おまえは部外者は引っ込んで」そんなにディアナが好きか！「誰だよ！ディアナってええええええ！」

取り巻きの雑魚Aがなんか喚いているがそんな奴にはシャイニングフィンガーをプレゼント。

「たd「ジエノサイドブレイバー！！」セリフくらい言わせるよー！」

取り巻きBには何か言う前に若本風の波動砲をプレゼント。

「畜生、こんなことしてタダで済むと思ってるんのk「全人類のデストロイおいしい！！」シンクノソラー」

主犯が復活したので紅い波動砲を打ち込んでやった。

そんなこんなで全滅させてやったら、覚えてるよ〜と三下のセリフを吐き捨ててどこかへ逃げ去っていった。残された少女は何が起きたのかわからないといった表情をしていた。

「大丈夫？変なことされなかった？」
「あ、…はい」

その問いに少女は頷いた。少女は金髪で白い和服を羽織っていた。

「そっか。連れの人はい」「ぐぎゅるゝ」腹減っているのか…」
「う……」

少女は顔を赤くして、腹を抑える。

「お嬢ちゃん？昼ごはんはお姉ちゃんがおごっちゃうー！」
「…ええんか？」
「その代わり、どこかいい店はない？ガイドマップじゃなくて地元の人がおすすめる店のがいいし…」

こういうのに載っているのは混んでる可能性が多いし

「…蕎麦でええならあるで」
「じゃあそこで食べよう。私は秋葉原 白花よろしくね」
「うちは月詠っていうんやよろしくな」

マジで？

・
・

案内された店は年季が入った雰囲気があり、客もそこそこいるとい
った感じだった。
私たちはズゾーと蕎麦をすすっていると、月詠の箸の動きがぎこ
ちなかった。

「腕、怪我したの？」

「ちよつと痛めただけや心配ないで」

そう言っているが箸をつかもうとしているが落としてしまっている。このままじゃあ、不便だろうと思ひ、自分の分の蕎麦を手早く食べる。

「月詠ちゃん、こっちにいらっしやい」

「…？」

そういつて、自分の方に来た月詠を膝の上に座らせる。

「ち、ちよつと！？」

「けが人おとなしくしてなさいね。はい、あーん」

月詠の分の蕎麦を取ってあげて食べさせよつとする。

「う、あ、あーん／＼／」

恥ずかしいのか、少し顔が赤い。ヤベ、鼻から紅い物が…何かに目覚めそう。

「ん、むぐ、ありがとう／＼／」

「どういたしまして」

この可愛い生き物お持ち帰りしていいかな？そんなことを考えていたら食べ終わったので、道場の方へ向かおうとしたら月詠もその道場に行っているらしくお礼に案内してくれるみたいだ。地図を見るよりこっちの方が楽でいいしね。

「そういえば、白お姉ちゃんは何の用で来たんや？」

ちなみにこの呼び名は「お姉ちゃんって呼んでええか？」と言われ
て速攻でいいよと答えたためである。

「こわーい師匠がこっちの道場で稽古をやるってことで来たんだよ。」

鶴子さんの練習メニューは厳しいからな…一番きつかったのは4時
間耐久実戦形式の試合だったな。その4時間は地獄になったんだよ
な…

「ついたで！」

「おおくなかないところじゃん…」

そこは関西呪術教会が管理している山の一角に造られた古風な道場
だった。

「失礼ですが。どちら様でしょう。」

細身で巫女服を着た門番の人が声をかけてきた。

「青山鶴子さんの紹介できました。秋葉原白花です。」

「少々お待ちを…」

そう言って懐からケータイを出し連絡を取って確認をしたようだ。
魔法使いや陰陽師って機械系に疎いようなイメージ持ってたけどそ
うでもないみたいだな。

「確認が取れました。それにしてもすごい師匠をお持ちですね…」
「そう思うなら変わってください」

門番の人が苦笑している。やはり鶴子さんの指導は鬼畜なんだな…

「それじゃあうちは道場の方へ行ってくるな」

「ありがとね。月詠」

そういつて月詠は道場の方へ行つていった。

少しこのあたりの地形を見てから道場に行くとしますか…

「あ、ようやっと来たようやな」

道場に入ってみると道場の奥で茶をすすっている鶴子さんと師範代らしき蔵ついおっさんがいた。

「時間は余裕を持ってきましたが…迷惑でしたか？」

ちなみに今は12：45分あたり

「いや、問題あらへんよ。白花、こつちが師範の木原や。師範こつちがうちの妹の弟子の秋葉原 白花や」

そう言ったら、木原と言われたおっさんはに顔をしかめた。

「ふん、関東の者が神鳴流を学ばせるなんざ青山も落ちぶれたものやのお」

あれ？いきなりケンカ売られちゃった。なにこいつマジウザい。

ぶちのめしたくなってきたよ。もしかして、関西至上主義ってやつかな？というかこいつ過激派だろ、麻帆良を襲撃している。

「嫌やわ、木原はんたらケンカ売ってるんとちゃいますか？」

鶴子さん、茶碗にヒビが…それにすごい怒気ですね。

「あいにく、わしの家には貴様のような出来損ないの妹のような奴は存在せえへんからのお」

さらに挑発するとは、こいつただの自殺希望者か？それとも実力の
あるバカか？

この野郎…コンクリに詰めて海に捨てたいな…

「まあ、どうでもええやろ。白花、今日の稽古は今日ここにいる道場の門下生と師範代すべて100名を相手しい。ついでにこの木原もや」

無茶なことキター（泣）

まあ、相手の強さにもよりますが…

「はっ！？本気かいなそんなことが出来るはず無いやろ！！」

「おや、こんな小娘一人に百人も相手するなら楽勝でしょう？それ・と・も門下生が全滅させられるのが怖いんですかあ？」

「なっ！？貴様のような小娘に負けるほど弱くないわボケ！！その言葉に後悔すんなや」

挑発してみると相手は顔を真っ赤にして怒鳴り散らして出て行った。

「おやおや、奴さん沸点が低いようですね。この程度で切れるとは

たかが知れますよ」

「まあ、木原自身実力が無くて落ちぶれた奴なんよ。一応陰陽術も使えるんやけどそっちもあんま使えんらしいけど狡賢い奴でこの道場もほとんど奴の私物のようなものや」

策士系の奴か…そういうのは前線に引きずり込んでフルボッコとかがいいけど…

「白花、師匠命令や…遠慮はいらん。ぶっ潰しいや！」

「了解！皆殺しですね！」

「いや、殺さなければどこまでもええで半殺しまでOKや！」

よし！やる気出てきた！！

・
・
・
「さすがに百人は多いな」

おっ月詠もいるじゃん月詠って今はどうなんだろう…どっちにしても楽しめそうだな。

ちなみに私の得物は刃を潰した刀と弓です。弓は背中にあります。

「白お姉ちゃん…」

「よっす月詠。ここの奴ら全員と稽古することになったから。全力で来てね！」

そう言ったら月詠は三日月の笑みをして、二振りの刀を抜刀した。

この頃からあつたんだな、狂気。

「ならうちも全力でいくで！簡単に壊れんといて〜！手足ぶった切

つて達磨にせずたに引き裂いたるよ!!!」

その言葉を発した瞬間目の前に来て右手の刀を振り落した。
それを避けて一太刀入れようとしたけど左手の刀で阻まれる

「なるほど…やるね」

「まだやで！にとくれんげきざんざんがんげん！」

のんびりした声とは裏腹に重く鋭い斬撃が襲い掛かる。

「なんのお!!!斬岩脚・天!!!」

それを紙一重で避けて月詠の腹部にサマーサルトキックを叩き込む。
それにより月詠の体は宙に浮き、そこへ白花が追撃のグラウンド（ゲ
フンゲフン、斬空閃を横一閃に放った。

「これくらいで決まると思ったんか〜白お姉さま〜」

月詠は刀を十字にかまえて防御の姿勢を取る。

何故お姉さまになっているし…だけどこれで終わりじゃないんだよ
ね…

「斬空閃・重ね十字!!!」

先ほど飛ばした斬空閃より速い衝撃を縦に放ち、着弾時に合わさる
ようになって、月詠の防御ごと突き抜いた。

「痛、さすが白お姉ちゃん強いね…」

倒れた状態で狂気が薄れていくのがわかる。

戦闘になると狂気に染まるってな感じが…

「月詠くそれに振り回されるんじゃないやなくて受け入れてみれば？それを含めて月詠なんだから」

「せやけどそんな事したら周りを傷つけてしまうやないか…」

「大丈夫さ。月詠ならできるって。根拠はないけど…」

「せやったらうちが引き取ったる」

道場の方で観戦していた鶴子さんが動いた。

「これだけの才をこんな所でつぶすなんでもつたいないしな」

やったね月詠！地獄の片道切符をゲットしたよ…

さて、残り99人。あつあの師範入れて100人か…

「まさか、あの忌子がやられるとは…」

「だが、相手は消耗しているんだ俺達でも勝てるだろう！」

楽観的だねエ此処の奴らの錬度はたかが知れるよ…

「話し込んでいいのかな？集気法！」

そう言い放ち私は辺りに漂う気を集め回復していく。

「な！？霧散した気を吸収しているだど！？」

「くっ！？かかれ！一気に攻め落とすんだ！」

うおおおおー！！と後ろの方で控えていた有象無象が突っ込んできた。

「くらえ！斬空閃！」
「斬岩剣！！」

瞬動を使って接近してきた特攻組と後方で斬空閃を放つ援護組で襲ってきた。

それを後ろに飛んで気で強化した足で一気に駆け抜けると同時に切りつける。

「お前らに足りないものそれはああ…情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！」

そしてエなによりもオ……………速さが足りない！！！」

言い終わり刀を鞘に納めた頃には襲い掛かってきた者たちはみんな倒された。

「これぞ我流奥義 閃走・幻夜……」

注：イメージ的にはBASARRA3の石田のゲージ技です。

これで大体20人は落ちた。残りの奴は後ろの方で動かない。

「オラオラ！縮こまってんじゃあねえよ！！斬魔弓・反響でもこれって斬じゃないよね？」

そういつて白花は背中にある弓と気が籠った矢を構え固まっている集団の上空を射る。

「はっ！どこを狙ってやがんだ！」

次の瞬間、矢が弾けたと思ったら大量の光の矢が雨のように降り注ぐ。

「ぎゃあああああ」

「ありえねえええ」

「あはははは！どうしたのかあ？まだ終わりじゃないよ？雷鳴剣！
！」

そういつて瞬動を使って距離を詰めて帯電した刀で切りつける。

「畜生、なんやこいつは！？化け物か！？」

「こんな奴に勝てるわけがねえ逃げん」まそつぶ！！「なんだそり
やー！！！」

雷鳴剣をたたきつけたら落雷のようになり、当たった個所を中心に
吹き飛んだ。これって雷光剣じゃね？

そんな感じで切りまくっていたら…いつの間にかあと4人なっ
ていたZE

しかもよく見たら月詠をいじめてた三下どもだった。

「うわ〜こいつら弱すぎだろ。アヒヤヒヤヒヤ！！！」

「畜生、関東のもんに此処までやられるとはなあ」

「師範どうしますか？」

「あわてるなやつも消耗s」集気法で回復余裕でした「ぐう…」

そして、4人がいる方へとゆっくり歩み寄る。

「ひっ！く、来るな！！グボア！！！」

慈悲もなく切り捨て…

「た、頼む助けウギャー!!」

三日月の笑みとともに刈り取る…

「畜生、斬岩け「斬岩脚」ギャアア!!」

獲物が無くなるまで食い殺すことをやめない。

「ちい、役立たずどもが…」

残った獲物はただ一人…

「手前が最後だ…」

そう言い放ち手にある刀に気と魔力を混ぜる。

「武装感卦！」

次の瞬間、刀は黄金の光を放つ光剣となった。

「つく！動くなやこの娘がどうなってもええんか？」

近くにいた月詠をにとつたが何の意味もなかった。あまりの事に混乱しているから忘れていたのだろう…自分が使っている剣術は切るモノを選ぶことが出来ることを…

「これで終わりだ…」

手の中にある刀の光が増し巨大な光の剣となる。

「ま、待てこいつがd「素子師匠直伝神鳴流決戦奥義！極大・雷光剣・星薙ぎの太刀いいいいいい！！！！」ああああああアああ…」

それを薙ぎ払い、師範を消し飛ばし、月詠には怪我一つない状態で救い出した。

「これがお前が否定した師匠の技だ…」

・

「やりすぎた…」

「やりすぎやな…」

「綺麗になりましたね白お姉ちゃん…」

いや〜月詠以外を攻撃対象にしてやったから

ここの道場を半壊にしちゃったんだZE

やべっこれ弁償しなきゃかな…

「まあ、この責任は全部木原はんが被ってもらうとしましょ」

「うわ〜えげつないっすね鶴子さん…」

「あの〜うちは…」

「月詠は鶴子さんの元で修行じゃないかな…」

きついけど効果は抜群なんだよね…

加減もできて、逝っちまう一歩手前で返されるから性質が悪い…

「それじゃあ、白花はもう帰らんな月詠はえ〜と此処に電話してうちの名前を出せば寝泊まりできるはずや…」

そういつて鶴子さんは月詠にメモを渡した。

「ありがとうございます鶴子さん。白おねえちゃん…また、会えるやろうか…」

「会えるでしょ。まあ、再開はもう少し先になるかもしれないけどね」

月詠は寂しそうな表情だった。けれど、すぐに笑顔になり…

「だったら、今度会ったときはまた試合をしましょか。白おねえちゃん」

「よし、来るなら来い。そう簡単にはやられないぞ」「せやったら、きついメニューを考えんとな」

あ、鶴子さんのこの笑顔が出たという事は地獄のような修行が待っているんだろうな月詠は…

「月詠、先に言っておくけど鶴子さんの修行はめっちゃきついから…死ぬなよ!!」

「頑張れとかそういう言葉よりも先に命の心配って…」

まあ、死にはしないだろうけど逃げ出そうとするとまた普通と違った怖さを味わえるんだよな…

「それじゃあ、月詠。身体に気を付けるんだよ」

「白おねえちゃんも元気でね」

そういつて私たちはボロボロになった道場を後にした。

帰りがてらにお土産を買って家に変えた。京都といえはやっぱり八橋でしよう。

第3話 神鳴流の乱（後書き）

八橋おいしいよね

今回の技は若本やメイガスの剣などが元ネタです。

どうせなら半人半霊の技にすればよかったかな…

第4話 卒業、そして麻帆良へGO（前書き）

最近、新しい話でも作ろうかなと思う今日この頃…
でもそんなことしたらこっちの更新速度が遅くなるしな…どうする
べ

第4話 卒業、そして麻帆良へGO

それは小6の冬のことだった…

「白花、ナエ卒業したら引っ越すぞ」

いきなり何言ってるすかお爺ちゃん…

「説明プリーズ」

「そうですね、いきなり引っ越すぞなんて…理由とかも行ってくださいよお爺様…」

「おおすまんすまん実はな…」

爺ちゃん説明中

「つまりは、お爺ちゃんのお悪友である麻帆良の学園長が、「こつちで教師やってくれ」ってな感じでお願ひしてきて、麻帆良の技術も見ておきたいから行くことにしたってな感じでもいいんだね？」

「説明乙」

ナエ姉もネタを言うようになったな…

「それで二人はどうする？寮がある中学に行くか、麻帆良に行くかどっちがいいかのお？」

まあ、あつちには千雨もいるし私も麻帆良の技術を見ておきたいしね。

「私はいいよ。ナエ姉は？」

「二人とも行くんでしょ？だったら私も行くわ。仲間外れは嫌よ？」
そんなつもりはないんだがな…

「まあ、家族全員で行くことでいいんじゃないやね。それじゃあ、向こうに連絡しておくぞい。」

「私たち以外はだれか行くの？」

「ああ、へべレケも付いてくるらしいぞい」

原作じゃあギャルにもてるために世界征服をたくらんだ人だけど
女子校にいつて大丈夫なのか？一般人を襲うようなことになったら
…フフフフ（黒笑）

「白花、その笑み恐いわよ…」

サーセン

色々あつて卒業式、月日がたつのは早い物ですね。

「ふうそれにしても白花は卒業したら引っ越すんだってな。この辺が静かになるぜ…」

「確かにね…このクラスの騒動の2割は白花ちゃん関わっているからね…」

異議あり！！その情報は偽りである！！！！

「いや合ってるよ…白花が誘導して騒動起こしまくってんじゃないん…」

「特に私とキノコのトトカルチエなんかやったらしいわね…」

それはいつもの事だよ。まったく1年の終わりに集計して勝敗を競ってたけど、結局卒業まで引き分けにしちゃったよこの二人…。勝率は1勝1敗1分けという結果になっていた。まったく仲がいいのか悪いのやら…

「やっぱり納得いかないわよね。6年の結果が引き分けなんて…」
「だったら最後に何か競いますかキノコ？」

何か競うねエ…。そうだ。確かポケットの中に…あった！

「じゃあ、これで決める？」

そういつて1円を取り出す。

「それじゃあ…表？裏？」

「私は表よ！！これで勝ち星を挙げてやるわ！！」

「なら私は裏ね…これで決着ですわよキノコ！！」

そして私はコインを弾き、手のひらに取ろうとしたらなぜか鼻がむずむずして…

「ハックシヨイ！」

その性でコインが床に落ちてしまったが信じられないことが起きた。

「んな！！ウソだろ！！」

「これは珍しいね…」

「ある意味奇跡だな…」

男性陣が騒いでいる理由は落ちたコインは床の隙間に挟まり、立っている状態になった。これじゃあ裏でも表でもなく中間じゃん…この結果は…

「ドローゲーム」

「こんなことってあり得るの？」

「普通はあり得ないと思いますが…」

あれか神様はお互いこれから競い合って行け！！って暗示なのかな？

「まったくお前といると退屈しないな」

ミズチ、それは私が原因だということのか？

「あそこでクシャミなんてしなければこんな事には成らなかっただろうな」

「おれは悪くねエ！！！！」

某親善大使みたいな事をしてたらタマオ先生がやってきた。

「はいはい、みんな席についてー最後のHRを始めますよー」

そして配布物が配り終わり、先生の別れの言葉が始まった。

「先生、初めて受け持つクラスだから最初の方は緊張したりしてたけど、時間がたつにつれて慣れていくものよね。一部の生徒なんか友人感覚で来る人もいるしね」

クラスにいた全員が私の方を見た。
こっちみんな…

「それで途中で転校しちゃった子もいるけど、みんな卒業できて先
生うれしいです。これから、中学に上がって苦勞することもあるけ
ど困ったならだれかに相談しなさい。それが友達でも親でも先生で
も…

それで先生が…うう”ん言いたいのには、友達や親を…グズツ大
切に…クツしなさいねあなたたち。それじゃあみんな卒業おめで
とう!!」

先生泣くなよ…こっちまでもらい泣きしそうじゃないか…グズツ
タマオ先生…この6年間ありがとうございました。

・
・
・

「ん？白花か…」

「あっシッシヨ」

素子さん

「麻帆良に行くんだってな…あそこはいろいろとあれだから気をつ
ける」

確かに正義（笑）の魔法使いの巣窟だしね…

「師匠から教わった技があります。それで大丈夫だと思えます」

「そうか…まあ、私から言えることは「日々精進」ってところかな。
鍛錬を怠るなよ白花」

「わかってますよ。師匠も新しい恋をがんばってください」

その言葉を発したら素子さんは顔を真っ赤にしていた。

「なっ!?!何を言っているんだお前は!?!」

「成瀬川さんに浦島さんお似合いだつて近所で有名ですよ(嘘)と
ころで師匠、浦島さんに好意を持っていらしてましたが、付き合っ
ていることが分かった時の心境はいかがでした?NDK?NDK?」

しかし、その時私はテンションが上がっていて忘れていた…普段は
優しい人ほど、キレた時、とんでもない事をするという事を…

「はくくか、ちよつつつとKEIKOが必要だね」

やべっやりすぎた…

「あゝ師匠すいません。調子に乗りすぎました。それじゃあ私は引
つ越しの準備が有るんで失礼します」

「白花ちゃん、引つ越しの準備ならやっておくからゆっくり稽古し
ていけば?」

ちよ!?!ナエ姉退路を断たないで!!

ガシッ!!

あれ、なんでそんな禍々しい気を出しているんですか?っていうか
その刀「ひな」じゃないですか!?あっ!ちよ!?!おまつ襟首掴ま
ないでください。引きずらないでください。

「何すぐ終わる…ふふふふふふふふふふふ」

あっこれは＼(＾o＾)／

アッ

!!!

「確かこういう時はムチャヤガッテだったかな」

いや、死ぬかと思ったよまさか極大・雷光剣・星薙ぎの太刀までしてくるとは…

そんなこんなで引越しの準備もあらかた終わったし、後はみんなにあいさつを済ませますかな…

「白花、向こうに行っても俺たちのこと忘れんなよ!!」

「大丈夫でしょコクエン君。白花ちゃんは普段はふざけているけど、友人は大切にする人だし…」

「忘れないよふたりとも・・・私がそんな薄情な人間だと思ってるの?」

この二人には結構世話になったな、コクエンとはなんか波長が合う感じでよく遊んだし、ハクマはなんだかんだで私たちのいたずらに乗っってくるし…

「あんだ達と一緒にいて楽しかったよ!」

「同感ですわね。」

「二人の喧嘩には毎回楽しませてもらったよ。でも、これからは程々にしときなさい」

いつも競い合っている二人はなんだかうらやましいと思う事が多

かった。全力でぶつかりあえるライバルみたいなのに憧れたりしたんだよね…

「まあ…その…元気でな」

「ミズチも健康には気を付けるよ、じゃないとまたリョウコさんに看病させられるからねエ」

「姉貴のことを出すな…あれは恥ずかしかったんだから…」

以前、ミズチが風邪で休んだ時、見舞いに行ったらお姉さんである闇雲　リョウコさんが付きつきり看病をしているのを見かけた。それでからかったりしたなあ…珍しく慌てふためくミズチを見れたからねエ…二人とも普段はツンな態度だから新鮮な光景だったな…

「白花ちゃんナエちゃん、向こうでさみしくなったら先生相談に乗るからね!！」

「そのときは連絡させていただきます」

「ご厚意に感謝しますよ先生」

タマ才先生、これからも教員生活頑張ってください。

「準備ができたかのう?二人とも…」

「それじゃあ、みんな…また会いましょう」

「みんな元気でね!！」

私は車の窓から乗り出してみんなが見えなくなるまで手を振っていた。

・
・
「それでおじい様、学園長はどのような人物なんですか？」
「まあ、自分のために面白おかしくさせるような奴じゃな」

策士タイプだからねあの妖怪は…

「あんま関わりたくないな私は…」

「よくそんな人と仲良くなれましたね…」

「あ奴は友人ではなく悪友じゃよナエ。そういえばあ奴に金貸したまんまだな…あとで徴収するか」

おいおい、大丈夫かよ…面倒なことにならなきゃいいけど。後お爺ちゃんきっちり徴収しておけよ。

数時間後…

「やっとついたね」

あれから数時間座りっぱなしの状態で少し疲れたな…

そう思いながら私は背もたれから体を起こし、車の外に出て伸びをする。

「それで着きましたら何をするんですか？」

「向こうが指定の場所に迎えをよこしてくれたみたいじゃからそこに行くとしよう」

しかし、ここの指定した場所ってもう女子中学校の中じゃないか？

「此処の学園長って変態なの？それとも逆光源氏でもしようとして
いるの？」

「女子中の中に学園長室があるなんてどうかと思いますね…」
「やべっ否定できんわい」

え〜と話題を変えよう…

待ち合わせ場所になんかダンディなオジサマが煙草を吸いながら佇
んでいた。

多分、あれが迎えの人なんだろう…

向こうも気づいたみたいでこちらの方へと近づいてきた。

「失礼、あなた方が学園長が言っていた新しく来る教師と編入して
くる生徒ですか？」

「此処の学園長が近衛近衛門なら間違っていないがのう…」

だんていな案内人は苦笑しそのまま続けた。

「間違いありません。僕はここの女子中学校で英語の教師をしてい
る高畑・T・タカミチって言います。では、学園長の所へ案内しま
す」

そういつて高畑教諭は校舎の方へ向かい案内を開始した。

校内の窓から見える世界樹こと「神木・蟠桃」はやはり大きかった。

「それにしてもでかい木ですね〜」

「あれは生徒たちから世界樹って呼ばれているんだ。ドクエが元
ネタだろうけどね。言っておくけどタイジユの国はないからね」

タイジユの国って高畑教諭もやってるのかなドクエ

しかも、モンスターズの方…

「パーティはなんですか？」

「にじくじゃくにダークドレアム、後はスライムかな…マダンテ覚えてる」

やり込んでいるな高畑教諭…

「着いたよ此処が学園長室だ」

そういつて目の前には学園長室と書かれた扉の前に来た。

高畑教諭はどうぞつと身を引いた。

そして扉を開けたら…

「おお、よくk「すいません、間違えました」フォッ!？」

ぬらりひよんなんていなかった。

「高畑教諭、あそこに人はいませんでした」

「いや、あれは一応人間なんだよ…信じられないけど」

部下からもこんなこと言われてるぜぬらりひよん…

「学園長失礼します」

「高畑君さっきの言葉はどういう意味かの…」

何のことでしょうととぼける高畑教諭

この事に関してはみんな疑っているんだろうな…人間か妖怪か…

「相変わらず変な頭をしておるの近衛門」

「秋葉原お主もか!!」

仲がいいなこの二人…

「それでこのぬらりひょんが学園長なんですか？高畑教諭」

「ホント、ぬらりひょんですね…頭とか…」

「こんな頭だけど一応人間だよ…多分」

「みんなひどくね？わし泣いちゃいそう…」

「泣かないでください学園長。気持ち悪いですから」

「フオローになっておらんぞい…」

「する気なんてありませんから」

この人外はいつたいいつまでネタを引つ張るつもりだ？

「もう、いいわい…とりあえず二人はこの第2学年に入ってもら
うぞい。住居じゃが学生寮の方を手配しておく。秋葉原は教員寮の
方へ入ってくれ。明日にクラスの方を連絡するから職員室によつて
もらうからの」

「わかりました。ぬらりひょん」

「お世話になります。ぬらりひょん先生」

なんかナエ姉もノリが良くなってきたなあ…昔なら咎めている
ところだが、いい傾向かな(笑)

なんかぬらりひょんがうつむいているが問題ないな…

「それじゃあわしはその寮の方へ行くんでな。また会おう近衛門」

「失礼しました」

そういつて私たちは学園長室を後にした。

・
・
・

まったくみんなはワシのことをぬらりひょん、ぬらりひょんと言っているがわしはれっきとした人間じゃ！！妖怪じゃないぞい。

「学園長、あの人たちは関係者なのですか？」

高畑君までワシのことをぬらりひょんと思っておったとは…給料減らそうかのお…

「あ奴は元関係者といったところじゃ。じゃからあの娘たちは魔法のことは知らないはずじゃ」

「そうですか」

（しかし、あの白花と言う娘は似ておるわい、あの「災厄の魔女」に…これは偶然かの？しかし、魔力はそんなになかったしまあ大丈夫じゃろう…）

そんな事を考えている妖怪であった。

しかし、その甘い考えを彼女は打ち砕く様な出来事が起こることをまだ知らなかった…

第4話 卒業、そして麻帆良へGO（後書き）

大抵の作品はやっているぬらりひょんいじりでした。

次回から麻帆良篇です。注：中1から始まります。

第5話 第一印象が大事って誰もが言ってるよね!!

さて、私は女子中等部の1-Aに入ることになった。ナエ姉とは別のクラスだ。それにしても、自己紹介とかマジデ緊張するんだよね（笑）。

それに、最初が大事だ。しっかりやっていこう。

・
・
・

あくそ、みんななんで非常識を認識できないんだ？私がおかしいのか、非常識はあいつらだけで十分なのに町全体が非常識とかどうよ？今日も現実逃避のためにネットのブログを更新する。

うん、いい出来だ。

『マスター最高です。ハアハア』

親友からもらった。人工知能のナビコが最近変に…いや、変態になり始めた気がする。

「ふふふ、ネット界のNo.1の確保は大変だな…」

『あっマスター不法侵入しようとしているくそつたれがいますが…』

「潰しておけ、ばれないように」

『Yes, My Master』

そんな感じが私の日常である。
中学に上がり、クラスは1-Aになったがバカ騒ぎは収まることを知らなかった。

「まったく、なんでこんなにはしゃいでいられるかねエ…」

そんなことを考えて、自分の席に向かった。

「みんな、ニュース、大ニュースよ!!!」

麻帆良のパパラッチこと朝倉 和美が来てはしゃいでいる。

「こいつが騒ぐと碌なことが起こらねエからな…」

関わらない様にしておこう。そう考えて自分の席でi podを起動し、音楽を聴くことにした。

「コノメニウー」

「なんと、このクラスに編入生が来るらしいよ!!!」

おお〜と騒ぐクラスみんな。一応、音量を低く設定していたので聞こえたが…

「どうせその編入生もこの非常識を認識できないだろうな…」

そして、HRの時間がきて

「みんなおはよう」

出張の多い担任の高畑先生が来た。教師よりも出張の方が大事なの

かね…この人は…

「先生、編入生が来るって本当ですか？」

鳴滝姉妹が質問してくると…

「情報が早いね、朝倉君経由かな？その話は本当だよ。うちのクラスと1-Cに一人ずつ転校してくるんだ」

どんな子だろう、よし、トラップの設置は…とざわついてきた。

「残念だけでもうそこにいるから罠の設置はさせないよ」

え〜ってお前らこういうイベントがあれば仕掛ける気なのかよ…

「それじゃあ入っていいよ。」

高畑先生がそう言つと…

「わたくし〜古代のロマンにズヴォリンスキ〜」

どこかで聞いたことのある声がドアの外から聞こえてきた。

「ああ〜穴があったら…」

まさか…

「掘りたいっ！」

ズバンッとドアを開けたのは私の親友である秋葉原 白花であった。

「レディース アンド ジェントルメン！」

なんだか知らないがいやにハイテンションになっており…

「さあ 本日お聞かせするのはわたくしの華麗なる半生」

私以外の生徒：いつも無表情なザジまで（。 。 ）ポカーンといった顔になっていた。

「貧しい生い立ちで幕を開ける 涙、涙の物語でございまアす」とりあえず、私は席を立ち、

「ハラショーハラショー張り切つてまいりましょうさあ腕を組み足のs「いい加減にしろ！！」「ウボアー！！」

親友の顔面にドロップキックをぶちかました。
ぬお〜と顔面を抑えて唸っているがそれを無視して席に戻った。

「…長谷川君？」

「あつどうぞ続けてください」

「いやいま「気にしないでください。」「むう」

気にしたら負けなんだよ先生。

「あ〜はい、このたび、この学園に通うことになった。秋葉原 白花です。よろしくお願いします」

何事もなかったのように自己紹介しているが……まあいつか。

その後、息を吹き返したかのように、騒ぎ出した。

「それじゃあみんなにか白花さんに対して質問はあるかな？」

「そんな時は麻帆良のパパラッチであるこの朝倉和美にお任せを」

朝倉の質問攻めが始まった。

「さっきの歌みたいのはなんなんですか？」

「サウンドホ○ズンの人生は入れ子人形です」

「趣味は？」

「機械いじりと剣術です」

「身長、血液型は？」

「身長は159、血液型はAB」

「それじゃあついでにスリーサイズも……」

「79、54、76」

朝倉が少し驚いた顔になっていた。

「まつまさか答えてくれるとは……」

「減るもんじゃないしね」

「それじゃあ私から最後の質問なんだけど……」

「なんだい？」

「千雨ちゃんとは知り合いなの？」

やはりその質問が来たか……

「まあ、一緒に暑い夜を過ごした仲です」

つぶー!!ななな;

おいこら早乙女今度の夏コミのネタキタ

(。。(

!!!じゃねえよ!!!

「何言つてんだお前!!!平然とそんな嘘つくんじゃねえよ!!!」

「え〜でも一緒に裸の付き合いした中じゃないか」

「小学生のころでひなた荘の温泉に入った時くらいの話だろうが!

」!

「気にするな、たいした問題じゃないさ」

「お前ちよつとO H A N A S Iする必要があるそうだな...」

はあ、やっぱりこいつは非常識の塊だ...

あ〜やっぱり千雨をからかうのは楽しいわ〜。

そして、次の人は...

「私からも質問いいかな?」

え〜と早乙女 ハルナさんが質問してきた。

「今度のコミケに二人のことネタにしていいいかな」

「いい」了承しようとしてんじゃねエ!!!「まそつぶー!!!」

ぐへえ、しかたない。

「すみませんがやめてください。主に私のダメージ的な意味で…」
「う…まあ仕方ないか」

まあいいや次、古菲さん

「剣術をやっているって言っていたアルナ…」

「ええ、まだまだ未熟ですが…」

まさか…

「勝負アル!!」

「だが断る!!!」

「何故アルカ!!」

「めんどくさいから!!次どうぞ」

はい次、超 鈴音さん。

「未来人はいると思うか？」

「居たら面白そうですね。それに未来人はロマンです。主にロボットとか、ロボットとか、ロボットとか…」

大事なことなので3回言いました。

なんか嬉しそうな顔をして席に座った超さんだったが…

次、葉加瀬 聡美さん

「ロボットは好きですか？」

「大好きですよ。ロボット」

現在制作中だがな…

「なら、今度麻帆良のロボット研究会に顔を出してみたいかがで
すか？」

「ぜひ、行かせてもらいます」

これは、今後が楽しみだ。

そんなこんなで質問タイムが終了した。

「それじゃあ席はエヴァンジェリンさんの隣の席で…」

「わかりました」

席の位置は、最後列の左側（教壇から見て）

「よろしくお願いしますね。エヴァンジェリンさん」

「ふん…」

ツンツンしてるなあエヴァンジェリンさん。

て言うかサラに似ている気がするけど気のせいかな？

まあいつか。

「それじゃあ授業を始めるよ」

「高畑先生、教科書ないんですけど」

「あっそうか、エヴァンジェリン君、見せてやってくれ」

「はあ、わかったよ…ほらこっちに席を寄せろ」

「すみませんね…」

そんなこんなで放課後

「あーやっとな終わったよ」

「白花、ちよっと話したいんだがいいか？」

千雨からくるとは…

「うん、いいよどこで話す？」

「世界樹前あたりでいいんじゃないかね？」

「んじゃ、案内はお願いね」

そういって世界樹の前へ行った。

「ちよっと聞いていいか？」

いいよと応えておく。

「いろいろ言いたいけど、先に久しぶりって言うておくよ」

「千雨もなんか変わったね。性格とかネットとか」

チェックは欠かしてませんよ『ちうの部屋』

「ばれてるか…まあお前にはれてても驚かないがな。性格の方は、

ここが非常識すぎてこうなったてな感じかな…」

「大変だったんだね」

「一人じゃなかったからここまで耐えれたんだよな…」

そういえば…

「ナビコは元気かな？」

「ああ、でも最近変に、いや、変態になってきてな…」

変態かよ…

「そっちのトモエはどうなんだ？私の予想じゃああまり変わってなさそうだけど…」

そつでもないんだよな…

「最近さ、トモエの小言が多いんだよなあ…」

「なんだいつも通りか…」

「なにそれ、いつも私が小言を言われているってことかよ」

「違うのか？」

そこで疑問文つて私つて信用無いな…

「この分だと1-Cの編入生つてのは」

「ナエ姉だよ。ちなみにおじい様は大学の方で教師をしてるよ。後、へべレケ博士も来てるから」

「なんか全員集合みたいな感じだな」

ぬらりひょんが招いたんだけどね…

「そついえば、パーツの方はどうなったんだ？」

「もう結構できてきているからできたらそつちに届けるよ」

ナビコは原作と同じデザインだけど、性能は違っけどメダチェンジはするよ。

「そういえば、住むところはどこなんだ？もしかして寮か？」
「うん、ナエ姉と同じ部屋で寮に住むことになったんだ」
「へえ、あたしも寮だから気軽に来るといいよ」
「おk」

カーナーラーズー

「カルマか。いい曲じゃん」
「だろ。もしもし、いいんちょ？なに、ああ、うん、いま一緒にいるよ。わかった」

「いいんちょさん？何か用だったの？」

「私ってどうか、お前に用だな」

「わたしに？」

「とにかく、教室に戻るぞ」

「了解。」

・
・
・
・
そして、教室に戻って見たらクラッカーの破裂音が響き渡った。

「「「「「１-Aへようこそ！！、白花ちゃん！！」「」「」」

どうやらクラスみんなが歓迎会の用意をしてくれたみたいだ。

「ほら、主役は真ん中に行かないとな…」

千雨がそう言って手を引いて、中央の席に案内した。

(よくこの短時間で用意できたな…)

そこには、菓子類のものや飲み物、そして中華系の料理があった。

「それじゃあ、白花ちゃん何か一言どう？」

とりあえず、あいさつとかもしておいた方がいいだろ…

「え〜と、私のために歓迎会を開いていただきありがとうございます。何分こんなバカ騒ぎに参加するのは久しぶりなので、え〜と、その、」

丁寧語で言うのはなれないし…

「あ〜もう！〜とりあえず、バカ騒ぎはするけど、はめ外さない程度に騒いでいこうや」

イエー イー！！

そんな感じで歓迎会が始まって、飲み食いしていると…

「ちよつといいアルか？」

「あつ私もいいカナ？」

W中華娘 が あらわれた。

「何か用かな？」

「S Y「勝負はしませんよ」ぬう、じゃあ剣術をやるといつていたが…実力はどの程度アルか？」

そういえば、ほとんど師匠の相手しかしてなかったから、どのくら

い強くなったのかな…

「ほとんど師匠の相手をしていたので、どれだけあるかわかりませんね。小さいころは千雨と一緒に稽古してたけど…」

その言葉に、古菲の目がギラリと光った気がした。

「つまり、長谷川も同じくらいの実力はあるということかな？」

「さあ？どうなんだろうね…」

「ちよつと失礼するアル」

古菲が千雨の方へ向かっていった。

「意外だったナ、長谷川さんはそんなに強いのか？」

今度は、未来の火星人が話しかけてきた。

「いや、最後にいつしよに稽古したのは数年前だし、今はどの程度まで言っているかさつぱりだよ。えくと、超ちよつさん」

「超チャオダヨ。超・鈴音チャオリンシエン」

顔を引きつりながらそう言った。

「で、いったい何の用ですか？」

「ふむ、ハカセからもお誘いがあるが、ロボ研にきたら、遊びに来るといいヨ」

「明日にでも行ってみたいですね」

「いいヨ、大歓迎ネ」

そして、時間が過ぎていき…

「そろそろお開きにしましょうか。明日の授業に支障がないうちに腰まである金髪の人、雪広 あやかさんが言い出し、片付けて、解散した。」

「そういえば、白花ちゃんって今はどこに住んでるの？」

神楽坂 明日菜さんが聞いてきた。

再来年のあたりからいろいろ苦労するんだろうな…

「姉と一緒に寮に住むことになっているから」

「あゝうちらとなんか寮に引っ越してくる人がいるってお爺ちゃんいってたな」

まじでありえないよな…

この近衛 木乃香さんあの学園長めらりひよんの孫娘なんだぜ…

「たぶんそれですね。それにしても…」

「近衛さんって学園長の孫娘なんですよね…」

「そやで〜。似てへんやろ」

「いや、女性は普通でも男性の方はあれなんですかね？」

「いや、お爺ちゃんだけがああなんよ」

遺伝子の突然変異じゃなくてよかった。

「ほんと、あの頭はどうなっているんかね」

「まさか本当に、妖怪なのかな？」

「んな訳ないやろアスナ。それならうちも妖怪になってまっちゃん。」

「あっそうだった、ごめんねこのか」

仲いいなこの二人…

「まあ、そんな感じで寮にいますからよろしくお願いしますね。」

「わかったわ、何か聞きたいことがあったら何でも言ってね。」

「逆にアスナが質問しそうな気もするけどな。」

バカレツドだしねエ…

・
・
・
・
「ただいまー」

寮の部屋にはすでにナエ姉がいた。

「お帰りなさい、晩御飯は…」

「ああ…クラスの歓迎会つてんでもう食べてきちゃった」

「ふふふ…実はうちのクラスも歓迎会をやっつてね。そこで食べてきちゃったから」

「あれ？そうなんだ」

その後は、教科書の整理などをしたり荷物の整理をしていた。

「そういえば、うちのクラスに千雨がいたんよ」

「そうだったのよかったじゃない」

「性格は少し変わってたけどねww」

「それは見てみたいわね。それと明日は寝坊しないでね。編入早々遅刻なんていやよ？」

「よし、トモエ任せた」

『たまには自分で起きてください』

ほんと、生意気になっちゃって…

第6話 趣味に走った結果がこれだよ(前書き)

新しいゲームにはまってしまっていて遅くなってしまいました。
申し訳ありません

それではどうぞ…

第6話 趣味に走った結果がこれだよ

さて、本日は休日なので先日お誘いにあつた。ロボット研究会に行ってみることにした。さてさていったいどういうものがあるのか楽しみだ。一応、ティンペットは男型と女型が用意してある。メダール？まだできてないんだ。ロボット研究会に行くときは女型ティンペット一機持っていくか。ついでに魔法球も…

・
・
・

で、ここどこだ？

麻帆良大学部、超の研究室に行こうとしたのだが…やばい迷ったどうしよう…

「おや、白花じゃないか？どうしたんだこんな所で」

そこにいるのは、龍宮 真名さんじゃないか…

とても中学生とは思えな（ゴリ ああやめて、銃口を眉間に向けないで…

「今、失礼なこと考えてなかったかい…」

いえいえ、滅相もございません（汗）。

「ここに来たということは、超の研究所に用があるのかな？」

そうなんだけど、迷っちゃってさ…

「ふむ、私も超に用があるから一緒に行くかい？」

「一緒にさせていただきます真名さん。ところでその銃は…」

「マナでいいよ。後これはエアガンだ」

エアガンなら仕方ないな。

・
・
・

「遅かったじゃないか。もしかして道に迷ったか？あつ龍宮さん銃弾のデータありがとうヨ」

まさにその通りだよこの野郎。

「ま…まあ、ここは広いからナ、慣れないと迷うこともあるヨ」

慰めどうも…

「さて、秋葉原博士たちが作った。メダロットだったかな？それはどうゆう物なんだ？」

少女説明中…

「なるほど、しかしこのサイズだと人工知能を入れるのに苦労するんじゃないか？」

「そこらへんはもうクリアしてあるよ」

「なに？いつたい何を使ったネ」

これ、と言って首飾りにしていたUSBメモリを見せた。

「見た目は普通のUSBメモリみたいですね…」

「まあ、これ自体は市販のものを改造した程度のものだよ」

中身が違っただけなんだよね…

「まさかこれが人工知能じゃないですよね…」

「いや…これはただの入れ物みたいなもので、中身が人工知能だから」

そういつてメモリをいじり、中にあったメダルを見せる。

「これは？」

「六角貨幣石…単細胞の化石でそれを加工したものだよ。この容量がすごくてね、人工知能を入れるのにちょうどいい素材だったから作ったんだ」

メダルをメモリに戻して、トモエに話すようにした。

『初めまして、超鈴音、葉加瀬聡美、龍宮真名』

「うお！？ビックリしたネ」

「会話も可能とは…知能は人間レベルに行っていますか…これなら…ブツブツ」

「こちらの名前は聞いていたからか…」

『その通りです。私はトモエと申します。以後お見知りおきを…』

バカ丁寧にするなあトモエは…

『初対面ですし、礼儀正しくしておこうかと思ひまして…』

「ふむ…主人と違っていい子のようだナ」

ひでえぞ超、私は礼儀正しくないってか？

「自己紹介の時点でもうアレですからね…」

あれ？あの紹介滑ったかな…掴みOKみただったけど…

「あれ？そういえば長谷川さんも同じようなものを持っていたような
な」

「そういえばもっていたネ。あれは？」

千雨普段からつけているのかな？

「あれは千雨が麻帆良に行くときに渡したものだ」

「なるほど、だからか…」

そんなこんなで話していたらお爺ちゃんが研究室に来た。

「おう、やっているようじゃのう」

「あ、秋葉原先生どうもネ」

「そういえばお爺ちゃん大学部だったね」

「お爺ちゃん？白花さんって秋葉原先生の子供だったんですか？」

葉加瀬がなんか驚いているけど…まあ、似たようなものだけだね

「子供じゃなくて孫だね。まあ、私は養子だけど」

「それで、どこまで説明したのかの？」

「メダルのことまでって所ですね」

次はティンペットの事だね。

「ならば、次はこのメダルの体になる『ティンペット』の説明をするかでしょう。白花、ティンペットはあるか？」

「持ってきてあるよ」と

そういつてカバンから白と赤で彩られた女型ティンペットを取り出す。

「これがメダロットの身体になる『ティンペット』じゃ」

「ちなみにこれは女性型で男性型もあるんだ」

研究者の二人は興味深いと言わんばかりにティンペットをじっくり見ている。

「『ティンペット』…直訳すると『ブリキの友達』か」

「その通りだよ真名。このティンペットにパーツとメダルを合わせることができるのがメダルロボット略してメダロットだ!!」

「そのまんまですね…」

シンプルの方がわかりやすいだろう葉加瀬。

「人間でいうならティンペットが骨組みでパーツが肉体、そしてメダルが頭脳の役割をするのじゃよ」

「それじゃあティンペットの動力とかの説明するね」

そういつてまず神経の役割を持つケーブルの説明を始めた。

「まずこのケーブルはマッスルケーブルと言って本体の神経となり、電気信号で収縮する素材として使われることにより、様々なパーツへの対応と柔軟な動きを実現することが可能……なはず!!」

「はずってまだ試してないの力？」

「いや、パーツの方が遅れていてねロボ研にはパーツ作成を依頼するかもしれないからその時はよろしく」

「任せてください！ロボ系のパーツならT - ANK - 3のパーツの予備などもありますし！なんなら説明が終わったらすぐにでもやりましょう!!」

「うおう！？予想以上にやる気出ているな葉加瀬…新しいロボット技術を学べることにテンションが上がったか？」

「その時はよろしく頼むよ。次にパーツの説明だけど…お爺ちゃんよろしく」

「ほいほい。あゝパーツなんじゃがこれは頭部、右腕、左腕、脚部の4つに分けておる。機能的には外殻や筋肉の役割をしておる。外殻の素材はN F P R装甲を使用しており、これは熱や接触を感じ取る感覚神経を有する装甲であり、より人間らしい行動を可能…なはずじゃ」

「またですか…」

「データが少なくて断言はできないのじゃよ。続けるぞい、筋肉にはさっき話したマッスルケーブルが使用されており、装甲にはナノマシンが織り込まれており、パーツが損傷しても大体1時間くらいで修復される。」

「そういえば漫画版でロクシヨウがレッドマトロイドにボロボロにされたときにセラフシステムが発動して、全快になった後一刀両断してたな…」

「動力なんじやが、ソーラーシステムに加えて、メダロット自身の動作によるエネルギー充填のオートマチックジェネレーターを併用し、半永久的に駆動する事が可能じゃ」

「なあ、白花。メダロットをエネルギー切れにする方法はないのか？」

「なんでそんなことを聞くんだろう…まあ、知っておいて損はないしね。」

「エネルギー切れにするなら日が差さない部屋でメダロットが動けない状態にしておけばエネルギー切れになると思いけど…何故そんなことを聞くし…」

「なんとなくだな…」

「さいでつか。まあ、傭兵ってのは情報もきちんとしておくものなんだろうね。」

「とまあこんな感じかの…」

「ふむ…ナノマシンの技術を使えばうちのロボットたちも強化できるかもしれないネ」

「あれ？これって茶々丸改造フラグ？」

「そういえば、茶々丸さんってここで生まれたんですよね？動力は何なんですか？」

「ぜんまいだよ」

「ぜんまい？あのキリキリ回す？」

「普通に考えたらぜんまいで動くってすごくない？」

「そのぜんまいだよ、完成当初は外部電源だったんだが、今は魔力を込めたぜんまいが動力だよ」

おいおい、魔力って…

「あのさ超、私たちは関係者じゃないんだけど…」

「あれ？秋葉原先生が元関係者って聞いたから白花も関係者だと思っただがナ」

「あんなの（自称正義）と一緒に働くとかマジ勘弁だわ」

働きたくないでござるー！！

「それはすまなかったヨ、今度店に来たらおごるからそれで許してくれない力？」

「許します！」『マスターその時はきちんとナ工様に連絡してくださいね』

わかってるよトモエ…私はそんなに信用無いかな

『念のためです』

さいですか…

「それじゃあ話も済んだことですし、パーツの調整を始めましょう！さあ始めましょう！！すぐはじめましょう！！…！」

葉加瀬エ…なんかもう待ちきれないって感じっすね…

「それじゃあ、このSAM型メダロット『トモエゴゼン』とNAV型『ナビ・コミュニケーション』の調整の手伝いをお願いするよ」「

「任せるネー!!」

「ヒヤッハー!!!」

葉加瀬がモヒカンになっちゃった…

カカツと調整完了

結局、あの後から葉加瀬はテンション青天井のままにして調整をした。

途中、目からビームをとかやっぱりロケットパンチをとか言って改造しようとしたところを近くにあった田中アームでぶっ叩いて気絶させた。

「さてと…トモエ。これがあなたの体になるからね」

『ではどうぞ』

「それじゃあ、メダルを入れて…と」

頭部のセンサーに光がとまり、そしてトモエの稼働が開始した。

「どうかのトモエ？」

「センサー、可動部その他もろもろ問題ありません」

「それじゃあ軽く動き回ってみて」

了解と言って部屋を2・3周歩かせてみたが、特に異常は見受けら

れなかった。

「よし、記念すべき1体目が完成だ!!!」

「ナビ・コミュニケーションは?」

「この後千雨に渡してメダルを入れて完成だから式体目だね」

身体を得て、千雨に襲いかからないか心配だけど…何とかなるか!
!たぶん!!!

「そろそろ日が暮れてきたから早く帰った方がいいヨ。ここの桜通りにはこわ〜い吸血鬼がいるからナ」

ああ、エヴァンジェリンの事か…

満月で桜通りに行くと和えるって奴だったかな

「わあつたよ。それじゃあ、またね!!!」

そういつて私は研究室を後にした。

・
・
・

「超、よかつたのか?彼女は計画の障害になるかもしれんぞ?」

秋葉原先生も帰った後、私たちは計画について話していた。

「確かにあの人の技術は脅威になりかねません…計画を確実にしたいなら不干涉を約束させるか協力させるかのどれかをすると思つてました」

メダロットやナノマシンの技術、これを使われるとやっかいなこと

になりそうだが…

「彼女とは正々堂々と戦いたいネ。これは私の我儘…そう、ただの我儘ヨ」

そう言い放つ超の表情はプレゼントを待つ子供のよ様な笑みだった。

・
・
・

白花 in 大浴場

寮の大浴場って広すぎね？そう思うくらいあるんだよね此処…

「ふいゝ極楽、極楽」

「親父臭いぞ白花」

「これはいいですねゝ」

「そうですねゝ特にマスターの裸体とか、裸体とか、裸体とか」

誰かこの変態メダロットを黙らせておけ。

しかし、なんでナビコとトモエが風呂にいるかって？回想入りまゝです。

ゝ 回想 ゝ

千雨の部屋に行き、ナビコを起動してみるとあら不思議…起動して数秒で千雨にルパンダイブをかますという奇行に出たが、難なく撃退した千雨であった。

「そろそろ風呂に入るか…」

その一言を聞いたナビコは…

「マスターの裸体に興味あります!!」

「いや、お前一応機械だろ」

「防水加工余裕でした」

てな感じで一緒に入ることになったが…あの純粹だったころのナビコはどこへ行った…

く 回想終了 く

「まったくいきなり飛び込んでくるとか…勘弁してくれよ」

「マスターが素敵すぎるからいけないんですよ」

向こうがいちゃついているけど、私たちはゆっくりつかっていると
しますかね

…ふう

「こづいうのもいいですね。お嬢」

そくだね〜あ”あ”〜良き湯かな〜

どっかの腐り神のごとくとろけきっていると入口の方から声が聞こえてきた。

「いや〜今日は引いた引いた」

「人を？」

「んな訳ないやろ!!なんやうちは車とか運転しないし、自転車より電車や!!」

「ごめんごめん。ジョークだってば」

「ん？あそこにいるのは転校生と長谷川と…人形？」

そこには同じクラスの佐々木まき絵、和泉亜子、大河内アキラ、明石裕奈が入ってきた。

「おいす〜秋葉原さん」

「ども〜明石さん」

湯船でとろけきっていると4人も湯船に浸かっていた。

「此処のお風呂広いでしょ」

「広すぎじゃね？下手な銭湯よりも広いじゃん」

「まあね、一度に100人近く入ったりするからこんなに大きいんだって」

一度に100人…多いな

「そーえば、そっちの蕩けきっているのと、長谷川さんに襲いかかるうとしているのは何や？」

ん？トモエとナビコの事か…ていうかナビコ少し自重しるや…

「ああ…あれは…」

メダロットについて説明中…

「へえ〜メダロットねェ…」

「トモエです〜よろしくおねがいします」

メダロツトつてのぼせるのかな…このまま入れたままにしてみるか…
ガスッ！！
ん？何の音だ？

「あはは！蕩けきってるなこの子」

「うりくなでなで」

「ぬへえ〜」

トモエ…変な声出すくらい蕩けきっているな…

「大丈夫か？長谷川」

大河内さんの声ができる方を見ると漫画で出てくる様なたんこぶ
ができており、水死体のように仰向けにぶか〜と浮かんでいるナビ
コと拳が少し赤い大河内さんがいた。
どうやらさっきの音は千雨に襲いかかっていたところをげんこつ
の一発でもお見舞いしたのかもしれない。

「ああ、大河内か…ありがとう」

「どういたしまして、でも長谷川もあの子も本気で襲われているわ
けじゃないんだな」

「まあ…あれだ。子犬がじゃれついているようなレベルだしな」

向こうは向こうで談笑しているみたいだ。

それにしても一撃で頭部パーツを破壊したのかよ大河内さんの殴る
行動拳ハンマー

そろそろ髪も洗うとしようかな…

「ヤベ…シャンプー切れてら」

どうすつべ…仕方ない周りから借りるか…
そう思い、隣にいた和泉さんにシャンプー分けてくれないかとお願
いすることにした。

「和泉さんシャンプー分けてくれない？」

「切らしちゃったん？ならええよ」

ありがとうと礼を言い一押し分けてもらうことが出来た。

「いや、内から持ってきた分だけでまだ大丈夫かと思ったけどそんなことはなかったよ」

「きちんと残りがどれくらいあるか把握しておいた方がええよ」

「そうするわ」

そんなこんなで洗い終わって湯船に戻ろうとすると…

「なあ…秋葉原さんちよつと聞いてええかな」

「ん？なんぞ？」

私、和泉さんに何かしちゃったかな？

「その傷はどうしたん？」

ああ、正義（笑）の魔法使いに打ち抜かれた傷か…

そつえば和泉さんは背中傷にトラウマみたいなのがあったな…

「昔、いろいろあつて撃たれた。それだけ」

「撃たれたつて…物騒やな」

「ただ運が悪かっただけさ」

本当は意図的に狙われてたけどまあ、運が悪かったで済みますか。

「えっと…その傷が疎ましいと思ったことってある？」

「特にないかな。別にあつてもなくても同じだし」

事実だ。そんな傷よりも鶴子さんの修行でできた傷のが多いし…まあ、その傷は治せたけど、なぜか治せないんだよね…魔法の矢で打ち抜かれた所

「その傷も含めて私だからね。いつまでも傷が疎ましいと思ってる
と人生損な感じだと思っただ。暗い事より、楽しいことを」

「傷を含めて私…か」

「そりや気になることもあつたさ。でも、傷のある私も受け入れてくれる人がいるから私は大丈夫なんだ。和泉さんにもいるんじゃない？
悩みを聞いてくれる友人が」

「確かにそうやけど…」

私の場合は千雨やナエ姉、それにひなた荘の人たちが支えてもあつたな…

「なら相談すればいいんだよ。それで申し訳ない気持ちだつたら向
こうの相談にも乗ってやればいいんじゃない？」

「そんなもんでええんやるか？」

「いいんだよ。一人で悩んで答えが出なかつたらほかの人を頼れば
いいのさ」

「そっか…ありがとな相談に乗ってくれて」

悩みを打ち明けてすっきりしたのかその笑顔は晴れやかだった。

「どういたしまして和泉さん」

「亜子でええよ秋葉原さん」

「それじゃあ私も白花でいいよ」

そしてまた湯船に浸かり、少しして大浴場を後にした。

・

・

・

部屋に戻って軽くくつろいだ後、詰め替え用のシャンプーを買いに行くことにした。

「ナエ姉、トモエ。ちょっとコンビニに行ってくる」

「あら？どうして？」

「シャンプーが切れたから詰め替えの奴を買いに行くそうです」

「待ちなさい白花、麻帆良はなんか吸血鬼が出るとかで物騒だから竹刀でも持っていきなさい」

そういつてナエ姉はベッドの上に置いてあった竹刀を袋ごとこちらに投げ渡してきた。

「ありがと、それじゃあ行ってきます」

そういつて私は部屋を後にした。

・

・

・

道中桜通り近辺を通っていたが今日は新月。

桜通りの吸血鬼は満月の夜に出るっていうし大丈夫だろう

「……………！！！！」

ん？なんか声が聞こえるような…

「…貴…！！…し…た…！！」

「…悪…いが！！正…き…るが…」

どうやら声は森の方から聞こえるな…

とりあえず行ってみるか。面倒事だと思いが変人に襲われていたのなら目覚め悪いし

「ハハハ！！打ち取ったぞ正義の魔法使いである我らが悪の魔法使い…闇の福音を！！」

男性の叫び声が聞こえとつさに気の陰に身を隠す。

幼女一人に…ん？あれはエヴァンジェリンさん？と茶々丸さんか…それに対して向こうは杖を持った男が十数名か…多分魔法使いだろうな…

「つく！！魔法薬が尽きたところを狙ったか…魔力や道具が少なくなつたところを襲うとは大した正義だな」

確かエヴァンジェリンって満月以外は魔法役を使用して少ない魔力を補っていたんだよね。それが尽きたところを襲うとか卑怯臭いな…

「黙れ！！貴様に正義を語る筋合いはない！！」

お前らの方が語る筋合いはねえよ…

「闇の福音を倒したとなればおれたちは一躍有名人だぜこりゃ」

「ククク、泣いて許しを請い、我々に従うのなら許してやってもらいますぞ？」

最低な奴らだなこいつら、奴らのうちの一人が白い木の杭を持っていてるが…たぶん不死殺しの杭なんだろうな…

「貴様のような下種にこの闇の福音が屈服するものか！！この薄汚い豚どもが！！」

おゝさすがは『誇り高き悪』正義（笑）とは大違いだな…

さてと、できれば私の正体をばらしたくないが…魔法や気を使わないうで倒すとなると面倒…さてよ？だったらスタンドを使えばいいんじゃないか！そうと決まったら陣術師を配置して結界を作れば…

「この吸血鬼風情が！！正義の裁きを受けるがいい！！！！」

そういつて男はエヴァンジェリンに杭を突き立てたが、それは刺さることはなかった

魔法使いたちもエヴァンジェリン達さえも予想しなかった乱入者の手によって打ち砕かれていた。

「なんだ「失せる屑がつ！！」「ぐぶいあ！！」

乱入者の竹刀が男の喉を突きそれにより手から離れた杭を砕く

「つく！？何者だ！！貴様は！！」

「貴様らに応える名前はない…よ！！！！」

そういつて近場にいた一人の顎を横一線に振りぬいた。

「あいにくさ、犯罪者＋ペド趣味の奴らに名前教える勇氣もないんでさっさとくたばってくださいますか？」

顎を抑えてのた打ち回っている男の顔面を踏みつけながら白花は言い放つ…

「オラオラ！踏まれて感じてるのか？このドM野郎が！！」

ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスッ！

「つぐ、があ、やめっ、ひい」

「貴様：われわれ正義の魔法使いに何たる行為を…さては貴様、闇の福音の仲間か！！」

自分で正義とかないわ

そんな事を思いながらまだ踏み続ける…

ガスッ！ガスッ！ゴシヤ！

「たっ助け、止め、……………」

ついに男は何も言わなくなってしまった。

「あれ？もう気絶しちまったのかよ…根性ねえな」

白花は魔法使いたちの方へ振り向き、竹刀を構える

「さて、覚悟はいいか？ゴミムシどもが…」

「つく…舐めるな悪の分際で！！光の精霊11柱、集い来りて、敵

を打て！魔法の矢11矢！！」

魔法使いの杖先から光が集まり、矢のようになって白花に向かってくる。

「あぶねっ変態シールド！！」

「ぎゃあああああ！！！！」

白花はさっきまで踏み続けていた男を持ち上げた手にして魔法の矢を防いだ。

「な！？卑怯な！！」

「勝てばいいんだよ！さっきお前らがやったみたいにな！！」

「ぐはあ！！」

因果応報だったかな？こつこつ…

そんな事を思いながらまた一人叩き伏せた。

予想外の出来事に混乱していた魔法使いたちだが、落ち着きを取り戻し始めた。

「こいつただの一般人じゃないぞ！！障壁を張れ！！」

「オラあ！！」

ガキンッ

顔を狙った一振りは見えない壁に弾かれてしまった。

「形勢逆転だな…死ね！！魔法の矢、氷の矢13矢！！」

「W変態シールド！！」

「ぎゃあああああ！！」

またしても飛来してくる魔法の矢を倒れていた男を持ち上げ、盾にして防ぐことが出来た。

その後は、白花が攻撃をするも障壁に阻まれ、徐々に押されていた…

配置も済んで後は結界を完成させるだけだが…さすがに使わないと無理そうだな…

「エヴァンジェリン！！これから起こることを他言無用で頼めるかい？」

「逆転の手でもあるのか？」

その言葉に白花は即答した。

「ある！！無ければこんなこと言わないよ！！」

「なら、私と茶々丸の安全が条件だ」

「了解！！それじゃあ…レギオン！！！！」

次の瞬間白花の周辺に剣と盾、そして槍を持ち、背中に翼のようなブースターを付けた人形が計4体ほど現れた。

「セイバー、ランサー構えろ！！」

ジャギッ

人形たちは手に持った得物を構え魔法使いたちの方へと向けた。

「攻撃開始！！」

号令が出された瞬間人形は魔法使いたちの懐に入っていた。

「グフ…」

「ウギヤアア」

人形たちの攻撃は障壁ごとぶち抜いており術者ごと切り捨て、貫いた。

「なんだ！？こいつらは！」

「繰り主だ！繰り主を狙え！！」

そんな声が聞こえてきて魔法使いたちは白花に集中攻撃を仕掛けるために詠唱を始めた…

「来たれ雷精、風精、雷を纏いて、吹きすさべ！南洋の嵐！雷の暴風！！！」

「ものみな焼き尽くす浄化の炎！破壊の王にして再生の微よ！わが手に宿りて敵を食らえ！！紅き焰！！」

様々な呪文が白花たちに殺到する、しかし…

「何のために盾があると思ってるのあんたら？」

白花の周辺に居た盾兵の盾が白色のビームシールドのようになり、魔法をすべて防ぎ切った。

「お…詠唱完了か。それじゃあ…精霊結界展開！！」

その言葉が響いたとき、あたりに幕のようなものが出来た。

「結界だと？こんなもので勝った気でいる気か！！魔法の矢27矢
！！！！」

魔法使いの一人が魔法の矢を放とうとするが先ほどのように魔法が
出る気配はない…

「んな！？どうなっている！！」

「駄目だ…障壁も…ギャア！！」

「貴様あ！！いったい何をした！！」

結界が張られて、魔法の使用が出来なくなり、障壁ももろくなった
ことにわからなくて慌てふためいている姿を楽しそうに見ていた白
花は再び竹刀で攻撃し始めた。

「さていったい何をしたんだろう…ね！！」

そついいながら辺りの敵を倒していき、十数人いた魔法使いも5人
程度になってしまった。

「手前から終わりだ…エクシードチャージ！！」

攻勢に出ていた人形たちは武器の柄をひねるとそれに応じるかのよ
うに剣は赤い輝きを、槍は蒼い焰が柄から噴出している。

「まっ待て！正義にこんなことをしてタダで…」

「もう遅えよ！！」

ズガアアアーン！！

轟音を立てながら突っ込んでいき魔法使いたちを粉碎して人形たち

を消した。

「JACK POTってか…」

死屍累々

そんな言葉が似合うような光景になった森の一角で白花はエヴァと茶々丸を背負いその場を後にした。

・
・
・

「おっおい…あんまり揺らすな。落ちる」

「我慢してよ〜二人背負うのきついんだから」

エヴァンジェリンが何か聞いたそうだけど今は茶々丸を工学部に運ぶことが先だ。

「それじゃあもう少し飛ばすね」

「な！？ちよつと待！ギャアア！落ちる〜」

ヤベ…なんかエヴァンジェリンの反応面白いな

お届け物です

茶々丸を工学部に預けた後エヴァを家に送ることにした。

「助けてくれたことを感謝する。ありがとう」

「どういたしまして…それじゃあ私は帰るね」

そういつてエヴァの家のログハウスを後にしようとしたが呼び止められた。

「待て…今夜はもう遅いうちに泊まっていくがいい」

「いいの？それじゃあお言葉に甘えるところでしょうか」

エヴァンジェリンって案外義理堅いな…そうだ泊まるとなればナエ姉に連絡入れておかないと…

「エヴァンジェリンさん電話借りるけどいい？」

「構わんぞ、そこにあるから使ってくれ。後はエヴァでいいよ」

「ありがと。じゃあ私も白花でいいからねエヴァ」

エヴァが脇の方を指さし、そこにあつた電話を使いことにした。携帯？部屋だよ…

そう思いながらワイヤレスタイプの電話の受話器を取った。

トウルルルルル…

『はい秋葉原ですが』

『あつナエ姉…白花だけだよ』

『あら？どうしたの』

『実は…カクカクシカジカで泊まることにしたから』

『わかったわ。それじゃああまり迷惑かけないでね』

『わかってる。じゃあね』

P.i…

「それじゃあ明日あたりに聞いてもいいか？」

「構わないよ。で…何処で寝ればいいの？」

「そうだな…一緒に寝てやろうか？」

なんかいたずらを思いついたような笑みをしているけど…

「別にいいよ減るもんじゃないし」

「んな！？」

あれ？エヴァの顔が真っ赤だけど…何か変なこと言ったっけ？
そう思いながら寝室に行きエヴァと寝ることにした

「それじゃあお休み」

「ん…ああ…お休み」

ふあああ…明日は説明ないとか…めんどくさ

エヴァの体暖かいな…ZZZZZ…

第6話 趣味に走った結果がこれだよ（後書き）

エヴァがデレに入っているのはどうかの赤毛の鳥頭に重なっているからです。

次にキャラ設定を入れるのでレギオンの事はそこでどうぞ

キャラ設定（前書き）

予告通りのキャラ設定です。

パーツについてはもう一度キャラ設定を出すつもりなのでその時に
出します。

キャラ設定

名前 秋葉原 白花 (ハクカ・スプリングフィールド)

性別 女

身長 159

体重 死にたいのかな？カナ？

宝具 アエストウス・ドムス・アウレア 招き舞う黄金劇場、すいてんにっごうあまでらまやのしずめいし 水天日光天照八野鎮石

得物 レクナムエカエロマムナ 隕鉄の鞆、玉藻鎮石、ルーンの包帯

SKILL

道具作成

神からもらったスキルの一つ、このスキルの応用で錬金術がしよう
でき調合次第ではかなりの物になる。このスキルのおかげで、造る
のは困難なものでも人が作れるものはほとんど作れるようになって
いる。

天才の頭脳

ありとあらゆる学問を理解することができる。

限界突破

鍛えれば鍛えた分だけ強くなれる。しかし鍛えなければまったく意
味がない。

黄金律

神からもらったスキルの一つ、金に困らないぐらい財貨と縁がある人生を送れる。

皇帝特権

本人が主張することで本来持ちえないスキルを短時間だけ獲得することができる。赤セイバーの能力

要は、がんばれがんばれでできる絶対できるがんばれもっと）
ry

直感

神からもらったスキルの一つ、未来予知にも似た勘の良さである。騒動の原因や危険な場所、敵の行動を先読みすることができる。ただし、感覚的でなんとなく感じてしまう。）

神鳴流＋我流

青山素子を師として、学んだ京都神鳴流。広く浅くと学んだため、本家大元には劣るし我流が混じっている。しかし、発想次第では、神鳴流に存在しない技を使えるので、上位ランクを倒すこともできるかもしれない。使用する得物は拳、剣、弓（秘剣 風塵乱舞の応用）

魔力制御

生まれついて魔力が少ないため、少ない魔力での魔力酷使が可能にすることができる。

簡易レート

魔法の射手1本⇨魔法の射手100本

並列思考

同時に複数のことを考えることを可能とする技術。詠唱中の行動や同時無詠唱をこなすことができるようになる。

魂息吹

空気中の魔力を吸収し消費した分を補うことができる。キャス狐のスキルの一つ

術式融合

特定の魔法を融合させるスキル。感卦法の要領でやっていけばよし。

例 治療×魔法障壁（全面型）＝ハートレスサークル

魔法適正

攻撃より防御の傾向が高く、魔力と気は量はそこそこだがその制御はかなりの物である。全ての属性を使いこなせるが、一点突破の適正には勝てないような感じである。上級呪文などはまだ覚えていないので、ひたすら初期の呪文を練習した。そのおかげで、初期の呪文はほとんどが一人前である。そして、防御、回復、補助に関しては（初期の呪文は）玄人クラスである。攻撃に関しては威力が低い代わりに数で勝負するといった戦法である。

始動キー エステウス・レグナス・アエストウス

現在の使用魔法

魔法の射手・治療・眠りの霧・魔法障壁・戦いの歌・戒めの矢・感卦法・武装感卦法

extraの技

花散る天幕、喝采は万雷の如く（バリテーヌ・ブラウセルン）、童ロサ・イクトウス
女謳う花の帝政）、燃え盛る聖者の泉、傷を拭う聖者の泉、時を縫ラウス・セント・クラウディオス
う聖者の泉、三度、洛陽を迎えても（インウイクトウス・スピリトトレ・フォンターネ・アーデント
トレ・フォンターネ・テンブステイスウース）、

呪相・氷天、炎天、密天、呪法・吸精、呪層・黒天洞、呪層界・怨

天祝奉、常世咲き裂く大殺界

ヒガンバナセツショウセキ

現在のスタンドの使用可能ジョブ

上海、剣士、銃士、盾兵、弓兵、槍兵、陣術士、衛生兵、紅の暴君

術技

エクシードチャージ

武器に仕込まれた機関部を燃焼させ攻撃力を高める。さらに魔力を送ることで強化可能。

精霊結界

陣術士が4体で作り出せる結界。効果は魔法に使うような精霊の召集妨害（つまりは魔法の使用不能にする）、魔法物質の脆くさせる事も可能。（魔法障壁など）

本作の主人公であり、転生者。神の寿命関係の書類ミスにより病死した少女。さまざまな能力をもらって、ネギま世界に転生。スプリングフィールド家に生まれたが、正義（笑）の魔法使いに不意打ちに会い、重傷を負い強制転移させられ、公式には行方不明扱い。日本に転移させられ、そこで秋葉原親子に拾われ養子として受け入れられた。ひなた荘との交流もあり、たまにその温泉に行ったりしていた。

自分自身を守る力を身につけたいと思い、青山素子に弟子入りをし、神鳴流を収める。そして、友人であるカオラ・スウから六角貨幣石を受け取り、メダルを作り上げる。そして、卒業後、麻帆良に行き、1-Aに編入。趣味は機械いじり

メダル組

名前 トモエ

属性 速度

性格 スピード

所持熟練度 なぐる・ねらいうち・おうえん

メダフォース なし

白花が最初に作り上げたメダル。名前のモデルは巴御前。性格は、真面目な感じではあるが、ボケるときはボケる。白花の呼び方は「お嬢」。

名前 ナビコ

属性 防御

性格 プロテクト

所持熟練度 まもる・なおす・せっち

メダフォース なし

白花が作り上げたメダル。現在は、長谷川 千雨をマスターとしている。

性格はおっとりした性格であるが、いろいろあつて変態化した。

第7話 金髪少女は何を思う…

昨夜は、侵入者の報告がありそいつらを撃退したまではよかった…

数が多く魔法薬をほとんど使いきってしまったのが運の尽きだったのかもな。そいつらは雇われの傭兵で私たちを消耗させる事が目的だったようだ。

そのせいで、撃退した後、気が緩んでしまい背後からの不意打ちを避けきれず、従者とともに負傷してしまった。

こちらは動けない状態になってしまい、奴らの要求を突っぱねて不死殺しの杭を使われそうになった時にこの学校に編入してきた白花と言う娘に助けられた。

一般人が裏の人間に勝てるわけがない、そう思い逃げるように言ったが、そいつは私を殺そうとした男の喉を竹刀の柄で突き、続けてもう一人踏みまくって倒してしまった。

魔法使いたちの攻撃を倒れている奴を持ち上げ盾にするなどのことをしていたが…奴らが冷静になったのか障壁を張り、魔法を使うが瞬動を使いよけていく。しかし、決定打の欠けた状態での戦闘は向こうが押しているようになった。その時、あいつはこれから起こることを口外しないでほしいと言ってきた。

おそらくこいつも魔法使いなのだろう…

私は茶々丸と私の身の安全を条件に口外しないことを約束した。しかし、そいつは私の予想と違い、そいつは人形を召喚し、戦闘を開始した。それは人形の形をした何かだった。魔力や気を使っておらず、それで召喚したとなると魔法使いではなく異能の持ち主なの

かもしれない。

そして、魔法使いどもを全滅させると茶々丸と私をおぶり、家に送ってもらった。

途中工学部で茶々丸を預けた。超たちはボディを交換すればすぐ終わるが、調整などもあるので預かっておく、と言っていた。

とりあえず、能力の説明や私のことなどを話しておこうかと思っただけ、もう遅いので家に泊めることにした。

普段の私ならさっさと追い出しているかもしれないのに、こいつを見てみるとなんだか懐かしい感じがする。あの勝気な笑みや気に入らない奴はぶっ飛ばす！といった態度。私の初恋であり、すでに死んでしまったサウザンドマスターに似ているからかもしれない。そう思ったら未練がましいなとおもい少し苛立った。それだからかうために一緒に寝るか？といって慌てふためく姿を見ようとしたがあっさり了承してきた。理由を聞いたら減るもんじゃないんだとこいつはどこか抜けている。そして一緒に寝ることにした。

ん、暖かい。こういうのも悪くはないな…

「知らない天井だ」

「お前は何を言っているんだ…」

そういえばエヴァの家に泊まったんだった。さくやは おたのしみでしたね。

「今変なことを考えてなかったか？」

考えてませんよ。

「まあいい。お前にはいろいろ聞きたいことがあるから朝食を食べたら聞かせてもらおうぞ」

りよ〜かい。

・

「御馳走様でした」

「お粗末様」

意外なことに和食だった。洋食を食べているようなイメージがあったんだがな。

「さて、説明をしてもらおうかな」

「できれば、第3者に見られないような所は無い？」

「ならばこっちに来い」

そういつて私たちは家の地下に行った。

そこにあつた魔法球の前に立ち、魔法球に入り、海辺の方にある家に入る。

「此処なら盗聴されることもないだろう。」

そうだけど念のため陣術師で阻害結界を作っておこう。

「その魔法でもない力はいつたいなんなんだ？」

結界を作った後、引っ込めてスタンドについて説明した。
少女説明中…

「なるほどな…スタンド、パワーを持った像か。」

「守護霊的なものでもあるんだよ。スタンドは生命エネルギーだから魔力を使つて無いんだよ。」

「だが、お前のスタンドは複数いたようだが？」

「私のは少し特殊だね。出せる数に上限があつてそれを超えなければ出せるよ。でも数が少なければ少ないほど強くなるの。」

そういつて【紅の暴君】を出す。

「これが今使える中で一番パワーがあるのだよ。」

『セイバーだ。よろしく頼むぞエヴァ』

「自我を持っているのか？」

「セイバーは特別だからね。」

「なるほどな…ということはお前のスタンドの能力は装備で戦闘タイプを変えることができるということか…」

鋭いね…大体は当たっているよ

「装備というか服だね。着せ替え人形みたいなものだよ。」

「なら、もっと増やせるということか。」

大当たり。暇な時や必要な時に造るつもりなんだよね

「まあね、少しずつ増やしていくと思うから。」

今の所は予定はないけど…

「次はエヴァの番だよ。」

「わかった。それじゃあ私のことを説明するか。」

幼J「誰が幼女だ!!!」少女説明中…

「真祖の吸血鬼か…」

「恐ろしいか？この不死の吸血鬼が…」

「全然。敵対しているわけでもないし、エヴァはエヴァでしょ。」

こうして話しているエヴァが人じゃないとか言っただとしても「それがどうした？」って感じだしね…

「そうか…そうだな。」

「それに、本当に恐ろしいのは狂信者だと思うんだ…」

「何？」

あいつら正義正義言ってるけどやってる事は外道だしな…

偶像のために人を殺したり、記憶操作の魔法をつまく使えば強姦してもばれやしないし…

下手な悪役より性質が悪い。

「実は私は魔法使いの家系でね。当時私には魔力が全然ないような状態だったの。」

「今は封印でもしているのか？」

「正解、家が良いところだったのか、周りからは非難を受けていたんだよね。でも、家族は普通に接してくれた。それだけでもよかった

んだ。」

「……………」

「だけど周りはそれを許さなかった。私には兄がいるんだけど、兄は私と違って魔力がかなりあったんだ。で私みたいな存在は必要ないってことで私を排除しに来たんだ。自称正義の魔法使いがね。」

「なに？」

「そこで死にかけてスタンドが発現して、自称正義の魔法使いを殺した。そのあとは強制転移の魔法が暴走して日本に来て今に至ると……」

「そうか…なあ、白花一つ聞いていいか？」

どうぞ。

「貴様は何を思ってその魔法使いを殺した？」

実にシンプルな答えだよ。

「死にたくないから殺した。殺さなければ殺されていた状況だったから……」

「正義の魔法使いどもなら激怒しそうな内容だな。」

現実を見ないバカどもだしね…

殺してはいけないから死んでくれってな感じだな。

「私は臆病だから『力』を隠して関わらないようにしているんだよ。これが交渉した理由。」

「約束は守る。条件も満たしてくれたしな。」

ありがとう、エヴァ

「それはそうと貴様は魔法が使えるのか？」

「独学で初期呪文しか使えないし、魔力は少ないけど制御の方は結構自信あるよ。」

それが取り柄だし…

「そういえば剣術も使えるのだったな」

「京都神鳴流っていう所なんだ」

鶴子さんは鬼畜で素子さんは切れると阿修羅。

「ずいぶんやっているんだな。」

「手札は多い方がいいしね。」

エヴァがなんか企んでいそうな笑みを浮かべている。 模擬戦フラグ
立ったかな？

「ふむ、それなら一度手合わせをしてみるか？」

マジで来たよ。でも自分の実力を知るいい機会だし…

「わかった、どこでやる？」

「その広場だ。」

そういつて広場の方へ向かう。

呪符とかも転送しておくか…

「では、こっちは従者を使わせてもらっぞー」

そういつてチャチャゼロを召喚した。

「オ、ナンダゴ主人コロシアイカ？」

「一応模擬だが、半殺し程度にしるよ。」

容赦ねえなエヴァ…；

「ケケケケ、テメモツイテネエナ。セイセイ楽シマセテクレヨ？」

「おk、だったらこっちは道具類もまんべんなく使うとするよ！」

そういつて呪符を取り出し魔法媒体のために造ったルーン文字を刻んだ包帯を腕に巻く。そして【紅の暴君】を召喚する。

「用意はいいか？」

「いつでも…」

向こうも準備ができたみたいだ。

「いくぞ!!!吸血鬼!!!」

「貴様の力を見せてみる!!!」

「切り刻ムゼー!!!」

『行くぞ、マスター!!!』

戦闘開始!!!

エヴァたちは各個撃破を狙ってきたのかセイバーにチャチャゼロ、白花にエヴァが付いた状態になった。

「オラオラ！！簡単ニヤラレルナヨ！！」

両手のナイフで攻めるチャチャゼロに対して…

『甘い！！』

それを捌き、隙を見つけて一撃を放つセイバー。

チャチャゼロはナイフの腹で受けるが、そのまま後方に飛ばされる。

「ナカナカヤルジャネエカ！！」

体勢を立て直して攻めることを再開する。

『お主もな！！』

ガキンツと剣を打ち合いを続ける二人であった。

「斬空掌！！」

白花の手から衝撃波が飛び、エヴァに襲いかかる。

「氷盾！！」

しかし、それは氷の盾によって阻まれる。

「今度はこっちの番だ！！リク・ラクラ・ラックライラック 来れ

氷精、闇の精、闇に従い吹雪け、常世の氷雪 行くぞ…闇の吹雪！
！！」

強力な力の放流が向かってくるが…

「障壁展開！」

白花の前に現れた障壁で受け切った。

「ずいぶんと硬いな…」

「これくらいないと師匠に殺されてますから…あはははは…」

どこか遠い目で語る白花だった。

「ふ、ならばこれはどうだ？断罪の剣！！」

エヴァは瞬動で接近し切りかかる。

しかし、白花はそれを気をまとった腕で受け止める。

「なんの、斬岩脚！！」

それをはじいて、かかと落としを放つ。

それを避けたエヴァだが、斬岩脚が当たった地面は碎け散った。

「気の扱いもかなりの物のようだな…」

「私はどつちかというところと攻撃より防御の方が得意なんだよ！！」

そしてまた攻防が展開される。

「炎天よ奔れ！！」

放たれた呪符から爆炎が奔る。

「ぐっ 呪符の威力はすさまじいな。」

「威力は呪符で補う戦法だからね！魔法の射手、炎の矢189矢
！！」

「魔法の射手、氷の矢189矢！！」

魔法の射手の打ち合いになったが、白花の方が打ち負け、前方に障壁を出した。

「そこだな……」

いつの間にか後ろに回り込んだエヴァに断罪の剣を叩きこまれた。

「ぐっ……」

前方の攻撃に集中していたためか後方の注意を怠ってしまい、まともを受けてしまった。

「貴様は強い、攻撃力は無くとも防御力、制御力は一級品の物だ。しかし、貴様には実戦経験が圧倒的に足りない。」

「その通りだよ。エヴァ……」

ふらつく足で何とか立つ白花だが、満身創痍であった。

「安心しろ、次の一撃で終わらせてやる。」

そういつて呪文を唱えようとする。

「終わってたまるかよ!!!」

白花も呪文を唱える。

「ならば抗って見せよ!!!リク・ラクラ・ラックライラック、契約に従い、我に従え、氷の女王、来たれ、とこしえのやみ!えいえんのひょうが!!!」

辺りに冷気が立ち込める。

「とっておきを見せてやるよ!!!エストウス・レグナス・アエストウス、来たれ風精、雷精、水精、氷精、火精、土精、木精、光の精、闇の精、幾多の精霊よ、我手に集い、眼前の敵を打ち滅ぼさん!!!」

白花の手の中にさまざまな色の光が集まり虹色の光を放つの槍となる。

「終わりだ、こおるせかい!!!」

「穿て、万魔の槍!!!!」

白花の周りは凍っていくが、すべてが凍る前に虹色の槍をエヴァに放つ。

エヴァは障壁を作るがそれを貫通してエヴァに突き刺さり、爆発した。

「つぐ...ここまで威力があるとはな。」

あの魔法を受けて下半身が吹っ飛んでしまったようだ。白花はこおるせかいで凍ったようだな。

しかし、こいつは面白い。まだまだ荒削りなところもあったが徐々に楽しい戦いであった。

経験を積みませれば化けるだろうな。

「オー御主人勝ツタカ。」

「チャチャゼロか。そっちはどうだったんだ？」

後ろから声をかけてきた私の従者は片腕がなく、胸に風穴があいていた。

「ギリギリノトコロデマケチマツタよ。御主人ガ凍ラセタ後、アイツモ消エテ胸ニ刺サツテイタ剣モナクナツタカラ動クコトガデキタンダ。」

お前の方は負けたのか…

「ソレニシテモ御主人モハデニヤラレタナ。」

「ああ、そうだな。チャチャゼロ」

チャチャゼロは私の後ろにあるクレーターを見てそう言った。

あの魔法、全ての属性を束ねてそれを放つ技か…

まったく非常識な奴だよ…

・
・
・
気が付いたらソファアの上で寝ていた。

確かエヴァと戦闘になって負けたんだな。

あゝくそなんか悔しい…

「起きたか。」

そこにエヴァがやって来た。

「ピンピンしてますね。あれは考え付いた中でも最高の威力を持っていたのに、自信なくしますよ。」

「今ではこうしているが、障壁を貫通して下半身が吹き飛ばされたぞ。」

そこまで行ったのか…

「それはそうとあれは全属性の魔法の矢を融合させたものなのか？」

「そうですよ。ほかにも範囲型の障壁に回復魔法を付加することでしよう壁内の味方を癒すことができる魔法もあります。」

「お前はほんとに非常識だな。一歩間違えれば魔法が反発して暴走して死ぬぞ?」

「そのための制御ですよ。」

これが私の取り柄だし…

「まあ、いいか。ところでなぜ上級呪文を使わないのだ？」

「その辺の知識がありませんから…」

さすがに雷の暴風や奈落の焰あたりを覚えておきたいかな。

「なるほどな…なあ白花お前が良ければいくつかの魔法を教えてやるるか?」

え”エヴァがデレただと!?!これは受けるしかないな、受けられない

んてありえない。

「こちらとしては願ってもいないことですが…どうしてですか？」
「お前に興味を持ったのだよ。その少ない魔力でこの闇の福音をこ
ダーク・エヴァンジェル
こまで追い詰めるほどの人材をここで手放すのは惜しいからな。そ
れとなれない敬語は使わなくてもいいぞ。」

まさか、一回の模擬戦で興味をもたれるとはな…

「了解。よろしく頼むよエヴァ。」

「私は厳しいぞ、弱音を吐くようなら氷神の戦槌が飛んでくると思
え。」

「鶴子さんは斬岩剣の弐の太刀を素子さんは斬空閃を飛ばしてきま
した。あははははは…はあ」

「そ、そうか…。」

エヴァ、この世には理不尽な理由で攻撃されることもあるんだよ…

…（遠い目）

主に照れ隠しで…

第8話 事情説明メンドクサイ

その後は1日がたつまで現在使える魔法の確認や限界まで出せる数などを報告し、軽く魔法の練習をした。独学もいいが未熟なうちは誰かに教えられながら修行した方がいいのかもな…

「防御や回復の適正はあると聞いていたがここまでとは…お前が後衛に置くにはもったいない気がするな」

「どゆ意味？」

「貴様の攻撃は威力は無くとも牽制に使えるし、あの術式融合も使えば攻撃力の無さも補える。さらに神鳴流での近接も可能だし、弓を使えるのなら後方からの攻撃も可能。はつきり言っつてどの距離でも活躍できると思うぞ」

つまりはオールラウンダーってことか。

「自分では器用貧乏のような感じがあるんだけど…」

「お前は自分を過小評価している。まあ、うぬぼれないだけかもしれませんが、行き過ぎた謙遜は逆に失礼だぞ」

それもそうか。でもそこまで評価してくれるとは嬉しいねエ…

「じゃあ状況に応じた対応をできるようにしないとね」

「そうだな。じゃあ無詠唱で魔法の矢を5000本くらい言うってみるか」

「了解」

飛ばしていくなあ。まあできるけど…

そんなこんなで時間が来て外に出ました。

・
・
・
エヴァの家でぶよ○よをやっていると、電話の音が鳴り響いた。

「ほらエヴァ誰かから電話が来てるよ。だからこの勝負は無効で」
だが断る！」「ちくしょう…」

絶対やりこんでるよこの金髪幼女…

「っち、じじいか…なんだ？いま私は忙し「ゲームで？」おまえは
だまつてる。」

サーセンww

「なに？ちょっと待て。白花、お前にだとき。」

そついつて受話器をこちらに渡してきた。

「なんですか？ぬらりひょん。いま私はどうやってぶよ○よでエヴ
アに勝つか考え中なのですよ？つていうかなんで私がここにいるこ
とを知っているんだ？」

覗き見でもしてたんだろうな昨夜のことも含めて…

『フオフオフオ、それはすまんかったのお。実は昨夜のことで話を
聞いておきたいのじゃが…』

昨夜…ああ、あのクソペド野郎どものことかな。

「学園長、広域指導員の人たちにあんな屑でゴミ以下の犯罪者が発生しないようにきちんと警備をしてくださいよ。って言っただけでください。以上」

『フオ！？ちよつとま』

何か言いそうだったしもう話すこともなく、面倒だったので通話を切る。

さてと、受話器を返して再開と行こうかな。

「言うこと言って返したか…」

「それしか言う事無いし、さて、もう一戦やろうぜ！！」

格ゲーなら得意だけどあえてぶよ○よにするぜ！！
はじめようとするとまた電話が鳴った。

「なんだまた白花か？」

そんな感じでまた受話器を受け取る。

「なんですか？」

『君が全滅させた人たちについて事情を聴きたいからエヴァと一緒に学園長室まで来てくれい。以上じゃ』

前置きを話していると切られると思ったのかな？ストレートに用件だけ言って切りやがった。こっちの都合も聞かないで…めんどくさ、部活でもないのになんで休日に学校に行かなきゃならんのだ？

「エヴァ、なんかエヴァと一緒に学園長室に来てくれたとさ」

「今からか？面倒くさ…」

ほんとにね……はあ

でも、逝かないといろいろと面倒事を持ってきそうだし一応行っておくか…

・

「で、何の用ですか？ぬらりひょん」

若干苛立ちを含めた声で聞く。読心結界も張ってあるな…偽装思考を展開しておくか。

周りには、ガンダロ先生や脱げ女などの魔法教師及び生徒たちがそれなりにいた。みんなこちらを探るような目で見ている。ウザったい…十中八九あの戦闘を覗いてやがったな…

「フオフオフオ、いきなりひどいのお」

当たり前だ。せつかくの休日をごく知らないことでつぶされたんだからこれくらい我慢しやがれくそじじい。

「休日に呼び出しながら面倒なことの上なので…むしろ迷惑料払えって感じですね。ところでこちらの方々は広域警備員の方たちですか？」

一応聞いておきますか…文句を言いたいし。

「うむ、そつじやま。」

「あなた方はこの学園を警備している立場なのですよね？なのにあんな屑どもに気が付かないとかありえませんかよ。もう少しきちんと警備してくださいね。」

まあ、あれたぶん身内だろうけどな（笑）
なんか一部、頭にきたのか顔が赤いし…

「で、昨夜の説明でしたね。」

「そのことなんじゃが…あれはウチの職員でのお…」

学校関係者が生徒を襲う…これをばらせば新聞に載るかもな…

「はあ！？職員が生徒を襲うとかどんだけだよ…救いようのないカスですね。とつととクビにした方がいいですよ。」

「むう…そのことについては謝罪しよう。」

微塵も謝罪をしているようには見えないなこの妖怪。きちんと頭下げろやks

「一応言っておきますが、そんな誠意のかけらも存在しない謝罪はしない方がいいですよ。相手をイラつかせるだけですから。」

妖怪が唸っているがどうでもいいな。

「話が進まないからさっさと要件言ってください学園長。」

とりあえず聞くだけ聞いておくかな協力する気は全くないけどね…

「う、うむでは初めに…君はいったい何者なのじゃ？」

一応、一般人（笑）だけだな…

「その質問の答えは1 - Aの秋葉原 白花としか答えられませんね。」

裏ではいろいろやっているけどね。

「そういう意味ではなく、君は魔法使いなのかな？」

ストレートに聞いてくるな。

「科学という名の魔法なら使えますが？」

昔の人から見たら今の技術は魔法になるだろうしね。

「そうか…なら昨夜のあれはいったいなんなんだね？」

「普通の剣術ですか？」

「それではない。そのあと出した人型の何かじゃ。答えよ。」

「なぜわざわざそのようなことを答えなければならないんでしょう。しかもこれを知っているということは昨夜襲われているにもかかわらず警備員や警察に連絡しないところを見るとあなたもロリコンのペド野郎の一種なのですね。下種野郎。」

「フオツ!? 違うぞい! この学園には魔法使いが存在しているのじや。」

「病院に行った方がいいですよ。」

「頭がかわいそうな人じゃないわい! 実際に此処にいる生徒と教師はその関係者なのじゃよ。」

「病院が大儲けですね。」

病室が満室になったら緊急搬送されてきた人が大変だろうな…

「そのネタはもういいんじゃない、魔法は秘蔵されるものであるから知らんのも無理はないのじゃよ」

秘蔵（笑）認識阻害に頼らなきゃ満足に活動もできない奴らが何を言っただか…

「で、昨夜の犯行は一部の関係者が暴走してあんなったわけだから…」

「それでも罪は罪です。きちんとクビにしてくださいね。ちなみに私がしたことは正当防衛なので問題ありません。私は反省も公開もしていません」

やりすぎ？いいえ、あれくらい過剰防衛にはなりません…多分。

「まあ、彼らはクビにして本国へ強制送還になっておるから問題ないじゃろ。それで、わしが聞きたいのは彼らを倒した力じゃ」

「？、魔法にはあんな力もあるんじゃないの？」

ワターシ、マハウナンテシーリマセーン。

「いや、あんな魔法は存在しないのじゃよ」

「じゃあわかりませぬね。この力は生まれつきで実の所よくわからないんですよね。一応この力の呼び名はなんか守護霊みたいな感じですからスタンドって呼んでます」

生まれつきですよ？生まれる前に決まっただけですけどね。

「スタンド…背後に立つ者という意味じゃな」

「ついでに言うておくと魔法のことは既にご存知ですよ」

みんなが驚いた表情になった。

「何故、魔法のことを知っておるのじゃ」

「それは、「それは私が教えたからだよ爺」いつちゃっていいのエヴァ？」

思わぬ人物による介入に周囲はざわつく。

「何を考えているんだ！？エヴァンジェリン。魔法は秘蔵されるものなんだぞ！！」

なんだ急に絡んできたくくガングロ

「別に問題ないだろう？本人は自分に向けられた魔法を幾つも見ただから。当事者として説明してやるのが礼儀といったもんだらう」

そばには茶々丸もいましたけどね！だから向こう側にモロばれです。問題ないけど…

「そういう時は記憶を消せばいいだらう！！」

勝手に人の記憶をいじるとかマジデむかつくから止めてほしいんだよな。

「事前に何かするようなら覚悟しておくように言ってありましたから。死にかけをつぶすなんて簡単なことですよ？」

嘘です。私がエヴァに何かするわけないじゃん！！後が怖い…そこへタレっというな！！

「なんと、無茶なことをするんじゃない…」

「後から実力がわかって結構後悔しましたよ。」

「それにこいつはなかなか面白い『力』をもっているしなこいつの身柄は私が預かる。文句はないな？」

うわ〜全員黙っちゃったよ。さっすがエヴァンジェリン私にできないことを平然とやってのける。そこに痺れる！！憧れる！！

「まあ、この子のことはエヴァに任せるとして、夜の警備「お断りします。」フォー!？」

これ以上面倒事に巻き込まれたくないし…

「別に金に困っているわけでもないし、自分を守る程度の力があればそれでいいし、わざわざ命を張るとか馬鹿らしい事この上ない。」

「なっ！！あなたは力があるというのにその力を誰かを守るために使わないというのですか！！」

なんだウザったい脱げ女が…

「なんで力があれば誰かを守らなければいけないんだ？報酬も期待できず、感謝されることもないのに…」

「あたりまえでしょう！！魔法使いは「私は魔法使いじゃないよ。」黙りなさい！！世のために尽くす事そして正義なのですから。」

あの変態どももただけどマジで薬物をやってんじゃないかと思つくりいうぬぼれていやがるな…

「あいにく、私は自分のことで手いっぱいなんですね。見ず知らずの誰かを守るより、私の大切な人たちを守るくらいならそれでいいんだし。」

これだけは偽りのない本心だ。

千雨たちといつものような会話をすること、おじい様や超たちと研究のことに没頭すること、トモエたちの面倒をみる（みられる）こと、エヴァとの修行も楽しいしな。こんな日常を守ればそれでいいし。

「そんな低い志では立派な魔法使いになるなんて到底無理でしょうね。」

なんか脱げ女がドヤ顔で言ってるけど…まあ、他人の信念なんて価値観の違いからごみにもなるしね…っていうか私は立派な魔法使いそんなものになるつもりなんてないんだけどね。

「それに悪である闇の福音を助けるなんてどうかしてるんじゃないですか？」

あ”っこの糞ビッチいま何を言いやがった？

「彼女は封印されているとはいえ凶悪な吸血鬼なのですよ！！それを「黙れ」っぐ！？」

こいつは他人だけの判断で動くバカだけどこまで言われて黙ってられないな…こっちが礼儀正しい大人の対応してればつけあがりやがってよ！！

思わず脱げ女の胸ぐらをつかんだ。

「さすがの私でも友人をバカにされてはいそうですか、なんて態度にはなれないんでね。」

私はエヴァのことをまだあまり知らない。

彼女がどれだけ苦しんで生きてきたかは私は知らない。ただ、

「あんま舐めた真似してんじゃねえよ。屑が…潰すぞ。」

私は守りたいものを守るくらいのはしたいからこのくそつたれを許すわけにはいかない…

「なっ!?!あなたは闇の福音に味方をするというのですか!?!」

「私は私のためにエヴァンジェリン・A・K・マグダウエルを味方をする。ただそれだけだ」

そういつて手を放してやった。

それにしてもガンダク先生は絡んでこないな?自分の生徒がケンカ売っているからすると思っただけだな…そっちを見てみるとなんだか複雑そうな表情をしていた。なんでだろう?

「あなたは騙されているのです!!」

「結構、それなら私を見る目がなかったというだけだし。」

「二人ともそれくらいにしてくれんかのお。」

一触即発の空気の中ぬらりひよんの静止の声が聞こえた。

「白花君、警備はしなくともよいが、このままでは不完全燃焼である。」

「その通りだな。とりあえずそのバカをつぶさなければ気が済ま

ないな」

なんかキーキー言っているがどうでもいいな。

「実は白花君の力を見るために模擬戦をさせようと思っておったのだが…その高音君と戦ってみるかね？」

願ってもいない、死なない程度に相手をしてやるか…

「なっ！？学園長。生徒に戦えというのですか！？」

なんか常識的だな、ガングロ。原作と違って少し柔らかくなったな。麻帆良の正義抹殺リストから外しておくか。

「なにも殺しあえとは言わん。お互いに鬱憤を発散させることと白花君の能力を見ておきたいからのお。」

「しかし…問題ありませんわガンドルフィーニ先生私がこんな悪に負けるはずがありませんもの。」高音君…説得は無理みたいだな。しかし、無茶はするんじゃないぞ。」

悪…ねえ。いったい何を持って悪と決めつけているのだろう。正義の魔法使いは…

「では、今夜の10時に世界樹の広場前にて秋葉原 白花と高音・D・グッドマンの模擬戦をするぞい。なおこの模擬戦は従者のありでの戦闘でよい可能？」

「いいよ、そのくらいのハンデくらい付けてあげるぞ。」

レギオンを出せばいいしね。

「首を洗って待っていないさい。」

「首だけ？洗うならきちんと全身洗わないと面倒だよ？」

「そういう意味ではありません！！！」

さてと、私の友人を侮辱したことを後悔させてやるか…

第8話 事情説明メンドクサイ（後書き）

一部のキャラの性格を変えてみました。そのままだとなんかつまらないでしょう…

第9話 VS脱げ女

その後は、解散して工学部へ行き茶々丸を引き取った。ハカセ曰く前の身体より数段上に強化したらしくたとえ魔法の矢を十数発受けても大丈夫らしい。私たちのナノマシンを使うことで茶々丸たちも強化されたみたいだ。なお、茶々丸はこのことに関して、「だって私は4体目ですから…」それどここの綾波？

そんなことは置いといて、夜まではずっといっていきかな…ちなみに今はロボ仲間を紹介しようと寮へ向かっていった。

そんな時、今まで黙っていたエヴァが話しかけてきた。

「ところで白花…聞いていいか？」

「どうしたのエヴァ？」

「何故私の味方をするのだ？確かに私はお前を気に入っているしかし、そこまで肩入れする理由はなんだ？」

今まで理解者がいなかったからか…誰かが味方をしてくれるという状況に慣れていないのかな？

「言ったはずだよ、私は守りたい人たちを守ればそれでいいって。その中にエヴァも入っているからかな」

「私はそんなに弱くはないぞ…」

「強い弱いの問題じゃないんだ。たとえその人が強くとも、弱くても私はその人の味方していると私が勝手に決めたからね」

「っふ…本当に自分勝手な奴だなお前は…」

その通り、私は自分が大好きで自己中なのだから。

「これからもよろしくお願いしますね」

「はい、マスターの可愛い姿は高画質で保存するのが私の使命ですから」

こうして、私は新たな戦友を獲得した。

「やだ…なにこれ…」

可愛い物は愛でよう同盟が結成された瞬間です。

・
・
・
そんなこんなで寮につきました。

「あっお嬢お帰りなさい」

「ただいまトモエ。あっこの人たちはお客さんだよ」

「エヴァンジェリン・AK・マグダウエルだよろしくな」

「絡線 茶々丸です。以後よろしくお願いします」

「トモエと申します。白花ともどもよろしくお願いします」

それぞれが自己紹介をした後、みんなを私の部屋に案内した。
部屋に着く前に千雨たちにエンカウント

「ん、白花か…大丈夫だったのか？変態に襲われたって聞いたけど…」

私はその程度の相手に後れを取っているのか…

「まあ、逆にやりすぎて過剰防衛になって警察にお世話になりそうだけだな」

大丈夫だ、問題ない。

と、そんなやり取りをしてついでに話したいことがあると言って一緒に部屋に来ることになった。

そして、魔法のことなどを話しておいた。

「以上が魔法に関することだよ」

「はあ、くだらねえ…」

意外と冷静なんだね千雨は…

「むしろ、その魔法使いがいるから攻めてくるんなら関係者とかがいなくなればいいのに…」

「それで自分は町を守っている正義の使者とかまさに自演乙ですね」

それぞれの感想ありがとうございます。

「で、私のあれを覗き見されて呼び出されて、エヴァのことを侮辱されたから今夜模擬戦という名の処刑があるから」

もちろん向こうが処刑される側だけだね…

「お前は、自分のことはどうでもいいのに友人や家族のためなら容赦ないからな…向こうの奴もご愁傷様だな」

「ところで昼ごはんはどうしましたか？」

そういえば、長話されてまだ食って無かったな…

「まだ食べていないな…材料はまだある？」

「はい、それなりに残っております」

「じゃあ、私を作るから皆は待ってて」

何を作るのかな…ご飯はあるし、みそ汁と鮭でも作るとするかな。

・

・

私を苦しめたのは麻帆良の魔法使いの認識阻害結界によるものだったらしい。魔法使いどもは、これを使うことで魔法を見られてもあ
る程度の修正が聞くようになるらしい。そのことを告げられた時は
静かながらも私は怒りを覚えた。こっちはそんなもの関係ないのに
巻き込みやがって…

「マスター大丈夫ですか？顔色が悪いですよ」

そんな中私のわずかな変化にきずいてくれたナビコ。

「大丈夫かな？軽くむかついたただけだから…」

麻帆良に来た当初誰も麻帆良の異常に気が付いていなくて、いじめ
られていたが、彼女がいたからこそここまで来れたのかもしれない…

「おい、長谷川「千雨でいいよ」そうか、なら私のこともエヴァで
いいぞ。それでだ…白花はいつたいたいというやつなのだ？本人は自
分大好きの自己中だと言っているが私にはそうには思えないんだが
な」

「そう見えるが、あいつは自分勝手だよ。ただ、失うことに恐れて
いるだけなんだ」

そう、剣術を習う理由も自衛の手段を増やすためでなく、失いたくない。ただそれだけだったから。

「あいつは一人になることが嫌いなんだ。だから家族や友達を大切にしている。本人は利用しているみたいだと言っているけど、私たちは十分対価をもらっている。だから、悔やむことは無いのに何かと背負おうとするんだよ」

だから、私も強くなるうとした。あいつに無駄に背負わせないためにも…

「まあ、それが人間らしいことなんだろうな…他人を助けるという事は正義とか悪とか関係なく結局は自己満足でしかない。自覚している分どっかのアホどもよりましだな」

確かに、聞いただけじゃ正義だとか言っただけで罪を犯していることに気が付かないのが愚かなんだろうな。まったく魔女狩りじゃないんだからしつかりしろよな。

「真面目なマスターハアハア。メモリーに焼き付けておかないと」

「これはこれでなかなか良いですね…録画中」

「ん？」

「おや？」

後ろでナビコとエヴァの従者の茶々丸見つめあっているが…

「可愛い物は？」

「至高の存在です…！」

ガシッ

そういつた後二人？（忒体？）が固い握手を交わしたことにめまいが起ころ。

「お互い、従者に苦勞かけさせられているな…」

エヴァンジェリンお前もなのか…

・
・
・

昼ご飯を食べた後、軽く体を動かして、ギルティ○アをみんなで対戦した。一部を除いて私が圧勝したが、その次でぶよ○よで勝負を挑まれ見事ボタンキューにされてしまった。畜生、みんな強すぎだコノヤロー！！

そんなこんなで夜になりました。

さて、いつもの包帯をして、今回は普通の木刀をいつでもも転移できるようにして、戦闘準備完了。

「クククッあまり弱い者いじめはしてやるなよ？」

気が向いたらね…

「私は行けないけどさ、徹底的にやっちなまえ」

もちろんそのつもりだよ。

「それにしても私が連れて行く意味はあるのですか？」

「今回はしっかり実戦形式の模擬を見ておけ。戦いをみるのも稽古のうちだ」

「了解」

そういつて私たちは世界樹の広場へと向かった。

「さて、覚悟はよろしいですか？」

「そんなことよりおうどん食べたい」

脱げ女がなんか言っているがどうでもいいな。

あれ、エヴァがなんか苦笑しているが…

「少しはまじめにやったらどうだ…」

真面目にやったら殺しちゃうじゃん。

「くっ今のうちですわよそんな態度でいられるのも…」

「」「」どうしてこうなった…」「orz x 2

えーと、佐倉さんとナツメグさんだけ？運が悪かったとしか言えないやごめんね。

「それでは、両者、準備はよろしいかな？」

「いつでもいいですよ」

「こちらもよろしいですわ！…」

「」以下同文…」

頑張れお二人さんそのうちいいことあるって今は倒させてもらっけ

ど…

「頑張ってくださいお嬢」

「では、はじめー!!」

それじゃあ処刑を始めますか…

・
・
・

「先手必勝ですわ!!百の影槍!!」

高音の影から無数の槍が飛び出し、白花へと襲い掛かってくる。

「はいはい、ワロスワロス」

白花の周りに盾兵が召喚され、すべての影の槍を防ぐ。

「それが君の力なのかのお」

「そ、まだまだ出せるよ」

学園長の質問に答えている間に、魔法の射手や黒子、影の槍が殺到する。

「よそ見している場合ですか!!」

全てが着弾して土煙が上がり、白花の姿が見えなくなる…

「これだけやれば少しくらいは…」

「やりましたか？」

「これが私の操影術、近接戦闘最強奥義、黒衣の夜想曲ですわ！！
これであなたの勝ち目はありませんわよ！！！」

そういつて黒衣の夜想曲から大量の槍が飛んでくる。

「多すぎて防ぎきれないな」

そういつて白花は初めてその場から動いた。

「従者のお二人さんには悪いけど、そろそろ退場してもらおうよ」

そう言い放ち、白化を中心に障壁が展開し、白花の影から異様に長いマスケット銃を取り出した。

「エストウス・レグナム・アエストウス、耐えよマックス、勇気を
持て！神を信じる者は行わん！」

その詠唱に何人かはこの詠唱がなんなのか分かったようだ。しかし、
それを歌っていることに理解はできていない。既存の魔法にはこの
詠唱は存在しないのだから。

「何なんですか！その妙な呪文は！！！」

「完成する前に潰します！！メイプル・ネイプル・アラモード、も
のみな焼き尽くす浄化の炎！破壊の王にして再生の微よ！わが手に
宿りて敵を食らえ！！紅き焰！！！」

「さっきの言葉道理なら狙いは私たち！？ラブ・チャプ・ラ・チャ
ップ・ラグプウル、全てを飲み込む大いなる海よ！！原初の始まり
にして荒ぶる意志なり！我手に現れ、怨敵を飲み込まん！蒼き水流
！！！」

二つの魔法が襲い掛かるが、強化された障壁に阻まれ傷一つつくことは無かった。

詠唱は続く…

「いざ行かん！山にも谷にも喜びは溢れ、明日こそ、うれしき戦の日！森や牧場の獣ども、空を翔け行く鷲や鷹、勝利は我らがものなるぞ！我らがもの！我らがもの！そして、有象無象の区別なく私の弾頭は許しはしない…」

「やはりこれは…」

「高畑先生、これが何か知ってるんすか？」

シスター姿の美空が知っていそうな高畑先生に聞いてみる。

「ああ、これはカール・マリア・フォン・ウェーバーが作曲した…」

白花はマスケット銃の銃口を正面に向け引き金を引く。

「魔弾の射手」

ドンツと音がした瞬間、高密度に圧縮された弾丸状の魔力の塊が不規則な青い軌跡を帯びながら二人に襲いかかり、障壁を貫通して両腕と両足を打ち抜いた。

「ああああああ、痛い痛い痛い痛い！！！」

「腕がああああ足がああああ！！！」

「面白そうだから使ってみただけで消費魔力も大きいし、そんなに長

く保てないし、詠唱も長いから要改良つてところかな…急所は外してあるから二人はリタイヤね。治療魔法が使える人は早く治療してね。急所を外してあるけど放置するとやばそうだから」

そういつて二人を観客の方へと転送する。

二人は治療魔法を受けて死ぬことは無くなった。

「さて、後はあんた一人だね」

獰猛な三日月の笑みで狩り人は獲物に話しかける。

一瞬で従者達がやられて茫然としていた彼女が自分の声を聞いたとたん、我に返る。

「しつつしかし、この黒衣の夜想曲の前に物理攻撃なんて通用しませんよー!!」

魔弾の射手は魔法攻撃である。冷静になればわかることだが見たこともない魔法による予想外の事態に混乱しているようだ。

「そういえばさあ、あんたら自分たちはこの土地を守っている正義の魔法使いなんだよね？」

不意の問いかけに高音は当たり前だと答える。

「でもそれってあんたたちに原因があるんじゃないかい？」

「そんな訳ないじゃないですか!!」

否定するように叫ぶ高音…

白花は考えるように額に指をたたきながら言葉を発する。

「本当にそうかな？ここの襲われる理由はまず世界樹の存在、次に図書館島の魔道書そして、関東魔法協会の存在」

その言葉に学園長は顔色を変えた。

「何故、関東魔法協会が狙われる理由になるのかね？」

「その理由はあるたらの関西に対する対応だよ。大戦時、関西の呪術師を半場無理やり徴兵して、死んでいった人の家族に対して謝罪もせず放っておくだけ。それで復讐しようとするだろうね」

ちなみにこの知識はまほネットからきちんと調べました。

「それは、正義のために散っていったのだから仕方ないことで…」

「ならあんたは、自分の両親が無理やり連れて行かれ、そこで犬死しました。はいさよならって対応されたらどうでしょう？」

「そっそんなの許せるわけないですわ！！」

高音は白花のたとえに怒りの色を示す。

そんな事になったとしたら、その人を許せる気がしないと思ってしまった。

「あんたが言っているのはそういう事なんだよ…次に図書館島だがこれは普通に別の場所に移せばいいだけだ。そして、世界樹はもともこの場にあるという事は日本の魔法使い、この場合は陰陽師や呪術師を率いる関西呪術協会が管理するものであると思うが？」

そこは今まで黙っていた学園長が答えてくれた。

「それは、この学園都市ができる頃わしたちが…」

学園長は言い訳を言うように呟いたが…

「土地を買いあさって奪い取ったというわけか…はたして何人強制的に退去させられたんだろうねエ…」

その言葉に学園長は凶星をさされ冷や汗をかく。どうやら何世帯かを強制的に退去させたらしい。

「まあ、そんなことはどうでもいいな。え〜と高音・ウホ・いい男さん」高音・D・グッドマンです！！なんですか！！その『やらないか？』的な名前は！！」「サーセンwwww」「

もちろんわざとです（笑）。

「あなたは人々を守るのが正義といたしましたよね？」

白花は再度問いかけるように話しかける。

「あつ当り前ですわ…」

白花の問いに答えるもその声に少し前までの力強さはなかった。

「ではなぜ、何にも関係ない一般人を盾にしているのですか？」

「なっなんですって!?!」

怒り交じりの声を上げる。

「おや？気づいていなかったのですか？何故、これだけ攻め込まれる要素が存在する麻帆良に何の関係もない一般人が生活しているか？いや生活させられているか？」

その問いの意味が解らないのか、その表情からは混乱してるように見える。

「この学園は魔法使いの本部でありながら一般人が生活しているつまり魔法の秘匿を盾に昼間攻め込めないようにしてあるのですよ？」

そう、”魔法は秘匿されるもの”それは、関西も同じことである。向こうは平安時代、魔都と呼ばれる京都を管理するためにできたので仕方がないがここは特に危険なものはなく、あるとすればそれは魔法使いたちが作り上げたものだけだ。

「違う…」

高音は事実を聞かされうつむいてしまい顔色は真っ青になってしまった。

信じていた…自分はこの学園の人たちを守っていると…しかし、真実はその守るべき人を盾にしている。なら、自分のしてきたことはいったいなんだったんだろう…

「そもそも悪と対になるのは善であって正義ではありません。正義と対になるのは別の形の正義です。その違いも判らず、他人の示された正義を盲目的に信じているなんて滑稽ですね」

それでも、白花は事実を突きつける。

「違います…」

否定をする、しかし、それは自分が行ってきた行為である。

「違います。あなたたちがやっていることはただの尻拭いなので
すから。それに、記憶を消す？ふざけんな！記憶はその人だけの財
産だ。それをそっこの都合で消すなんて傲慢すぎんだよ！！」

「私は……」

自分の信じてきた正義、それは一体なんだったのか…

「それに吸血鬼だから悪？なにも知らないくせに種族的に悪と決め
つけてんじゃねえよ！！十人十色、人間だって悪はいる！！主に昨
夜一人に対して、消耗した少女たちを十数人で襲いかかったごみ野
郎どもだな」

「私は正義……」

今の高音には現実を見ないことが精一杯でうわ言のように繰り返し
ている。

「それに、危険から守ると言っているが魔法使いの方が危険な存在
だろうが！！魔法という名の見えない拳銃を持ち歩き、罪を犯して
も記憶を消してなかったことにするといったことも可能だ。そして
いつから正義は免罪符になった？正義のためなら何でもしていいの
か？そんなこともわからない奴なら最低だな…」

かつて、正義の魔法使いに襲われ、それまでの自分を殺された、だ
からこそ言える言葉だった。

「違う…違う、違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違
うあああああああああ！！！！」

あまりの信じられない事に耐え切れず高音は絶叫し、白花に襲いか
かってくる。

「私は正しい、間違っただけだあああああああああああ
ああ！！！！！」

黒衣の夜想曲をがむしゃらにふりまわしていた。

「さてと、言いたいことも言ったしおねんねの時間だよ」

そういつて、懐から符を取り出してそれを投げつける。

「氷天よ縛れ」

高音は黒衣の夜想曲ごと巨大な氷柱に囚われ、身動きが取れない状態になった。

「さてと、その魔法はスタンドに似ているから試してみますか……」

そういつて、背後に青い光を放つ半透明な女性を呼び出した。
金の髪に赤い目をしている美しい女性だった。

「この名前は【終焉の紅い月】とでも名付けておくかな。」

そういつて、拳にも魔力をまよわせた距離を詰める。

「とりあえずあなたたちはもう少し視野を広く見るべきだね。それ
じゃあ、お休みなさい。高音・D・グッドマン」

そういつて、白花は紅い月とともに手を握り拳を造り打ち付ける。

「オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ

！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！

「無駄！」

最後に拳を後方に引き溜めを作ってぶちかます。

「オラアアアア！！！！」

「無駄アアアア！！！！」

高音をとらえていた氷柱ごと殴り飛ばす。高音の状態は目が虚ろで心身ともにボロボロであった。

そのあとは治療を施して一応肉体は全快にした。

偽りの正義は打ち壊され、その後、どうなっていくのか…そのことは誰も知らない。

第9話 VS 脱げ女（後書き）

終焉の紅い月はアルクさんです。わかる人はわかるかもしれませんが魔弾の射手はHELLSINGのリップバーン中尉の弾丸です。

PV30000突破記念 ネギ・スプリングフィールドの変貌(前書き)

PV30000突破やりました!!

でもこの話はやりすぎた…

PV30000突破記念 ネギ・スプリングフィールドの変貌

僕の名はネギ・スプリングフィールド

父さんは英雄で尊敬できると思うけど父さんがいない今、妹のハクカの為に僕はしっかりしていないと…

「お兄〜見てください。こんなに真っ赤なキノコが取れましたよ」「どんなキノコなの？」

見せてもらったけどホントに真っ赤で一般的なキノコの形とは違って炎みたいに伸びているよこのキノコ…

どう見ても毒キノコですね本当にありがとうございます。

「さあネギ兄様、味見を…」

「いや！？これどこからどう見ても毒キノコでしょ！！ていうかなんで僕なの！？」

「何を言っています！実はおいしいキノコかもしれないじゃないですか！というわけで逝ってきなさい！！」

「逝きとうないでござる！！」

そういつて白花の手にあったキノコを奪い取り、森の方へ投げた。ちょうど投げた所にイノシシがいてキノコがイノシシの口に入った途端苦しそうにのた打ち回ったのちに動かなくなっ…

「……………」

「…弁解は？」

「ついカツとなつて食べさせようとした。後悔はしていない」

「いや！？後悔はしてよホントに…食べてたら大変なことになつてたんだよ！？」

「サーセンっした。そしてサラダバー！！」

そういつてハクカは家の方へと逃げて行つた。後になつてわかつたことだがそのキノコはカエンダケという最恐の毒キノコだった。どうやら汁にも毒があるらしく、あの時ハクカが手袋をしていなかったらやばかつた…僕もだけど

わずか3gで致死量つて…え？生息地が全然違う？こまけえこたあいいんだよ！！

そういつた平和？な日々を送っていたがそれは突然終わりを告げた。

その日、僕とアーニヤは外で遊んでいて、ハクカは散歩すると言つてどこかへ出かけていったが、日が暮れてもハクカが帰ってくることはなかつた…

「ハクカ遅いね…」

「どうしたのかしら…」

その時家のドアが開いた…

「ハクカ！？」

「え？何？どうしたのネギ？」

家に来たのはアーニヤを含むココロウア家とスタンおじさんだった。

「どうも、おじさんたち…」

「やあネギ君、ハクカちゃんがどうかしたの？」

「出かけて行ったきり帰ってこないんです…夕飯には帰ってくるって言ったのに…」

「こりゃもしかしたら…」

「探さないと…」

「ネギ!!」

僕は村の方へ飛び出し、ハクカを探し回った。いつもの裏山や湖などで名前を呼びながら走り回った。

スタンおじいさんやココロウアさんたちも探し回ってくれたがハクカが見つかることはなかった…

「ハクカ…お願いだから…帰ってきてよ…」

「大丈夫よ…ハクカはきつと帰ってくるから…」

目撃情報によればハクカを見かけたという情報はあったがその場所には2人の男性の死体と血で赤く染まったその日ハクカが着ていた衣服の断片だけだった。この情報からハクカは既に死亡したと言われているが、死体が見つかっていないため行方不明となった…

その事実を受け入れられなくて僕は家にこもってがむしゃらに魔法や勉強に集中した…

そんなある日…

「ネギ…」

「なんだいアーニヤ…僕は今忙しいの…だから出てって…」

そう冷たく言い放つネギだがアーニヤは出ていくことはなかった

「あんだ…いつまで逃げているつもりなのよ…」

「逃げてなんかないよ…」

「ネギ、あんたはそうやって引きこもり続けて誰かを守れると思っているの？」

「……」

「ふざけないでよ…そんなんで誰かを守れるわけないでしょ…! あんたはハクカを守るって決めたんでしょ! ならこんな所で何引きこもっているのよ…!」

「だけどハクカはもう死んじやったじゃないか! 僕は守れなかった…ハクカのお兄ちゃんなのに…」

アーニヤは無言で僕の方へ向かって行った。

「ネギ」

「え？」

「歯を食い縛りなさい…この大馬鹿者が!」

ゴシヤツ!!

「ツ!!」

「馬鹿ネギ!! 何ハクカを死んだことにしてんのよ!! ！まだ死体だっで見つかっていないんだからどこかで生きているかもしれないじゃない!! きつとどこかで生きてるわよ…きつと…」

「…だからってグーはないでしょグーは」

そうだ…まだ死んだと決まったわけじゃない…きつと生きているはずなんだ…

「ごめんアーニヤ…面倒かけちゃって」

「私に殴られる前に気づきなさいよ馬鹿…」

「そうだね…こんなお兄ちゃんじゃ恰好着かないよね……だったらせめてハクカもう一度会えたなら「立派になりましたね」って言わ

せてやらないとね…」

それは若い少年の誓いだった。

ハクカがいなくなつて数年がたつた…

それから僕たちは今できることをした。

スタンおじいさんを師匠とした初期呪文や魔法の矢の訓練、後回復魔法の練習などをしていた。

たまに「お前たちはもうちょっと子供らしいことをしてみろい。休むのも遊ぶのも修行のうちじゃ」と言われてしまった。確かに、魔法ばかりやっていて一般常識を忘れてしまったら人生的に危ないな…

そのことをネカネ姉さんに話して何か遊べるようなことはないか？と聞いてみたら魔法で強化した状態家の倉庫の方へ行つてしまひすぐに戻ってきて、服を持ってきてくれた。なんかカメラも持つて顔が赤くてハアハア言っているけどどうしたんだろ？

「ネカネ姉さんこれは？」

「なんかかわいいですね」

「これはとってもいい服よ…さあ、二人とも着て見なさい」

そういつて僕たちはその服を着てみたけど…

「これ女物じゃないかな…」

「あら、似合ってるじゃない。ネギ」

僕が来た服はなんだか赤い服に帽子にはちよつと怖い兎が付いてるし…それにこのゲートボールスティックは一体…

「うん。ネギは〇イーちゃんに似合っわね…これに気づくとはさすが私!！」

なんだろう…自画自賛しているネカネ姉さんを見ているとなんだか遠い存在になっていつてる気がする

「どう?ネギ…この服に合ってるかなノノ」

アーニヤの服は白い服に儀礼用の杖を持っていた。なんだろう…管理局の白い悪魔…そんなフレーズが脳内によぎった。

「うん、とても似合っているよアーニヤまるで魔王みたいだ」

「そ…そうかなノノネギも似合っているよ恰好」

「僕一応男なんだけど…」

「二人ともこつち向いて…チーズ」

カシャッ!!

もしかして写真撮られた?

「ネカネ姉さんそれ今すぐ消して!!」

「だが断る!!これは私のお宝なのだから!!というわけでサラダバーH A H A H A H A H A H A H A H A - !!」

そういつて家から飛び出していったネカネ姉さんだった。

こうなったら最近覚えた雷の暴風で…と思い杖を取り出したがアーニヤに後ろから押し倒されて追いかけることが出来なかった。

「駄目よネギ!そんなことしたらネカネさんが黒こげになっちゃうじゃない」

「僕の黒歴史を抹消するんだ！だから退いてアーニヤアアア！！！！」

ちなみにアーニヤとネカネの念話では

（ネカネさん焼き増しお願いします。それにしても、このネギも可愛いわ〜このまま食べちゃおうかしら…）

（任せなさいアーニヤ！さてこれで『ネギ君を見守ろうつ会』はさらに発展するでしょう。おっと鼻血が…）

敵はとても近くにいたのでした。

そして6歳の冬の頃…

「ネカネおねえちゃんが帰ってくるね」

「今度のお土産はどんなのかしら」

「できれば服じゃなくて食べ物がいいな…」

あれから何度か着せ替え人形にされてしまつて写真を撮られて、抵抗することをあきらめた…

ちなみに今も鉄槌の騎士の格好をしている。女装もなかなか…ツは！？何を考えているんだ僕は…

「そつえばあんたスタンさんたちとその格好でゲートボールしてたわね」

「エーナンノコトデシヨアーニヤサン…ワタシソソナコトシラナイアルヨ」

ヤバイ！！この間ネカネ姉さんとその友人たちで馬場抜きをして負けてしまった罰ゲームとしてこの格好でゲートボールをしたことがばれちゃった！！

「ようこそ、コスプレの世界へ」

「僕は…多分普通です」

なんかもう…諦めたくなってきた…

「さて、そろそろ帰りましょう」

「うん、そうだね」

雪が降る夜

そこはいつもの村と違い、赤く染まっていた

村が燃えている…それに転々と黒い異形の姿もあった。

此処から見える村の人たちはみんな石化していた。

まるで悪夢のような世界だった。

「何よ…これ…」

「村が…」

僕たちは啞然としていたがすぐに立ち直った

「お父さんとお母さんは？」

「みんなを探さなくちゃ…」

そういつて僕たちは家の方へと走っていった…

辺りは炎で包まれており、道端には石化した人や異形の体の一部の
ようなものが散乱していた。

「なんで…こんな…」

「お姉ちゃん…スタンさん…」

『オイ！ココニモイキノコリガイタゾ』

『マダノコツテイタカ…』

お姉ちゃんやスタンさんを探しているうちに異形達に見つかってしまった。

『セイゼイ泣キ叫ビナガラ死ンデイツテクレ』

そういつて異形はその鋭利な爪で引き裂こうとした…
しかしそれが起こる事はなかった…

フードの男が割り込みその爪を素手でつかみ、握りつぶし…

『雷の斧！！』

雷属性の上級古代語魔法を受けた異形は塵のように還っていった。

『ツク！？全員デカカレエエエエエエ！！』

異形が号令をするとフードの男の方へと向かって行った。
しかし、男は殴り飛ばし、蹴り飛ばし、そして『雷の暴風』で異形の軍勢を壊滅させた…

『ククツコノカノ差…コレデハドチラガ化ケ物カワカラナ…』

そんな言葉を残して異形の一人は還っていった

その光景に僕は恐怖を覚えた

しかし、あの人は…まさか…

そう思つて男の方へと駆け出したが、生き残っていた異形は口を開き光線を放ってきた。

「さげんぞー!!」

「お姉ちゃん!!スタンさん!!」

「おう、坊主たち無事じゃったか…」

「ネギ!!その格好マジカワユス」

僕をかばつてスタンさんは全身が石化し始めてしまつて、ネカネ姉さんは足が石化碎けてしまった。ただ、お姉ちゃん自重して…

「どうやら、この襲撃は村の誰かを恨んだ奴らの犯行かのお…というかネギよいつまでその格好なんじゃ…」

「聞かないでスタンさん…(泣)」

そのとき、異形と軟体生物は追撃を掛けようとした

「つく!?!もう少し弱つていればがこれが使えたのに…クソお!!」

どうする!?!このままじゃ殺される…考える

逃げる?…無理だ…アーニヤたちを見捨てられない

男に助けを求める?…この数十秒の間じゃあ無理だ!!

なら…

「戦うしかないよなアア !!!」

僕は叫び今使える最強呪文を唱え始めた。

「ラス・テル マ・スキル マギステル 来たれ雷の精、薬莢を打ち出し、その鉄槌似て、叩き潰せ!!!轟・天・神・雷 『雷神の鉄槌』!!!」

周囲の魔力を杖の先端に集め魔力の塊を帯電させそれを一気に振り下ろし、敵を潰す魔法

ネカネおねえちゃんから見せてもらったこのコスプレの元になったキアラの必殺技とアーニヤのコスプレの人の収束砲撃をヒントに造ったネタ魔法だったがそれは意外に使用して、集めた魔力が多かったせいか異形がいた場所はクレーターになっていた…

『ハツハツ八君ノヨウナ子供ニヤラレルトハ…マツタク人間トイウノハイツモ驚カサレルナ』

異形は何とか避けたみたいだが右半分が消し飛んでいた

「助かったぞネギ…六芒星と五芒星よ悪しき霊に封印を…封魔の瓶!!!」

スタンさんが放った瓶に傷ついた異形は吸い込まれていく…

『コレデハ還ルコトガ出来ナイカ…少女ヨ、ヨケレバ名ヲ聞イテモヨロシイカナ?』

吸い込まれながら余裕だなこの異形…

ていうか少女ってまあ、いつか…

「ネギ・スプリングフィールドだが今はこう名乗っておこう鉄槌の騎士ヴィータ様だ!!!」

『ナルホド…英雄ノ息子ダツタカ…ナラ私モ名乗ツテオコウ、私ノ名ハヴィルヘイム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン、シガナイ没落貴族ダヨ。デハイズレマタ戦オウデハナイカ鉄槌ノ騎士ヴィータヨ…シカシ、変ワツタ趣味ダナ…』

そういつてヘルマンさんは吸い込まれていった…

悪魔にまで言われちゃったよ…そりゃまあ僕もノリノリだったけどそれよりもスタンさんは…

「まったく誰に似たのやら…」

「これはネカネおねえちゃんの性だよ」

「はっはっは、違いねえ」

もう首の所まで石化が進んでしまっている…

「坊主、ネカネたちを連れて逃げな、この石化は強力でもう助からん…だから逃げな…ネカネたちを連れて…どんなことがあってもお前だけは守る…そのつもりが逆に守られるたあ情けねえな…ああ後、残った治療術死を探しな…石化を止めんとネカネが危ないぞい…」
「ごめんなさいスタンさん今だけは我慢してください…必ず治して見せますよ、石化の治療方法を探して見せますよ!!!」

「その通りよ、私たちが何もしいなんてことはないんだから、絶対治療方法を探し出して見せますから…だから今は…ごめんなさい」
「すまんのお苦勞を掛けるわい…あと…ネギ…その格好は…どうにか…せい………」

最後の言葉がそれかよ…ははっ笑えねえつつのくそ…
そして僕たちは後ろにいたフードの男によって村のはずれの丘に連れて行かれた。

「すまない…来るのが遅すぎた」

「まったくだよ…ヒーロー気取るなら5分前行動でもしてよ父さん」
「えっ！？じゃあこの人は…」

アーニヤは戸惑っているが僕にはなんとなくわかる…この人が…僕の父さんだという事を…

「なるほどお前がネギか…ずいぶん生意気なこと言うようになったな…」

「あんたの性でしょ…育児放棄して…ハクカもどつかいっちゃったよ」

「確かにな…親らしいことまったく出来なかったよ…済まない…ネカネの足の石化は止めておいた…あとは治癒術士に直してもらえ…それとお前もネカネの餌食になったか…」

「これはスプリングフィールド家の試練か何か？」

「いや違うが…まあいい。っち、もう時間がねえや…」

父さんの方を見ると体が透けてきていた。

「この杖をやる…俺の形見だ」

「貰えるもんは貰っておくさ…父さんもしまたあなたに会えたなら…ぶん殴っておくからね」

「おうおう、かかってきやがれてんだ。おれはいつでもお前の挑戦を受けるぜ」

「その時は覚悟しておいてね、」

「楽しみにしてるよ…ああネギ、もし日本に行くことがあるなら麻帆良ってところにいるエヴァンジェリンって奴の封印解いてくれ。3年の約束が10年近くになっちゃまったからよ…ああ、解呪方法は杖に書いてある呪文を唱えればOKだ」

別れ際にそれかよ…我が父君はいい加減だな…

「わかったよ…まったくいい加減な奴め」

「まったく…生意気な奴め親の顔が見てみたいわ…」

「鏡見る…」

「…ああそうだな、それと、ハクカだがあいつは生きてるだろうな…」

「ホントに！？ハクカは生きてるんでしょうね…」

「その自信はどこから？」

「なんてったって俺の娘でもあるんだぜ？そう簡単に死ぬかよ」

確信のない言葉…だけど僕たちは信じているからね…彼女がどこかで生きているという事を…

「まあ、悪いなこんな親で…元気に育て、幸せになつてくれくらいしかいえねえや」

「言われなくてもそうするさ…それじゃあまたね父さん」

「ああ、またなネギ…」

そういつて父さんは消えていった…まるで最初からそこにいなかったかのよう…

残された僕たちはじっと待つことにした。

「やれやれね…これからの課題が多い事」

「石化の治療にハク力の探索、父さんをぶん殴るって所かな」

「最後はあんただけでしょ…」

「まあ、やれることをやっていこうかアーニヤ…」

「そうね…がんばりましようネギ」

「ところでいつまでその格好（鉄槌の騎士）」

「着替えられる時まで…」

台無しだ…

PV30000突破記念 ネギ・スプリングフィールドの変貌（後書き）

ネギ は 女装癖 を 獲得した。

いや〜なんとなく似合いそうだったから女装させてみました。
身長が低くて髪が赤かったからついやっっちゃたんだ。

アーニヤは普通です…多分

襲撃が遅かったのはハクカの失踪で騒ぎになったからです。

第10話 勝手な思い込みで距離を取るのはどうかと思うんだよね。

圧倒的な実力と正義の否定によって、模擬戦（という名の処刑）は白花の勝利で幕を閉じた。

「それじゃあもう帰ってもいいよね？明日は学校があるし…」

そういつてその場を後にした。

「どうだったトモエ？あれが魔法使いの戦い方だったけど…」

「どっちかというのであれば心理戦じゃないですか？」

そうかな？

「しかし、お嬢、あまり陰口はしないでください…」

「陰口って？」

「日常面でもそういつていましたよね…私は嫌ですよそんな事をするなんて向こうと同じ小物の様な存在ですよ…面向かってはつきり言えばいいでしょう」

小物…か、確かに、陰で言っているなんて小物のやることだな…何やってんだろ私…

「……ごめん。なんか正義正義言っている奴だとムカついてこうなっちゃうんだ」

「だったら治していきましよう…私も協力しますから…」

「ありがとうトモエ」

幼少の頃のトラウマみたいなものだけど、何とかしていこう…この

子たちの為にも…

そんな事を思っていたら何か殺気に似た気配を感じた。
ある意味予想通りの人物が呼び止めてきた。

「待ってください」

白花を呼び止めたのは桜咲 刹那であった。

「なんですか？私はもう眠いのでさっさと帰って惰眠をむさぼりたいのですが…」

「無礼を承知なのですが、私と勝負していただけないでしょうか？」

すでに戦うこと前提で気が抑えきれないじゃないか。

勝負しなきゃ通してくれないだろうな…でも

「だが、断る！！」

「んな！？」

自分の欲求に従う白花であった。

さっさと帰って休みたい。それが今白花が求めている欲求だから…

「ならば、無理にでも仕掛けさせてもらう！！斬岩剣！！」

そういつて、野太刀を抜刀して、気をまとった一撃で切りかかる。

「あぶねっ！！」

その一撃をヒラリと躲す。

「なんだよ、いきなり狂犬みたいなやつだな」「うるさい！！斬空閃！！」おっと」

野太刀から放たれる衝撃波を避け、影から木刀を召喚する。

「仕方ないな…相手をしてやるよ！！トモエ、次は剣士戦だ！よく見ておけ」

「了解です。お嬢」

そういつて、木刀を構えた。対して刹那はその装備を嘲笑った。

「そんな気も通っていないもので私の剣を防ぐことはできんぞ！！」

そういつて、野太刀を縦に振り下すが…

「気が通っていない？お前の目はフジヤマか？あっ間違えた節穴だった」

ガキンツと音を立て、刹那の野太刀を切り払う。

「っな！？気はかよっていないはずなのに！？」

「かよっているよ？ただ薄く鋭く気を巡らせているからわからなかったかな？」

目を凝らしてよく見てみると木刀からはほんのり光が燈っておりそれは薄いが鋭い刃を構成していた。

「あいにく、私は気の量は少ないのでね。こうやって無駄をなくした結果がこの形になったのだよ」

そういつて今度は白花が攻勢に打って出た。

「うら、斬空閃・双牙!!」

式回連続で放たれる飛んでくる斬撃しかもそれは刹那の斬空閃よりも素早く鋭かった。

「つく!!」

何とか避けた刹那だったが後ろにあつた街路樹が木目を見れるくらいきれいにずれて、落ちた。

「こうなつたら接近戦でないとダメか…」

そういつて、瞬動で距離を詰め近接戦闘を始めるが…

「君はもう少し武器の特性を考えようか…斬岩連斬!!」

白花は斬岩剣を振り下ろし、振り上げ、薙ぎ払いの流れで繰り出した。

刹那はその攻撃を防ぐも弾き飛ばされてしまう。

刹那の得物は野太刀、通常の太刀よりも大きい対妖怪退治用の物である。対して白花はお土産屋に売っているような木刀で対人戦闘に使える程度の物である。いくら気で体が強化されていても懐に入れば野太刀はその威力を発揮することはできない。

「貴様はお嬢様の敵なのか？」

剣をふるいながら刹那は白花に問いかけた。

「？、だれそれ？」

もちろん白花はそんなことはなく、知ってはいるが面白そうだから知らないふりをした。

「とぼけるな！！神鳴流を使い、符術を使うという事は西の回し者じゃないのか？」

「別に神明流は近所の姉さんに教えてもらっただけだし、符術は便利だから使っているだけだけど…」

一応、ひなた荘は近所だったのでこのたとえば間違っていないはずだ…

「そんなバカみたいなことあるわけないだろう！！」

「そんなことよりさあ…あなたは木乃香の護衛なんだから…」

「何故そのことを…」

注：二人は切りあいながら話しています。

「麻帆良の狙われる可能性で学園長の孫娘という立ち位置だからその近辺を調べて護衛が一人いるってとこまでわかってね。後は今あなたの言葉でこいつだなって思っただけ」

そこで一旦言葉を切った。

「でもさ、あんたがその護衛だとは思わなかったよ。護衛らしいことを全然していないんだから」

「なっ貴様！！雷鳴剣！！」

そう言い放つと、怒りを乗せた雷撃が繰り出されるが、すべて避けられる。

「だってそうじゃないか。護衛というのはいつでも守れるように対象のそばで構えているはずだろ。それがこんな所で油を売っているなんて護衛失格じゃないのかい？」

「そんなことはない！私はきちんとお嬢様を守っているんだ！！」
「まさか、外敵を倒しているから護衛のつもりなの？笑えるね、木乃香から聞いた話では幼少時は仲が良かった幼馴染が今では嫌われているんじゃないかって言ってた、これは間違いなくお前さんだが、この時点ですでに護衛を名乗る資格はないんだよ。護衛が対象を傷つけるとか聞いたことないな。こんなんじゃないっか誘拐されて、適当に利用されて気づいた時には死体で見つかっているっというた状況になるだろうな」

「そんなの私がさせない！！百烈桜華斬！！！」

必死にその言葉を否定する刹那しながら円を書くように野太刀を振るうが、それが当たることは無かった。

「くそっ！！ちょこまかと！！！」

「それが私の戦法だからね。隙を見つけて一撃を入れる」

白花の尋問が再開される。

「それに、あなたからは守るのは他者じゃなくて自分を守っているような感じがするんだよね」

「何故そんなことがわかる！！！」

白花は当たり前のよう to 答えた。

「『切ればわかる』つまりは戦いあつていればわかるって意味さ。
あんたの剣から感じられるのは敵を排除する意思と自らを縛る束縛
そして、何かを恐れている」
「・・・!!!」

その言葉に刹那は真つ青になった。

「木乃香は刹那がどんな存在であろうと受け入れてくれるだろうな
だけど、お前は勝手な思い込みで距離を取り、そして木乃香を傷つ
けていることにも気づいていない愚か者だ」

「・・・」

「それともお前は大切な親友のことも信じられないのか？」
「そんなことあらへん!!!」

いつの間にか刹那は素の口調に戻っていた。

「なら、一つ賭けをしない？」

「賭けやと？」

そういつて一旦二人は動きを止める。

「私の一撃を耐えて見せなさい。この一撃はかなり効くよ…耐えき
つたなら秘密を言わないし、この場を引き下がる。だけど耐えきれ
なかったときはあなたは木乃香に自分の全てをぶちまけなさい」

「ええやろ…受けて立つわ!!!」

その言葉を聞いた白花は木刀を腰のあたりに差し、居合の型を作る。

「抵抗してもいいけど…捉えられるかな？」

「いつでもきいや。四天結界独鈷鍊殻!!!」

そういつて刹那の方は独鉗を4本使って三角錐の結界を作る。

「これは神鳴流の式の太刀を取り入れた我流の奥義…」

そう言い放ち、木刀に手を添える。

シュツ！！と音がした。

刹那が気づいた時には木刀を振りぬいた白花が刹那の背後にいた。

「絶影…」

木刀をもとの位置に戻したとき、衝撃が襲い、刹那が倒れるとともに結界は碎け散った。

結界は傷一つないにもかかわらず刹那には横一文字の痣があった。

「賭けは私の勝ち…っと言っても聞こえてないか…」

そして、あたりに静寂が戻る…

・
・
・

うわ〜なんかこのセリフ中二病だな。

「さてと、マナ居るんでしょう。」

「よくわかったね。これでも気配は殺していたはずなんだけど…」

「そこは私のセンサーでどうにかしました。」

トモエの頭部はナビコ程じゃないけど結構見えるからね…わずかな

音で捉えられるだろう。

「それじゃあマナ、刹那借りるね。」

「わかった。けどいつたい何をするつもりだい？」

そういつて私は刹那を背負い、笑みを浮かべる。

「なに、ちよつとした嫌がらせだよ。」

・

う、むう、私は…そうだ私は白花さんに挑んで、負けたのか…腹のあたりが痛い。

最後の一撃、あれは忒の太刀を取り入れたと言っていたがそこまで使えるのか彼女は…しかも全く見えなかった。

「ここは寮か？」

龍宮が運んでくれたのかな？
そこへ入り口のドアが開く。

「あつせつちゃん起きた〜。」

「お、お嬢様!？」

何故、ここにお嬢様が!？

ん？枕元に紙が…

『とりあえずここまで運んでおいた。木乃香には不審者と間違えて襲いかかってきた刹那に思いつきり木刀でぶつ叩いてKOしちゃったって言うておいたから。後はがんばれYO ぶちまけちまいなY』

O。 b y 白花』

「先日、不審者が出たんはわかるんやけど、いきなりはどうかともうでせつちゃん。」

まあ、似たようなものだけどこれじゃあ私は狂犬みたいじゃないか…ん？裏にまだ何か…

『だってあんた狂犬みたいなものじゃん』

…なぜ考えていることがわかったし

「嫌かもしれんけど、我慢しといてや。」

何を言っているんですか？お嬢様。

「せつちゃんがうちの事、嫌いかもしれへんけど」そんなことあらへん！！」「せつちゃん？」

「うちはこのちゃんの事、嫌いになつたりせえへんよ！！」

ああ、今になってわかった。

「うちは…うちは怖かったんや…このちゃんを傷付けてそれで、また一緒にいて傷つけてしまつんやと勝手に思い込んで…理由付けて、このちゃんを避けてしまつたんや。」

彼女の言葉の意味を…確かに、これじゃあ護衛失格だな。

「それは、あの川でのこと？」

私は黙って頷いた。

「バカ！大馬鹿やせつちゃんは！！そんなのうちがあそこで遊ぼう
と言って川に落ちてしまっただけでせつちゃんのせいじゃあらへん
よ。」

私は信じていなかったんだ。親友と言っていたにもかかわらず、自
分の秘密を知られるのが怖くて、また遠ざけられるのが怖くて。

「ごめんこのちゃん、ホントに…ごめん。」

私は、ただ謝ることしかできなかった。

「また、昔みたいに一緒にいてくれるん？」

「もちろんや！！今度こそこのちゃんを守って見せるんや。」

「でもせつちゃん。うちはせつちゃんが傷つくのは嫌やで、だから
せつちゃんの関わっていることを教えてもらおうで。」

！？なぜお嬢様がそのことを…

「おじいちゃんやお父様が何かに関わっていてそれを秘密にしてい
るってことまではわかったんよ。それにせつちゃんが関係があるの
かもって思ったからや。」

長、どうやらお嬢様に魔法と無縁な生活は無理のようです。

「わかりました。今は遅いので、一部の人と同伴で話させていただ
きます。」

ならば、私は守るだけだ。それが私ができることだから…

「それじゃあ、お嬢様。私は部屋に戻らせていただきます。」

そういつて、ベッド起き上がるつとすると…

「えい」

お嬢様に押し倒された。え、何この展開？

「駄目やでせつちゃん。もう真名にはここに泊まるって言うておいたんや。」

あれ？なんかお嬢様目が座っていませんか？

「それに、せつちゃんの成長も見ておきたいしな」

そういつて、お嬢様は私の服に手を突っ込む。

「え、つちよ、このちゃん？待つアツーーーー！！！！」

次の日、顔がツヤツヤな木乃香と異様にやつれた刹那の姿が目撃された。

第11話 仮契約、そして覚醒…

昨日は長い夜だった。まあ、ストレス解消にもなったからいつかな
休日明けの学校ってなんかだるいんだよなあ…

…っと、そんなこと考えていたら、後ろから木乃香と刹那が来た。
ツヤツヤな木乃香、やつれた刹那…いったい何が…いや、ナニを
やったのか…木乃香が攻めで刹那が受けか…今の状態で教室行っ
たら、ハルナにばれるんじゃないかねえの？
あれ？なんかこっち来たな。

「おはようございます。白花さん」

「おはよ〜白花」

どうせならからかわないと思ひ、いたずらな笑みを浮かべて…

「おはよう、お二人さん昨夜はお楽しみでしたね」

その瞬間、刹那はゆでだこのように真っ赤な顔になった。

「そ、そんな事よりも学校終わったら説明をお願いしますか？」

「いいよ、じゃあ、終わったら私の部屋に来てね」

「うち、ごまかしやがったか。」

魔法球の中で説明するかな…後、エヴァと龍宮を誘っておくか。

そんなこんなで教室に行ったら案の定ハルナに「二人から強烈なラ
ブ臭がする！」と言っており、アホ毛が頭をゲツダンしているか
のように振っていた。

それは、センサーなのか？と本気で考える今日この頃…

放課後まで

キングクリムゾン

今日の授業は眠かった。英語の時、高畑先生がなんか奇妙な目で見ていたが気のせいだろう。以上

そして、寮に行き、私とナエ姉の部屋で木乃香に説明するために集まったメンバーは以下のとおりである。

エヴァンジェリン、千雨、マナ、後口ボチーム。

「じゃあ、さっそくだけど別荘に行くのでしょうか」

その言葉にエヴァは眉をひそめた。

「別荘？それなら私の家に行かないと無いぞ？」

刹那と木乃香は頭の上に？が出ているような気がする。

そつえば言つて無かったな。

「私も魔法球持っているんだよ」

その言葉にエヴァは驚いたようだ。

「なに！？だが魔法球はかなり高価なものだぞ？いったいどうやって手に入れたんだ？」

千雨だけはまあ、白花だし、て表情をしていた。

「そこは一から作っちゃたんだ」

その言葉にエヴァは啞然としたが、無視しよう

「まあ、入ってみるといいよ。ナビ、ここにいる人たちの入る事を許可する」

『了解、ではエントランスに転送します』

その瞬間、部屋が光に包まれて白花たちは部屋から消えた。

「ようこそ、魔法球クラスターへ」

光が晴れ、目を開けるとそこは中央に円形の机があり、奥の方には先に続く道があり、横の方には幾つかドアがあり、その上には大きなモニターがある部屋に出た。

「おい、白花ここは魔法球の中なのか？」

みんなが珍しそうにあたりを見ている中、エヴァは私に聞いた来た。

「そうだよ。自作の魔法球だから市販のものとはだいぶ違うかもしれないから。このクラスターは管理人格のナビが管理していて、ここから下のブロックがダンジョンで上の方は研究などに使うブロックがあるんだ。」

『ダンジョンの方は基本自由にさせており、実質私が管理しているのはブロック内ですね。』

そういえばこの前見に行ったら、老山龍ラオシャンロンみたいな馬鹿デカイ龍やリオウスみたいな飛龍種がわんさかいた気がするな。MH化が進んでいるのかな？

そんなことを考えていたら、千雨が何か聞いたそうにしている…

「このナビってのはナビコと関係があるのか？」

「名前も似ていますし私の後に造られたのですよね？」

さすが、千雨そこに気が付くか。

「ナビはナビコのデータをもとに作り上げたからね、まあナビコの妹だと思えばいいよ」

その言葉に千雨は信じられないといった表情になった。

「嘘だ！！ありえん！！ナビコの妹がこんなまともな訳がない！！」

言いたいことはわかるが叫ぶな千雨。そして「俺の○がこんなに可愛いわけがない」みたいに言うな…

「ひどいですよマスター！！それじゃあ私がまともじゃないみたいじゃないですか」

……まとも？なのかな。まあ、どうでもいいか…

「それじゃあ木乃香説明するから。みんなも適当なところに座って」

少女魔法の存在について説明中…

「てな感じ、今の私の立ち位置はエヴァの庇護下にある異能使いだね」

「別に私の所にいなくても生きていけるだろお前は…」

こまげえことはいいんだよ。

生存率は上げられるならあげておきたいし…

「魔法に陰陽師か〜思いつきりファンタジーな話やね」

木乃香は不思議そうな表情をしてつぶやいた。

「しかし今、白花さんが言ったことは全て真実です」

フォローありがとう刹那。

「それにこの学園、いやこの麻帆良という都市が関東魔法協会になつているから」

その言葉に木乃香は驚いた。

「ちょっと待ちい、たしか関東魔法協会って関西から狙われているんよね。そんなんじゃないか！」

いつものほんわかかな表情が消え、まじめな雰囲気になった木乃香。鋭いね、いや、これが普通の反応なのかもしれないな。

「そのことは、昨夜この学園の魔法使いたちに言っておいたよ。ま

あ、それでどうにかするとは思えないけどね」

処刑込みでだけどね…

「さて、木乃香。君は裏の存在を知った、ここで選択肢がある。一つは魔法の記憶を消して暮らしていくこと、そしてもう一つは魔法を学び身を守るすべを身に着ける。どっちを選ぶ？」

まあ、選択の余地はないんだけどね…選ばなくても向こうが関わるようにあの手この手で仕掛けてくるからなあ。

「うちは…魔法を学ぶことにするよ」

「一応理由を聞いておくよ」

「おじいちゃんがこの関東魔法協会の長をしているという事は、必然的にうちも狙われることになるのだから、うちには身を守る術が必要なんや」

ついでに言っておけば関西呪術教会の長の娘でもあるんだよね。そのことにはもう気が付いているだろうね。

「お嬢様、私は誰が敵になろうともお嬢様の味方です」

おお、刹那なかないこと言うじゃないか。

「今の木乃香には身を守る術がないんだ。しっかり守ってやれよ刹那。後、私は傭兵だから依頼であれば守ってやるよ」

マナ、初回は安くしたやりなさいな。

「魔法に関してならアドバイスできる。わからなければ私たちに聞

くがいい」

おお、エヴァも協力的だな。ん？私『たち』？

「それって私も入ってるの？」

「なんだ、嫌なのか？」

嫌じゃないんだけど…

「私、教える立場になるのは初めてなんだよね…」

「……ま、まあ一緒に教えるから我慢しろ」

サーセン。

「そういえば刹那に木乃香、お前たちは仮契約した方がいいだろう」

「『仮契約？』」

ハモっていうとは、シンクロ率は高そうだな。
私もトモエとドール契約した方がいいかな…

「エヴァ、私にはドール契約の仕方教えて」

「わかった。どこか空いている部屋はあるか？」

『空き部屋ならその扉があるところが空いています』

メダロットに魔力供給したらどうなるのだろう…

「あのか仮契約ってなんや？」

さっきのまじめな雰囲気はなくなりいつも通りのほんわかとした感じの木乃香になっていた。

「そういえばまだ説明していなかったな。仮契約というのは簡単に言えば従者契約だな。主と従者を設定して、主は従者に魔力を送り強化したり、念話での連絡、従者の召喚ができる。一方、従者の方はアーティファクトという強力な魔法具を召喚し使用することができる等々だ」

「それならば私たちは契約した方が良いでしょうか」

木乃香が後衛で刹那が前衛をやると結構バランスいいかもな。

「だが、仮契約は専用の魔法陣を使うので今その道具が「有るよ。」なに？」

こんなこともあるのかとまほネットで購入しておいたんだよね。

「いつかはトモエと契約するかもしれないと思ったからまほネットで買いそろえておいたんだ。」

「それを今出せるか？」

エヴァはせかすように聞いてくる。

まあ、落ち着けエヴァそんなにせかさなくても出してあげるから…

「可能だよ。ナビ」

『了解。転送』

そういつてテーブルの上に光が集まり、魔法具が転送される。

「よし、これだ」

そういってエヴァは卵のような形をしたものを取った。

「これを地面に割れば魔法陣が出てくる。その中でキスすれば契約完了だ」

おやおや、刹那の奴、朝みたいに顔が真っ赤になりやがった。
木乃香は笑ってるだけか…

「キキキキキ、キスですか!？」

「なんだ、ずいぶんと初心な反応じゃないか。ククク」

うわ〜お、エヴァがすごい悪い笑みを浮かべてるわ〜。

「それじゃあ、二人だけの大切なお話もあるんだし、私とトモエは別室でヤツてくる。エヴァ、ドール契約は？」

「そっちは普通に魔法陣を張って、核となる場所に血をやればOKだ。魔法具は…これだ。」

そういって、色違いの卵のような物を渡してきた。

「こったメダルに血を塗ればOKみたいなものか。」

「ウフフ〜それじゃあ、せっちゃん行こか〜」

そういって刹那の襟を持ってずるずると引きずりながら部屋に向かった。

「マスター私たちはどうします?」

「せっかくの機会だから契約しておくか。そういえばエヴァ私には魔力はあるのか?」

千雨、ナビコ組も契約するようだ。ナビコが人間だったら本契約まで逝っちゃいそうだな。

「ああ、一級品とまではいかないがそれなりの量があるぞ。ほれ」

そういつて魔法具とナイフを千雨に渡した。

「サンキユ」

「終わってこつち来たら治療してあげる」

そういつて、それぞれが個室へと向かった。

そんなこんなで契約完了!!

「ウフフゝええ気持ち良かったわゝ」

木乃香の手には一枚のカードがあった。

木乃香さん、なんかそのセリフエロくね?

刹那は、黙ってうつむいているけど耳まで真っ赤だな。

「それで、そつちはどうだメダロット組?」

「今の所は問題ありません」

「トモエと同じ感じですね」

二人は特に変わった様子ではなかった。

「それじゃあ魔力流してみるね」

そういつて私は魔力を流してみる。千雨と木乃香はまだできないらしく私だけが試す形になった。

「どう？トモエなんか変わった？」

「……」

そう聞いてみるが返事がない。

「トモエ？」

嫌な予感がして、あわてて魔力供給を切ったが遅かった。

「！！！」

魔力とは違う力があふれ出ており、トモエの背中から昆虫の羽のような光が出てきた。

まさか、メダフォースか！？けどこのままだとなんかやばそう！

「おい白花これはなんだ！！！」

エヴァが突然のことに慌てふためいている。

「これはメダフォース。メダルの潜在的な力みたいなもの。多分魔力を流したことでメダフォースが発動したんだと思う」

それしか思いつかないしな

「止める方法は？」

「一応頭部にダメージを与えれば機能停止になるけど止まるかわからない」

そういつていつもの包帯を腕に巻きつける。

「わかんねえならとりあえず戦うぞ。白花、刀くれ!!」
「援護なら任せてください」

ナビに頼んで日本刀を転送し、千雨に渡す。

「弾薬費はそっち持ちで頼むよ!!」

どこから出したのか、ボルトアクション式のライフルと二挺の拳銃をとりだしたマナ。

「うちらはどうしたええんや？」

「刹那は木乃香を守って、エヴァはいつでも動けるようにしておいてくれ!!」

刹那は木乃香のそばに行き被害が出ないようにしておく。

みんな、それぞれの武器を構え、トモエを止めに入る。

「じゃあ止めに行きますかな!!」

「ガああああ!!!!」

「っち、硬いな、こいつかなり強化されていやがる…」
「マスター次弾来ます!!」

千雨はその場から飛び退いたが頬をかすり、その先の壁に弓矢が突き刺さった。

「生半端な攻撃は通じなくなっているな…」

幾多の弾丸を撃ち込むもかすり傷程度しかないと愚痴りながら拳銃のマガジンを交換する。

「氷の矢18矢!!」

エヴァは魔法の矢を打ち込むも効果はあまりない。

「おい、白花合わせろ!!」

「オツケー!!」

そういつて白花と千雨は刀を上段に構え、気で強化した刀を一気に振りぬく。

「斬岩十文字!!」

二人の攻撃は、床ごとトモエを切り裂いた。パーツはひび割れ動きは鈍くなり、ギリギリッと何かがこすれる音がした。パーツの間隙からは蒸気が噴出している。

ふと、千雨の方を見ると何かを考えるようにしていた。

「白花！水だ！あいつを冷やせ！！」

その言葉を聞いて、二人の魔法使いはすぐに詠唱を始める。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック、来たれ氷精、爆ぜよ風精
…」

「エストウス・レグナム・アエストウス、目醒め現れよ、浪立つる
水妖、水床に敵を沈めん…」

「氷瀑！！」「流水の縛り手！！」

氷瀑により、ブーツが凍りつき、魔法でできた水がトモエを縛り上げて動きを止めた。

その時、ブーツから湯気が立ち込め、熱疲労を起こし次々とひびが入っていった。

「キ・・・アア・アア…」

プシューッと湯気を出しながらトモエは停止した。

「とりあえず、トモエは一度修理に出さないとだな。マナ、弾薬費は後日だすわ」

わかったよと答えるマナ。その後方で木乃香は初めての実戦を目にし、得るものもあっただろうか…

「みんなはいつもこんな危ない目に合ってるんやな…」

木乃香は傷ついたみんなを見渡してぼつりとつぶやいた。

「誰も何かのために戦うものだ。大切なもののため、対価をもらうため、戦う理由なんていくらでもある。近衛木乃香、お前はいつたい何のために戦う？」

その問いに一片の迷いもなく答えた。

「うちは、そんな大層な理由なんて持つておらん。でも、うちは守られるだけなんて嫌なんや。そのせいで傷つくというのならその傷をうちが治したる。大したことやないと思うけど、それがうちのできることやから…」

その答えにエヴァは満足したようだ。大切な者が傷つくのが嫌だからそれを癒すか…正義の為などとふざけた答えならぶん殴つてでも修正しようと思つていたが、これなら誤つた道に行くことは無いだろうな。自分の行動に責任を取り、それをごまかさず、信念を持つて行動する。一人では挫折するかもしれないが、こいつにはそばにいてくれる仲間もいる。

その優しい心があるならいずれは多くの人を救えるのかもしれない。

「よく言つた。近衛木乃香お前の信念しかと受け止めた。この闇の福音がお前に魔法を伝授しよう。つといても私は回復の適正が低いから白花の方に行くだろうがな…」

苦笑するエヴァに最後の最後で閉まらんなあと笑う木乃香だったが、その瞳には決意の光が輝いていた。

第11話 仮契約、そして覚醒…（後書き）

三組が契約しました。メダフォースについては漫画版をうる覚えで参考にしました。漫画の方は、大抵の奴一撃で機能停止だったな…止め方も漫画版でしたね。（漫画版はスプリンクラーで停止。）—
応刀には触れましたけど沸騰はしませんでした。

第12話 正義の意味

私の信じていた信念は借り物だったのか：今思えばこれは本国が唱えたものであり、私の信念でもなんでもない。私は立派な魔法使いという偶像を求めて一般的な普通の常識を忘れていたのだろう。正義といえばすべて許されると思ってしまうのはまさに愚行なのだろう：そんな考えが頭の中でグルグルと廻っている。

魔法使いは世のために尽くす事そして正義なのですから！！

ふと、彼女に言った言葉を思い出した。

違う、全ての魔法使いがこれをなしているわけではない…

むしろ、犯罪を犯すものも多々いる。これらは無償奉仕で許されるが、見方を変えれば強制労働だ…

見ず知らずの誰かを守るより、私の大切な人たちを守れるくらいならそれでいいんだし。

確かにその通りだ。赤の他人と自分にとっての大切な人を天秤にかけて大切な人を選ぶ。これが当たり前なんだろう。だけど、私はそれを嘲笑った。

正義に固執してしまい正義があればどんな強敵でも勝てるという妄想にとらわれていた。現実はそのではない…それで死んでしまったら正義の為に散ったのだから仕方ないという考えを持ってしまった。

あなたは悪である闇の福音に味方をするというのですか！？

闇の福音。まさに悪の代名詞である彼女は英雄ナギ・スプリング

フィールドが呪いをかけられて此処で働いていると聞いた。本来は3年の契約なのにもう10年以上此処にいることに疑問を持たなかった。悪であるからここで一生過ごせばいいんだ。

そんな身勝手な考えを持ち、自分は正義だと自分をごまかし続けた。

そもそも、彼女はなぜ罪を犯したのか？

その理由も知らないで一方的に悪と決めつけていた。

吸血鬼だから、賞金首だから

彼女は人から吸血鬼になったと聞くがいつたいつた何時、そしてなぜ吸血鬼になった？もしかして彼女は悪ではないのでは？
ああ、考えだしたらきりがありませんわ…

「・・・ね・・・高・・・高音！！」

ふと、顔を上げると、友人である英子がいた。

あれ、授業はどうしたんだっけ？

「英子、授業はやりましたっけ？」

「あなたまだ寝ぼけているの？もうとっくに終わってるわよ…」

周りを見ると、生徒たちが談笑していた。

「高音あなた最近ボーっとしているけど大丈夫？」

「少し悩み事がありましたね…」

「だったら早退して休んだ方がいいんじゃない？」

確かにこうも考え事で授業を潰すより、休んだ方がいいのかもしれない

ない。

「お言葉に甘えますわ。それじゃあ保健室の方へ行ってきました」

そういつてわたくしはふらふらと保健室の方へ向かった。

「珍しいこともあるのね。高音があんなに悩むなんて…」

英子さん、それは私が直情バカつてことですか？そう問たいけど体がだるい。風邪かもしれないませぬ…

・
・
・

保健室の方で早退届をもらい先生に提出して、寮に戻ろうとしたら途中愛依と合流した。

「あれ、お姉さま？どうしたんですか？今の時間は授業のはずじゃあ…」

「ちょっとだるいから早退してきたのよ。それに最近授業が身につかないの…」

「やっぱり、あの夜の事ですか…」

愛依は思い出したのか体を抱きしめ震えてた。無理もないあの夜、愛依とナツメグは四肢を打ち抜かれてしまったのだから、幸い治療が適切に済んだため痕は残らなかったが二人にはトラウマものだっただろう…

「そうね…あれから何をしていたのかわからなくなっちゃったわ…」

私を否定した彼女はここの攻め込まれる原因が私たち魔法使いにあると言い放ち、私の最悪魔法を打ち破った。その後、目覚めた時から自分の行動に疑問を持ち始めた。私たちがいるから攻め込まれる、ならいなくなってしまうえば…

駄目だ。思考がどんどんネガティブになっていく。もうどうしていいかわからない…

「お姉さま。大丈夫ですか？顔色が悪いですよ。」

「あ、大丈夫よ愛依」

そうはいつているが思考はどんどん悪い方へ行ってしまう。

「お姉さま。一度ガンドルフィーニ先生に相談してみてもいいですか？」

確かに…私一人で悩んでも答えは出そうにない。ならば、師であるガンドルフィーニ先生に聞いてみるのもいいだろう…

「そうね。今度相談してみるわ」

そして、次の休日に相談することにした。

・
・
・
「最近自分の行動に疑問を持ってしまったか…」

若いうちにはよくあることだ。壁にぶつかりそして進むことに悩む。

そしてそれを導くのが大人の役目。

「しかし、できるかなあ……」

できることはやらないとな……

・
・
・

私と愛依とナツメグの三人は職員室で相談を受けることになった。

「今日はお時間をいただきありがとうございます。」

「そう硬くならなくてもいい。楽にしていってくれ。」

そういつて私たちは席に着き、溜まっていたものを吐き出した。

何が正義で何が悪なのかを……そして闇の福音は本当に悪なのか……私たちはこの地から離れるべきなのか……と

「君たちの言いたいことはわかるよ。私も似たようなことがあったからね……」

その言葉に信じられないと思った。ガンドルフイーニ先生は大分烈戦争には関わらなかつたが幾つもの戦いを生き抜いた歴戦の魔法使いとしてもそれなりの地位についているから

「まだ君たちくらいの頃私は『悪』を倒すことに躍起になっていたんだ。それで周りが認めてくれる。そう思ってたが……ある日それを否定されたよ……」

なつかしむように語っていく先生に私たちは聞き逃さないように真

剣に聞いていた。

「ある村で賞金首を殺したときに『私たちの希望を殺して何が正義なんだ！』と周りの村人に言われたよ。その賞金首を調べてみたらどこにも属さない治療魔法使いだったんだ。必要な薬などを対価に貧しい村や医者にありつけない人々を治療して回っている立派な魔法使いみたいなんだ。本国の上層部はこちらに所属するように言ったがその要求を突っぱねて賞金首になったらいい。」

その人の行いは間違いなく正義であったと思った。しかし、情報操作により悪に仕立て上げられて殺されてしまうなんて信じられなかった。

「その事実気づいたとき、初めて自分の行動に疑問を持ったんだ。そのせいで仕事も集中できず、悩む日々ばかりだったんだ。」

まさに今の自分たちの状態だ。出口のない迷路を彷徨っている感じである。

「そんなある日、一人の女性が言ってくれたんだ。『悩むくらいなら行動を起こせ！』って言われて、無理やり引張られてその人と一緒に簡単なボランティアとかをやったり、慈善活動をやったりと初心に帰ったような感じだったよ。彼女に正義とはなんなのかと聞いたら『うだうだ悩むのは性に合わないんだ。だから私はなるべく後悔をしないように生きていたい。失敗したとしても、それを糧にして同じ過ちを繰り返さないようにしたい』と答えてきたよ」

過ちを繰り返さないか…

「そうしているうちに彼女に引かれていったね。コンビを組んで活

動するようになったんだ。その時に『お前の正義はなんだ？』って聞かれてね。『あなたを守ることが私の正義です』って言っちゃたんだよ。そしてその人と結婚して子供ができて『妻と子供の将来を守ること』それが今の私の信念であり正義になったんだ」

彼女は言っていた。『正義と対になるのは別の形の正義』その意味をようやく理解することが出来た。ガンドルフィーニ先生が話してくれたように『過ちを繰り返さないための正義』や『大切な者を守る正義』、そして人々を治し続けた賞金首も自らの正義に従い行動してきたのだろう。

同じ正義は存在しない…あつたとしてもそれは借り物の正義なんだろう…」

思えば私は、考える事を他の何かに委ねすぎていたのかも知れない。それが本国の唱える正義であったり、誰かの命令であったりとそんな不確かなものに振り回されている人形のようなのだ。

だけど、私は気づけた。だからやることが出来た。

「ありがとうございます。ガンドルフィーニ先生、おかげでこれから何をすべきかを見つけることが出来そうです」

いつもより足取りが軽い。迷っていたことに出口を見つげられたのかも知れない。

「君はこれからどうするんだい高音君」

一番の疑問を解消しましょう…」

「エヴァンジェリンさんに話を聞きに行きたいと思います。彼女は

なぜ悪と呼ばれるようになったのか…それを見極めたいんです」

「お姉さまお供させていただきます！」

「やっぱりお姉さまはこう一直線に突っ走るのが似合ってますよ！」

そういつて私たちは事務室を後にした。

・
・
P r r r r r r

「はい絡繰です。え？高音さん？今日は集会などはないはずですが…はい、少々お待ちを」

なにやら茶々丸がこちらに来たが…それに高音？白花がぶち壊した魔法使いじゃないか…報復でもするつもりなのか？

「マスター、関係者の高音・D・グッドマンさんが話を聞きたいからこちらに来ててもよろしいですかと言っていますけどどうしますか？」

向こうが指定した場所ではなく家にだと？それに話が聞きたい？何か企んでいるのか？ええい、毒を食らわば皿までよ！

「いいだろう。話を聞きたいなら勝手に来るように言っておけ」

「了解しましたマスター。よろしいようです」

さて、何をたくらんでいるのやら…

・
・
・

「どうもお邪魔します」

私たちは話を聞くためにエヴァンジェリンの家に来た。

最初は断られると思ったがあっさりと招待してくれた事に驚いた。

「さて、発動媒体も持たずにこの闇の福音にいったい何を聞きたいんだ？」

向こうは警戒しているのか威圧感を出しながら迎えてきた。

まあ、今までの私たちの対応を考えれば当たり前だろうが…

「私たちは戦いに来たわけではありませんから武器は必要ありませんよ…」

そう、あくまで戦うことはないことを前提にしている。もしそうならこっちが全滅させられるだけだ。

「ふん、まあいい。それで聞きたいこととはなんだ？」

「無礼を承知で聞きます。あなたはなぜ吸血鬼になったのですか？」

その言葉にエヴァンジェリンは驚いたような表情になって冷静に対応してきた。

「何故、そのようなことを聞く？」

「私たちはあなたを悪と決めつけて自己完結してきました。しかし、それでは逃げているだけなんだと思っただけなんです。一方的に決めつけるのではなく、自分の目で、耳で確かめたからです。」

こんなことが起きるとは予想していなかったのか困惑しているようにも見える。

私たちは彼女の対応を待つことにした。

「あれだけ打ちのめされて何か気づくことがあったのか？」

はいつと私は答えた。

「よかるう、質問に答えてやる。私が真祖の吸血鬼になってしまったのは十歳の誕生日の時の話だ。」

そこからエヴァンジェリンの昔話が始まった。

「その前までは屋敷で不自由のない生活をしていた。しかし、誕生日の日に私が目を覚ましたと思ったら叔父上が私をこんな体に変えたんだ。しかもこの体にした理由が真祖の吸血鬼になる実験だったんだ。その身勝手さに私は激しい怒りを覚えたよ…それで腕を吹き飛ばすも叔父上には逃げられてしまったんだ。」

一息ついたときに愛依が質問をした。

「でも、それじゃあその人が真祖になっているんじゃないですか？」

確かにそうだ。実験が成功してしまったのならその男も不老不死の真祖になっているはずだろう。

「吹き飛ばした腕が持っていた本が実験の全てが載っていたんだ。逃げる時、それを拾うことが出来なくて、真祖化の実験に使う材料や分量がわからなくてできなかつたんだろう。それ以外にも魔法についてなどが書いてあってそれを学んで魔法が使えるようになった

んだ。続けるぞ、しばらくして吸血鬼狩りのハンターが来たり、異端審問官がやってきたりと大変だったな。襲ってきた奴らは女、子供以外は殺した。殺さなければこっちがやられるからな……」

殺した。その言葉に顔色を変えてしまったが相手は殺意を持って襲ってきた。ならばそれは正当防衛ではないか。これが私たちが見ようとしてもしなかった真実の一つなのだろう。

「そうして、叔父上を見つけて殺した後は賞金につられてくるバカどもを殺したり、魔法を磨いたりとして生きてきたんだ。そうしているうちに600万ドルもの賞金を懸けられるようになってしまったというわけだ。」

話し終わったころには3人とも沈黙していた。

「自分たちが思い描いていた悪とは違ったことに落胆したか？」

私は首を横に振った。

「申し訳ありませんでした。エヴァンジェリンさん私たちは勘違いしていました。」

「こちらが話さなかったから知らないのは当たり前だ。それに人は異端を恐れるものだ」

経験者が語るとその言葉に重みがあることがわかる。

「それでも、知ろうともしないよりはましですわ!」

そうか、と満足そうに答えてそれ以来黙ってしまふ。

真実を見てみれば私たちがいかに自分勝手に愚かであることがよくわかった。

彼女の最後に聞いた言葉『もう少し視野を広く見るべきだね』
確かにその通りだ。世間の情報だけでは真実にたどり着けないこともある。

ふと、何かを考え込んでいたナツメグが質問をしていた。

「そういえばエヴァンジェリンさんの呪いは解けないのですか？」

「ん？ああ、この呪いはバカみたいに魔力を使っており通常の解呪方法じゃ解けないんだ。」

登校地獄ですか…サウザンドマスターが掛けた呪いで学校に通い続けるという妙な呪いでしたね。

ん？この呪いって登校させるだけですよね…

まさか！？

「エヴァンジェリンさん！学園から出れなくなったのは封印されてからどれくらいたってからですか？」

「な！？なんだいきなり、確か封印されてから3日くらいで出れなくなっただんだ。」

その言葉に私の予想は確信へと変わった。

「エヴァンジェリンさんここからは私の予想の話です。とりあえず聞いてください」

わかったと頷いてくれた。

「登校地獄は文字通り、登校させるだけの呪いです。ならなぜエヴァンジェリンさんは学校外へ出られないのか？それは別の呪いがかかっているからではないですか？」

みんながアツ！！と今わかったような感じになった。

「確かに学校外からでも通えるから閉じ込める必要はありませんね。」

「それだと組み込まれているのは学園結界の方ではないですか？それなら動きの制限もできるはずですよ！」

「待て、それなら魔力抑制も結界の方に使われているんじゃないか？」

確かに、その可能性は限りなく高い

「これを掛けたのはサウザンドマスターではなくて学園長が掛けたんじゃないですか？3日の間に学園結界に組み込まれていなかったけどその後結界に組み込みエヴァンジェリンの魔力を使って結界を強化した。この線が一番強いと思います！！！」

冷静に考えればひどい話ですね…拘束具に抑制を強いられる。しかも、3年を超えても解除しないとは…

「あのくそ爺…報復してやろうか？しかし、いいのか？私にそのことを知られても…」

「別にいいんですよ。私はただ想像したことを話しただけですから…それよりもその呪いは解呪専門の人なら溶けるのではないですか？」

その言葉に驚きを隠せないでいるエヴァンジェリンであった。

「なんだと！？しかし、この呪いは私でも解けないのだぞ」

そこは呪いなどに詳しいナツメグが解説してくれた。

「自分の呪いを解くのと他人の呪いを解くのでは難易度が段違いです。多分学園長が呼んだ人たちでも解呪できたでしょう。だから、学園長の息がかかっていない人に頼めば何とかなるかもしれません…」

しかし、あの人はあれでも関東魔法協会の長。それを対抗してまで賞金首を解呪しようなんて殊勝な人はいるだろうか…

「エヴァンジェリンさん、それなら白花さんに頼んでみてはどうですか？」

あの人は魔法だけでなく符術も使っていた。もしかしたら封印を解呪できるかもしれない…

「私がなんだって？」

入口の方を見ると、秋葉原白花さんがたっていた。

「なんだ？もしかして聞いていたのか？」

「実は割と最初の方からいたんだよね。でも、3人とも良い目してんじゃない、間違えたよ…」

彼女の見る目は以前と違い、うれしそうな様子だった。

「それはあなたのおかげでしょうね…あなたが指摘してくれたからここまで来れたのでしよう。それが無かったら私たちは気づけずにいたでしょうね…」

きつと気づけずにいただろう。そして、正義を免罪符にして殺しをしても罪悪感などみじんも感じず、命令をこなすだけの人形のような存在に成り果ててしまっただろう…

「気づけたなら大丈夫だろうに…それよりも封印の話だったね。解呪の符なら何回か作ったことがあるけど強力な呪いの解呪はやったことがないんだよね…だから成功するかはわからないよ」

「それでもいい。可能性があるなら試してみてくれ白花」

「なら、明日あたりに登校地獄だけを解呪してみるね。これは解いても問題ないから。」

「私たちに何か手伝えることはありますか？」

足手まといかもしれないけど、できることはしておいた方がいいだろう…

「今は特にないけど手を借りるかもしれないから解呪の時、同席してくれない？」

「わかりました。私たちはその日は開けておきますね」

そんなこんなで話し込んでいたら日が暮れてしまいました。by

高音

「そろそろお暇しますね」

「では、また今度」

「さようなら」

迷いや疑問が解けて清々しい気持ちだった。

「お前ら、呪いや話を聞いてくれたことを感謝する」

「別に礼を言われることなんてしてませんわ。今まではあなたを否定し続けたのですから、恨み言を言われてもおかしくないのですから……」

「それでもだ…真実に向き合い、光を見つけてくれたんだ。これくらい言っておくさ…また来るがいい。相談くらいには乗れるだろうしな」

「そうですね。茶々丸さんのお茶もおいしいですし、時々寄らせていただきますよ」

そういつて私たちは帰路に就いた…

・
・
・

「私をわかってくれるものがあるとはな…」

みんながいなくなってポツリと呟いた。

そうだな、封印が解けて外に行けるようになったらみんなどこか行くのもいいな。その時が来たら誘ってみるか…

「人生、何が起こるかわからんな…」

第12話 正義の意味（後書き）

最近、もし白花などがくに行ったら…と考えることがあります。

リリなのとかISとか…

もし行ったらメダロットはデバイスやISの機体になるだろうな…

第13話 封印解除しましたが何か？（前書き）

原作までもう少しといったところです。

第13話 封印解除しましたが何か？

先日、エヴァからの依頼で登校地獄を解除することになったが、これは私の血を使わないといけないのかもしれない…。しかし、血を飲むという事はその人の情報を得ることになるだろう。まあ、どうでもいいけど。とりあえず、解呪符にあれを使うかもしれないな…

そして、私たちは放課後にエヴァの別荘で作業をする事になった。

「とりあえず、解呪符を50枚ほど用意しておいたよ。普通のより強力なのだからこれに+すればどうにかなると思う」

さすがにこんなに使わないと思うけど念のために多めに作っておいた。

「用意しすぎじゃないか…」

大丈夫だ。問題ない（キリッ

「まあいい、その+はお前の血を吸うことになる方がいいのか？」

「別にいいよ。少しでも魔力があった方がいいからね」

「それなら私たちの血を使えばよろしいのでは？」

封印の違和感を教えてくれた高音さんたち

「いや、いざという時のために温存しておいてちょうだい」

わかりましたわと言って後ろの方に下がる

「詳しく見てみたけど、この呪いは登校地獄と結界、魔力抑制の3種類の呪いがあって登校地獄と結界は二つで一つみたいになっていくみたい。だから、これを解除すれば外に出られるね。魔力抑制の方は監視用だと思う、だからこっちはまだ解呪しないでおくけどいいかな？」

ていうかあの爺、面倒なのを掛けやがって、そして親父は約束したなら守れよダメ人間が…

「かまわんよ。別にすぐに答えを出す必要はないんだ。ゆっくり考えればいいさ…」

とりあえず、解呪符を貼ってみるが貼った瞬間バチツと電流のようなものが奔ったと思ったら一瞬で燃え尽きた。

「なるほど、これは強力な奴だね…それじゃあ、解呪を始めるよ。エヴァ血を吸ってもいいよ」

そういつて私はシャツを脱ぎ捨て首筋を差し出す。

「ブツ!!おまつ!!いきなり脱ぐな!!」

「え、一々伸ばすと服が伸びるし、血で汚れるからこっちのがいいでしょ。」

ブラ?そんなもの必要ありませんよ。ある人は言いました。貧乳はステータスだ!希少価値だ!!と…別に悔しくないんだからねチクシヨー!!!

「ぬっ…それじゃあ飲ませてもらうぞ…」

そういつてエヴァが私の首元に近づいてくる。少し怖いな…

「だいじょぶだ。痛くしないよ…」

優しく語りかけてきたエヴァが背中に手をまわされ抱きしめられながら首元に牙を突き立てられた。チクツとした痛みがあつたがそれ以降は体の中から吸われていくような感覚を覚えた。それも心地よい感じであつた。

「ん、ちゅっ、んん、んく、はぁ…」

エヴァの髪からはなんか甘い香がしていた。香水でもつけているのかな？

「んく、チュパ、んく、くはぁ…」

息継ぎをするかのように一度口を話してまた吸い始める。そんなにがつつかなくてもいいのに…

「はむ、ん、んむ、んく…」

なんか長いな…エヴァ正気を失ってないか？

「エヴァ意識はきちんと有る？あれば手を握って開いてみて」

その言葉を聞いて、背中に回した手を握って開いた。どうやら大丈夫のようだな…

「ん、くはぁ、はぁ、はぁ、なかなか美味であつたぞ」

そいつはどうもさてと、解呪の儀式に移るとしますか…

「白花、お前は…」

「ん？どしたのエヴァ？」

一瞬何かを考えていたような表情になったがすぐに目をそらされた。

「いや、なんでもない。解呪の方を頼むぞ…」

「任せておいてよ。このくらいどうってことないんだから…多分」

そういつて12枚の儀式用の符を囲むように配置して影のゲートから鏡を取り出した。

ふと、3人の方を見てみると、3人とも鼻から紅い物を噴出しており、高音と茶々丸以外気絶していた。

とりあえず起こしておくか…

「録画完了です」

「ちよつとこれは刺激が強すぎですわよ…」

サーセンwwいや〜大事が無くてよかったよ。それと茶々丸ナイスださて、ここからが本番だ…

「その鏡はなんなんだ？」

「これは私の切り札の一つかな」

「綺麗ですね。発動媒体なのですか？」

それにも使えるけどこれの能力はすごいからな。防御に使えば大抵の攻撃を防ぐ最強の盾になりうるものだし…

「まあ、その使い方もできるけど力の増幅も可能だからねこれを使

つて解呪符の力を増幅させて封印を解くよ。じゃあ、はじめますか…」

そういつて一息すつて静かに唱えていく。

「出雲に神あり、審美確かに、魂に息吹を…」

鏡を頭上にかけてそこから光を放つ…その光景は何とも神秘的な雰囲気であつた…

「山河水天に天照す、是自在にして襖の証…」

そして光が最高潮に達したとき鏡を地面に叩き付け、周りの十二の符が浮かび上がり陣を形成し、周りに鳥居が出現する…

「名を玉藻鎮目石、神宝宇迦の鏡なり!!」

準備は整つた。これにより鎮目石のバックアップを受けて、解呪符の力を限界まで高めて使えば!

ポケットから魔法薬を取り出し、飲み干す。それによって、魔力が増幅させる。

しかし、それだけで終わりではない…

「呪層界・怨天祝奉!」

一回限りの増幅呪法をかけて準備完了。

「それじゃあ行くよエヴァ」

「いつでもいいぞ」

そして、解呪の儀式を開始する。

「我力を持って、彼の者を縛りつける悪しき呪いの鎖を今こそ断ち切らん…」

詠唱をすると、エヴァの体から二重にかけられた鎖と空に向かって伸びる糸が出現した。

それに強化された解呪符を押し当てると、バキンツと音を立てて、体を縛る鎖が砕け散っていった。

「これで解呪はできたと思うけどどうか？」

「今はまだわからないがなんだか体が軽く感じる…多分成功だろうな」

「やりましたね！でも、私たちがいる意味はなかったんじゃないですか？」

備えあれば憂いなしってね

「もし、失敗による障害や暴走の時の後始末をまかせようと思ったのさ」

「ひどっ！！後始末ってひどっ！！…」

大事なことから二回言ったか。

あはははっと笑うけどそろそろ限界だ…

「それより白花聞きたいことが…」

「あ、ごめん、今無理・だわ…魔力・切れた・みた・い…」

「お、おい白花！！！」

そこで私の意識は途絶えた。

・
・
・
「様子はどうなんだ？」

その後、白花は倒れ、別荘内の部屋に寝かしつけてある。

「急激に魔力を使ったことで意識を失っただけのようです。命に別状はなく、少ししたら目を覚ますでしょう」

ナツメグと呼ばれているこいつは回復系が得意で助かった。回復系は得意じゃないから正直、こいつの存在はありがたかった。

「それにしてもあれはすごかったですね…」

高音の従者の一人であるメイと呼ばれる従者が呟いた。

確かにあれはアーティファクトでもないのにとんでもない能力だったな…

「名称から検索してみました但し神宝『玉藻鎮目石』とは三種の神器の一つである八咫鏡の原型であり、天照の神体のようです。何故、彼女がそんなものを持っていたのでしょうか？」

茶々丸が解説してくれてあの鏡の正体もわかったが神宝か…

神宝の所持それだけでもとんでもない爆弾だ。これを欲する者もいるだろう。それにこいつは…

「どうしたんですか？エヴァンジェリンさん顔色が悪いですよ…」

考えに没頭して顔に出てしまったか…

こいつらなら話してもだいじょぶだろうな…

「血を吸うという事はそいつの魂の情報を見ることもできるんだ。

白花の血を吸ったときに秋葉原になる前の白花を見た」

「元は違ってたんですか？」

「ああ、こいつは魔法使いの家系で才能が無くて、周りの勝手な言い分によって捨てられたんだと…」

まさか、白花が…

「そこで見たこいつの兄が…ネギ・スプリングフィールドという名の少年だったんだ」

「「「なっ！！！」」」

三人ともその言葉に動揺を隠せなかったようだ。

「待つてください。それじゃあまさか…」

「ああ、こいつの本当の名はハクカ、ハクカ・スプリングフィールド。英雄ナギ・スプリングフィールドが残した子の片割れだ」

・
・
・
それは幼いころの夢だった。

白花は戦うよりも守ることがすごいんだから大丈夫！！

従姉妹の言葉に励まされた時の事だ、周りは非難していたがこの人は受け入れてくれた。

まったくあ奴らはガキに何を期待してんだかな！お前らはナギみたいなバカになるなよ！！

バカ親父に苦勞をかけられていた老人の言葉、酒を飲んでいた時に聞いたことだ。確かにあの鳥頭はバカだよな…私はならないけどネギはなるかもね…そこ嘘だ言うな…

私たちが傷つくのなら、白花が治してよね！

活発そうな幼馴染に言われた一言がうれしかった。こんな私でも必要としてくれるんだから…

大丈夫さ！みんなが悪く言っても僕は白花の味方だよ。だって僕は白花のお兄ちゃんなんだから！！

ああ、いつか会う日が来たら、言ってやろう…育毛剤はまだできていないんだ。と…あとは守られるだけなんて嫌だよ。だから一緒に肩を並べていこうよ兄さん…

そこで私の目が覚めた。

「知らない天井だ…」

いつも通りのネタを言って辺りを見回してみるとそこは別荘の中にある城の一室だった。

たしか、レーベンシユルト城だったかな…

「起きたか…」

扉が開いてエヴァがどこか神妙な顔もちでやってきた。

「ぶっ倒れちゃったか…」

「そうだ、大変だったんだぞ？ここまで運ぶのは」

ごめんと謝って、そのあとは沈黙してしまった。

「やっぱり見えたんだ…」

エヴァはああ、と答えた。

「だが、こうなる事がわかっていたんだろ？なら、問題ないんじゃないか？少なくとも私は英雄の娘だろうがなんだか知らないが秋葉原白花としか見ておらんよ」

ぶっきらぼうに言い放つその言葉に若干うれしさを感じた。

「ありがとう」

「気にするな、立てるか？」

うん、とエヴァの手を取ってそのまま引かれながら広間についた。

「あ、白花さんもう大丈夫なんですか？」

「あんまり無茶はしないでくださいね」

「座った方がいいですよ…」

入ってすぐに高音さんたちが声をかけてくれた。

「大丈夫よ、少しくらくらするけど立てないほどじゃないから」

「それでも、血を吸った後にあれだけの魔法を酷使したんだ。今は

意地を張らず甘えておけ…」

そうするか。と思い、おとなしく椅子に座った。

「今、茶々丸が暖かい物を作っているから食べて血を作っておけ」

「梅茶漬けですがどうでしょう」

「ん、ありがとう」

アツ、冷まさないとな…ん、美味い

「白花さん、食べながらでもいいですが、聞いてもいいですか」

大体質問の内容はわかっているんだよね…

「私の生まれと此処にいる経緯を聞きたいってなところかな」

はい、と頷いた。

そして、今までのことを話した。

少女説明中…

「もしかして、あそこまで正義を否定したのはこのことが原因なんですか？」

「それもあるけど、普通にそういうのが許せないだけさ」

むかつく奴はぶちのめす、ただそれだけのことだし

「そういえば、初めて会ったときは、封印した奴として私を見てい

たのか？」

やっぱりそこを聞いてくるか…そりゃそうかわざわざ目標が助けに来るなんておいしすぎて疑うだろうし…

「あれは偶然だ。夜道は物騒だからって竹刀を持って行っただけだし。強いて言うなら嫌な予感がしたから持って行ったかな」

「嫌な予感か…まあいい。それにしても殺したとおもった者が生きているとなれば又、殺しに来るだろうな」

その通りだ。だから、名を変えて身体を成長させてわからなくした。

「恐いですね…一歩間違えれば私たちもそのひとたちみたいな狂信者なっていたのでしょうね」

高音さんは今までの自分を思い出しながらポツリとつぶやいた。

「とりあえず、今日はもう解散という事でいいんじゃない？目的の解呪も済んだんだし」

「そうですね。エヴァンジェリン、今度町に行って買い物でもどうですか？」

「お姉さま、その前に学園長をごまかさないと…」

その辺の話は考えてある。

「それなら、まほネットに売ろうと思っていていた解呪符をエヴァに取ってもらったら発動してしまって呪いが解けてしまったという事でもいいだろう。また掛けると言ってきたら『ナギを呼んでかければいいだろう？それ以外は認めん』っていえばいいんじゃない？」

「あくまで事故という事か、もうそれでいいだろう。なんかもう面

倒になった」

エヴァ、丸投げかよ…そういうえばチャチャゼロも動けるようになってたかな…

「そういうえば、お前はまほネットで出品しているのか？」

「結構、儲かってありんす」

今でも好評で黒字をたたき出してるよ。セキュリティはナビでOK
！！電子精霊だろうとハッキングはできないZ E

「ほんと、幅広くやっていますね…」

「符術に硬すぎる障壁さらに魔法とは違う力に神宝を使えて、神鳴流も使えるって言うてましたねそれに加えて商売とは…」

「鏡についてはあえて触れませんが…」

その方がありがたい。まさか、神にもらったなんて言えないからな…
そして外に出た。

「私ことは言わないでね」

「わかってますよ。この事は誰にも話せないような内容ですし…」

それなら安心かな…今のこの人たちなら信じられるし。

そういうえば、ナツメグが今の私の容体を説明してくれた。

「白花さん今日はもう帰ったらゆっくり休んだ方がいいですよ。それか、ここに泊まって休んだ方がいいですね。回復はしましたが油断しない方がいいですし…」

そういわれて私はエヴァの家にお世話になることになった。ナエ姉

に連絡も入れてこれで大丈夫だろう。

「それではお邪魔しました。」

そういつて高音さんたちは帰路についた。

「今日は助かったよ。まさか半場諦めていた封印が解けるなんてな喜んでいただけて何よりだよ

「元はといえばバカ親父のせいだし、当たり前のことをしたただけだよ」

「それでもだ。お前が来てからは日々の変化が楽しいよ」

「ああ、こんなにつれしそうにしているマスター最高です。」

そういいながら録画モードでこっちを撮っている。

どうしてこうなったのだろううちのナビコもこの子も…

「あゝ白花。もしよかったらまた一緒に寝ないか？」

これはエヴァなりに気を使っているのかな。

まあ、いいでしょう。

「喜んで、ご一緒させてもらおうよ」

そう言ったらエヴァは目に見えて喜んでるように見えた。

「そうか！そうか！よしそれじゃあ、ゆっくりしていけ」

「無邪気に喜ぶマスターもいいですね。ハアハア」

茶々丸お前少し自重しろ…

だけどこの光景に思わず笑みが出てくる。

こんな毎日もいいなと思う今日この頃であった。

第13話 封印解除しましたが何か？（後書き）

やったね！ネギ君。解呪することが出来ないね

一応ネギ君には魔力抑制などを解いてもらう事になっています。

第14話 修理完了、後追加です。(前書き)

トモ工復活！後新キャラ追加です。

第14話 修理完了、後追加です。

「むう…」

今わしが唸っている理由はエヴァンジェリンの封印の一部が解けてしまったことだ。

なんでも、まほネットに売るための解呪符をうっかり触ったため解けちゃった との事らしい。

普通に考えたらふざけるな！！と言った感じだが、正義バカの一人の証言もあるようだし多分本当なのだろう…その子には黙ってもらおうように言ったが…あっさり引き下がり追った。もしかしてグルか？しかし、あの正義バカが闇の福音に協力するとは思えんしのお…証言によればその解呪符は特注品で安くしても数百万はするくらいでもない解呪符らしい。それでも損害はないとかどれだけ儲かっているのじゃ…

また封印を掛けようにも『もう3年はとくに過ぎているんだ。そっちに従う理由はない』と突っぱねられるのがオチだろう…

「しかし、またこやつか…」

秋葉原 白花

電子精霊を駆使して彼女のまほネットのユーザーページから探ろうとするがセキュリティが固く、電子精霊すらもはねのけるといふ普通ではありえない事をしでかしている。

「どうにかして引き込めればいいんじゃないかなあ…」

多分無理じゃろうけど…

はあ、この事が正義バカどもにばれたら大変じゃろうな…事実の隠
ぺいに抑え付けにやららんから忙しくてたまらんわい…

・
・
・

朝になって隣を見てみたらエヴァがギョツと私を抱きしめていた。
寝顔かわいいなあ…ほっぺたぶにぶに

「ん、朝か…」

まだ眠いのか目が半開きの状態で寝癖もいくつかある…

「おはよう、エヴァ」

「ああ、白花か。どうだ調子は…」

「バツチリだね。ゆっくりした甲斐があったね。それよりもそろそ
ろ離してくれない」

その言葉を聞いてやっと今の状態に気付いてエヴァはあわてて離れ
た。

「あゝそのすまんつい抱き心地が良くてな／＼／」

うん、恥ずかしがっているエヴァもなかなか…

「恥ずかしがっているマスターは最高ですね！」

茶々丸お前何時の間に…

「朝食が出来ましたのでおこしに来たんですがお邪魔だったよう
ですね」

そういつてごまかし、その場を後にした茶々丸だった…

「とりあえずさっさと朝食にありつけるとしますか」

「そうだな」

朝を抜くときついからな…

本日は白米に味噌汁、納豆に漬物、焼き魚といった和風な朝食でした。

そういえば最近パンやカロリーメイトばかりだったな…ん、おいしい

「むぐむぐ、そういえばトモエの状態はどうなんだ？」

エヴァよ、食べながら話してくんなし、行儀悪いぞ…

「メダルの方は問題なくて、パーツももう治ったから復帰が可能だよ」

あ、この漬物おいしいな…

ついでにほかのパーツも作っちゃたんだよね。ナビコ？健在です。

「それに新しいメダロットが増えるよ」

さて朝食も済んで、クラスター内でトモエのパーツの修理も終わったことでトモエが復帰できました。やったね！！

「さて、気分はどうかな？トモエ」
「絶好調です。お嬢」

よしよし、これで目覚ましを掛けずに済むな…

「目覚ましはやりませんよ…」

何故ばれたし！？

「これくらいはお見通しですよ」

私の考えはお見通しか。日々成長しているなこの子は…

「そういえば今の状態はどう？」

「動作に問題はありません。ただ…」

なんだろう…トモエはなんだか不思議そうな表情になっていた。

「この機体に流れているのか…何かの『力』を感じます」

「それは多分メダルの潜在的な力でメダフォースっていうんだ。暴走もその覚醒で起きたものだよ」

「メダフォース…」

リミッターも取り付けた。だから、暴走は起きないはずだ…

「それより、トモエ。新しい脚部パーツができたんだ。つけてみてくれ」

そういつて飛行型のパーツを転送した。

「この名は『ムシャバカマ・ハヤブサ』って言って高速飛行を可能にした一品だ。」

イメージ的にはレディブースターの脚部に袴（薄い装甲）をつけた感じである。

そして、脚部を付け替えて試運転をさせてみる。

「うおっと!?これは…バランスを取るのに苦労しますね飛行型は…」

浮かび上がったからすぐにふらついていたが徐々に安定していった。

「ヒヤッハー!!!いいね!いいね!最高にハイって奴だ!!!」

……!?

「イヤッホー!!今やこの大空は私イの物!さあ、お嬢。私オにひれ伏しな」雷の暴風」うわらばッ!!」

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ、普段はおとなしくまじめなトモエに飛行パーツをつけて飛ばしたと思ったらテンションが青天井にいつちまった。そんでムカついたからつい雷の暴風を食らわせちまった。以下略…

「あれか、運転とかすると人格が変わるみたいな感じか…」

まあどうでもいつか…

脚部を元に戻して目が覚めるのを待ちますかね…

「すみません、なんか飛んだらテンションが上がっちゃって…」

良かった、元に戻った。

「ま、まあ次から気を付けるようにしよう。あ！そういうえば新しいメダルと機体が完成したんだ」

式体とも女型である。

「それじゃあ、私がお子たちの姉という事になるんですかね？」

「まあ、作られた順ならそうだね」

そうですか…と言ってなんだかうれしそうに感じている。

「それじゃあ、研究所の方に行くよ！」

「了解」

さてと、どんな子になるのやら…

「君がマスターかそれで私の名前は何というのだ？」

「君の名は煉だ。よろしくね」

うーん、なんかトモエと似ている感じかなこの子は…

「おい、名前を決めてぬえとかSylleにならんしょそれは…」

「はいはい落ち着いて、君はテノコ、これからよろしく頼むよメイ
ン盾」

黄金の鉄の塊でできた天人風のナイトですね、わかります。

そんな感じで二人？（式体）の名前を決めて、機体を転送した。

「まずこのFAM型には煉、君に入ってもらおう。そしてテンコ、君はこのNET型に入ってもらおうよ」

そういって、モニターを捜査して機体にメダルを入れる。
ちなみに外見はまんまです。（レンとてんこさん）

「む、これはちょっとバランスが…うわ!？」

「おっとっと、これくらいちよろいもんよっておいしい!？」

あ、二人ともこけたWWW

「大丈夫なのですか？この子たちは…」

「少し慣らせば大丈夫でしょう」

でもなんかそわそわしてるなトモエ…

「別に手助けしなきゃいけないなんて言っていないよ。だからいってあげなさいトモエ」

「う、では、失礼します」

そういってトモエは二人？（めんどくさいから二人で固定）の方へ向かっていく。うん、命令もしていないのに心配か…これって自我ができてない？まあ、それはそれでうれしいけど…

「ほら、大丈夫？二人とも」

「ぬう、ありがたい姉上」

「ほう、経験が生きたな。ピーチを奢ってやるう」

そういつて、テンコはどこからともなく桃を取り出した。

「ありがと、それじゃあ二人とも私が手を引くからそれに合わせて歩いてみてね」

トモエは二人を起こして歩くことの指導している。

トモエって結構面倒見がいいんだな…新しい一面を発見したね。

「わ、私はこんなことしなくても大ジヨブだし（照れ）」

「そういつて転んだのはどこの誰かな？」

「む牛ん」

論破されてるぞメイン盾…

しかし、これなら任せても大丈夫そうだな。

「お嬢、この子たちは私に任せてはお戻りください。学校の方も出ておかないと…」

ほんところいうところは誰に似たんだか…

「わかったよ。それじゃあ煉、テンコ。トモエの言う事をしっかり聞くんだよ。何かあったらナビに言えばいいからね…」

「わかったよ」

「hai!」

よろしい。

「なんかお嬢がお母さんみたいですね」

…トモエ一言余計だ。

・

・

クラスターから出て準備も済ましてエヴァたちと一緒に学校へ行った。

明日菜と木乃香に行きあつたがやっぱり速すぎだろう…

まだ余裕があるのになんでそんなに急いでるんだか…

「おゝす、白花にエヴァンジェリン、茶々丸、おはよう」

「おはよ、千雨」

途中千雨と行き会い、現状報告などをしながら教室へと向かった。

「そうか、やっとトモエが治ったか」

「それに二人追加だぜ」。煉とテニコっていうんだ。千雨も仲良くしてやってくれ」

千雨にも作ってやらないとなその方が賑やかで楽しいし、それに千雨に二人造ってあげればロボットができるしな…ぐへへ

「おい、なんだその気味の悪い笑みは…」

おっとつい顔に出ってしまったようだな。

「そついえば白花。先日なナビコが『ナビちゃんには体はないんですか?』って聞いてきてな、そこんこはどうかなんだ?」

ナビの体か…
ムシャハカマを作ってる時に造っちまおうと思って制作中なんだよ
ね…

「そろそろ作ろうかになって思ったとこだよ。デザインになんかリクエストある？」

「私は特にないが、ナビコが『一番良いデザインで頼む』ってさ」
ナビコよ…そのネタはどこから…

「ちなみにこのネタはN動だ」

あるの!?

此処でも神の影響が…

そんな事をしてたら教室へ到着。

「そついえば一限目なんだっけ？」

「え〜と…英語だ。今日は高畑教諭いるんだっけ？」

そう、この英語の担当である高畑は、出張でいないことが多く、英語は自習になることが多い。

MGOで魔法使いとしての活動をするのはいいけどさ、そのことで生徒を放っておくのはどうかと思うぞ高畑教諭…どっちか一つに専念すればいいのに…

「今日はいるって聞いたよ。まったく出張多すぎだろ高畑先生は…」
「多分、裏の方の仕事で忙しいんでしょ。あれ、MGOに所属しているって話だし…」

「おいおい、生徒放っておいて正義の味方気取りの活動かよ…」

ちなみに認識阻害と遮音結界はしっかりかけてあります。

「まあ、本人のやりたいようにやればいいんじゃない？ 私たちには授業のことくらいしか影響ないし…」

もう居るか居ない関係ないってなかんじだしね、いいんちよがしっかり皆をまとめているし…

「あいつらはもう少し一般常識を知っておくべきだと思っただが…」

言っでやるな千雨あんだけ叩いて気づかない奴はもう手遅れかもな…

「え〜と今日は〜月の〜日だから白花君。次の英文を読んで訳してもらおうよ」

私の番か…え〜と…なんでこれが教科書に載ってるし…

「I am the bone of my sword .
Steel is my body , and fire is
my blood .
I have created over a thousand
blades . (ry)」

これってちよ…

「訳は『体は剣で出来ている。血潮は鉄、心は硝子。幾たびの戦場を超えて不敗 (ry)』ですね」

無限剣製ジャン！誰だよこんなの教科書に載せた奴は…

「はい、あっているよ。ありがとうそれじゃあ…」

他にも「働きたくないでござる」「や、俺、これが終わったらあいつに告白するんだ…」なんて訳もあるしどうなっているんだこの世界の教育機関は…

そんな疑問を残しながら授業は終わった。

そんなこんなで帰りのSHRまでカット

「ああ、白花君学園長が君を読んてるからSHR終わったら学園長室に行ってくれ」

あん？あの妖怪が一体何の用なんだ？封印か？それともまほネットの事かな？ま、協力の式文字は存在しないけどな…どうするか…学園長の所へ行って無駄な時間を過ごすか帰ってみみんなを誘って遊びに出るか…

「面倒だからバックれるか…」

「いやバックれないでくれないかな…」

っち、まだ嫌がったかこのロリコンメガネは…

「仕方ねえな、行ってやるよ」

「そうしてくれると助かるよ」

• どの口がそれを言うのか…強制したくせに…

「さて、ここに来てもらったのは君がエヴァの封印を解呪してしま
ったことじゃ」

「帰っていいですか？」

面倒なことしかないので速攻で言い出しておこう。

「却下じゃ。せめて事情の説明くらいはしてもらっからのぉ」
「くそつたりい」

簡単に偽装報告を済ませました。学園長室にある読心結界？又は魔法は偽装思考で余裕でした。

「なるほどのぉ、こちらの報告と一致する内容じゃな」

そりゃそうだ、高音さんたちもうまく報告してくれて助かったよ。

「まほネットで出品していると聞いて調べてみたんじゃが特定でき
なくてのぉ」

「当たり前でしょう。そんな簡単に特定できたら個人情報保護法は
必要ないでしょう」

電子精霊如きが意志を持ったセキュリティを突破できるわけないだ
ろっつが…

「せいぜい無駄な作業に時間を費やしててくださいな。では報告
もしたことですし帰りますね。失礼しました」

向こうは泣き寝入りするしかないようだな…

ザマア W W W W W W

「待つんじゃない、この事がばれたら正義狂いの奴らがエヴァを襲うかもしれないぞい。だからこのことは他言無用じゃぞい。」

彼女に勝てるような奴はこの学園にはいないだろうけど、向こうも職員や生徒を失うのは避けたいみたいだな…

「もともとそのつもりですよ。ばれたとしても呪いの方は結界外に出れるだけで魔力抑制は効いているという事にしてください。そういう魔法具も用意できますし…ああ、エヴァはきちんと報酬を用意してくれるなら働いてくれるそうです。ただし、こっちの事情を優先するそうですよ」

その言葉に向こうは安堵の表情になっていた。

まあ、公に封印解除ができる状態なら魔力抑制も外すのでしょうか…さてと、今度の休みにはエヴァたちと町で遊ぶのに誘っていいのかな。

第14話 修理完了、後追加です。(後書き)

学園長はまだ高音のことを正義バカだと思っています。

第15話 彼女が憧れた一つの願い（前書き）

空白期のラストです。

第15話 彼女が憧れた一つの願い

本日はエヴァや千雨、高音さんたちと町の方へ出かけて、買い物をしてきました。

ちなみにトモエは煉やテンコの面倒を見ているためお留守番

本当は京都あたりに連れて行きたかったんですが、長期休暇になったら連れて行けとのことでした。

「それにしてもエヴァンジェリンさんって京都が好きなんですか？」

「ああ、封印される前日本にいた時なんかで世話になったりしたところもあるからな」

「マスターはテレビの特集でもいろいろ見ていましたよね」

そんな感じで駄弁りながらゲーセンへと向かって行った。

「あ、○鼓の達人ですね……」

「ふっ…なら先ほどの話題に合わせて……」

「あっ…なら私もやるぞエヴァ」

エヴァと千雨がやるみたいだな……

○鼓の達人で京都の話題に合う曲ってあったっけ？

そしてエヴァが選んだ曲は……

『○ウルキヤリバー？～Brave Sword、Braver Soul』

「これってステージの曲じゃん」

「いいだろ！別に……いい曲じゃないか……」

結果…二人ともミスなしのパーフェクト

「やり込んでるね」エヴァ、千雨

「確かにいい曲でしたね。しかし、京都と関係ありましたか？」

原作のステージ知らないとわからないよね…

「んじゃあ、次は私が曲を決めるぞ」

「なんでもOKだぞ、千雨」

「それじゃあ遠慮なく…」

『さいたま2000』

「なに！？まさかこの曲をやるだー!？」

「さあいくぞ！エヴァンジェリン譜面の記憶は十分か!！」

「やってやるさー!！」

ヒートアップしていく二人…しかし、おいて行かれる私たち

「あの二人はなぜあなのでしょう…」

「黙ってまじょうか高音さん…私たちは見守っているしかできませんし…」

「そうです。お姉さま、私たちはタイミングが合わなくて四苦八苦している姿を楽しみましょう」

「いや…それは駄目でしょう…」

佐倉さん…黒いです…

結果…千雨：叩けた率95%、エヴァ：ノルマギリギリ

「ぐぬお…まさかこの私が…」

「地位と権力にしがみついた結果がこれ…お前調子ブツこきすぎた結果だよ」

「すごいですねマスター！あんなのを打てるなんて…」

「悔しがっているマスターもなかなか…」

そういつて主人のorz姿を録画している茶々丸であった。

千雨はパンチングマシンでは100とか普通に出すんですねわかります。

「次は何をしますか？」

「Lovなんてどうでしょう」

そういつて佐倉さんは懐からカードを取り出す。どうやら多種族混合みたいだ

「甘いですねあなたたち…ここはボダブレでしょう！私の魔槍ヴェスパインが血に飢えていますわ！！」

意外なことに高音さんはボーダーブレイクをやり込んでいるのか…ヴェスパという事は狙撃兵？高音さんって突撃へ行ってイメージがあるんだけどな…

キングクリムゾン！！！！

佐倉さんはアルカナストーンを狙った戦法で勝利を収めた。ちなみにNewカードはおでん（オーディン）でした。

高音さんは某剣のように突撃していき見事な竹槍や先生の設置をしていていたが、コアを狙われてしまい敗北…

そのあとテキストに遊んでゲーセンを出た。

「いや〜楽しかった」

「白花：お前は私たちがやっているのを観戦してただけだろ…」

「失敬な！ナビコとガンダムVSをやったよ！負けたけど…」

スパコン級には勝てませんでした。

次に向かったのは映画館：え〜と今から見れそうで面白そうなのは…

極道モノのゾンビアクション『Mjmが如く』隻眼のヤクザがショットガンでゾンビを無双する映画らしい…

大人気魔法少女を麻帆良の学生が新たに作り上げた二次創作映画『魔法少女○リカルなのか？ファテは私の嫁！退いてヴィー○ちゃんそいつ殺せない！！』ヤンデレ物らしい

着ぐるみカンフーアクション『五重の塔・愛を取り戻せ』出演者が全員ネコなんだよね

一流レスラーになるための最大の試練『漢祭り・ASを切り開け！』どこかアレな臭いが漂う

「どれ見る？」

「私は『mjmが如く』だな。極道モノもおもしろそうだし」

「ゾンビアクションっていうのも気になりますから私はこれにします」

エヴァとナツメグは『m j mが如く』を見るようだ…

「それじゃあわたしは『リリカルなのか？』でも見るかな…いったい原作とどう違うのやら…」

「あっ！？マスターが見るなら私も見ます」

千雨、ナビコ組は『リリカルなのか？』を見ることにしてみたみたいだ。ちなみにナビ子は子供料金

「着ぐるみカンフーというのは興味がありますから私は『五重の塔』を見ますね」

「私もネコがカンフーという部分に興味があるからそっちにするよ」
「猫が出るならこれ一択ですね」

私と高音さん、茶々丸さんは『五重の塔』を見ることにした

「メイはどうしますか？」

「それじゃあ私はこの『漢祭り』を見ていますね」

佐倉さん、どこからともなく丸メガネを取り出して鼻息を荒くしているけど…

「まさか、あの迷作がここに合ったなんて…」

…一応聞かなかったことにしよう

各映画内容一部抜粋

『たとえこの身が減ぼうと正義を貫くこの拳！命を燃やし試練を遂げる！守って見せよう純潔を！愛と正義の使者！グラン・バタフライ今宵も華麗に参上だっち！！』

『行くぞ　！！グラン・バタフライこのグラン・クエスチョンを打ち破れるか！？』

蝶の仮面をかぶり潜水艦を背負ったウホツ！いい男がはてなの仮面をつけ、食い倒れ人形を担いだ褐色の男に挑んでいく…

全員見終わって…

「すごかったですねエヴァンジェリンさん」

「ああ、特にラストのmjm対巨大ゾンビの戦いは胸が躍ったよ」

二人は満足しているようだ…

特にエヴァは友人と一緒に見るといふ事が無かったからかいつもよりもうれしそうな表情をしていた。

「まさかラストがなのフランク스가ヴィー○に刺されるとは…もののっそい原作崩壊だった」

「あれも一つの愛の形なのでしょう…」

原作とは大違いの展開に驚きを隠せない千雨と一応合っている事を言うナビコであった。

「ニヤン様と真央さんの抱きしめたシーンは泣けました…」

「しかし着ぐるみでもあそこまで動けるとは…」

「映画で見た限りではチャックなどが見当たりませんでしたから、本物ではないですか？」

「そこはプロだからじゃない？ネコ型ロボットじゃあるまいし」

高音さんは終わりの方では感動のあまり涙を流していた。

私と茶々丸はスムーズに動く猫の方が気になっていた。

「ふう……なかなか（バキューン！）な内容だったな……」

私は何も聞かなかった……

その後、みんなと合流して映画館を後にした……

昼食をとるために○ツクにて……

「そういえば白花……ムグムグ……お前の兄の……モシヤモシヤ……ネギ
なんだが……」

「マスター食べながらは行儀が悪いですよ」

ビク○ツクを砲張りながら話しかけてくるエヴァを叱咤している
茶々丸……

母親と子みたいだなあ……

「ング……ネットで検索してみたら『ネギきゅんを見守る会』という
サイトがあつてな……そこを覗いてみたらさっきの魔法少女モノのハ
ンマー持っている奴の服を着たネギがいたんだが……どう思う？」「
「は？……」

一瞬言葉の意味が理解できなかつた。

「それってもしかしてこれの事か？」

そういつて千雨が携帯を操作して件のサイトを見せてくれた。

「私のブログちうのホームページに並ぶ人気サイトで私も何度か覗いてたけど、この子かなりレベルの高いコスプレイヤーだと思ってたが…」

「多分、ネカネ姉さんのコーディネートの結果だろうな…サイトの存在も本人は知らない可能性が高いな…」

あの人…私がいた時も何度かコスプレさせようとさせてたし…

それにしてもカメラ目線以外の奴もあるが、盗撮か？見えそうで見えない画像もいくつかあるし…

しかし、ヴィー○の格好似合ってるな…他にも聖なる焔や日本一のツインテール魔神にメイド服…

キャラのコスは赤髪ばっかだな…しかもかわいいし…

「まあ、からかいのネタが増えたね」

「しかし、本当に可愛いですね…」

「私もこんな格好してみたいですね…」

茶々丸さんもコスプレに興味を持ったみたいだな…

「千雨…」

「任せておけ…最高の結果を残してやる。エヴァも込みで」

ククク…エヴァも巻き込んであんな恰好やそんな恰好を…

「まあいい…みんな食べ終わったしそろそろ出るか…」

「そだね、それじゃあ行こうか」

○ツクを出した後、千雨が布地を買いたいといったため雑貨屋『コスプレ』に行った。
なんでもここは日用品のほかにも衣装やファンシーグッズなどコス以外にもさまざまなジャンルの商品が置いてあるらしい
ふと…エヴァがある一点に視線を向けていた
そこには○鼓の達人のマスコットキャラであるドン・和田とカツ・和田のぬいぐるみであった。

「エヴァ、あれが欲しいの？」

「う、いや…別に………」

恥ずかしいのか顔をそらしながら言つがチラチラぬいぐるみの方を見ている。

えくと…セットで1200円か…

「これくらい買った上げるよ」

「う…しかしだな………」

「今日の主役はエヴァなんだし、これくらいいいよ」

とりあえずぬいぐるみを購入し、エヴァに渡す。

「ほい、どーぞ」

「ありがとう………」

ぬいぐるみの入った紙袋を抱きしめながら頬を染めながらお礼を言ってくるエヴァを見ていたら鼻から紅い物が…

エヴァ…恐ろしい子…！

他のメンバーは千雨の布地のほか、クリップ買ったり、タオル買ったりなどでした…

日が暮れて暗くなり始めたところに私たちは帰路に着いた。

「しかし、あの闇の福音の意外な一面を見れましたね」

「なんていうか、とつてもかわいかったです。」

「今度の夏コミのネタにしていいいですか？」

今まで敵対してきた存在の意外な一面にそれぞれの感想を口にした
高音さん御一行…

だけど、佐倉さん自重しろ……

「それではわたくしたちの寮は別方向なのでここでお別れですね」

「今日はありがとうございました。楽しかったですよみなさん」

「エヴァ×茶々丸…いや、白花にするべきか…いつその事3(ドスツ!!アフウ…」

「ふざけすぎですわよ愛依…」

ついには高音さんが佐倉さんに腹パンして黙らせて、気絶させた…
気絶した佐倉さんは高音さんに背負われた。

「それでは失礼しますわ」

そういつて高音さんたちは寮へ帰っていった…

「それじゃあ私たちも帰るね」

「すまんが白花少し時間くれないか？話がある…」

何やらエヴァが私に用があるみたいだ…でもなんだろう…

「まあいいよ。千雨、ナエ姉には少し遅くなるって言っておいて」

「わかった。それじゃあまた明日な」

「さよ～なら～」

千雨とナビコは寮へ帰っていった…

「すまん…時間を取らせて…」

「別にかまわないよ。それで話して？」

「なに…お前が来てから私の身の周りが様変わりしたなと思ってな

…十五年近く続いた退屈な学園生活だったが今は充実しているんだ。お前が来たおかげでな…」

「私は私のやりたいようにやっただけだよ…」

「その結果がこんな私でも笑って過ごせる日々なんじゃないか。私は今日みたいな日々憧れていたんだと思うんだ…友人と共に笑いあえる日々をな……」

友人とともに笑いあえる日々……か

「続けさせるさ…」

「白花？」

「少なくとも私がいる間は退屈させないよエヴァ…だからこれからは楽しんでいこうよ」

「ふふ…そうか……なあ白花」

「なに？」

「ありがとう」

チュツ

!?!?!?!?!?!?!?

え!?!私キスされた?!マウストウマウス!?!ん?足元にあるこれ
つて…仮契約の魔法陣?

「さっきの礼だ。後で複製カードを渡しておくよ」

いたずらな笑みを浮かべているエヴァの手に仮契約カードがあった。
やれやれだね…

「いきなりとか…汚いなさすが吸血鬼汚い」
「汚くて結構。なんせ私は……」

悪の魔法使いだからな…

第15話 彼女が憧れた一つの願い（後書き）

今回の映画のタイトルで元ネタがわかった人はいるかな？

はっきり言って映画のタイトルは趣味です！

次回キャラ設定を入れた後原作に入っていきます。
それではまた次回をお楽しみください。

キャラ設定？（前書き）

追加設定、メダロット組の設定です。

キャラ設定？

仮契約カード紹介

名前 ハクカ・スプリングフィールド

称号 打ち捨てられた探求者

アーティファクト 夢幻兵装

特性 希望 方位 中央

色調 白 星辰性 彗星

アーティファクト説明

持ち主の想像によってその姿を変えるアーティファクト。剣などの近接武装や銃などの遠距離武装にもなれる。大型のものや伝説級の物（fateの宝具など）に変化するのに時間がかかり、一度破壊されると同じものを出すには24時間必要である。なんか某正義の味方の投影に似た感じですよ

原作との違い

ネギ 女装癖に目覚める。コスプレイヤー、一般常識を持っている。ナギに憧れていない。

エヴァンジェリン・AK・マグダウェル 白花と仮契約を結ぶ、封印の一部を解除

近衛木乃香 魔法の存在を知る 刹那と仮契約（主）

桜咲刹那 半妖であることを木乃香に告げる、木乃香と仮契約（アーティファクトは建御雷）

長谷川千雨 魔法の存在を知る

高音・D・グッドマン 正義狂いの解消

月詠（青山 月詠） 青山鶴子の弟子、現在は傭兵をしている、ネギマ世界に無い力に目覚める

メダロット組設定。

名前 トモエ

機体名 トモエゴゼン

メダルの絵柄 刀と矢が交差している絵柄になっている。

装備パーツ一覧

頭部 SAM-01X ロイヤリティ ・装甲60・行動 打つ（そらび）・特性 スコープ

右腕 SAM-02X ラストハウコウ ・装甲40・行動 殴る・特性 ソード

左腕 SAM-03X クビウチボウ ・装甲40・行動 狙い撃ち・特性 デストロイ

脚部 SAM-04X サトリピース ・装甲50・移動タイプ 二脚

メダフォース 縦一闪、威力全開、???

忠義を尽くす女武者型メダロット。近接と遠隔両方をこなす万能型で、その強弓に射抜けぬものはなく、相手が行動した直後に当たればただでは済まないだろう。

備考 白花が作ったメダロットの一つ、真面目な性格で白花のことをお嬢と呼び、行動を共にしているメダロット。身の回りのことをよく世話をしてくれる。ドール契約をしてメダフォースに目覚めるも暴走を起こし、現在は修理中である。

名前 ナビコ

機体名 ナビ・コミュニン

メダルの絵柄 原作のNaviの様に三枚の葉がある。

頭部	NAV-01NF	リコレクト	・装甲70	・行動	守る
特性	索敵				
右腕	NAV-02NF	メモライズ	・装甲30	・行動	応援
特性	補助チャージ				
左腕	NAV-03NF	リメンバー	・装甲30	・行動	特殊
特性	継続リペア				
脚部	NAV-04NF	フリーダム	・装甲70	・移動タイプ	
二脚					

メダチェンジ後

ドライブA 行動 特殊・特性 反射

ドライブB 行動 治す・特性 回復

ドライブC 行動 治す・特性 復活

・装甲200 ・移動タイプ 浮遊

メダフォース データ解析、回数アップ、???

かわいらしいマスコット系2等身案内嬢を模っており、様々なサポートを得意とする支援型。

変形すると背中に収納されているバインダー状のパーツを使い、4〜5等身のナビゲーターに姿を変える。

備考 長谷川千雨が麻帆良に転校するときに渡し、以後は千雨をマスターとしている。性格はおっとりとしていておとなしそうな感じであるが千雨のコスプレなどを保存するのが趣味で若干?変態となっている。一応一般常識はあり、場所を考えて行動している…といいな…

千雨とドール契約を交わしており、メダフォースは時間をかけて覚醒させたため、暴走は起きない様に済ませた

名前 煉

絵柄 炎

属性 症状

性格 テクニック

所持熟練度 殴る・がむしやら・妨害

白花が作り上げたメダルの一枚、毒舌家で遠慮がないが礼儀をわきまえているが実は姉に甘えていたお年頃である。白花にはそれなりになつてはいるが、どっちかというところトモエの方になつてい

る。
メダフォース 全体継続、推進アップ、???

機体名 アカレンジャ

頭部 F A M - R 0 1 イプレクイカ ・装甲40・行動 殴る（

装備）・特性 ブースター

右腕 F A M - R 0 2 ホットスポット ・装甲30・行動 殴る・

特性 ファイヤー

左腕 F A M - R 0 3 スピキュール ・装甲30・行動 がむし

やら・特性 ファイヤー

脚部 F A M - R 0 4 イクリプス ・装甲50・脚部タイプ二脚

F A M（使い魔）型の一体。情熱のアカレンジャその炎はすべてを燃やし尽くす業火なり

性能 継続の症状で相手を苦しめることが可能な機体F A Mシリーズはほかにもさまざまな特性の物を作るつもりです。

名前 テンコ

絵柄 盾を持った騎士

属性 防御？

性格 プロテクト

所持熟練度 守る・がむしやら・狙い撃ち

白花が（ry）性格は傲慢そうな物言いで矛盾したことを幾つか話すが、守ると決めたものは絶対守るといった頑固な一面もある。おれは不良だからよ…困っている人がいたら助けるし、きちんと敵から味方を守るのが一流のナイトなんだべ。

メダフォース 鉄壁防御、縦一閃

機体名 黄金の鉄の塊でできた天人

頭部 N I T - E X 0 1 ウチヨウテン ・装甲60・行動 守る・

特性 完全防御

右腕 N I T - E X 0 2 ケーニツヒシールド ・装甲120・行動 守る・特性 防御

左腕 N I T - E X 0 3 ヒソウノツルギ ・装甲40・がむしやら 特性 ソード

脚部 N I T - E X 0 4 トンズラ 装甲60 ・移動タイプ 二脚

メダチエンジン後

パワー変形

ドライブ A ・行動 狙い撃ち・特性 ビーム

ドライブ B ・行動 殴る・特性 ハンマー

ドライブC ・行動 がむしゃら・特性 サンダー
・装甲 280・移動タイプ 飛行

黄金の鉄の塊でできた天人が皮装備のジョブに後れを取るはずがない！

性能 メイン盾は砕けにいとわんばかりに防御を中心とした機体。だが彼女の怒りが有頂天メタチェンジになると鬼の攻撃力で相手を圧倒する。お前調子ぶっこき過ぎてた結果だよ？

名前 ナビナビ

魔法球クラスターの管理人格

機体は現在制作中

ナビコのデータをもとに作り上げられたメダル。しかし、性格はまじめで、仕事をしっかりこなしている。

キャラ設定？（後書き）

さて、次回から原作をお楽しみください…

どれだけ崩壊しているかはわかりませんがね…

第16話 ネギ来訪… +

「卒業証書授与　この7年間よく頑張ったこれから　…」

魔法学校の卒業式

本来僕はこの壇上に登るはずじゃないのだが、周りの勝手な評価によりいくらか免除されて卒業証書を受け取る。

「メルディアナ魔法学校卒業生代表！ネギ・スプリングフィールド君！」

「はい！」

魔法の成績だってそうだ。実力的に考えて受け取るのはアーニヤのはずなのに…

あれは、まだ子供で居られたころだった。守るといったのに守れなかった妹のことで落ち込んでいる僕をぶん殴って励まされて今の僕がいる…

だけど、2年前アーニヤが消えた時は本当に参ったな…その数日後に10歳くらいになって帰ってきたけど…（現在は年齢詐称役でこまかしている）

「卒業おめでとう、ネギ」

「兄きおめでと〜ございやす〜！」

ネカネ姉さんとアルベール・カモミールことカモくん
ちなみにカモ君はあることをして罪を清算させて、僕の使い魔として働いている。

あることはなんだって？それは去s「いわせねーよ〜！」

「ネギ！あなたの課題はなんだった？私は日本で学生することになったけど…」

「ネギも同じような課題じゃないかしら…」

「あ！アーニヤにネカネ姉さんまだ見てないよ」

立派な魔法使いになるための修行地か・・・はつきり言って立派な魔法使いなんてどうでもいいんだけどな…永久石化の呪いの解呪のための研究ができるような場所が望ましいんだけどなあ……

「え〜と（ヴォンあ、でたよ。『A Teacher in Japan』（日本の学校で教師をやること）』…）」

……

なんだかビミョーな空気が漂い…

「「「「はあ！！？？」」「」「」

思わずみんなで叫んでしまった。

でも、教師？学生の間違いじゃないの？十歳の子供にこんな課題だすなよ、爺ちゃん！！

「何かの間違いじゃないかしら？」

そ、そうよだね。間違い間違い…

「それじゃあ学園長室に行かないとね」

「あっ！？ネギ私も行くわ」

「あっ！？兄貴まってくだせえ！！」

もし本当なら鉄槌の騎士が爺ちゃんの所に来るかもな…

まったく…こんなの絶対おかしいよ!!!

・
・
・

「いや、課題はそれであっておるよ」

この言葉は聞きたくなかった…orz

「爺ちゃん…こんな子供に教師なんて何考えているんですか。この
野郎…雷神の鉄槌喰らわせますよ?」

「ネギ…本音が出ているわよ」

おっと、失礼。

「もう決まったことじゃ、立派な魔法使いになるためには頑張って
修行してくるしかないのう。安心せい、向こうの学園長はワシらの
友人じゃからな。ま、がんばりなさい」

それでもこれはひどすぎるんじゃないか?
ん? 念話?

『それにのう……本来の課題なんてメガロメセンブリアでの教育だ
とかふざけた課題だったんじゃないだからこうするしかなかったのじゃ
よ。向こうはメガロの傘下ではあるがあそこなら鍛えてくれそうな
人もいるのじゃ。無力な祖父を許してくれネギ…』

…!

そういう事か…

「わかりました。この課題しっかり取り組ませていただきます」

「まあ、校長。私がサポートをしてあげたりするんで安心してくだ
さい」

そんな頭脳労働よりも肉体労働のが得意でしょ…アーニヤは…

「ネギ」 飛翔爆炎脚と獅子王波どっちがいい？」

「何故わかつたし…」

戦略的撤退！！！！

それにしても日本か…エヴァンジェリンって人がいる国だったな…
封印解きにいかないと…

あつ！でも日本語の勉強もしくちな…

・
・
・

そろそろ原作が始まる頃か…

どうも秋葉原 白花です。2・Aに在学しております。

2月。春も近くなってきましたが、まだまだ寒いですね…

「なあ、白花…今度の日曜空いてへん？」

そういつて話しかけてきたのは友人の近衛木乃香であった。

「どしたの？なんか用事？」

「なんでも、イギリスからの留学生と教育実習生を迎えに行っ
てほしいって爺ちゃんからお願いがあつてな。報酬ありで」

「のつた」

報酬ありなら言ってもいいかな…
それにしても実習生はネギだとして留学生？

誰なんだろう…

「ほな、よろしゅうな。ちなみにメンバーはうちとアスナやで」
「了解、まかせなさい」

原作よりも計画的になってるけど成長したのかな？
さて、どこまで成長したのかなネギ兄…

・
・
・

日本に行くために飛行機に乗ったけど…耳鳴りがひどいな
まあ、最初と最後だけだったな…ひどかったのは…

「ほらネギ、指定した時間まであんまりないから急ぐわよ」

あ！ホントだ。これは観光している暇はなさそうだな。

「でも兄貴。一応、数日早く来たんだから急ぐ必要はないんじゃないかな
いつすか？」

「駄目なんだよ力夫君。向こうに連絡入れて迎えをお願いしたって
言ってたから、その人たちに迷惑がかかるでしょ」

それにしても…

「どうしてアーニャは肉体強化しなくてそんなに早く走れるの？」

そう、今アーニヤは肉体を魔法で強化していない状態で強化した状態のネギについてこられるのだ。

それに、年齢詐称役を解除して12歳くらいになっている。

「ヴェルダウムにいた時の修行の成果ね。これくらいどっつてことないわ」

ヴェルダウムというのはアーニヤが消えてから世話になっていた家がある世界らしい。

それが真実なのか、それとも妄言なのかは本人しかわからない。多分真実だろうけど…

「ツとついた。予定より15分早かったみたいね」

「まあ、今のうちに休んでおこうよアーニヤ。あ！カモ君。認識障害もう切るから黙っててね」

「了解しやしたぜ。兄貴」

そういつてカモ君をカバンの中に入れておく…

ふう、これから教師になるのに遅刻なんてしたら恰好悪いしね。

ん、あのツインテールの人…

(ねエアーニヤ。あの人失恋の相が…)ゴニヨゴニヨ

(言っつなよ！絶対にそのこと言っつなよ！！)

そのフリはたしか話しておkという意味だったかな…

日本語は難しいよ…

「聞こえているわよ…このガキヤ　！！！！」

うわ、声が大きかったか！とりあえず誤っておかないと

「す、すいません！占いでそう出ていたもので…」

僕はその場でジャパニーズDOGENZAをした。

額をこすり付けています。日本の本格的な謝罪は確か鉄板の上でやるんだっけ…

「う…ま、まあいいわ。世の中には言って良いことと悪いことがあるから、そのところろ気をつけなさいよ！ところであなたたち…この学園に何か用なの？」

「え〜と、ここで人を待っているんですよ。向こうが言うには3人迎えを寄こすって」

その言葉を聞いて、ツインタールの人はなんか疑うようなまなざしで見てきた。

「え〜と、もしかしてあんた達がイギリスの留学生と教育実習生？」

あれ？迎えの人は3人だって言ってたけど…

「ハイそうです。私はアンナ・ユーリエウナ・ココロウアといます。長いのでアーニヤと呼んでください。それで…」

「教育実習生のネギ・スプリングフィールドといます。よろしくお願いします」

「あれ、でもあんたまだ子供じゃない!？」

まあ、普通に考えたらそこに気づきますよね…

「色々あるんです…」

「何か事情があるみたいね…まあ、詳しくは聞かないでおくわ。私は神楽坂 明日菜よ。よろしくね」

最初の方は怖い印象だったけどこの人いい人かもしれないな…

「「よろしくお願いします。明日菜さん」」

「よろしくね。そういえば…ほかの二人はもうすぐk」「ごめん遅くなっちゃった」ほら来たわよ」

あ、こっちに向かってきている二人の女性ですか
黒髪の人と…!?

「ごめん、ちよつと寝坊しちゃって」

「まったく…白花はトモエたちに起こしてもらわんとダメやな」
「ホントよね、普段は頭のいい優等生って感じだけど、寝起きの姿見たら、ないわ〜と思うわ」

この人はどこか似ていると思ってしまふ。もしも生きていたならこんな姿なんだろうなと…

アーニヤも同じような考えになったのかこの人に目が離せないでいる。

「どうしたの？キミたち、そんなに見つめないでくれたまえ」

「ちよつとあんたたち、女子中学生が珍しいの？」

その言葉に我に帰りあわてて謝罪をする。

今回は普通ですよ…

「あ、すいません。つい…」

「知り合いに似ていたのよ。ごめんなさいね」

知り合い…確かに今となってはそうなるかな…

「まあいいよ。ところでアスナ留学生たちは「その子たちらしいよえ！？まじで！」

いつまでもあの子と重なるのは失礼だし、これから教師になるんだ…しっかりしろ…！

「本当です。この後学園長にあつて…予定を決めるらしいんですが…」

「ちっこいのが実習生らしいわよ」

「若いのに大変だね。私は秋葉原 白花っていうんだ。よろしくね」

「うちは近衛 木乃香や。よろしくな」

「実習生のネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願ひします」

「留学生のアナ・ユーリエウナ・ココロウアって言います。アーニヤって呼んでください」

「んじゃ、自己紹介も終わったことだし…学園長室に行きましょう」

明日菜さんが案内しようと校舎の方に体を向けたら髪が鼻に…ハ…ハッ

「ハクチッ」

うわ…つくしゃみが出ちゃった。うわ、予想通り笑われちゃった。

・

「別にいいわよ。ふたり入っても問題ないし…あんた達なら歓迎するわよ」

「うちも歓迎するえ」

「う…では、失礼します」

「ありがとうございます」

こちら辺は原作通りか…明日菜の疑いは無さそうだな

「では、学園長…失礼しますね」

「うむ、ご苦労じゃったぞ」

その後、街に出かけてネギとアーニヤに色々な店を紹介したり、ゲームセンターで遊んだりと、楽しいひと時を過ごした。

「みなさん、今日はありがとうございました。やっぱり日本の漫画はいいですね」

「ええ、楽しかったですよ」

「年下なんだから少しは甘えてもいいんよ」

「だけど！教師の仕事の時はきちんやりなさいよね」

「社会人としての自覚もしっかりね」

ネギは力強くはいっ！！と答えてくれた。

「よろしい。じゃあ私は先に帰らせてもらつよ」

「はい、今日はありがとうございました」

「これからもよろしく願いますね」

そういつて私は一足早く帰路に着いた。

・
・
『ねえアーニヤ、あの人は…』

『確かに似ているけど…確証がない以上まだ黙っておきなさい』

ハクカナのかな？あの子は…

…いつか話してくれればいいんだけど

第16話 ネギ来訪… + (後書き)

やっと原作に入ることが出来ました。

アーニヤの異世界話は番外編ですつもりです。

第17話 ちよっぴり(？)変わった物語の始まり (上) (前書き)

今回白花の出番はあまりありません。

しばらくはネギが主役です。

第17話 ちよっぴり(?) 変わった物語の始まり (上)

さて、ネギ先生がこのクラス2-Aで教師をするみたいだな…
そして鳴滝姉妹と早乙女、美空がトラップを仕掛けているけど…
原作通りになるか、それとも成長しているのか気になるところだな…
さていったいどうなる事やら…

・
・
・
「教育実習生のネギ・スプリングフィールドと申します。まだまだ未熟ではありますがよろしくお願いします」

現在、僕は職員室にて自己紹介をしています。ネギ・スプリングフィールドです。
やっぱり子供が教師っておかしすぎるでしょうjk(常識的に考えて)

「では、ネギ先生これから頑張ってください。わからないことなどがあつたら我々を頼ってください」

「ハイよろしくお願いします。新田先生」

学年主任の新田先生はベテランの雰囲気を感じる。

「じゃあ、ネギ先生。教室の方に行きましょうか」

「わかりました。しずな先生」

そういつて指導教員のしずな先生に案内してもらい、教室の方まで案内してもらっています。

それにしても麻帆帆良に行けるとは…父さんの頼み(尻拭い)をやら

なくちゃな…

エヴァンジェリンだっけ…見つけたら謝罪に説明に封印解除と…やることが多いなあ

とりあえず、カモ君用のペットの許可は後でしておかないと…

「ハイコレ、クラス名簿よ」

そういつてしずな先生から渡されたクラス名簿に…

『エヴァンジェリン・AK・マグダウエル』

もしかして父さんが言ったのってこの子かな？それにしてもタカミチ、この『困ったときに相談しなさい』って…

本人は同意して書いたのかな？どちらにしても関係者ってことばらしてるじゃん…

この出席番号1番の人の1940…ってなんだろう…今から60年位前じゃん…

「ほら、ネギ先生教室に着いたわよ」

「あつ！ネギ。あんたが担任なんだ…」

そうしているうちに教室に着いたのだが、どうやらアーニヤもこのクラスみたいだ。

それにしてもドアの上に黒板消し…

「確かこれって日本の伝統なんだっけ？」

「新人が来たらずまず最初に受ける洗礼の一つ『KOKUBANKESHII』！」

「いや…伝統じゃないからね。まったくあの子たちはやんちゃなんだから…」

あれ？違ったようだけど…まあいいか

「それで外す？」

「いや、ここは…全速前進だ　！！」

思いつきりドアを開けると上から黒板消しが落ちてくるが…頭に落ちる前に側面を叩き壁の方へ飛ばす。

そこまではよかった…

黒板消しを避けて安心したのか軽い足取りで教室に入ったら、床に張ってあったロープに引っかかり、そこから連鎖してトラップの洗礼を受けてしまった。

不覚…一瞬の油断が命取りってこういう事なんだ…（今の姿勢はorz）

よろけながらも教壇に立ち何事もなかったかのように自己紹介をした。

「え〜と、今日からこのクラスでコスプレじゃなかった…英語を教えることになりました。ネギスプリングフィールドです。3学期の間ですがよろしくお願いします」

しばしの沈黙…

すべった？

そう思つた次の瞬間：

『キイエアアアアアアア！！！カワイイ

！！』 「男の娘k t k r

！！』

鼓膜を破らんばかりの大声で迎えられた。つて！？窓にひびが！？それに虫の触角の髪ような人の言う男の娘つて何？

「あなたたち、もう一人このクラスに入る子がいるから静かにしなさい」

痛む耳を抑えていると、しずな先生がアーニヤを教室に入れた。

「アンナ・ユーリエウナ・ココロウエです。アーニヤって呼んでください」

『こつちもカワイイ

！！』

アーニヤが一礼してからまた歓声上がり、質問攻めが開始された。

「何歳なの～～！？」

「何処から来たの ！？」

「はいここは麻帆良のパパランチであるこの朝倉和美様にお任せを」

「……キイエイ！！！！」

ノリノリですねこの人たち……

そして出席番号3番の朝倉和美さんが録音マイク片手に僕たちの方へ来た。

「名前はさつき聞いたし…まず、出身地をお願い」
「僕たち二人ともイギリスのウェールズですよ」

周りからウェールズって何処？という声が多数上がっていたけれど、
アーサー王を調べればわかると思います。

不老不死の骸骨みたいな変な生き物なんていませんよ？

「それじゃあ身長、体重、血液型は？」

「え〜といくつだったけ？アーニヤ…」

「知らないわよ…最近測ってなかったからねエ」

最近伸びてきてるからなあ…大体でいつか。

「多分140前後だと思います。体重は…最近測ってなかったんで
わかりません。血液型はABです」

「私は150辺りね。体重は黙秘するわ。血液型はAよ」

「ナルホドね。それじゃあ趣味の方は？」

「古道具集めですね…後、(コスプレ専門誌の)読書です」

「修行に読書といったところかしら」

「はい、ありがとね〜」

なんかアーニヤが言った修行という単語が出た瞬間、褐色の人…出席番号13番の古菲さんと糸目の人…出席番号21番の長瀬楓の目が輝いている気がしたけど気のせいかな？

「それじゃあ今の質問以外で聞きたいことは？」

「アンナ殿勝負しないでござるか？」

「アンナさん勝負するアル！！」

二人とも待つてましたと言わんばかりに声を張り上げて聞いてくる。

「別にかまいませんよ。忍者に格闘家ね…腕が鳴るわ…」

「それにアンナ殿拙者は忍者ではござらんよ」

楓さんは反論しているが口調ですでに忍者ですよ。あなた…

「私からもいいかな？」

「はい…え〜と、早乙女さん」

「二人のことをネタにしているかな？」

ネタ？何のことだろう…よくわからないけど…

「かm「自重しろ」ちよつ！？秋葉原さん！？」

「まだ先生が知らなくていい事です」

秋葉原さんは、何処から取り出した破裏扇で早乙女さん頭部を叩き、黙らせた。

知っておかないとまずい事だったかな…

「もういませんか？それならこのまま英語の授業に入りたいと思います」

「アンナさんはザジさんの後ろの席ですよ。あっザジさんというのは窓側の最後列にいる人の事ですから」

アーニヤは出席番号31番のザジ・レイニーさんの後ろの席に着くことになったみたいだ。

「よろしくね。ザジさん」

(ペこり)

アーニヤが席に着いたのを確認して授業を始めることにした。ただ問題が発生した…

高い位置に書き込めない…

「先生これをどうぞ」

そういつてしずな先生から踏み台をいただき、授業を進めることが出来、その後、無事授業を終えることが出来た。え？消しゴム弾？喧嘩？そんなものはなかったZ E

「ネギ先生、初の授業はどうでしたか？」

教室から出るとタカミチが声をかけてきた。もしかして見てた？

「高畑先生、身長が欲しいです…」

「あー、まあ、そのうち大きくなれるさ」

困惑した表情で答えるタカミチ…まあ、この身長だからヴィータちゃんに似合うんだけどね…複雑だ。

「あつ！！高畑先生こんにちは」

「やあ、アスナ君。彼の授業はどうだったかな？」

「特に問題なく進められました。まあ、あたしが付いているから大丈夫ですよ！！」

そうタカミチに熱演する明日菜さんを見ていて、タカミチに好意を持っているのがわかる。

歳離れすぎじゃないかな…十代が三十代と付き合っつてやばいんじゃない？

ちょうど近くにいた木乃香さんに聞いてみることにした。

(木乃香さん、もしかして明日菜さんってタカミチの事が…)

(その通りやで、ネギ君。じゃましたらあかんよ)

(わかってますよ。日本では恋路を邪魔したら馬にけられて地獄に落ちるって聞いてます)

(…まあおおむね合ってるな。地獄に落ちるかは知らんけど碌なこと起きへんから気を付けな)

そして僕はこの空間を後にした。

職員室に戻ろうとしたら、業務用の携帯から校内の施設の場所を把握しておきなさい。と新田主任から連絡があり、商店街や図書館島を見ておくことにした。

とりあえず図書館島の場所を覚えておこう。資料と化を使うのに利用すると思うし…

図書館島へ向かう途中、出席番号28番の宮崎のどかさんが視界を塞ぐほどの本を持って階段の端の方を降りてくるのを見かけた。しかも妙に足取りがおぼついていない。

あれだけの本を持ってちゃあんな状態じゃ危ないな…

次の瞬間、宮崎さんは足を挫いて階段から落ちていく。

あの高さじゃまずいだよ！仕方ない…な…！

懐から練習用の杖を取り出して風魔法で一瞬落下を止めて、何とか受け止める。

「だいじょうぶですか！？宮崎さん」

「え？あ、先生…その……ありがとうございます」

「どうも…しかし、宮崎さん。あんな視界をふさぐほどの本を持っていくのはよしてください」

「あつ…すいません。あれ？でもどうしてあんなになったんだけ？いつもならパルやゆえに手伝ってもらうのに…あれ？」

…… 大方、連中が暗示系の魔法をかけて運ぶようにしたんだろう。

正義の魔法使い

大層な名前だけどその実態はとんでもないくらい腐った奴が多い…正義を免罪符にするような連中や自分が絶対正しい、という勘違いをした屑野郎…メルディアナにいたころも似たようなことがあったな。

階段で踏み外せて僕が助けるように仕掛けてヒーローにするような手口…ここでも健在かよ、まったく。

「あ…あ…あ…」

「あ…」

やっべー見られちゃった。

弁解しようとしたら、襟をつかまれて人気のないところまで連れて行かれた。

ああ、これからどうなるのやら…

・
・
・
「え〜と…」

なんだか、頭がボーっとする…とりあえずわかっていることは

- 1・普段は持たないくらいの量の本を抱えていて、階段から落ちた。
- 2・新任のネギ先生が助けてくれた。
- 3・明日菜さんがネギ先生を連れ去った。

という事だった。

「とりあえずこの本どうしよう…」

また運ぶとなると同じようなことが起きかねないし…周りには人がいないし…仕方ない。携帯でパルゆえを呼んで頼もう。

「おや？のどか嬢じゃないか。どうしたんだこんなに本をぶちまけて」

声をした方を見ると図書館島で司書兼警備担当のロボットと聞いている、煉がいた。彼女とは友達で図書館島でよく話したりしている。

「本の返却しようとして図書館島に向かう途中、階段から落ちちゃって…」

「ナルホド…これだけの量を運ぶのは大変だろう…手伝うよ」

「ありがとうございます」

「なに、気にすることはないだろう。そういえばジョセフィーヌがお前に会いたがっていたぞ」

ジョセフィーヌというのは、図書館島に住んでいる飛龍で1年前、煉に用があつて探していた時、煉が知らない部屋に入っていくところを見て続けて入つてみたら龍がいました。それがジョセフィーヌの初めての出会い…

初めはものすごく驚いたけど、煉の仲介が入って触ったりなでたりしているうちに懐かれた。もちろん口外しないことにしている。これは私と煉の秘密である。

「そうですか。あの子って意外と甘えん坊なんですね。ドラゴンなのに」

「あれでも彼女は幼いんだよ、他と比べれば」

そんな事を話しながら本の半分を持ち直して、半分を煉が持つてもらい図書館島へ返却に向かった。

第17話 ちよっぴり(?) 変わった物語の始まり (上) (後書き)

今回の補足設定

出席番号が1番ずつずれていますが、白花が入ったことではありません。

メダロット達は、大学のロボットとして働いています。

テンコとトモエは広域警備員、煉とナビコは図書館島司書兼警備員として働いています。

原作前にメダロットたちに色々な経験を積ませようという試みで各々の職に着くことにしました。

クーンルの飛龍ですが、人間で表せば10歳前後でのどかとは波長が合っているような感じで懐いています。ただし、部屋に侵入しようとするれば威嚇されます(吠えるだけ)。

のどかの認識はこんな生物ってまだいるんだな〜程度の認識です。

第18話 ちょっぴり(?) (変わった物語の始まり) (下) (前書き)

なんかもうggggな感じになっちゃった…

第18話 ちよっぴり(?) 変わった物語の始まり (下)

私こと神楽坂明日菜はつい先ほどありえない光景を目にした。

歓迎会の主役を呼ぶために新任の教育実習生のネギ先生を探していたら、知り合いの本屋ちゃんが階段から踏み外して落ちてくるのをネギ先生が受け止めたという事である。

これだけを聞いたら単にネギ先生が助けただけという事だけと先生が懐から変な棒を取り出してそれを本屋ちゃんに突きつけたら…あら、不思議…一瞬だけ本屋ちゃんの落下が止まったではありませんか…

その光景を目にした私は思わずネギ先生を誘拐しちゃいました。

どうしよう…まあいつか。とりあえず尋問といこうかネギ先生…

「え〜と、神楽坂さん一体何の用でしょう…」

「あなた…今のはいったいなんなのよ!!何あれ!?超能力!？」

「いえ、あれは…」

「その年で教育実習生つてのが少し怪しいと思ってたけど…現行犯で見たわ!さあ吐け!!吐くのよ!!!」

ヤバイ…今までにない事だから興奮してテンションが青天井だ…だけど私は自重しない!!

「仕方ありませんね…」

やっと観念したか!さあ、じっくり聞かせて「お願いします!!この事は他言無用にしてください!!!」って、土下座!?

「これがばれるといろいろ面倒なことになるんで見なかったことに

してもらえませんか…」

うわ、地面にこすり付けてるよこの子。なんかこっちが悪役みたいじゃない…

「わかった！わかったから！言わないから土下座はやめなさい！良心が痛むから…！！」

「ありがとうございます…！！」

よほどばれたくないみたいね…

「はあ…まったくあんた一体何なのよ…魔法使い？」

「いいえ、コスプレイヤーです」

「真面目に答えなさいよ。ていうか、なんでコスプレイヤーなのよ…」

「まあ（ホントでもあるけど）ジョークとして魔法使いなんです」

なんかボソツとつぶやいてたけどよく聞こえなかったわ。

それにしても魔法使いって…

「黙っていてほしい理由のうちの一つは魔法は秘蔵されるもので目撃されたら黙ってもらおうように交渉する、もしくは記憶を消すなどの処理をしなくてはいけないんです」

「記憶つてずいぶんと物騒ね」

「一応言っておきますが、ファンタジー要素よりも命の危険のが多いですから魔法使いは…危険だからこそ秘蔵されているんです」

つまり、いま私は交渉されたってことか…

それにしても記憶を消すねエ…

「記憶うんぬんのあたりは気に入らないわね…」

「まあ、交渉せずに消したりする輩もいますからね。でも悪い事だけじゃありませんよ？精神崩壊するような出来事…誤って人を殺してしまった時などですね。その記憶を消してある程度ケアをして、戻すといったやり方にも使えます」

薬も過ぎれば毒にもなるって言うけど…似たようなものね…

「でも、なんでその魔法使いがここで教師やっているのよ？」

「修行です。魔法学校を卒業する時に卒業生は課題をもらい、その修行地で修業をするんです。ほかに聞きたいことは？」

うーん今の所はないかな…

「とりあえず無いわ…修行中ってことはあまり多くの魔法は使えないんじゃない？」

「そう思っていて構いませんが…よくわかりましたね」

「あれよ。ゲームで言うなら冒険に出たばかりの魔法使いか僧侶みたいなものでしょ」

覚えているのがメラやホイミくらいしかないのが基本だし…

「あつ！！そうだ！あんた一度教室に戻って頂戴」

「あつ…はい、わかりました。それでは、また後ほど」

そういつて私はコンビニで買い物をした後に教室の方へ戻った。

・
・
・

仕方がなかったとはいえバレってしまったか…あまり巻き込みたくない

いんだけどな……はあ
まあ…魔法なら結構使えるんだけどね…

それにしても明日菜さん、あんな速度で走れるなんて気の強化でもしているのかな？

まあ、それは後で考えるところでしょう。確か教室だったね…
さっさと向かうとしよう

『2・Aへようこそ？ネギ先生、アーニヤちゃん!!』

短時間でここまで準備するとは…みんな行動力あるね〜

「どうもありがとうございます」

「ありがとう皆!!」

そういえばアーニヤに魔法ばれたことを言っておかないと…

(アーニヤ…クラスに一人に魔法ばれちゃった…)

(初日で!?!何やってるのよあんだ!!)

(ごめん…)

そこまで念話で会話していたら、さっき助けた宮崎さんがこちらの方へやってきた。

「あの　ネギ先生…えつと……さっきは…あの…助けていただき
ありがとうございました」

「どういたしまして、宮崎さん…けがはなかったですか？」

「はい…あ、これ…お礼です……図書券……」

「本屋がもうネギ先生にアタックしてるぞ

！！」

そういつて図書券を渡した後、周りが騒ぎだしたり、委員長の雪広綾香さんから銅像をもらった。その後、明日菜さんがいいんりよさんをシヨタコン呼びわりして喧嘩が始まり、賭けが始まって大騒ぎであった。

(なるほどね…んで、宮崎さんにばれたの?)

(いや…助けている場面を見たのは今取っ組み合っている神楽坂明日菜さんだよ。宮崎さんは突然の出来事でわからなかったみたい)

(ふ〜ん、とりあえず、後で私のことも言っておこうかしら…)

「やあ、ネギ君初日の授業お疲れ様だったね」

「なかなかの手際でしたよ。ネギ先生」

そういつてくれたのはタカミチとせずな先生だ。

「いえ…本職の人たちに比べればまだまだです」

「そりゃ一日で抜かれたら教師の立場が無いよ」

タカミチ…あなたがそれを言う資格ないと思うよ。出張多すぎワロタWWW

そんな事を考えていたら、明日菜さんがなにやら耳打ちしてきた。

(ねエ、ネギ。魔法で読心術とかできないかしら?)

タカミチの好きな人でも探ろうとしたいのかな?

(一応できますけど、無理ですね)

(え、どつちよ?)

(読心の魔法は使いこなせていないと簡単にレジストできる魔法なんです)

(簡単そうに見えるんだけどなあ)

(熟練の魔法使いや専用の道具じゃないと本人が読みたい内容以外の物を読んでしまうんですよ)

(残念…高畑先生がどう思っているかは無理か…)

すみませんね明日菜さん…タカミチも関係者だから読心ができてもレジストされてわかりそうにないから…

「そういえばネギ先生はどこで泊寝泊りおられるのですか?」

そんな事を考えていたらいいんちよさんが聞いてきた。

「明日菜さんと木乃香さんの部屋でアーニヤと共にお世話になっています」

「なんか爺ちゃんが用意しとらんかったんやって」

「なん……だと……」

「生徒と相部屋だった?」

「うーん、もう少しインパクトが無いとネタにできないね」

やっぱり生徒と相部屋はまずいですよね…向こうが真面目に用意してくると思えませんが……

「その所どうなんですか?高畑先生」

「ああ、その件はまだみたいだよ。だからしばらくはお願いできるかな?アスナ君」

「大丈夫ですよ。二人とも礼儀正しいし、家事もできるみたいです

し」

「うちも平気やで、こんな子たちなら大歓迎や」

そんな事を話したりしたのちに解散となった。

「2・Aの皆さんはいつもあんな感じなのですか？」

「そやな、みんないつもあんな感じでお祭り騒ぎな感じや」

「あんた、これから大変だと思っわよ〜それじゃお先に」

「あ、待って〜な明日菜」

明日菜さんはいたずらっぽく笑みを浮かべて寮の方へ爆走していき、そのあとを追いかけていく木乃香さんであった。

「みんないい人たちだね」

「そうね、私も強敵とこに会えたから満足しているわ」

強敵とこって古菲さんと長瀬さんかな？

「まあ、あんたは教師の仕事しつかりやりなさいよ」

「わかってるよ。明日は職員会議もあるし、早めに起きないとね」

さて、この麻帆良ではどんな日々が送れるのかな…

できれば平和に過ごしていきたいけど…無理だろうな…

第18話 ちよっぴり(?) 変わった物語の始まり (下) (後書き)

一応、原作のイベントは普通に起きますが、対応が違うのでその所をお楽しみください。

PV100,000記念 一狩り行こつZEE!! (前書き)

今回はモンハンのような感じですよ

それにしても皆さん、お気に入り件数も100件を超えていました。
ここまで読んでくださり本当にありがとうございます。
これからもこの作品をよろしく願います。

え〜最近出番がない秋葉原白花は今クラスターの下層エリアの集会所にいます。

ほかに、エヴァと茶々丸やトモエたちメダロット組、高音さんとゆかいな仲間たち、そして千雨たちである。

「本日集まってもらったのはこの大狩場で狩りをしてもらいます。何か質問は？」

「おい、白花：戦闘準備して来いって言うていたが：まさかただの狩りなのか？」

この狩りは普通じゃないよ〜エヴァ

「まあ、ただの狩りだけど、ここにいるほとんどは熊なんか軽々超える実力を持っているから：死にそうになったら強制的にここに戻るように係員が運んでくれるからね」

そういつて後ろの方に控えていたネコ型の獣人のアイルーを前に来させた。

ちなみに名前は三途と彼岸

「初めましてニヤ。僕たちがみなさんが死にかけたらここに運ぶニヤ」

「可愛い…」

「お持ち帰り…」

「解剖…」

なんか最後物騒なことが聞こえたけど：問題ないでしょ

「それで白花さんルールはどうするんですか？」

「最大パーティ4人までで目標を討伐して少したら転送されるようになってるから。そんなでもって討伐したモンスターの素材を使つてみんなに武器や防具が後日渡されるような感じで」

此処のモンスターの素材で作った武具は下手な魔法具より強力なんだよなあ

「今回は従者たちで分けることにしようと思うんだ」

「つまりは、私と茶々丸それに白花、高音は愛依とナツメグでいいとして、メダロット組はどうするんだ？」

「メダロット組は千雨の所で組んでもらうよ」

「なるほど、つまり私の所に煉とテンコが来るわけ」

そして出来上がったパーティは

エヴァンジェリン・茶々丸・白花・トモエ

高音・愛依・ナツメグ

千雨・ナビコ・煉・テンコ

『それではみなさん、くじを用意しましたので代表はくじを引いてください』

そういつてナビが箱に入つたくじを転送した。

「なら、最初は私がやりますね」

最初は高音さんがやるみたいだ。
高音さんはくじを引いて開けてみる…

「え〜と、何々…岩竜狩猟、場所は火山ですね」

「なんですか、岩竜って？」

『説明いたします。岩竜というのはバサルモスの呼び名です。
岩竜バサルモス…鎧竜グラビモスの幼生であり、火山地帯に生息しています。鉱石を主食にしており、平時は岩に擬態する等して外敵から身を守っています』

「鉱石というと石を食べているんですか？」

『まあ、そう考えてもらって構いません。そのためか…バサルモスの甲殻は岩のような頑丈差を持っています。攻撃手段は毒ガスを放出したり、突進したりですね。硬いと思うのでこの大樽爆弾をどうぞ』

そういつてナビはかなり大きめの樽を転送させた。中には火薬がたっぷり詰まっている危険物だ。

『簡単な衝撃だ爆発するので取扱には注意してください。ちなみにバサルモスの弱点部位は腹部で属性は水が有効です。ナツメグさんがんばってください』

「わ、私ですか!？」

「確かに水属性はナツメグが得意ですしね」

「私は火属性ですから、頑張ってください」

やったね、ナツメグさん!あなたが主役だよ!!

「さて、次は私が…」

次に千雨がくじを引き、それを開いた。

「溪谷でジンオウガか…」

「そういえば千雨の王刀の強化品ももう少しで完成だったね」

千雨は何度かここにきて一緒にモンスターを狩っていたりしていたからすでに王刀ライキリがある。

今回のジンオウガで碧玉ができれば王牙刀【伏雷】にすることが出来るだろう…

「ジンオウガですか…私たちは機械ですから気を付けないといけませんね」

「黄金の鉄の塊でできたナイトが毛装備の龍に後れを取るはずがない!!」

「となると、氷か…ナビ、腕を変えてくれないか？」

『了解…「FAM-007ユメウツツ」「FAM-008コチヨウノユメ」転送および交換します』

煉の両腕が光に包まれ、光が晴れた時には袖が白い装甲になった煉がいた。

FAMシリーズの試作品で極低温の衝撃を与えることが出来るフリーズ攻撃と混乱を可能にしたパーツであるが、今回は腕だけなので混乱は無し。属性的にはジンオウガに有効だろう…

「それじゃあ私は六花を転送してくれ」

『六花垂氷丸転送します』

そういつて千雨の前方に光が集まり、氷に包まれたような太刀が転送され、それを背負った。

「最後は私か…」

そういつてエヴァはくじに手を突っ込んで引いた。

「？おい白花、これWARNING！って書いてあるだけなんだが…なんだこれ？」

「それある意味大当たり…次にこの阿弥陀くじやって」

そして阿弥陀くじの結果、エヴァは雪山で狩りをする事になった。

「それで私は何を狩るのだ？」

「この世界で最強クラスのモンスターで、金獅子ラージャンっていうモンスターなんだ」

『ラージャンというのは巨大な猿のような体躯と、山羊の角のような掬れた二本の角が横からつき出た頭部を持つモンスターで非情に凶暴な性格をしており、縄張りに入ってきた侵入者には徹底的に攻撃をしかけます。普段は黒い体なのですが激昂時に毛が逆立ち金色を帯びるため金獅子と呼ばれています。攻撃方法は殴るなど原始的なものが多いのですが雷球やビームの様なプレスを吐いたりしますので十分注意してください』

ラージャンとは戦った事があるけど…あれはマジでヤバイ！！

「なるほど、この世界で最強クラスか…最強の魔法使いであるこの

私にふさわしい相手という事だな」

「サイヤ人が相手となると全力でいかないとな」

「私たちはマスターのサポートに専念するとうましよう」

「そうですね。攻撃はお嬢たちに任せるとしましよう」

『ちなみに弱点属性は氷です。激高時には回避に専念することをお勧めします』

「属性的には有利という事か…」

最恐VS最強か…まあ、勝って見せるさ…

『それではみなさんを各フィールドに転送します。なお、回復アイテムなどは向こうにある青い箱に入っているのものでそれを使ってください。使い方も一緒に入っているますし、私を呼んでくれればアドバイスをいたします。それでは、皆さん頑張ってください』

そして私たちは光に包まれ互いの狩場に転送された。

・
・
・

高音S

「それにしても龍と闘う事になるとは…」

ナビさんから聞いてみましたが、バサルモスは飛龍種の中ではまだ弱い方らしいです。甲殻が頑丈なだけで体力が少なく、攻撃モーシヨンも遅いとのことであるが、「あなた方だと苦戦するかもしれない…」とのことであった。

なにか苦戦する要素があるのでしょうか…

「準備できました。お姉さま」

「情報によると最初はエリア7の方にいるらしいですよ」

結構奥ですわね。まあ、大丈夫でしょう。

「それでは参りましょうか」

しかし、クーラードリンクというのは暑いところでは必須ですね。
このすつきりとした味わいは癖になりそうですわ…

やってきましたエリア7しかし…

「居ませんね…バサルモス」

すでにどこかへ移動してしまったのでしょうか…

「少し探してみましよう、どこか見落としているかもしれませんし」
「わかりました」

「了解です。お姉さま」

そして周辺を探索してみましたが、あつたのは火薬草や龍殺しの実
などであった。

「居ませんね」

ちょうど愛依が近くの岩に背を預けた時、その岩がぐごめいていた
ことに気が付いた。

「愛依！！危ない！！！！」
「つく！？」

愛依はなんとかその場を飛びのき地中から岩竜の奇襲を回避した…

これがバサルモス…

岩のような外殻、つぶらな瞳、ゆらゆらと体を揺する動作…：可愛い

「可愛いですね。あの子」

「何とかお持ち帰りしたいです」

「しかし、向こうは野生の生き物…捕まえる何てこと無理に』できませんよ』っえ？」

『体力を減らして落とし穴か痺れ罠にかけて捕獲用麻醉玉をぶつければ捕獲という事でクリアできます』

…いいことを聞きましたわ

「これは捕獲一択ですね！！」

「ヒヤッハー！！可愛い子はお持ち帰りだ　！！！！」

「みｗｗｗｗなｗｗｗｗぎｗｗｗｗつｗｗｗｗてｗｗｗｗきｗｗｗｗた
！！！！ｗｗｗｗ」

なぜか怯えたように後ずさっています…もう遅い！！私たちに
会った不幸を呪いなさい！！！！

・
・
・

ジンオウガの居場所はナビコの索敵のおかげでエリア6にいることがわかり、戦闘に入ったが、ここで予想外の出来事が起きていた…

ジンオウガは既に帯電状態になっていたのだ…

ねーよ…なんでいきなり帯電状態なんだよ…私たちより前に何かと闘っていたのか？ここに来るまで変わったことなんざ、せいぜい天候が荒れたくらいなのに…っち、ついてねエ

「マスター！！連撃来ます！！」

「危ね！？」

ナビコの声に反応してジンオウガの雷を纏った左右の叩き付けを回避することが出来た…

「ハイスラア！！」

「追撃のフリーズでダメージはさらに加速した…でいいのか？」

叩き付けたことよってできた隙にテンコはヒソウノツルギで切りつけ、煉は腕から発生させた氷柱を叩き付ける。

「おい 千鯨…俺の気のせいかもしれんが…あのキングベヒんモスもどきあんなか弱ってぬえか？」

「何？」

テンコの言葉を聞き、ジンオウガをよく見るとまだ戦い始めて2時間程度しかたっていないが…すでに角は折れており、爪も欠けている…

私たちの前に縄張り争うでも起きたのか？

「まあ、私たちには関係ないし…邪魔にならなければいい…さ…！」

六花で上段から斬り付け、突き、切り上げ、左側へ体重移動を掛けながら斬り払う。

反対側にいたテンコは剣と盾のコンボを入れトドメに踏み込んだ足を軸にして、体全体を回転させながら斬りつける。

正面で構えていた煉は、ほかの二人に合わせてフリーズ攻撃を繰り出す。

ジンオウガがなにやら腰だめを造り、回転攻撃を繰り出すが、すでに3人は離れ、回転攻撃を回避することが出来た。その動作の合間にナビコのヴァルキリーブレイズで肉質の柔らかい頭部や背中を打ち抜く。

4人の連携にジンオウガが怯み、その隙を逃さずに太刀に纏っていた気を開放してジンオウガに斬り払う。

「まだだ…！」

さらに逆回転。そこから手首を使い、小さく素早い動作で式回、参回と切りつけ、最後に力一杯振り下ろす。

「イヤアアアツ！」

トドメに全身を振り回すようにして横一線に太刀を振りぬき、太刀

を鞘へと納める。

そして倒れるジンオウガ…小さく呻き動かなくなると、纏っていた雷光虫が霧散していった。

「ふう…私たちは勝ったがあいつらはどうかな？」

・
・
・

エヴァス

「闇の吹雪！！」

「万魔の槍！！」

全くなんだあのスーパーサイヤ人は！？

力だけでタカミチの豪殺居合拳を超えるは、砲撃とも思える雷球を吐き出してくるわ…

なるほど…伊達に最強と呼ばれているわけではないという事か

「ぶちぬけええ…！！」

「ミニガンでは歯が立ちません。マスター」

トモエが力を纏った（たしかメダフォースとか言ったか…）弓を放つが角にあたって弾かれる、茶々丸もミニガンをあまり効果はなかった。

ブオオオオオオオオオ！！！！

咆哮

ただそれだけで吹き飛ばされてしまうような錯覚に陥る…
最初の方は黒い身体だったが、今は黄金に輝く獅子と化していた…

金獅子ラージャン

説明で聞いた容姿だったが、今のこいつは悪魔にも見えるな…

圧倒的な力、全てを蹂躪するような凶暴性、

「断罪の剣!!」

グルアアアアア!!

奴の拳と断罪の剣がせめぎ合い、負けたのは私の方だった…そのまま私は壁に叩き付けられる。

ただの拳で断罪の剣を砕くとはな…
世界はまだまだ広いのだな…

とこんな時にそんな事を考えてしますのであった。

「エヴァ!!大丈夫か!？」

「マスター!!」

大声で叫ぶな、頭に響くだろうが…

「うるさいぞふたりとも…トモエを見習え」

「この程度でくたばるとは思えませんでしたしね」

全くこいつは誰に似たのだからなんか生意気だな…

「この十数年私も腑抜けたものだな…」

吸血鬼になってこんな戦いは何度があったが、ここ最近は何の危機というのはいなかったからか少し鈍ったな…まったく平和なのはいい事なのだがたまにはこういう刺激もなくちゃな…

「感謝するぞ金獅子ライザンよ。こんな楽しい闘争は久しぶりだ…私も本気で行かせてもらおうぞ…！」

こちら最高級の技で答えるでしょう…十年近くかけて作り上げたこの闇の魔法でな

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック来たれ氷精！大気に満ちよ…！」

ぶるああああああ…！！

本能的に危険を感じたのか…ライザンは四肢を踏ん張り、エヴァに向かって雷光を放つ

まだ詠唱が完成してないうちに叩くか…だがこちらは一人ではないのでな

「白花さん！マスターを」

「任せな！最強防壁…！」

茶々丸の号令で私の前方に立ち雷光ビームを防ぎきる…相変わらずの硬さだなこいつは…
それじゃあさっさと完成させるか!!

「白夜の国の凍土と氷河を!!凍る大地!!術式固定!!!!掌握!魔力充填!!術式兵装!!」
「白夜の氷姫!!」

凍る大地を固定、解放し、その魔力を身に纏う…

「さてと…一気に行かせてもらおうぞ!!」

リミットギリギリまで逝ってやる…

「解放!断罪の剣!!」

再び発動した断罪の剣だが闇の魔法によって属性付加に加え、周囲の魔力を取り込みブーストした状態の魔法を発動させる。

「うおおおおお!!!!」

瞬動で一気に接近し、斬り付ける…

反撃しよう腕を振り回すが、ハクカが懐から何かを取り出すのを見て距離を置く

「閃光行くよ!!」

白花は何かを投げると次の瞬間、小さな破裂音と同時に目を灼き尽くさんばかりの閃光が放たれる。

グルアア・・・

その閃光でラージヤンは視界を潰され暴れまわる。

暴れ回るうちに適当な方向へ突撃してきたラージヤンが落とし穴に嵌った。

「ビンゴー!!」

「一気にたたみかけるぞ!!」

「フルチャージー!!」

「ヘビィボウガンでございます」

突然の出来事に対応できていないラージヤンは落とし穴から出ようとがくがくが、強力な粘着性のネットが下半身に絡みつき脱出することが出来ない…

「左腕解放！断罪の剣！！右腕解放！凍る大地！！術式融合！！」
「罪裁く絶対零度の剣！！」

エヴァは闇の魔法で纏っていた魔力を開放し剣と共に放つ
放たれた魔法によってラージヤンの角は根元から叩き折られる…

「メダフォース『縦一閃』！！」

トモエはメダフォースが籠った斬撃を放ち、当たった瞬間、衝撃と
なってラージヤンに襲いかかる。

「汚物は消毒です」

茶々丸はナビに転送を要請し、取り出したヘビィボウガン海造砲【

灰燼】で爆発系の弾丸を打ち続ける。

「『来たれ！』ビックバン・ソード・グラビティ！！」

白花のアーティファクト『夢幻兵装』によって呼び出した”女の子でもぶんぶん振り回せる巨大な剣”をコンプセプトにした刀身が黒一色で1メートル半はある剣、一撃なら最強の威力を持っているが、強度は最低ランク…一撃放てば絶対壊れるというロマンあふれる品物なのだ

「ぶっ飛べ　　！！」

両手で握りしめた剣が、限界まで体をひねり、バネを最大限に生かしてグラビティがレーザーに直撃する。

鼓膜が破れそうな轟音と衝撃

そしてすぐ後に壁の方で何かが叩き付けられたような音が響く…そこには山の岩壁に貼り付けになったような状態のレーザーがあった。

落とし穴からは飛んで行った方に千切れたネットがあった…どうやら、落とし穴から壁まで飛んで行ったようだ…

「私たちの勝ちだな」

「最強の名に恥じない強敵だったさ」

そうつぶやき集会所に4人は集会場へと転送されるのであった。

・
・
・

結果：高音sはバサルモスを捕獲することに成功した：ただ、バサルモスはなんだか怯えたような感じだったが、何かあったのか？

千雨たちは無事シンオウガを討伐することに成功したが、溪谷近辺で何か起きているかもしれないと忠告を言い残した。ちなみに、シンオウガから碧玉が取れたので強化することが出来るようになった。

そして私たちは、ラージャンの討伐に成功：壁に埋まっていたため転送が面倒だったとナビに小言を言われる始末：エヴァは今回の狩りに満足している様子だった。今回はソロで行きたいと言っていたが：まあ、大丈夫かな？最強の魔法使いだし……：ていうか術式融合パクられた、どうでもいいけど

獲れた素材を使い、各々にできた武器を渡した。

高音たちは鉱石系の片手剣『オデッセイ』を作成し、それに呪文処理を施していた：無属性だから付加しやすかったとのことだ。

千雨は、武器を強化して『王牙刀【伏雷】』を作成：余った素材で『王弩ライカン』を作り、ナビコに装備させた。テンコはヒソウノツルギがあるから問題にいとこの事で煉は素手の方がやりやすいとのことだ。

そして私たちはエヴァに武器を提供することにした。鉄扇を使っていると聞いたので道具作成スキルにラージャンの素材を使い作ってみた。そしてできたのが『獅子鉄扇【狂乱】』雷属性を纏った鉄扇であり、発動媒体にも使うことが出来る代物だ。今度狩りに行くときは氷属性を付加できる奴：クシャルダオラ辺りを狩るとしますか…

そして、今回の狩りは幕を下ろした。

「結局出番無かったニヤ」by 彼岸
「けが人が出ないのはいいことなのニヤ」by 三途

PV100、000記念 一狩り行こつて！！（後書き）

モンハンの描写って難しいですね。

オリジナル武器作っちゃいました。

獅子鉄扇【狂乱】

とりあえず盾のない片手剣でいいかな？

麻帆良祭で鉄扇使っていたしこれが合うかなと思いつっちゃいました。

反省も後悔もしていません
ステータスは

攻撃力350 属性値・雷300 防御力+5 会心率20%

という感じで出来ました。

切れ味の方は他のライザン武器と同じくらいという事で…

それでは次回もお楽しみください。

第19話 アンナ・ユーリエウナ・コロウエの一日(前書き)

今回はアーニャしてんです。魔法関連は特にならない日常的な感じですよ。

第19話 アンナ・ユーリエウナ・コロウエの一日

「あら？アンナじゃない…どうしたの？こんな所で」

声ができる方を見るとそこには白い髪に赤い瞳…最近占いにはまっている預言者プラムがいた。

久しぶりねプラム…

「もしかして、ようやく私の物になる決心がついたのかしら？」

いやいや…そっちが呼んだんでしょ？まったく夢にまで手を出すなんて…

「あら、ばれちゃった…でも、あなたがいないと退屈なのよ」

「おお、プラムよそんなに退屈ならこの魔帝ロイヤルキングダーク3世が…」

突然乱入してきた、二メートルを超える筋肉男にむかって私は愛用しているライフルを、プラムはどこから取り出したバズーカでお見舞いする

お呼びじゃねえんだよ！！

「消え失せなさいゴミムシが！！」

「うわらば！！」

そうして、ただのアホ（魔帝ロイヤルキングダーク3世）は彼方へと消えていった。

「はあ…まったくあの恥知らずは……」
あれに関しては同情するわ…

「ありがとう、それじゃあそろそろお目覚めの時間ね。またねアスナ」
ええ、身体には気を付けなさいよ

起床、現在5時半

まさか夢にまで干渉するなんて…さすがは魔王といったところかしら

「あつ、アーニヤおはよう」

「おはようアーニヤ」

「おはようネギ、木乃香…あれ、アスナは？」

今部屋にいないルームメイトの行方を聞くと…

「あゝ、アスナは新聞配達のアルバイトしててな〜アーニヤが起きる少し前に出たんよ。それよりアーニヤごはんで来てるで食べてきい」

「わかったわ、食べ終わったらランニングにでも行こうかしら…」

「付き合うよアーニヤ…僕も軽く運動したいし」

「時間は大丈夫なの？職員会議とかで早いんじゃない？」

「軽くだから大丈夫だよ」

そして朝食を食べて、ランニングに出かけた。ちなみに今日の朝食は白米に目玉焼き、その他もろもろ…

食後の運動にランニングをしている途中新聞配達をしている明日菜に行きあった。

「お！頑張ってるわねあんた達」

「おはよう明日菜」

「明日菜さん、お疲れ様です」

どうやらまだ新聞配達は終わっていないみたいでバッグにはまだいくつか新聞が残っていた。

「まだ終わってないからまた後でね」

「頑張ってるね明日菜…ネギ、そろそろ時間」

「そうだね、それじゃあ先に上がらせてもらっよ」

そしてネギは寮の方へ、明日菜は商店街の方へ向かって行った。

その後、少し走って寮へ戻り登校することにした。

そして教室にて…

「おはようザジさん」

※(、、、)

なんだか眠そうな表情であいさつしてくるザジさん…

この人は悪魔みたいだけど敵意はないみたいだし、敵対する必要はなさそうね…

「そういえばね、今朝プラムが夢に繋がってきたのよ」

(。、)

「え？プラムとの関係？向こうが『私の物にならないか？』なんて迫ってくるのよ…」

(ー ー) エヘー

「いやね、ちょっと前に魔界においてその時に気に入られちゃったみ

たいなんだけど、いったいどこが気に入ったのかしら…それよりザジさんって好きな芸能人っている？」

「プレネールさん……一択……」

「やっぱり？でもたまに出るアサギも面白いわよね」

「……確かに……曲……入ってるよ」

そういつてザジさんはI podを取り出し、イヤホンを差し出す。

『たなぼたチャンス』

「メタフォか、わたしはG o F i g h tが好きね」

「罪なバラも……いいよね」

「ふふ、そうね」

魔界のことを知っている人がいると話題が尽きないわ

そんな感じで話し込んでいるとHRの時間が来てみんな席に着く。

・
・
・

「え〜とこの英文を……明日菜さん呼んでください」

「ちよっ！おま！？なんで私なのよ！！こっいつ時は日付と出席番号でしょ……！」

「思いつきり目線そらしていたので指しました。わからなくていいですから、どうぞ」

一時間目の英語…英文を訳してもらったために指名されてしまった明日菜であった。

確かに、ネギがアスナの方を向いたら必死に目線そらしてたわね…それはもう首が90度を超える様な勢いで

「うっ、わかったわよ。えっと訳すのよね…ジェイソンがチェーン

ソーを持って…友達斬って、わが世の春が来た？ジエイソンとその花は…えと…骨が…百本？えっと、その………わかりません……」
「全く明日菜さんは英語もダメですわね」
「英語だけじゃなくて数学もダメだったよね……」
「というか保険以外駄目なんじゃない？」

アハハハハハハハハハハ

さすがにこれ、いじめレベルじゃない……
ていうかやばいわね、ネギはこーいうのって……

「ちよつとみんなヨ「バンツ！！」遅かった……」

ネギは教団を叩き全員を黙らせる。

「みなさん…他人をバカにするのがそんなに楽しいですか？」

若干怒気が籠り、底冷えするような声に無表情で問いかけるネギ……
背後にはなんか某管理局の白い悪魔が見えるわね……

「人の失敗を笑うというのならあまり感心できませんね…確かに日常でちよつとした失敗で笑う事はあるかもしれませんが、でもそれは傷つけることはない悪ふざけのようなものですが、今のは完全に人をバカにしていましたよね？それに誰だって苦手なことはあるんです……」

静かに、だけど重くのしかかる言葉……
笑ってしまった人たちは既に蛇に睨まれた蛙の様に黙っているしかなかった。

「僕が言ったこと間違っていますか？ですが、些細なことで行き違
うことだつてあるんですよ？だから…」

少し頭冷やそうか…

『すいませんでした　　！！！！！！』

一部のメンバーを除き、全員がしっかりと謝った。

おい、それ何処の管理局の魔王様だよ…なんか長谷川さん苦笑いし
ているけど、元ネタわかつたからかな…

「謝る相手は僕ではありませんよ？」

「明日菜さん…申し訳ありませんわ…」

「ごめんよ　！アスナ　！」

「うわーん！ごめんなさい　！」

うわ…すでに泣いている人もいるわね…まあ、ネギの魔王モードは
恐ろしすぎるしね…

以前、魔王モードになった時は、魔法学校で同じ学年で成績の悪い
子がいてその子がいじめを受けていたのよね…しかも、教師ま
で参加するくらいだから性質が悪いわ…それでネギが関係者を全員
粛清しちゃったのよね…鉄槌の騎士に変身して…

生徒は入院してうわ言のように『ハンマー怖い、ハンマー怖い』つ
てトラウマになって、教師はクビという結果になったのよね。そん
で、いじめを受けていた子と友達になって一緒に遊んだりしたわね
…あの子、元気かしら…

「もういいわよ…事実なんだし……」

「みなさん、反省してくださいね。傷つけるつもりのない一言でも傷つけてしまつて自殺なんてこともあるんですから…」

『はい…』

その後は、重苦しい空気の中授業することになり、4時間目まで2
・ Aはお通夜のように静まり返っており、新田先生も「いったい何
・ があった…」とぼやくほどであった。

・
そして昼休み…惚れ薬騒動？あるわけないじゃん

中庭にて

「ちよつと悪乗りしすぎたアル」

「確かに…拙者たちも人のこと言えんで御座るからなあ」

「だったら少しは勉強した方がいいんじゃない？こんなことしてないで」

ちなみに今は古菲と楓と組み手をしている最中である。

二人もバカレンジャーと言われてるからか、今回のことを重く受け止めたようだ…

「何か、もやもやしていて勉強する気にならないアル」

「それにしてもネギ殿は怖かったでござる」

「あれは魔王モードに入つたからね…流血沙汰にならなくてよかったわ…」

「そこまででござるか…」

疑念があるからか、二人の攻撃は昨日の様なキレが無くたやすく見切ることが出来る、それを受け流し二人の腹部に掌底を打つ

「ほいっと、私の勝ち」

「アイヤ〜」

「やられたでござるな」

二人はあおむけに倒れ、そのまま寝っ転がりながら

「勉強は苦手ヨ」

「しかしなあ…」

「はあ、だったら私が見てあげるわよ。そのくらい」

「「本当アルか（でござるか）！！」」

「基本くらいなら教えられるから、頼ってもいいわよ。わからなかったところはネギ先生に聞けばいいでしょ」

「そうアルな…よし！こうなったら次の期末テストにはバカとは言わせないような点数を取ってやるヨ」

「拙者もこのままなら、こうこういって留年という可能性もあるでござるからな…今のうちにしっかりしておくでござる」

「さて、やる気も出たことだしもう一セットやる？」

「ストレス解消にもってこいネ！行くヨ、アーニヤ！！」

「これが終わったら勉強教えてもらうでござるよ。アーニヤ殿！！」

そして、二人は立ち上がり、再び組手を開始した。先ほどとは違い、晴れやかな表情で向かって行った。

第19話 アンナ・ユーリエウナ・ココロウエの一日(後書き)

補足設定

アーニヤのレベルは大体、800辺りです。(デイスガイヤ基準で)
プラムはデイスガイア2ポータブルのDLCで仲間になり、歳が近い
ためかアーニヤとともに行動することが多く、人間の可能性に興
味を持った。

第20話 年上は偉いと言ってるけど、それに見合う能力が無いとねエ…（前書）

ふはは　！！ようやく出番です！最近出番が無くて主役（笑）状態
になっていた私の出番がやってきましたよ！！え？さっさと始める
？へいへい、わかりましたよ…それではどうぞ

第20話 年上は偉いと言ってるけど、それに見合う能力が無いとねエ…

ようやく本編で出番がありました秋葉原白花です。突然ですが…

原作ブレイクしすぎワロタwww

アーニヤって炎系の魔法を得意としてそれを力押しといった感じの
はずが、魔法と気なしの素の能力でも麻帆良四天王の二人に勝てる
くらいとかどんだけ…

ネギ先生もいい方になっちゃったよ。ただどあんな魔王の様な
雰囲気出すとは…だけど、なんか抜けているところがある気がする
んだけど…まあ、いつか。

そして、一番の驚きといえば…

バカレンジャーが勉強に力を入れているという事くらいかな…

すごいよ…この間の英語の小テストなんか古菲45点、楓52点、
アスナ67点…他の二人はいつも通りで合った。

そのせいで刹那が新たにバカホワイトに就任しかけたのは置いと
いて…

今までにない高得点をたたき出して、勉強を教えていたいいんちよ
や木乃香たちは狂喜乱舞。朝倉に至っては「カンニングしたんじや
ないか？」と疑うくらいだ。

そんな事で騒いでいたら新田先生がやってきたが、バカレンジャー
が高得点をたたき出したという事を報告したら目頭を押さえていた

…そのあとすぐに説教されたのはご愛嬌

そんな事を思い出しながら昼休み

「それにしても、世の中何が起こるかわからないもんだね」

「どうしたんだ？突然」

「マスターおそらく先日のテストだと思います」

茶々丸に指摘され、あゝと納得した様子のエヴァ

「確かにあれは驚いたな…一瞬、坊やが魔法を使ったんじゃないか？って思うくらいだったよ」

原作なら使った疑いはあるけど、この世界のネギ先生はしっかりしているからなあ…

「ネギ先生といえば、茶々丸、今朝ネギ先生となに話してたの？」

「放課後にマスターに取り次いでもらえないか」との事でした。

「直接言わないのは」HRの後にすいなくなってしまうて取り次げなかったの、クラスの方たちから私を通せば聞いてくれるのでは？」と、聞き、私経由で聞いてきたんです」

「一応、私の家に招待するつもりだが…いったい何の用なんだろうな」

「案外、呪いを解くために来たりして…」

もし、そうなら正式な解呪だから魔力抑制も解呪できるな。

「午後の授業ってなんだっけ？」

「今日は屋上で体育ですね…」

「私は適当に見学してるがな…」

適度に運動した方がいい気がするんだが…

・
・
・

体育はバレーをやるみたいです。

いつもと変わった点といえば体育の真田先生が風邪でお休みという事でネギ先生が監督の先生になったという事くらいですかね…

「あら、また会ったわねあんたたち…偶然ね」

そう思っていた時期が私にもありました。

なんかウルスラの制服を着た人たちがいるんですけど…

そういえば、幾つか原作イベントが無かったから忘れてたけど、こういう事もあったっけ…それに、着替えの時に裕奈たちが高等部の人たちと場所取りでもめたって言ってたし……

「なんであんたたちがここにいるのよ！」

「私たちは自習だからレクリエーションでバレーをすることになったのよ」

「わ、私たちもバレーよ！」

「あら…ダブっちゃったわね」

アホくさ〜どうせ、昼休みの仕返しとかその辺だろ…
バレーがしたかったらそつちの校舎ですればいいのに

「どうしました？みなさん…ってまたあなたたちですか…」

ネギ先生が遅れてやってくると、高等部の人たちを見ると顔をしか

めた。

「それで…何故、高等部の生徒が中等部の校舎にいるんですか？」

「それは…自習でバレーを……」

「なら、ウルスラの校舎ですればいいじゃない」

退屈だったし、正論を述べてみますか

「む、向こうの屋上が使えなかったのよ！」

「だそうですが？ネギ先生」

「少々お待ちを……」

そういつてネギ先生は携帯を取り出し、どこかへ連絡する。おそろしく、ウルスラの高等部だろう…

「あ、シャークティ先生ですか？ネギです。実は、ウルスラの…」
2-Aよネギ」どうも。高等部2-Aの生徒が自習でバレーをしに、中等部の校舎で来ているのですが…はい、確認お願いします」

いったん通話を切り、そのまま連絡を待つことにする。

数分後、着信が入り通話ボタンを押す。

「はい、どうでしたか？やはりですか…え？こちらに？はい、わかりました」

何やら予想外の事が起きたのか、少し驚いた表情になったネギ先生

「自習は事実でしたが、バレーをするなんて許可は出していないみたいです。加えて、ウルスラの屋上は使用可能との事です」

「これって立派な授業妨害ですよね。ネギ先生」

「そうですね。秋葉原さん…これなら停学もあり得なくはありませんね」

「……そ、そんな!?!」「……」

ウルスラの人たちは青ざめています。が自業自得でしょう。

明らかにこちらを妨害するつもりで来たのですからそれくらいの処罰は受けるでしょうね…普通なら

「ああ、後2 - A委員長と新田先生がこちらに来るそうです。おとなしくお説教を受けた方がよろしいですよ」

その後、新田先生と委員長の高音さんが来て、ウルスラの人は新田先生に連行され、高根さんはこちらに謝罪をして帰っていった。

その後は普通にバレーをやって終了した。

・
・
・

放課後、エヴァの家にて…

ちなみに私は別室で盗み聞き中

「どうも、エヴァンジェリンさん」

「それで、先生話ってなんですか?」

ネギ先生は普段はナギの杖を持ち、エヴァの家に来たのだが…

「確認しますが…あなたはナギ・スプリングフィールドに封印されたエヴァンジェリンさんでいいんですか?」

「そうだが?…それでどうする?私を殺すか?」

いきなり物騒なこと言うなエヴァは…まあ殺す気なら私も参戦するけど…エヴァの味方として

茶々丸も懐に手を入れて、いつでも戦闘できるように待機していた。

「ち、違いますよ！実は父さんにあなたの解呪を頼まれているんです」

「父さん…という事はナギが！？死んだんじゃないのか?!」「生きています。4年前に僕にこの杖を託して、封印を解除するようにお願ひしてきたんです」

襲撃の時期が若干ずれているな…私の影響なのかな？

「そう…か、だが、遅かったよ」

「というと?」

「ナギの登校地獄はもう解呪してしまったのだ」

「まあ、十年近く遅れたんですから当たり前ですよね…」

「だが、あの爺に魔力抑制の呪いも受けてしまったてな、正式に解呪したという事でその解呪の呪文をやってくれないか?」

「わかりました。登校地獄を解呪したら一緒に解除しちゃったという事でお願ひしますね」

そういつて杖を取り出して呪文を唱え始める。

「彼の者を縛る戒めの鎖よ…解けよ…解呪!!」

パキンツと碎ける音がして、エヴァから魔力があふれてくる。

「うむ、これであの花粉症やアレルギーに悩ませられる日々とはおさらばだな」

「真祖の吸血鬼なのに花粉症って…」

「魔力が落ちて身体能力が一般人並みになっていたのだよ…」

実際、花粉症になって茶々丸さんや高音さんに看病してもらったり、猫に障れなかったりといったことがあったなあ

「すみません、ダメ親父の性で、今度会ったらぶん殴っておきます」「いいさ、こうして解呪してくれたんだし…ああ、ぶん殴る時は思いつきりで頼むぞ」

ずいぶんとバイオレンスなこと言っているけど…どうでもいいか、育児放棄した罰として受ければいいと思うし

「とりあえず、何か不調がありましたら連絡ください。ああ、これ僕の携帯のアドレスと番号です」

「ありがとな、先生…お礼と言ってはなんだが、魔法関連ならいくつかアドバイスしたりしてやる。それくらいのことにはさせる」

「ありがとございます。そういえば茶々丸さんってエヴァンジェリンさんの従者なんですか？いつも一緒にいますか…」

「ああ、そうだよ。従者はクラスにあと一人いるがわかるかな？」

「案外、白花さんだったりして」

「さあ…どうだろうな」

感がいいなネギ先生、当たりだよ。まったく…

「それでは、そろそろ失礼しますね」

「ああ、休日には気軽に来るといいよ」

「それでは、友人と一緒に来てみますね…では、体に気を付けて」「さよなら、ネギ先生」

そういつて、ネギ先生は寮の方へと帰っていった。

「まったく、あの坊やはナギとは大違いだな……」

「ケケケ、確力ニナ：鳶ガ鷹ヲ生ムンダナ」

「二人の親父の評価はどんなんだよ……」

「約束を忘れる大ばか者」

「斬リガイノアツタ奴」

さいですか。

「マスター、今日の夕食はどうします？」

「どうせなら外食にする？」

「そうだな…呪いが解けたお祝いという事で超包子にでも行くか」

「酒ガ飲メルナラドコデモイイゼ」

しかし、封印を解いたとなると正義バカどもが騒ぐだろうな…もしもの時は gangslo 先生や シャークテイ 先生たちに協力要請するか…あの人たちは正義バカじゃないし、協力してくれればうれしいんだけどな…

第20話 年上は偉いと言ってるけど、それに見合う能力が無いとねエ…（後書

補足設定

体育の真田先生

ぶっちゃんけBASARAの真田幸村

一般教員・既婚者・広域指導員

なんて設定も作っちゃいました。これは息抜きという事で許してください。

それにしてもエヴァの呪いを解呪しちゃったから騒ぎ出すでしょうね…まあ、撃退する戦力は十分にあるから大丈夫かな？

それにしても、期末テストの所、どうしよう…

第21話 期末テスト (上) (前書き)

なんか最近短い気がするな

第21話 期末テスト（上）

どうもネギです。

教師になつて早数週間、他の先生に授業のことを聞いたり、小テストを作ったりと忙しい毎日ではありますが充実した日々を過ごしています。

そして、生徒たちは苦悩の表情を浮かべて、これを待ちわびているでしょう…

そう、期末テストです！

テスト2週間を切ったあたりから生徒たちはピリピリした雰囲気になり、図書館島を利用する人が増えてきています。うちのクラスの人たちも結構利用しているんですよ。

僕たち教師も期末テスト用の試験問題を作るために資料を確かめたり、授業の進み具合を報告し合ったりと割と多忙な日々を送っています。

しかし、僕はまだ実習生なので問題作成はしていません。代わりに生徒の授業でのアドバイスや試験範囲に合わせた授業をしていくことが今、僕にできること…

後は、生徒たちが頑張つて点を取るかですね

2・Aは万年最下位だけど、今年はバカレンジャーと呼ばれた人たちも今では努力して小テストで結構いい点数を取っているのが最下位はないかもしれませぬ。

しかし、油断してはいけませんね、僕もしっかり教えていけないと

……

・
・
・

学園長室

「ふむ、ネギ君も頑張っておる様じゃの」

「はい」

今、わしは指導教員のしずな先生にネギ君の評価を聞いておるところじゃ

評価はなかなかいい様じゃ。さすがは英雄の子といったところかの……
フオツフオツフオツ

「（恐怖の魔王と恐れられる反面）生徒からも慕われていて、授業内容も頑張っていますし、仕事の方も問題ありません」
「それ相応の努力をしているという事じゃろう」

何やらボソツと言っていたがよく聞こえんかったわい。

「この分なら指導教員としては十分合格点を出してもいいと思うのですが」

「フオフォ、そうかそうか。じゃが、もう一つ……彼には課題をクリアしてもらおうかの」

・
・
・

寮・大浴場「涼風」

「成績が悪かったらクラス解散で小学生まで戻る？」

トモエやナエ姉たちと寮での大浴場に入っていたら、バカレンジャ
ーたちは何やらありえないことを話していた。

ちなみに、桜子の英単語野球拳は起きなかった。ていうか、発言す
らしていなかった。魔王ネキの恐怖が根付いているみたいだな…下手な
ことをすればやられると…

朝倉辺りに話したら今度の新聞の一面を飾りそうな内容だな…義務
教育はどうした、義務教育は…

「あら？なにやら面白そうな事話してるじゃない」

「あ、白花」

「おいすゝ、んでクラスの解散だっけ？どんなことなん」

それから木乃香たちから聞いてみたが、麻帆良のクラスはクラス替
えが無いにもかかわらず、次の期末で最下位を取ったクラスは解散
するらしい。さらに、特に悪かった人は留年どころか小学生からや
り直したとかなんとか…

「ねーよ」

「え！？でも、私たちずっと最下位だから…」

「たとえそうだとしてもあり得ないわね」

そこに、ナエ姉が話に参加してきた。

「いくら学園長が怒っていても、そんな事すればPTAが黙ってい
ないでしょうね。前者のクラス解散はあるかもしれないけど、後者
の留年や小学生からのやり直しなんてありえないわよ。留年は高校
で赤点を撮ったりすればなっちゃうけど、小く中学校の9年間は何

とかなるはずよ?」

普通に考えればそうなるはずだが…ここは普通じゃないからなあ…

「しかし、そうだとしても最下位になったらまずいかもれませんね…クラスの解散は嫌ですし…やはりアレを…」

何やら、ブツブツと呟いているバカブラックの夕映であったが…多分魔法の本の事だろう。

「どうしたの夕映?」

「勉強会でもするアルか?」

「拙者と古もだいぶできるようになったでござるし、夕映殿も参加するでござる。」

本当に変わったな、バカレンジャーたち……

『もうバカとは言わせない』ってか

そう言えば、夕映とまき絵ってあまり勉強してないんだっけ…他の奴らを見るよしっぴかり勉強してるぜ…

「いえ、そんな事じゃなくて図書館島を知っていますね?我ら、図書館島探検部の活動場所の」

そんな事ってなんだよ、そんな事って……明日菜と楓それに古菲は若干顔をしかめていたが、そんな事お構いなしに話を進める夕映

「その図書館島の最深部に読むだけで頭がよくなる魔法の本があるとのうわさです」

「ないわ〜www」

「夕映〜さすがにそれはないよ」

「そんなものに頼って取った点なんて価値が無いアル」

「古の言う通りでござるな。そんなものに意味などござらん」

「フルボッコにされました」

当たり前だ、バカ野郎…普通に考えればそんなもの存在するわけないだろう…

普通に考えればだけどな…

「まあ、皆さんが言った通り、そんなものはないでしょうね。せいぜい出来のいい参考書か過去のテストの資料とかその辺でしょう」

「そうね、そんな便利なものはないでしょうね。あったとしても何か代償があるんじゃないかしら…」

「代償ですか？」

ナエ姉がそう言い放つとのどかが反応した。

「ほら、ゲームとかでもあるじゃない。寿命と引き換えに修行での能力アップとか知識を得るために片目を潰したりとか」

前者はどこかの育成ゲームの薬だね。後者はオデン神話だね。

「まあ、安易な方に頼ることなかれってね」

「そういつおいしい話には大抵、裏があるからね」

そう言い残して私たちは大浴場を後にした。

・
・
・

「やはり、勉強なんて退屈なだけですな」

シャーペンを机に置き、椅子の背もたれに体を預ける。

こんな事をするよりも未知の探求をしていた方がずっと有意義ですね。

ここ最近図書館島でも新しい発見もないし、同じような作業の繰り返し……

退屈です……

高等部や大学部の人たちはもっと深いところまで行けるのがうらやましいですね……

………行きますか

・
・
・
「それでここは」

私たちバカレンジャーは風呂から上がった後、いいんちよの部屋の勉強会に参加していた。

ちなみに教師役はいいんちよとアーニヤ、白花、後息抜きにと超も手伝ってくれた。

まき絵も置いて行かれるのが嫌なようだったから、参加することにしたらしい。

「まったく、あなたたちは少し頑張ればここまで行けるじゃないですか……」

いいんちよ達が作成してくれた小テストの回答を見てそんな事を呟いていた。

「ホントね…特に明日菜なんかもうバツチリじゃない」

そう言つて千鶴さんがテストを返すと10点中9点が当たっていた。

「むう、負けたアル」

「拙者も精進せねばなるまい」

「大丈夫ヨ、クーも楓もガンガン伸びてるしナ」

向こうは半分くらいが当たっていたみたいだ。

少し前の私ならこんなことしなかつただろうな…

でも、ネギがあそこまで言ってくれたし、いつまでもこのままじゃいけないなつて思つていいんちよに頭下げて教えてもらつてるんだよね。

そんな事を考えていたら夕映からメールが来た。

内容は図書館島に行かないか？との事だ。

諦めてなかつたんだ、夕映

周りを見てみるとほかのバカレンジャー組も届いたらしい。

「私は遠慮しておくけど、ほかは？」

「そこまで困つてるわけじゃないから遠慮するネ」

「同じく」

「ちよつと興味あるけど、こうして教えてもらっているのに魔法の本に頼るのは気が引けるからパス」

そういつて断りのメールを送ると、これの前に一通のメールが届いていた。

『図書館島より連絡、諸事情により以下の書籍が必要になったので今日中に至急返却してください』

「人ならわかれ総合基礎問題集」

「三重にすごい問題集」

「俺、この問題がわかったらあいつに告白するんだ…」

「首を吊って槍を刺しても学力を上げる本 後編」

「そんな教育しかできないのなら理想を抱いたまま溺死しろ」

以上です』

ゲ……『人ならわかれ』って私が借りている本じゃない……ていうか、もう閉館してるじゃない。

「なんでこんな時に…」

「あ、この死亡フラグ本、私ネ」

「『三重にすごい』って私の借りてるやつだ…」

「『そんな教育』は私だわ」

他のバカレンジャーと白花が借りている本をピンポイントに狙ったように返却要求…

作偽的なものを感じるわ…

「いいんちよ、ごめん。今日は」

「わかりましたわ、とりあえず解散しますからさっさと本を返してきてください」

そう言って、私たちは部屋に戻って件の本を持ち図書館へと向かった。

・
・
・

図書館島・入り口付近

図書館島の玄関は閉じたままで裏口から入ってくれとの事だった。裏の方へ行こうとしたら何やら言い争うような声を聞いた。

「駄目だよ夕映く危ないよ」

「大丈夫です。ちよつと深いところまで行くだけですから」

「そんなこと行って行方不明になったらどうするのよ!!」

何やら完全武装した夕映とのどか、ハルナがいた。

「何やってんのあんたら…」

「あ、白花。それにみんなも…」

「おや？もしかして図書館島に潜るのですか？」

「違うわよ。なんか本の返却の催促が来ただけ」

そういつて明日菜は持っていた携帯を三人に見せた。

「なるほど…では、途中までご一緒してもいいですか？」

「めんどいから好きにして…」

そういつて、裏口から入ったが司書の姿が見えなかったので書置きを残して本の場所を調べて返すことにした。

「さあ、目指すは魔法の本です！」

「え〜と、私たちの返却場所は…と」

「ゲ、かなり奥アルナ」

「面倒でござる…」

はあ…前途多難だな、こりゃ

第21話 期末テスト (上) (後書き)

本のタイトルはネタに走りました。

原作と違って夕映以外は魔法の本に興味を示していません。
他の人たちが向かった理由は少し強引過ぎたかな…

第22話 期末テスト (下) (前書き)

次回から空白期だ…何、書こうかな…

第22話 期末テスト（下）

図書館島内部：1F

バカレンジャーが図書館島の魔法の本に食いつかなかったからか、なんか強引な理由で図書館島に行くことになりました。

学園長あたりが仕込んだかな……

「どうしました白花さん」

「いや、なんでもない……」

やっぱりこの考え込むと顔に出ちゃう癖どうにかした方がいいかな？ それにしても、このバカブラック勉強する気ないんじゃないかな…… まあ、私にとってはどうでもいいけど

「それにしてもこの『人ならできる基礎問題集』の場所が地下29階なんて……ついてないわ〜」

「かなり深い場所じゃね？それ」

「ちなみに魔法の本は地下30階辺りにあるそうです」

狙ったような場所に安置してあるな……魔法の本

とりあえず、私たちは向こうから許可貰っているけど、夕映って不法侵入じゃね？

……私には関係ないから見捨てるか

「それにしても、なんだってこんな時に返却しなきゃいけないアルカ」

「たまたまこの本を借りてしまったのが運の尽きという事にしておくでござるよ。古菲」

それにしてもこの図書館島はいつ見ても広すぎ+本多すぎワロタwwだよな…

夕映の説明によれば…学園創立と共に建設された巨大図書館で世界大戦中戦火を避けるべく世界各地から様々な貴重書が集められ、蔵書の増改築が繰り返された結果その讒謗を知る者はなくなっているらしい…

そんなこんなで話し込んでいたらB3階…

「そろそろトラップがあるので注意してください」

図書館にトラップなんて作るなよ…まったく…それにしても…

「どしたの？白ちゃん、難しそうな顔して…」

「いや、司書はどんな感じで仕事しているのかな…って思ったただけだよ」

その言葉に”あゝ、確かに”とみんな納得したみたいだ。

こんだけのトラップに多すぎる蔵書から本を取りに来る図書委員は超人集団なのかもしれない。一般公開エリアでも、かなりの数の本があるしね。まあ、深部は魔法関係者が頑張ってるだけだと思うけどね…

「麻帆良の図書委員は化け物か?!」

「それ何処の紅い彗星?」

「そこ気を付けてです」

夕映が警告したが遅かったようだ

ふるえながらも進むまき絵が本棚と本棚をつなぐ板のあたりを通ろうとしたとき、床が開きそこから落ちそうになるが、リボンの本棚のでっぱりに巻き付け、難を逃れた。

「新体操部ってのはみんなああいうスキルがあるのかね」

「さあ?」

間接剣を持たせたらBASARAの半兵衛のような攻撃もできたりして…」

「それなら面白そうアルな」

何故ばれてるし…ていうか、古菲ってBASARA知ってるのかよ…

「拙者やアーニヤたちと一緒によくやっているのでござるよ。ちなみにさつきから考えていることがダダ漏れでござるよ白花殿」

「さすがにあんな器用なまねはできないよ」

「頑張ればできそうなのは私だけかしら…」

「大丈夫だ明日菜…私もそう思うよ」

一撃かましてオモイガ!

その後、様々な畏が図書館島探検部+ が待ち受けていた。

『ゆつくりして行ってね!!』 『当店自慢の一口餃子でございマー
ス。ゆつくり食べていってね』

「落ちそうになった本棚を蹴ったら、本と一緒に変な饅頭みたいの
が降ってきたネ!」

「ふむ…こし杏でござるか…お茶が欲しいでござるよ」

どこかの巫女と魔法使いの姿をした饅頭などが一緒に振ってきたが、
魔法使いが出した一口餃子の中身があんこだったことに絶望した。

B y 白花

•
•
•
大体B20辺りまで来てみたが、何やら湖のフロアに来てしまった
ようだ

「見事なまでに水浸しだな」

「不思議と此処の本は水につけてもふやけないのです」

「ところで…あの背びれは何なの?」

まき絵が指さす方を見ると、なぜかそこには背びれがあった。

「とりあえずこちらに害はないみたいですし、無視しましょう」

「触らぬ神に祟りなしってね」

「誰かがこっそり飼っているのかもしれないアル」

「あれ?なんかこっそり来てね?」

「とつととずらかるでござる!」

•
何を飼ってるんだよ図書館島…

道中本を戻しながら下りていき…

図書館島：B29

「よし、返却完了」

最後の『人なら（ry）』を返却し終えて地上の方へと戻ろうとする
と、夕映に止められた。

「ちょ！？どうせだったら魔法の本の方も手伝ってくださいよ！」
「めんどい」

確かに魔法の本が安置してあるB30まであと少しだけど、もう私
たちはこれ以上潜る必要はないんだけどね…

（白花、このまま放っておいたら魔法の本持ち出しかねないと思う
んだけど…）

（確かに、ああいうのってバレなきゃ大丈夫だろうって思うやつだろ
うし…）

一応、友人が犯罪者になるのは忍びないしねエ

「しゃ～ねえな、ついてってやるよバカブラック」

「感謝するです」

面倒なことにならなきゃいいけど…

・
・

図書館島：B30

「なんぞ？これ」

目標の地下30階にて、見たものは…

二つの石像と魔法の本らしき本が台座に置かれていた。

「ラスボスの間みたいだね」

「なんで図書館にラスボスの間がある」

それらを確認したのか、夕映は本の方へと向かって行った。

「ふふふふ、これで期末テストも……」

「夕映ちゃん、勝手に持ち出しちゃ駄目だよ」

私以外のみんなが止めようと、夕映の方へ向かっていくと突然橋が開いて下の板みたいなのに落ちてしまった。

「大丈夫か？みんな」

「大丈夫です。白花さん、しかし、油断しました、トラップの可能性に気づけないとは……」

トラップ云々はお前が突っ走ったからだろ…

『フォッフオッフオ、この本が欲しければ…わしの質問に答えるのじゃー！…！』

石像は本が安置されている台座の前に立ちふさがった。

「石像が動いた　…！！」

「ていうか、これツイスターゲームってあるんだけど！」

「お、落ち着くアル、そうだこつこついう時は素数を数えれば…2、3、5、7、11、13、17、19」

お〜お〜、パニくってるパニくってる
ていうか、古菲、素数できたんだ…

『では、第一問「DIFFICULT」の日本語訳は？』

「そ、そんなのわかる訳が…」

「むずいね」

「むずいアルネ」

「むずいで御座るな」

「これをツイスターゲームの要領で踏むのかな？」

バカブラック以外は、解けたみたいだな。

そして、各々が文字盤を踏み正解したようだ。

『むう、まだまだ続くぞい。ちなみに手を別の所に付けたら失格じやからな。第二問「CUT」の日本語訳は？』

「斬るね」

「いや、切るでしょ」

「どう違うのですか？」

「漢字が違うじゃない」

メメタア

(ry)

「あいたたたたくこの体制はきついわ」

「アスナ〜ひざが、ひざが〜」

「問題に作為を感じるです…」

なんかもう、色々絡み合っていて悲鳴がすごいわ、行かなくてよかったです

『これで最後だぞい、「DISH」の日本語訳は？』

「お皿アル」

「明日菜さん、まき絵さんお願いします」

「え」と、「お」

「ん」

「じ」「じ」

何故か「ら」ではなく「る」を踏んでしまった明日菜とまき絵…
何かしやがったな…あの爺

「おさる？」

『フォッフオ、不正解じゃ！！』

そういつてハンマーを持っていた石像がゲーム版を叩き割ろうと振り下ろしてきた。

「ちょっとアスナ何やってるのよ！！」

「いや、ちょっとミスっちゃって…」

「ゴメン」

「ギャー！…！ここを叩き割る気です」

「「＼（＾o＾）ノアル（でいぢる）」

「爆ぜろ」

そんな声が後ろから聞こえてきたと思ったなら、ハンマーが爆発した。

「何やっているんだ？マスター」

「お、煉じゃん、どうしてここに？」

「仕事だよ、この人の案内でね」

「授業の資料を取ってくるように言われてきました」

「ネギ先生チース」

煉と一緒にいたのはネギ先生の様だった。

「色々と聞きたいことがあります、先にあの石像を潰してから聞くとうましよう…」

何処からかゲートボールスティックのようなハンマーを取り出したネギ先生。

石像の方へ接近し、それで剣を持っていた石像に叩き付け、剣を破壊した。

「とりあえず、潰れる…」

石像の肩辺りに飛び移り、ハンマーを大きく振りかぶり、頭部に叩き付け頭が胴体に埋まってしまつて、首なし状態になっていた。

もう一体の石像は煉が対応したみたいで、カード型爆弾をこれでもかと投げつけた後…

「……………くたばれ」

そうつぶやいた瞬間、カードは一斉爆発して、石像は崩れ去っていた。

これで、原作みたいに地下で過ごす心配はなくなったわけだが…

「さて、みなさんちょっとOHANASHIを聞かせてもらいますよ」

今は目の前の魔王をどうするかだな……

・

その後は、外に出てお説教を喰らう羽目になった。

まあ、私たちは軽くお説教をされた程度で済んだけど、夕映は許可なしで入ったためかもう少し残るように言われたみたいだ。

次の日に、真っ白に燃え尽きている夕映の姿があった。

話しかけても反応はなく、ただ「ごめんなさい、ごめんなさい」と呟いているだけであった。

のどかがネギ先生に何かあったのかと聞いていたが、「何もありませんよ…そうなにも…ね」と黒い笑みを浮かべながらそう言っていた。

そんなこんなで試験をやって結果発表

「今回は最下位なんて言わせないわよ」

「大丈夫です。私だってやったんですから…赤点クラスを取ったら死にます。殺されます…ああ、チガウンデス、ネギセンセイ。ゴメンナサイ、ゴメンナサイ」

「とりあえず放っておくでござる」

「真面目にやってよかった」

バカレンジャーも今回までかな……

そう言えば、学園長は現在病院にて入院中……何でも、全身やけどと首のあたりをけがしたらしい。

「そろそろ結果発表ある」

「白花、あんたはこのクラスにかけた？」

この麻帆良では、期末の成績が発表され、順位が付くことから学校公認の賭け事になっていた。

ちなみにかけるのは金じゃなくて食券……

「大穴一点張り……ウチのクラスに食券50枚つて所だね」

「うちのクラスの倍率どのくらいだったっけ？」

「確か4〜5倍辺りだえ」

「ありがと木乃香、とにかく当たればすごい数になるわね」

「明日菜はどこ掛けたん」

「手堅くF組あたり？」

「いやいや、今回みんな結構頑張ってるんだし自分のクラスにかけるでしょう」

そんな感じで話していたら、モニターから順位が発表され始めた。

そして、1年の成績発表が終わり、2年の成績が発表された。

『では、第2学年のクラス成績をよい順に発表しましょう！
第1位2年……え、マジで！？ツと失礼しました。第1位2年A組です！！平均点は89.6！まじで何があった！！』

その言葉にA組生徒は歓声を上げた。

「おっしゃ……」

「掛けてよかった　！！」

「あれ？裕奈もかい」

「ハクカもうちのクラスにかけたんだ！いや〜これで食券長者だね
」H A H A H A

裕奈よ、そんなに騒いでいると……

「おい！裕奈たちはかなりの食券を手に入れたらしいぞ」

「よし、ゆ〜な！この喜びはクラスのみんなに分けてあげないとね

！！！！」

「よっしや　！！今夜は高級焼き肉店J○j○庵で宴会じゃ

！！」

「コンナハズハ　！！」

やっぱりね…まあ、こんなバカ騒ぎが2・Aの日常なんだよな…

「あ、白花さん」

「今日は、白花」

そんな事を考えていたら、ネギ先生とアーニヤがこちらに来ていた。

「1位取れましたね。先生」

「皆さんのおかげですよ。それですね、トトカルチエで大勝ちしまして僕一人では使いきれないような量なのでお祝いという事で皆さんに奢ろうと思ってるんですよ」

「高級焼き肉店J○j○庵っていうお店なのよ。それでクラスのみんなに連絡入れてくれないかしら…」

「わかりましたけど…いったいどのくらい掛けたいんですか？」

「ざっと70枚です」

私よりも多いや…しかし、もうみんなお祭り騒ぎだな…ウチのクラス
さて、次は吸血鬼事件だけど…いったいどうなるのかな…

オマケ

図書館島：地下

「それでね、うちの学年トップになったんだよ」

「すごいじゃないか、のどか。この調子で頑張っていきなさい」

どうも宮崎です。

みんなからは本屋って言われています。

いま私は煉と共に図書館島地下に住む生き物たちと戯れています。

動く饅頭（私が食べたのは粒あんだった）ゆつくりと湖に住んでいる
フェアリエルちゃんに餌をあげたり、本を読んであげたりしていま
す。

フェアリエルちゃんなんか○F8のダンジョンのリヴァイアサンのよ
うな外見をしているけど、甘えん坊で私があると頬ずりなんかをし
てきます。

「しかし、のどかはモテモテだな」

「えへへ〜」

『ゆっくりしていったね!?!』

少しして、ネギ先生が食券長者になってクラスのみんなを奢るとの
事だ。

「それじゃあ私は戻るね」

『もっとゆっくりしていったよ…』

『キユー…!』

「ごめんね、また遊びに来るからね」

『またゆっくりしていったね!?!』

『キユー…!』

そして、その場を後にしてJ.o.j.o庵に向かったのです。

第22話 期末テスト（下）（後書き）

のどか、奇妙な交友関係拡大。

地下で合宿？真面目なネギ先生なら出口見つけてさっさと帰還するでしょうね…

補足設定

ゆっくり

外見は東方キャラであって、なぜか図書館島に住みついている。偶にキモカワイイ？ネコとダンディな声のネコと結託して悪だくみを始めたりするが、基本的に無害…ゆっくりしていつてね！！

フアリエル

水竜の子供、アルビオレ・イマが偶然見つけた卵から孵った竜。アルビオレにはあまり懐いていない。水を操ることが出来、その気になれば大津波を発生することが出来る。ジョセフィーヌの部屋に水路がつながっていて、そちらの方でも交流がある。ちなみに性別はメス

第23話 薬味と運命と先行者のオフ会（前書き）

メダロット4のお着替えイベントでは声出して笑いました。

第23話 薬味と運命と先行者のオフ会

どこかのチャットルーム

薬味：ちわー^^

フ・アース：どうも、薬味さん。しばらく来てなかったけど、どうしました？

薬味：いや〜いろいろあったんですよフアさん

一気飲み：みなさんこんにちわ〜。あ、薬味さん久しぶりです。

薬味：こんにちわ〜一気飲みさん。

一気飲み：テストの後は羽伸ばしたいから来ました

薬味：テストというと期末テストですか…

一気飲み：こつちもテストあったけど全然できなかったorz

フ・アース：ドンマイ

薬味：テストの後ってなんかだるいですよね〜

一気飲み：それに、幼馴染が春休みにどっかいくぞって騒いでいて大変なんですよ

フ・アース：幼馴染だと！？けしからん！！

薬味：まあまあ、どうせなら気分転換にみんな顔合わせしませんか？

一気飲み：つまりはオフ会？

フ・アース：いいですね

薬味：それでは、みなさん3日後は空いていますか？

フ・アース：ふむ、その日なら大丈夫だね

一気飲み：僕も大丈夫ですけど、どこで集まります？

薬味：どこか希望はありますか？

一気飲み：じゃあ、麻帆良の方にできた『ウサオちゃん喫茶』なん
てどうでしょう…あ、これ地図xxxxxx.jp

フ・アース：おk

薬味：おk

薬味：それではまた…

フ・アース：じゃね〜

一気飲み：それじゃオフ会で…

「ふう…」

顔の知らない人たちだけど、話し合えるっていいなあ…

「あら、ネギ何やってたの?」

「ただのチャットですよ。アスナさん」

「ネギ君で、チャットとかできたんや」

「はい、最初はお姉ちゃんのPC使わせてもらってやっていました」

最もそれを使っでいて、どこかのサイトのショートカットがあつてそれを見たら僕のコス姿が掲載されていたんだよな…

「それで、3日後にチャット仲間とオフ会することになったんでその日はご飯はいいです。木乃香さん」

「わかつたえ。存分に楽しんできいや、ネギ君」

「あんた働いてばかりなんだし、しっかり息抜きしてきなさいよ」

確かに、教職についてから遊ぶ機会が無かつたしな…

ここらで息抜きしていかないと…

「ところでネギ、おめかしは必要かしら?」

「いやいや、いきなり女装姿はないと思うよ、アーニヤ」

「あら、残念」

こつちで女装するときには、アーニヤに手伝ってもらわないとつまくできないんだよね…

さて、3日後が楽しみだ。

・

・

・

3日後

ウサオちゃん喫茶

とりあえず今日は普通の格好できました。いきなり女装姿で来るのもあれだし

「いらつしやいませ、おひとり様ですか？」

「予約していた薬味といたしますが…」

「はい、5番テーブルでございます」

さてと、ほかは来ているかな…

そこには、コーヒーを飲んでいる白髪で無表情の少年と、ちょんまげの少年がいた。

「え」と、フ・アースさんと一気飲みさんですか？」

「そうですね、ひよつとして薬味さんですか？」

「ええ」

二人とも早いな、一応約束の時間の15分前なんだけどね

「お二人はいつからこの店に？」

「いや、今日が楽しみで約束の時間の20分前に来てしまったんですよ、薬味さん」

「僕はすることが無かったから一気飲みさんよりも早く来てしまったんだよね」

20分前より早く来ていたんだフアさん…

「それまで何してたんですか？」

「普通にコーヒーを飲みながら待っていたよ、薬味君」

「でもフアさん、それ何杯目だよ僕が来てからもう2杯くらいおかわりしていたけど…」

「なに、たったの7杯だよ」

多?! ひよっとしてこの人カフェイン中毒? しかも「たったの」って…

「ちなみに君たちはこういうのを飲むのかい?」

「僕はコーヒーより紅茶ですね。香りを楽しみながら飲む…まあ、たまにミルクティーにもするけどね」

「緑茶ですね。あれを飲んでると落ち着く気がするんですよ」

「なるほど…人それぞれといった感じか…薬味さん、僕も紅茶を飲むときもあるんだが、君のおすすめはなんだい?」

「ストレート、せめて一口飲んでからミルクを入れたり、レモンにしたりした方がいいと思うよ。まあ、故郷ではほとんどの人がミルクなんだけど、ストレートもいいと思うんだ」

「てことは、薬味さんの故郷ってイギリスあたり?」

「黙秘しますよ」

^{ウェールズ}故郷のみんなはさ、ミルクティーこそ至高だとか言っているけど、ストレートやレモンも飲んでみるやあの味覚馬鹿どもが…

「とりあえず何か頼みましょうか」

「そうだね、そろそろ昼だし」

「」注文をどうぞ」

そういつて1mくらいのウェイトレスがメニューを渡してきた。もしかしてメダロットなのかな…でもどうして喫茶店に?

胸部にはひらがなで「める」って書かれたプレートが付いていた。しかし、この『ウサオちゃんスペシャル』ってどんなんだろ…

食後に頼むとするか

「僕は和風ハンバーグにライス大盛りで」

「それなら僕はカレーとサラダ」

「カツカレーうどん定食一つ」

……何それ？

メニューを見てみると、うどんの上にカツカレーが乗っており、お茶碗に山盛りのご飯とみそ汁が付いていた。こんなのあったんだ…

これはどう食べればいいんだ？

カレーうどんを食べながら、カツでご飯を食べるのか？

それとも、カツカレーうどんを食べた後に残り汁をご飯にかけて食べるのか？

一気飲みさん、これをどう食べるんだろっ…

そんな事を考えていたら料理が来た

「お待たせしましたー」

しばらくしてウェイトレスが、各々の料理を運んできた。

僕は、ハンバーグに大根おろし付きで大盛りごはん、みそ汁と漬物
フアさんは、カレーにサラダといったシンプルな感じであった
一気飲みさんは、メニュー通りにカツカレーうどんに大盛りごはんとみそ汁だった

さあ食べるとしようか…

ふう…なかなかの量だったな
それにしても、まさか飲みさんは、カツカレーうどん定食をあんな
食べ方をするとはい…

「すごかったですね、飲みさんの食べっぷり」

「ああ、まさかあんな食べ方をするとはい…」「ゴキユツゴキユ

そう言いながら、コーヒーを飲み干すフアさん。

なんかこの人、逆○裁判のゴトー検事みたいだな…

「はあ〜い、みんなおいしかったかしら〜」

「あ、ユキエさんどうも久しぶりです」

会話に入ってきたのはこの店のマスターであるユキエさんだ。坊主
頭で口紅をしたナイスガイといった容姿だ。

どうも、一気飲みさんとは知り合いみたいで、麻帆良に来る前はよ
くユキエさんの喫茶店に行っていたらしい。

……彼女と

「あ、マスターこのウサオちゃんスペシャルお願いします」

「はいはい、すぐ持ってくるわね」

そういつてユキエさんは厨房の方へ向かって行った。

「食後のデザートか…よく入るね」

「いや〜おいしそうな物ならそれなりに入るからね〜」

「結構おいしいよ、『ウサオちゃんスペシャル』」

「一気飲みさんは美味しいと言っているけどどんなんだろう…
メニューには絵が無かったんだよな」

「は〜い、おまたせ〜」

お盆には大もりのパフェがあった

これは期待できそうだな…

「いただきます」

む、これは…

「おいしいです。このあま〜い感じにキムチのピリリとした辛さが効いて、隠し味のキムチがパフェの甘さを引き立てていますね」

「うふふ〜これはね、餡子とプリンとチョコとキャラメルとバナナとキムチのた〜っぷりつまった甘辛い初恋の味なのよ」

それにしても初恋か…僕の初恋はアーニヤでいいのかな？でも、どつちかというところがあるのが強いと思うんだよなあ

「それにしても、イツキちゃんの友達はかわいい子ばかりね」

「ありがとうございます」

「それでさ、食後にちよつと来てくれない？」

…まあの後は特に予定が無いからいいかな？でも、ほかはどうだろう

「僕は構わないけど、二人はどうする？」

「別にかまわないよ」「ゴキユツゴキユツ」

「まあ、いつか」

まだ飲んでるよフアさん…

そして、食べ終わり、店の更衣室に案内された。

B G

M：おきがえちゅっヨ

「それで…君たちに似合うキャワイイ服があるんだけど…！」

そういつてユキエさんはフリフリの服を取り出してきた。

やはりそうか…なんとなくネカネ姉さんやアーニヤと似たような気配がしてたんだよな…

「…そこまでよ…！」

更衣室の入り口あたりから、アーニヤと…誰？え〜と、その他大勢が乗り込んできた

「ネギのコーディネートだけは譲れないわ…！」

「フェイト様をいじれるのは私だけです…！」

「イツキのお着替えは私の役目よ…！」

アーニヤはわかるけど、ほかはどちらさん…

「暦何故ここに？」

「アリカ、どうしてここが!？」

どうやら二人の関係者みたいだね…

「なんだかおもしろそうな気配がしたのでついてきました」

「アタシを出し抜こうなんて百年早いわよイツキ（相手が女子かど

うか見ておきたかったのよ！！イツキは私の婿！！」

なんだかカオスな予感がしてきたんだけど…
初手にアーニヤが動き始めた

「それよりウサオさん」

「ユキエよ」

「ネギに似合うのは…この服よ！！」

そういつてアーニヤはハンガーから紅いワンピースを取り出した。

「やるわね…でも、負けない！！」

そういつてユキエさんは小道具なんかを入れるような引出しからリボンを取り出して髪に結びつけた。

「ウサオさん、ゴスロリ服有りますか？」

「G列のハンガーにあるわよ！それと私はユキエよ」

「どうやら向こうも動き始めたみたいだ…ああ、ファさんいつまで」
「ヒー飲んでるんですか…」

「落ち着くまで」「ゴキユツゴキユ」

一方、一気飲みさんは、メイド服に着替えさせられていく

「やっぱり、イツキはこの恰好が一番似合っているわよ」

「うれしくない…」

「何よ！男らしくないわね」

「なら、せめて男として扱ってくれよ！！」

ああ、この人はまだ一線を越えていないのか…

「飲みさん、この状況でありがたい言葉を聞かせてあげましょう」

「へ？」

「激流に身を任せ同化しろ」

「嫌だ〜！！」

「初めは僕も嫌でしたけど、慣れればどうってことないですよ」

「慣れちゃ駄目でしょ！！」

「あきらめろ」「ゴキユゴキユ

フアさん飲みすぎワロタwww

そんなこんなで着替え終わってしまった。

僕は明日菜さんみたいに片方リボンで結ばれ、髪は三つ編みで後ろにまとめて、赤いワンピースを着た格好だ。何故か、さらしを付けていて、アーニヤいわく「チラリズムがたまらねエ！！」との事らしい…

フアさんは、逆十字の柄が入ったアシンメトリーのオーバースカートの付いた凝ったスカートに、黒と白の編み上げドレスに薄紫色のバラの飾りがついた黒のロングブーツを履いている。ヘッドドレスが付けばどこかの第1ドールのような容姿になっていただろうな…

一気飲みさんはメイド服で、ちょんまげを結ぶところがリボンになっている、フリル付のカチューシャまでついていた。

「シクシクシクシクシクシク…」

「人生諦めが肝心だよ」

「この程度の事でなくな…」「ゴキユツゴキユ

お前はいつまで飲んでるんだよ…

そんな事を考えていたら、突然更衣室の扉が開いた。

「ユキエさん、メルの調子はどう…」

いきなりここへ来たのはうちのクラスの秋葉原白花さんだった。
白花さんは、なんだか生暖かい視線を僕の方へ向けた

「先生…そういう趣味で…」

「え〜と、これは…」

「黙っておきますよ、それでは失礼します…」

そういつて、白花さんはどこかへ行ってしまった…

まあ、女装もいいと思うからばれても別に問題ないけどね…

「大変だね」「ゴキユツゴキユ

「いつまで飲んでるんだフアさん」

第23話 薬味と運命と先行者のオフ会（後書き）

フェイトは重度のカフェイン中毒になりました。

ユキエに関しては4のユキエをイメージしてください。

アリカと一気は付き合っています。

ちなみにメルはM I D型メダロット「ロイヤルメイド」で、工学部の協力という事でここで働いています。

第24話 機械乙女が見る夢は… (上) (前書き)

遅くなって申し訳ありません。

ネタが尽きて考えていたら一週間近くたってしまいました。

第24話 機械乙女が見る夢は… (上)

これは絶対夢である。

私こと、トモエはお嬢の身の回りのお世話が仕事である。

本日は、新入りのメルの様子を見に行ってきたらしいが、顔を真っ赤にして帰ってきた。

なにやら「あんなに可愛いとは／＼」とブツブツ言っていたが、何があったのだろう…

その後は、いつものように買い物をしたり、お風呂に入ったりして就寝（私は休眠モードです）して、一日が終わったはずだが…

目が覚めたら人間になっていました。

ついでに言えば、今いる場所もどこかは知らない学校で、机に突っ伏していました。

状況確認…

この世界の情報…なぜかわかる。ISという兵器があり、女性にしか使えないため女尊男卑の世の中になってしまったらしい。

現在地…自分の生徒手帳を見つけ、ここはIS学園の1年1組

自己認識…名前 秋原 巴 身長160辺り、体重不明、髪と目の色は黒、出身国日本、髪は肩までである黒髪であった。

ISに関する知識…教科書読んで覚えるか

所持IS…無し、ただし、学校の方から訓練用ISである打鉄が使える

こんな所かな…

とりあえず、これは夢としておいていずれ起きると思うからそれまで目立たないように過ごすとするか…

気になる事といえば隣の人が男性くらいかな…

うん、問題なし

・
・
・

教師らしき人物が来て、HRが始まった。山田麻耶…逆から読んで
もやまだまや

どうやら自己紹介のようだ。

私にとっては好都合だな、これでクラスの人たちの情報を得られるわけだし…

「それじゃあ、秋原さんからお願いしますね」

………って私は最初の方が。「あ」行だし

「えっと、秋原巴です。趣味は家事や読書、それに鍛錬ですね。一応、剣道と弓道をやっています。以下略…よろしくお願いします」

そして、席に座り次の人へと回っていった。

次は、噂の男性でISを起動させた織斑一夏だ。
なんかボケ〜っとしてるようだし、聞いていないな…
ったく、起こってしまったことは仕方ないんだから、しっかりし
てよ……

「お前の番だよ、色男」

「へ？俺！？」

「ご、ごめんなさい、あの、あのね、自己紹介、『あ』から始まっ
て今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己
紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っっていうか自己紹介しま
すから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対です
よ！」

そういつて教壇から身を乗り出して両手を合わせてお願いポーズの

山田教諭

畜生…でかいな、私は…少しはあるんだ…

……貧乳はステータスだ、希少価値なんだきつと

あれ、なんだろ…・目から涙が^{オイル}……

「山田先生、落ち着けるように手に人書いて食べばいいじゃないで
すか？」

「あ、そうね、え〜と人つて書いて……」

ジョークのつもりで言ったんだが…ずいぶんとあがり症なんだなこ
の先生

…ガス抜きさせるか

「ところで山田先生」

「あ、はい、なんでしよう」

「座布団は何枚ですか？」

クラスの大半は頭の上に？マークが出たような気がする。ネタを知っている人たちはオイオイといったような表情だった。

「すみません、座布団は出せません」

「そうですか…じゃあ、色男、お題は妖怪だ」

「え！？いきなり、え〜と…父さん！妖怪が出たよ！！」

「なんか妖怪…か？」

「先言うなよ！」

「サーセンwww」

ガス抜きしすぎたかな…

そんな事を考えていたら、背後から敵意のようなものを感じ、回避行動をとろうとしたが…

パンツッ！！

乾いた音が響き渡り、私と織斑は痛む頭部を抑え、後ろを振り向くと黒髪の女性がいた。

「げえ！？関羽」

ガスッ！！

あ、今度は織斑が出席簿の角で叩かれた

「誰が三国志の武将だ。バカ者、さっさと自己紹介をしろ」

「はい…え〜と、織斑一夏です。よろしく願います」

そこで一旦口を閉じる織斑…周りは黒髪の教員に目が行っている人がいくつつかいるが、女子は男子に興味津々、その視線には『もつと喋ってよ』や『それだけじゃないよね』、『そんな事よりおうどん食べたい』的な意味が含まれていた。それから数十秒沈黙していた織斑は、ついに口を開き

「以上です!!」

ガタツ!!と、折原の発言に期待していた者たちはコントのごとく一斉に椅子からずり落ちた。趣味とか好きな者とかを喋ればいいのに…山田教諭も涙目の展開である。

もちろんツツコミも忘れてはいないようだ。織斑はもう一発黒髪の教師の一発を受け悶絶していた。

「もう少ししました事をしゃべらんかばか者が」

「いや、だつて千冬姉」

「織斑先生と呼べ」

あ、もう一発くらつてらあ…それにしても、織斑?こいつ(一夏)の親族か何かかな…

「先生。もう会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田くん。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

そういつて黒髪の先生は、山田教諭と会話を交わし、教壇へ立った。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者

に育てるのが仕事だ。

私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来ないで指導してやる。

私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

うわ、何たる暴君宣言

麻帆良の教師の中じゃこういうタイプはいなかったな…

そして、いったん静まり返ると、次の瞬間一気に騒ぎ出した

「キヤー!!!生千冬様よ」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

以前、お嬢の弁当を届けた時に訪れた2-Aの雰囲気と似ているな…最近先生が変わって前より騒がしくなくなったなあ…
っていうか、さっきからうるせえ

「毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ……私のクラスにだけ集中させてるのか？」

しかし、紺だけ黄色い悲鳴を受けているとなると、有名人か何かかな？

「養豚場の豚を見るような目で罵ってください!!」

「そして、いつの日かデレを見せてください!!」

「ハラシヨー!!」

テラカオスWWW

さすがにそんな事したらやばいでしょ…
なんか一夏（織斑だと被るから名前で）は驚愕の表情だが、仲悪いのか？

そんなこんなで1限目終了し、休み時間へ

・
・
・

全く一夏を観察していたけど見ていて飽きないな

なぜ自分はここにいるのかか思っていたように表情を変えていたりと言った感じだった。

「だいじょぶなん？織斑君」

「え?!あ、えつと秋原さん?」

「いや、なんかスパスパぶつ叩かれていたようだったからねエ」

「あはは...まあ、だいじょうぶだよ」

「そか、それにしてもとっさのネタに反応できるとはねえ」

「滑つちまつたけどな」

「確かにwwww」

そんな感じで他愛もない話をしていたらポニーテールの人がやってきた。

「一夏、ちよつと良いか?」

「あ、筈か?」

知り合いみたいだな...その後、言葉を交わして廊下の方へと向かって行き、休み時間は終わった。

「であるからして、ISの基本的な運用は国家の認証が必要で

あり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

とりあえず、内容は理解できるから助かったな。それにしても分厚かったな…参考書

お隣の一夏さんは顔をしかめ、教科書に穴が開くくらいガン見して冷や汗のようなものを流しているけど…わからないのか？

「織斑君、どこかわからないところがありますか？」

さすがにこんな態度をとってたら気づくだろっな

「えっと、聞いてもいいですか？」

「はい、そのために先生はいるんですから、それでどこがわからないんですか」

「全部わかりません」

え、全部？

山田教諭もこの衝撃的な一言にフリーズしちゃったみたいだね

「……織斑、入学前の参考書きちゃんと読んだか？」

今だフリーズ中の山田教諭に代わって、織斑教諭が聞くと…

「古い電話帳と間違えて捨てちゃいました」

спан！

まゝた出席簿の一撃を喰らってらあ…

「必読と書いてあったらう馬鹿者が……」

「……すみません」

「再発行してやるから、一週間で覚える。いいな、返事は受け付けていないから」

うわゝあの分厚い参考書を一週間かい、大変だねエ

ま、自業自得って奴だね

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに凌ぐ。そういつた『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解が出来なくても覚える。そして守れ。規則とはそういうものだ」

確かに、展開してなければわからないし、飛行可能と来ている。

都市部で奇襲なんてことも可能だろうな……もしくは自爆とか……
そんなこんなで授業終了

・

・

・

休み時間

「ちょっと、よろしくて」

なんだ？お嬢様口調の金髪ドリルがお隣さんに絡んできたみたいだ
けど……

もててるねエ織斑君

「何の用？」

「まあ、なんて返事ですの。私に声を掛けられるだけでも光栄ですよ。それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

態度からして良い所でなんだろうけど、絡む意味が分からないな

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「私を知らない！？ あなたはどうなんですか！？」

何故こちらに振るし…面倒事に巻き込まれた気がするんだが…
え〜と、この金髪ドリルは…金髪…ドリル…金髪…ドリル
ドリルといえばグ○ンラガン

「カミヤ？」

「誰ですか…それは」

どっちかというドリルはシモンか…いや〜失敗失敗

「んで、誰？」

「まったく…私の事も知らないなんて非常識な…私はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生にして入試主席ですよ」

へえ〜、だから？

「ふん、所詮は極東の島国ですわね。このわたくしのことさえ知らないだなんて。本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡…幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはらっきーだなー（棒読み）」

「……馬鹿にしていますの？」

そりゃ初対面でこんな態度で出られたら馬鹿にしたくもなるもんだよ

「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

ああ、なるほど…女尊男卑主義なのかいけど、その考えはいつまで持つのかねエ

「入試って、あれか？ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は？」「すごいじゃないか織斑君」

試験の教官を倒せた人ってのはこのセルビナさん以外にもいたらしいから一応すごいと言っておこうか

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

だいぶヒートアップしているみたいだけど…

そりゃあ、試験管を倒した人なんて一人や二人いるんじゃないか？もしかしたらもつといたりして……

「まあ、落ち着きなさいよ、セルビナ・オレカタタさん」

「これが落ち着いていられますか！後私はセシリア・オルコットで キーンコーンカーンコーン

クツ、もう時間ですか……また後で来ますわ！逃げないことね、よくって！？」

訂正を加えたところに三時間目開始のチャイムがなり響き、セシリアはまるで三下が逃げる時のような台詞を残して席に戻って行った。

「テラ三下wwwwww」

「言つてやるな…ああいうのには関わらない方がいいしね」

「そだね、織斑君」

「一夏でいいよ、秋原さん」

「んじゃ、私も巴でいいし」

そんな感じに駄弁っていたら織斑先生が来た。

それにしてもさっきのセドリック・俺ツエーwwwwさん、やっかい事を持ってきそうな気がするけど気のせいかな？気の性であってほしいなあ…

第24話 機械乙女が見る夢は… (上) (後書き)

下は明日投稿します。

第25話 機械乙女が見る夢は… (下) (前書き)

オリISあり

第25話 機械乙女が見る夢は… (下)

「それでは、この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

今回は織斑教諭が担当みたいだな…

メダロットだったころなら症状やら変化やら特殊やら格闘、射撃、メダフォースといういろいろあつたけど似たようなものなのかな？

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦の代表者を決めないといけないな」

代表者？学級委員みたいなものか…

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

「では候補者は織斑一夏…：他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

やっぱりその方が面白そうだからか、一夏君が推薦されたみたいだね…

なんか呆然としていた一夏君だったが、やっと再起動して立ち上がった。

「お、俺!？」

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちよっ、ちよっと待った！俺はそんなのやらな」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。」

選ばれた以上は覚悟をしろ」

「ぐ…ならおれは秋原さんを推薦するぜ！」

「なんでだよ……」

私はISなんて持っていない一般人だぜ？モブなんだぜ？無茶いうなつつうの

「拒否権は？」

「無い、諦める。他は？」

オーマイガッ

全くめんどくさいことに巻き込まれちまったい
そんな事を考えていたら、甲高い声が鳴り響いた

「待つてください！納得がいきませんわ！」

パンツと机を叩く音。

振り向くと、そこにはセシリア・オベリスクの姿があった。

「どしたの？オベリスクさん」

「さっきよりひどくなっていますか？私は巨神兵じゃありませんよ…っと、そんな事よりそのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

「ぜひとも味わってくれ、もしくは国に帰ればいいんじゃない？」

そういえばこんな迷言があったな

いやならやめてもいいんじゃないぞ。b y マート

「な、なんですって　！！」

「無理に來ているならさっさと帰って風味をブツ飛ばした味氣のない料理でも食べてればいいじゃん」

「ありえませんか、実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に來ているのであつて、サーカスをする氣は毛頭ございませんわ！」

これは、イギリスが日本にケンカ売っているのと同意義なのかな？
もうぶん殴つていいよね？ok？答えは聞いていないけどね…

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

後進的つて言っているけどISつて日本の篠ノ之　束が作ったんじやなかつたけ？

「イギリスだつて大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……！！？」

ナイス援護射撃だ。織斑君

「言つてやるな一夏君、英国人は紅茶にミルクを入れないと飲めない、野菜の風味を飛ばさないと食えない、焼くことしか能がない味覚バカなんだよ」

まあ、本当は食材本来の味を残さないほど加熱する調理法が他国人には好まれないからである。（wikiの一部抜粋）

その後、売り言葉に買い言葉といった感じになり、なんか知らないけど私と一夏に決闘を申し込まれて、一週間後に戦う事になった。

・
・
・
色々あって一週間後…

え？合間の事も書け？え〜と、一夏が寮で放棄に撲殺されそうになつてるところを笑いながら見物したり、先輩が「IS教えよつか？」って言ってきたと一夏が「お断りします（。）。（。）。（。）」ってやって、ポカーンとしている先輩にm9（^ ^）プギヤ
ーしたくらいかな…

「それにしても、一夏のIS遅いね」

一夏のISは政府の方が専用機を用意してくれるとの事で、打鉄は私の分だけ持ってきていた。

「織斑先生、本当に大丈夫なんですか？もうすぐ開始ですよ？」

「あわてるな、大丈夫だろ…たぶん、きつと、」

「初期化や最適化処理とかはもう実践でするしかないか…」

言いよんどるところが信用できませんね…一夏ドンマイ

まあ、その点私のは軽く武装を追加した程度だから大丈夫だけどね追加した武装は弓矢セットで、矢には火薬のおまけつき。此方の任意のタイミングで起爆可能な一品だ

武装名は『首落とし』物騒な名前だよ…首どころか頭部がなくなるんじゃない？これ

「おっ！織斑君つ織斑kゲホゲホ…コヒューコヒュー…」

え？！何その呼吸音かなり危ない音じゃね？！

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す〜は〜、す〜は〜」

「はい、そこで止めて」

止めるなよ！？ああ、山田教諭の顔色がどんどん蒼くなっていく…

「　　〜っ！〜っ…！！」

どのくらい耐えられるのだろうか…教師だからそれなりに持つか？

「ぶっはあ〜！まだなんですか？」

「目上の者に敬意を払え馬鹿者が！！」

スパァン！！

「オウフ」

自業自得だ一夏…

「それですねっ！来ました！織斑くんの専用IS！」

「！？、やっと来たんですか！？」

「はい、後なんかついでに秋原さんの専用機も来ているんですよ」

Why?

「私に？」

「はい、なんか政府がついでにこの機体を押し付けようという話になったらしいんです」

押し付けるといって、とんでもない物かいわくつきのものものどっちかな…

「私が先に相手することになっているから一夏君は相手をしている間に第一移行を終わらせれば」

「巴は？」

「戦りながら設定する」

そして、機体を見してみる

それは、日本の鎧武者の様なものだった。

付属には一振りの日本刀と折りたたまれた弓だった。ただし、弓はアーチェリーのような器具が付いていなかった。

現実の私の体に近い感じであった。

「この名前は？」

「えっと、『巴御前』です」

・
・
・
ISを纏い、ピットから飛び立つ…

しかし、私の元の人と同じ名前とは…

この機体は脚部に飛行機能（スラスタ等）が集中しているみたいで、胸部に防御機能、頭部にハイパーセンサーを搭載した機体で、機体のバランスを取るのに手こずる（下手すれば犬神家になるらしい）ためにお蔵入りした機体らしいが、ハヤブサで慣れているから

問題ない

「やっと来ましたね…」

そういえばもう向こうが出撃してから10分近くたっているな
セルゲイ（セシリアですよわ！！）セシリアのIS『ブルー・テイ
アーズ』は射撃を主体とした第3世代。BT兵器とかいうファンネ
ルもどきのデータをサンプリングするために開発された実験・試作
機だとかなんとか…

「めんごめんご、業者の方が遅かったのと想定外の事態が起きただ
けさ」

「ま、まあいいですわ。最後のチャンスを上げましょう」

「いや、そういうの良から、別に勝てる戦いで賭けをするなんて
大人げないし」

「あなたは私より実力が上だと申したいんですか？」

「あら、そう聞こえたかいサーセンwww」

全く短期なのかセシリアは小刻みに震えているよ…

「もう許しませんわ！！落ちろカトンボ！！」

そう言って手に持っていた巨大なレーザーライフルの銃口をこちら
に構え、引き金を引く
どこのシロツコだよ…

そう思いながら、横へスライド移動するように体制を保ったままレ
ーザーを避ける

続けて、レーザーを打ってくるが、同じように横移動で避け続ける

この距離じゃあ回避は無理か…機体が持つかねエ

そして炸裂するミサイル…巴のいた場所を中心に煙が立ち込める

「所詮はこんなものでしょう…まあ、頑張った方ですわ」

セシリアも勝利を確信し、BT兵器を下部に戻し、ピットへ戻ろうとする。

しかし、センサーから警告が入り、再びライフルを構える

「OK…」

煙の中から声が響く

「レッツパアライイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

煙が晴れた時、鎧が肌に吸い付くようになり、ところどころ見えていたISスーツが鎧で完全に見えなくなっていた。腰に携えていた弓も上成節と下成節が展開され身丈ほどの弓になっていた。

直後に初期化と最適化が終了したことを告げる画面が表示された。

「まさか、あなたは第一移行していなかったんですか?!」

「なじむ!実になじむぞこの機体!!」

「って、聞いてますかあなたは!？」

「ハッハー!!最高にハイっ!!て奴だ!!ふははははははは」

セシリアは巴の変貌に手を止めていたが、我に振り返りライフルの引き金をひき、レーザーを放つ

「無駄ア!!！」

放たれたレーザーを腰に携えていた刀 奉公 で切り払う

「なら、ブルーティーズ!!！」

B T兵器を巴の周囲に展開して一斉射撃をしようとするが…

「装甲射出!!！」

B Tが攻撃するよりも早く全身の装甲が射出され白装束を纏った状態になり、射出された装甲がB Tは撃ち落としてく。

突然の出来事に対応できず、動けないでいるセシリアに弓を引き絞る。

「JackPot!!！」

放たれた矢はセシリアに直撃し、爆発を起こす。

そして、終了の合図のブザーが鳴り響いた。

そして、視界が真っ白になっていった…

・
・
・
目を開けるといつもの低めの目線とお嬢の部屋の光景…

設計図や書類で散らかっている机

いつものPSOとゲームソフト

そして、寝坊助なお嬢

てびつくりしたよ。
それにしても異世界か…

「そう言えば、白花ちゃんの所ってもう少し進めばお祭りがあった
っけ？」

確か、麻帆良祭だったかな

……よし、その時になったら行って来よう。

「そうと決まれば、早めに有給取らないとねえ、ミストラル？
有給貰いに行くわよ」

従者も一緒に誘わないとね
ああ、その時が楽しみだ……

第25話 機械乙女が見る夢は… (下) (後書き)

一応設定

巴御前の単一仕様能力^{「フォース」}に搭乗者に合った力を引き出し、様々な超常現象を発生させることが出来る。(様はメダフォース)

第26話 戦前の日常（前書き）

バイトのことなどで遅くなりました。
申し訳ありません。

第26話 戦前の日常

夕日の砂浜…そこでは紅い髪の男を追いかける幼女の姿があった。

「あはははは〜待て〜ナギ〜」

「ハツハツハ〜捕まえてみやがれ〜」

幼女ことエヴァは杖を振り、氷の矢を赤い髪の男、ナギに放ち、ナギはそれを雷の矢で相殺していく…

「さつさと当たれや！この鳥頭が！！！！」

「しつげえんだよ！！吸血鬼！！」

氷と雷で辺りは焼け野原と氷柱が生えている程度の事だった
そんな感じで辺りを破壊しながら移動していったが、ナギの足元が突然抜けてネギとニンニクが入った落とし穴に嵌った。

「んな！？俺が掘った落とし穴だと！？」

「こんなこともあるうかと用意しておいたのだよ…さあ、小便は済ませたか？神様にお祈りは？穴の底でガタガタ震えて命乞いをする準備はOK？」

「あー、すまん。エヴァンジェリン俺が悪かっただから止めてくれないか…」

「だが断る。『おわる世界』！！」

「アッー！！」

落とし穴を中心にナギの氷像が出来上がり、ゴングが鳴り響いた。

『やりました！エヴァンジェリン選手の終わる世界が決まった！

！これにより第1回積年の恨みを晴らそう杯の王者になったのは…
…エヴァンジェリン・AK・マグダウエル選手に決まりましたー！
『！』

ワ！！

実況の勝利宣言でギャラリーはここぞとばかりに騒ぎ出した。

「そこまでだ！！」

しかし、フードをかぶった人物が乱入してきた。

「なんだ…貴様は、こっちは勝利の余韻に浸っているというのに無
粋な奴だな」

「ふふふ、ナギごときに勝ったからと言って良い気になるなよ…奴
は四天王の中で最弱の存在よ」

「貴様…何者だ？」

「私の名はネギ・スプリングフィールド、」

「さあ行くぞ！ネギー！！」

「さあこいエヴァンジェリン実は私は一回刺されただけで死ぬぞ！
」！」

こっして恨みを晴らそう杯最後の戦いが始まる…

『愛読ありがとうございます』

・
・
・
「ぶっはあー！！」

……ひどい夢を見た

目が覚めて最初に思ったことはそれだった。

なんだあの打ち切りマンガみたいな展開は…確か昨日やっていたアニメの内容みたいだな。確か、ソードマスターポテト…いやトマトだったか？微妙に配役を変えてあったけど………だけど『積年の恨みを晴らすう杯』ってなんだよオイ…ああ、もう考え出したらきりがない…

一体何時だ？

…午前3時か

微妙な時間に起きてしまったな…

寝直すか…

そして、再び布団をかぶって寝ようとするすると携帯が鳴った

誰だ？こんな時間に…

ピッ！『おお、エヴァ夜遅くにすm「死ね」ふお！？』プッ…ツーツーツー

つたく、ふざけた爺だな。今日も学校なんだからこんな時間に電話なんかするなよボケが…

そして数十秒後に再び携帯が鳴り始めた。

「要件言っつてさっさと終わらせろ爺」
『ネギ君と闘つてくれんか』

ネギと？ああ、英雄の息子に私を倒したという実践と実戦の経験を
積みませよつという魂胆か

「一つ聞いておく…別に血を吸い尽くしてもいいんだよね？」

『ふお！？嫌、さすがにそこまでは…』

まあ、そこまでするつもりはないが、

「なら、こちらの要求を飲んでもらうぞ」

『どんなものかの？』

「なに、簡単なことだ。私を卒業後、自由にしてくれればそれでいい。ああ、今のクラスはきちんと過ごすから安心しろ」

そのまま就職という手もあるな……それとも、進学してみるというのもいいかもな…

いや、また旅に出るといのも…

『ぬう…わかった。登校地獄ももう無いしそれくらいならいいじゃろ』

「交渉成立だな。それじゃあ、桜通りの吸血鬼の噂に乗じて事件を起こすから噂の方を頼むぞ」

そして通話を切り、ベッドに寝転がりネギとの対決のことを考える。

あいつ自身も強く、並の相手なら負けはしないだろうな……だが、あいつの全力は見たことが無い。ちょうど戦ってみたかったし、いいタイミングで連絡してくれたなあ爺。

とりあえず、朝になったら連絡を入れておくか。

・
・
・

教室

「3年！A組」

『ネギ先生

っ！！！』

「少しポリリウムを下げなさいあなたたちは…」

どうも、白花です。3年になり新学期早々テンションMAXのクラスに苦笑する今日この頃……

それにしても朝からエヴァはなんか上機嫌なんだよね。何かいいことあったか？と聞いてみるとネギと決闘をするらしい。その際には私も同行してくれとの事だ。

しかし、決闘で上機嫌とはエヴァって実はバトルマニアなのかねエ…

「それでは身体測定なのでしずな先生お願いしますね」

「はい、任せてくださいいな。それじゃあ皆、体操着に着替えて保健室よ」

そして、保健室

…あまり育ってなかったorz

エヴァの方も盗み見てみたがやはり変わらないみたいだ。本人はどうでもよさそうな表情だったが…そこらへんは不老の身にしかわからない苦悩があるのだろうか…

待っている間は柿崎やハルナたちが桜通りの吸血鬼の噂で盛り上がり、鳴滝姉妹のペツタンコ宣言、吸血鬼は吸血生物疑惑チユバカラ、いいんちよの体重を量っているときに桜子が体重計を押して若干重くしたりと大騒ぎだった。

ちなみに千雨は若干育っていた。どこが？言わせんな妬ましい

「先生　！大変や！まき絵が、まき絵が」

「まき絵がどうしたの！？」

廊下から亜子が保健室の方へやってきてクラスみんなは下着姿のまま廊下に出ていた。

こいつら恥じらう気持ち持っていないんじゃないか？と思う今日この頃…

その後、まき絵を保健室のベッドに寝かせてネギ教諭がジト目でエヴァの方を見ていた。

エヴァはというと苦笑を浮かべていた。

どうやら二人は念話で会話しているみたいだったので聞いてみると…

460

『無関係な人を巻き込まないでくださいよエヴァンジェリンさん』

『すまん、爺が桜通りの吸血鬼に偶然会い、戦闘をしたという事にしなければいけないらしい。そのためにこういう演出をしないといけないみたいなんだ。ああ、佐々木は少し吸っただけで眷属にはしていないから安心しろ』

『…お互い面倒な思惑に巻き込まれましたね』

『まっただくだな』

『『はあ…』』

もうバレてらあ…

しかし、学園の方もネギを英雄にしたいがために最強の魔法使いに挑ませるのかい…

『とりあえず今夜桜通りに来た人を襲うからその時に勝負だ』
『最強の魔法使いにどこまで行けるかわかりませんが、全力で行かせていただきます』

ネギの方もやる気満々か…

これは久しぶりに楽しめる戦いになりそうな予感だな。

そう言えば明日菜とかはどうするんだろ。参戦するのかな？

しかし、最近はその子も桜通りのあたりを警備してたから来るかも
な…

第26話 戦前の日常（後書き）

今回は短めです。

次回の戦いには白花以外の乱入者もいますのでお楽しみを…

第27話 真夜中の闘争

桜通り

どうも最近影が薄い気がする秋葉原白花です。

現在私と茶々丸は桜通りの周辺に人払いと近くにいた生徒の思考誘導をしていた。

桜が咲き乱れる通り道…

昼間は生徒たちでにぎわうこの通りも今は人一人いない道であったがそこに生徒の一人である宮崎のどかがいた。

「こわくない」 こわくないです」 こわくない」 たらこわくない」

恐怖心を紛らわせようと何やら変な歌を歌っているようだ。

桜通りの吸血鬼の噂を聞き怯えているようだ。

「っひ」

ビュウッと風が当たり、何か視線のようなものを感じたのか辺りを見回し、街頭の上に立つマントを羽織り、帽子で顔が見えない人がいた。

「28番宮崎のどか。悪いがその血を分けてもらおうよ」

とりあえずネギ先生と打ち合わせした通りならここで乱入し、学園長の思惑通りの展開を演出するらしい。

「待てやコラ！！僕の生徒に手を出すたあいい度胸じゃね…じゃな

くて何してるんですか！！」

……なんか素の口調がアレだなネギ先生。 893？

エヴァの方も少し驚いたように呆けていたが、すぐに持ち直してネギ先生が放った戒めの矢を防ぎ初対面のように装う

「この素様爺までの魔力…10歳にしてこの力…さすがは奴の息子ではあるな」

「あ、あなたはクラスのエヴァンジェリンさん！？なぜこんなことを」

「世の中には言い魔法使いと悪い魔法使いがいるのだよ。氷結武装解除！」

エヴァは魔法役を投擲して、武装解除をした結果ネギ先生は障壁を張り服の片腕まで氷砕け散ったのだが、気絶して近くに倒れていたのどかにまで武装解除の余波が行ってしまった、制服が砕け散って素っ裸にしてしまった。

(おいい〜！！エヴァンジェリンさん何やってんだよ teme ！！)

(す、すまん！退避させるのを忘れていた)

表情には出てはいないが、さすがのネギ先生も生徒を素っ裸にされては平常ではいられないみたいだ。

そのあとエヴァは逃走して明日菜と木乃香がやってきた。ネギはのどかのことを任せてエヴァを追いかけたみたいだ。

もうしばらくしたら、私と茶々丸が呼び出されるだろう。茶々丸は従者契約をしていないのか先にエヴァの所へ向かった。私は得物である竹刀の状態を確認したり、包帯を巻いたり、準備運動をしたりして待っていたら念話が来た。

(白花、出番だ。召喚するぞ)

(了解。いつでもいいよ)

「召喚!!!!秋葉原白花!!!!」

エヴァの声がしたと同時に足元に魔法陣が展開され、エヴァの前方に召喚される。茶々丸も此方に飛んできて、私たちはネギ先生と相対した。

「悪いが、従者を召喚させてもらったよネギ先生。紹介しよう私のパートナー3 - A出席番号11番絡繰茶々丸と出席番号1番秋葉原白化だ。二人とも私の従者だよ」

「どうも」

「よろしくねネギ先生」

しかし、ネギ先生は予想通りといった表情で笑っていた

「まさか、予想が当たるとは…勘も馬鹿にはできませんね」

「さて、どうするネギ先生?こちらは3人そちらは1人数ではこちらが有利だが?」

「……そうですね。僕だけなら…ですがね」

そう言つてネギ先生は懐から1枚のカードを取り出した。あれは…仮契約カード?!

「なら、僕も従者を召喚させていただきますよ…召喚!!!!ネギの従者アンナ・ユーリエウナ・ココロウエ!!!!」

そして、ネギセンセイの前方に魔法陣が展開され、そこからアニーヤが出現した。

「最強の魔法使いと闘えるなんて…これほどうれしい事はないわ。さあネギ準備はできてるでしょうね？」

「もちろん、それでは行きますよエヴァンジェリンさん!!」

ネギ先生もゲートボールハンマーを召喚して戦闘準備が整ったみたいだ。

「エヴァ、私はアーニヤと闘っているよ」

「ああ、茶々丸は私と一緒に坊やの相手をする。白花負けるなよ」

「頑張ってください白花さん」

「あいよ、それじゃやりますか!」

そして、アーニヤに向かって突進し、ネギとの距離を離す。

・
・
・
「っふ!」

地上に降りて、先制攻撃を仕掛ける白花、上段から放たれる縦切りを炎のように赤い手甲を付けた腕により阻まれる。

「それがアーティファクト？」

「まあね、イフリートの手甲って言って下手な手甲よりも頑丈よ」

それ以外の効果は秘密という事かい

そう思いながら、ドールズレギオンを出現させる。アーニヤは接近戦を得意としそうなので遠距離の銃士と補助の衛生兵を中心に展開する。隊の構成は盾兵2、銃士3、衛生兵2という感じだ。

「いっぱい出したわね、ならこれはどうかしら？残像拳！」

高速で突っ込んでくるアーニヤを銃士は発砲して迎撃するが、打ち抜いたアーニヤは残像でさらに横移動を加えて計5人まで増えたみたいだった。ここまで高速で移動されるとどれが本物かはわからない。

なら…

「全部叩けばOK！！魔法の矢52矢！！！」

迫ってくる残像に惑わされながらも魔法の矢全ての残像に当てる。しかし、本物はいなかった。

背後に気配を感じ後ろに向かず盾兵で防御させてみてアーニヤが放ったアッパーを何とか防ぐことが出来た。

「頑丈な盾ね。普通の魔族ならあの一撃でつぶせるんだけど……」
「そんな一撃出さなっつ」の

つまり、私は普通じゃないってことなのか？まあ普通じゃないけどさ…

「けど、周りのは潰せたみたいね」

周囲の人形を見ると、銃士の人形腹部に風穴が開いていた。

いつの間に…

「さっきのアッパーを放つ前に魔法の矢を打っただけよ。ただし、それなりに強化された一撃だから障壁ごとぶち抜いちゃったわ」

人形には一応障壁が展開されていて中級魔法（白き雷や奈落の焰）くらいなら防げるはずだが…それを打ち抜くほどの魔法の矢とは…おそらくアーティファクトの効果かな？

「そのアーティファクトの効果って炎系の魔法の強化？」

「少しだけ正解よ。まあこれには対炎屋やATK屋も結構つけているから」

後半の事はよくわからないが通常の魔法で中級以上とは…

「ふう…なら、人形たちを出していても速攻でやられるってな感じか」

「どうだかね。その盾を持っているのは別としてほかなら一撃で仕留める自信はあるわよ」

そしてすべての人形を戻して、竹刀を再び構えた。

何やらアーニヤが竹刀をまじまじと見ているが…どうしたのだろうか

「その竹刀結構大事に扱っているのね」

「もう小学生くらいから使っているからね。結構愛着がある品だよ」
「そうよね。大好き屋が付くくらいなもの」

よくわからないが、使い込んでいることが向こうはこの竹刀を使いこんでいるという事がわかってきているみたいだ。

「さて、白花あなたの剣の腕前、見せてもらおうよ」

「見るどころか昇天しないように気を付けなよ…いくぞ」

拳を合わせ構えを取るアーニヤ、対して白花は腰のあたりに両手で

竹刀を持ち

そして拳と剣の応酬が始まる。

先に仕掛けたのはアーニヤの方だった。魔力を纏った拳が白花の顔面に迫るが、頭を横にそらし紙一重の所で避ける。続けて腹部に掌底を放つが掌底を放たれると同時に後ろに下がりギリギリのところまで躲して腕が伸びきった状態で止まっているアーニヤの頭部に面を入れる、アーニヤは痛む凸を我慢しながら足払いをするが、白花はその場で飛び腹部に蹴りを放ち距離が空く。

「何その避け方…未来予知でもしているわけ？」

「なんとなくここに来るなあと思って避けているだけだけど？」

「ありえないわね…：…なら！」

アーニヤは後方へ飛び退き、拳に魔力を集中させる…

「これならどうかしら？獅子王波！！！」

白花は迫りくる魔力の放流を切り裂いた

「んな？！あれを斬るですって！？」

「隙あり、堕ちろ天幕！花散る天幕！！！」
ロサ・イクトウス

空中にいるアーニヤに向かって一閃

獅子王波が斬られるという予想外の事態を処理しきれなくて防御が遅れてしまった。

「ぐぐぐ、負けたあ…ああ、もう悔しい」

「アーニヤもなかなか強かったよ。また暇なときに戦ってみようや」

「その時は私の勝利を飾って見せるわよ。コノヤロー」

地面に大の字で倒れるアーニヤを見下ろしながら微笑む。

そこへエヴァから撤退するといった念話が来た。向こうも終わったのかな？

「それじゃあ私は帰る」「ハイスラア！！」「うお！？」

その場から立ち去ろうとしたら、いきなり1mほどの何かが斬りかかってきた。

「俺は噂が気になり急ぎよ桜通りの周辺を警備していたら何やら喧嘩をしているような物音を聞きつけ服すら装備していない貧弱一般人たちが襲われネギとアウスナが犯人を追ったらしく「はやくきてーはやくきてー」と泣き叫んでいるでメイン盾の到着を待ち望んでいる又ギ達のために俺はとんずらを使って普通なら付かない時」

「やっと着いたのか…遅い…」

「きたwwwメイン盾(笑)きたwww」

「もう終わっているわよ」

「……………」

「一応言っておく…：テンコは広域指導員で麻帆良の治安を守っているメイン盾なのである。」

「んじゃ、アーニヤ私たちは帰りましょ」

「そうね、それよりその竹刀強化してみない？」

「何？くぎでの打ち込むの？」

「いや、そのままで強化できる方法が……………」

「oi みうs ミス お前らせっかく駆けつけたのにその態度はあんもりでしょう！？他に何か言う事はないのか？……………」

納得いかないといった感じで突っかかってくるテンコだが…

「アーニヤ、今の言葉聞こえた？」

「聞こえない、何か言ったの？私のログには何も無いわね」

こうして魔法使いVS吸血鬼の第一幕は降りた。何故第一なんだって？だってそうしないとネタが…（ゲフンゲフン、なんかエヴァの方は明日菜の乱入で決着がつかなかったらしい。次に戦う時は大停電のときみたいだ。それでは次の戦いに向けて…ロボトルファイト
!!!!

「たしかにハブるのは勝手だけどそれなりの扱い方があるでしょう；
」

テンコさんドンマイいつか出番があるよ

「チクシヨウお前らはバカだ…」

第27話 真夜中の闘争（後書き）

テニコさんごめんなさい

これは陰陽を見ていて思いついたネタでついやってしまいました。

最近、白花の竹刀をメイン装備にしようかなと思う今日この頃でした。

ネギとエヴァの戦いは次回書こうかと思えます。

第28話 それぞれの事後報告（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

第28話 それぞれの事後報告

白花 イン エヴァ宅

昨夜の決闘の後に私たちはエヴァの家に泊まり互いの相手の事を話し合っていた。

エヴァの話によるとネギ先生は戒めの矢で茶々丸の動きを封じエヴァと一対一の状況を作り上げ、体術で対応したらしい。詠唱する暇も与えないほどの猛攻だったが、無詠唱や合気道を駆使して闘っていたらしく、関節を決めた時に明日菜が乱入して飛び蹴りを喰らい、ヘッドスライディングする羽目に……と茶々丸の動画はここまでだった。

「まったく…なんなんだ！神楽坂明日菜のあれは?!」

「ああ、落ち着いてくださいマスター。それにしても見事なヘッドスライディングでした」

「うっさい黙れ、このポケロボがこの、巻いてやる」

「ああ、マスターそんなに巻かれると」

テンプレ乙

「やっぱりこれって魔法無力化体質？」

「はあああ、だろうな。しかし、なぜ神楽坂はこんな能力を？」

「まあ明日菜の戸籍とか学園長やらタカミチやらが関わっている時点で怪しいし、何よりネギと同室にしたという事は巻き込む気満々だったんだろうな。ただし、学園長の誤算といえばネギがしっかりしていたという事くらいかな」

「ケケケ、完璧クロジヤネエカ」

「そうだな……裏で無力化体質で有名といえば黄昏の姫御子だが…

…まさかな」

「そうなるとう明日菜さんはオスティアの姫様になりますね。それよりマスターそろそろ出ないと遅刻しますよ」

時計の方を見てみるとすでに8時を過ぎていた。

「それじゃあ行くところか」

「そだね。んじゃ、この話はまた後で」

「オウ、イツテラツシヤイ」

「行ってきますね姉さん。では、行きましょう。白花さん、マスター」

ちなみにテンコにはぬらりひょんに頼まれたと言っておき引いてもらった。

・
・
・

明日菜 in 寮の部屋

まったく…昨夜ネギが桜通りの吸血鬼と闘っていて、そこへ乱入した見たらクラスのエヴァンジェリンさんと茶々丸さんだった。そのあとはネギとエヴァちゃんが黙っちゃって一言言葉を交わした後に帰っちゃったんだよね。でもそのあとネギに言われた言葉が…

「空気読んでください…」

だったのよね。まったく失礼しちゃうわ

んで…事情を聞いたらエヴァちゃんってなんかすごい魔法使いでネギと闘うように誰かに依頼されたらしいのよ

「結局のところエヴァちゃんって頼まれて動いてるわけでしょ？それなら依頼した人をぶっ倒せば良いんじゃない？」

我ながら名案だ。映画や漫画でもよく黒幕を倒せばOKみたいな感じでしょ。」

「残念ながら依頼人は学園長あたりでしょうから無理でしょうね」「mjdd?」

あの学園長が！？そんなことを…うん、なんかしそうな感じがするわね

「エヴァンジェリンさんとの関係は向こうには知られていないので今回の件は『実戦形式の訓練』ということになります。向こうはエヴァンジェリンさんを倒したという功績を付けたいみたいです」

「何だよ?」

こんな子供（見た目は）に決闘をさせて何しようとしているのよ学園長は…

「色々あるんですよ…ところでアスナさんはどうするんですか?」

「そりゃネギのこと心配だしネギの味方として付こうと思うんだけど…」

「それが高畑先生と敵対することになってますか?」

!??

「どづいつ事!??」

「文字通りです。向こうが望まない展開になる…例えば僕が負けそうになって何らかの手を使い乱入した場合、ぼくはタカミチをぶっ

倒しますよ」

さらっとそんな事を言い放つネギ。なんだろう、高畑先生に何か恨みでもあるのかな？

「でも、助けに来てくれるんじゃない？」

「これを仕組んだのは学園側なんですよ。そんな助けいりません。むしろ邪魔です」

「邪魔って……」

「まあそうなったとしてもタカミチを合法的にボコせるからいいんだけどね。ウケケケケケケケ」

なんぞっ！？ウケケケってどんな笑い方よ……

こうして私は同居人の知りたくもない一面を知ってしまった丸

「んで、結局のところエヴァちゃんたちの対抗策ってあるの？」

「アニキ使いたくない手ですが従者の方を襲撃するという手もあるんでやすが……」

「却下」

「ですよー」

大将を打つ前に周りから潰すのね。確かに有効な手段だけど

「でもネギの命も危ないんじゃない？　だったら少しくらいは……」

「だからといって生徒を傷つけるようなまねはしたくないですよ。

それに茶々丸さんや白花さんの一日の行動を観察してみれば明日菜さんの考えも変わると思いますよ？」

「どういう意味よ？」

「カモ君。何か起きた時のために今度の休日明日菜さんと一緒にい

てくれない？」

「わかりやした。それよりそろそろ時間ですぞ兄貴」

そう言つてカモミールが時計を指す。

「それじゃあこの話はまた今度で…行つてきます」

「行つてらっしゃい。また教室でね」

そう言つてネギはカバンを持って学校の方へ向かつて行つた。

「ネギつてなんか変わつているわね」

「今さらですぞ姉さん」

普通にオコジヨと会話している私も大差ないかな？

それにしてもなんで学園長はネギを戦わせようとしているんだろ？高畑先生もそれを黙認しているのかしら…大好きな高畑先生でもさすがに見逃せないわ。あれ？そう言えば私つてなんで高畑先生のこゝと好きなんだっけ？

えっと、私は渋いおじさんが好きだ。何故？一緒にいると暖かいよ。うな気持になる。

だけど、そう思い始めたのはいつだっけ？タカミチと生活しているとき？いや、もっと前だった気がする。

いつたい何時の事なのかしら…

わからない…多分大切なことなんだけど

「姉さん？どうしやしたぼうつとして」

カモミールの言葉に我に返る

• 言いようのない不安を残しつつも何でもないと返しておく…

どうやら明日菜ちゃんはネギ君と協力してエヴァに対抗するようになったみたいだ。これでネギ君の戦力も上がるだろう。

「どうやら、こちらの思惑通りに進んでいるみたいじゃの」

「ええ、仮契約こそまだですが協力するみたいです。この調子で木乃香ちゃんたちと仮契約していけばいいんですがね」

「そうじゃの、契約してくれるなら木乃香も安泰じゃい」

そう、そして生まれるのだ、新たな英雄が…これはその第一歩だ。

明日菜ちゃんも平和に生きるために喜んで協力してくれるだろうな。

「もしもの時のために頼んだぞい高畑君」

「任せてください学園長。未来の英雄のために頑張りましょう」

第28話 それぞれの事後報告（後書き）

次回は茶々丸尾行などを書こうかと思っています。

ちなみにうちのタカミチはネギを英雄に仕立て上げようと無駄な努力をしています。

第29話 アスナの茶々丸観察録（前書き）

これからの更新は週1ペースになるかもしれません

ドリフターズの2巻面白いです

黒王様御乱心キャラ崩壊しすぎワロタww

第29話 アスナの茶々丸観察録

明日菜 イン 寮

さて、休日になったみたいだし、ネギが言っていたように茶々丸さんを尾行してみようかしら。休日を見れば考えが変わるって言うってたけど…本当なのかしら

白花ちゃんの方はなんていうかフリーダムだったのよね。大学部でロボット同士と闘わせてみたり、葉加瀬と一緒にグラサンのロボットの腕にドリルアームを付けようと超を説得してた。葉加瀬が土下座までしていたのが印象的だったわ。ちなみに白花ちゃんは終始苦笑いしているだけだったけど…

却下された時の葉加瀬の表情は（――。）。こんなだった

（。。。）

こっちみんな

それで今日はネギのペットであるアルベール・カモミールと一緒に茶々丸さんを尾行することになった。何かこいつ、元下着ドロだったらしいんだけど今は改心してネギのサポートをしているらしいわ。普通ならまだ服役中なんだけどあることをして罪を清算したらしい、何をしたのかと聞いてみたのだが二人とも答えてくれなかった。特にカモの奴なんか部屋の隅でガタガタ震えていたけど、まじで何があった…

エヴァちゃんは学園長に呼び出されたみたいで今は茶々丸さん一人だ

商店街の方へ向かって行ったので買い物だろう

そういえば木乃香にテッシュ切れてたから買ってきておいてって言われてたな…お、徳用の奴が安い、買いね
はっ！茶々丸さんはどこに?!おのれこれも孔明の罠か…

「姉さん、素直に目を離していたっていいじゃないですか…」

私のログには何も無い

「とりあえず橋の向こうに行きやしたのを見ましたから行って見ましよう」

そうして、カモの指示に従い歩道橋の方へ向かってみるとお婆さんをおぶっている茶々丸さんがいた。その周りには小学生くらいの子供が何人かいてじゃれ合っているように見えた。お婆さんを向こう側まで運ぶとお礼を言われていて、軽く会釈をしてその場を後にしたみたいだ。

「え、ちょ、どういう事よ。茶々丸さんたちって悪い人じゃなかったの?」

「違いやすぜ姉さん。茶々丸の姉さんは町ではいい人という事で人気者なんでさあ、まあやっていることはいつもこんな感じに見かけたら助けているといった感じっす」

「あ、今度はドブ川に仔猫が…」

ダンボールが流れていて中に仔猫がいた。

茶々丸さんは持っていたビニール袋を置くと何の躊躇もなくドブ川に入り仔猫を救出して見せた。

「いい人だ……」

「まあ茶々丸の姉さんのことはわかりやしたか?」

「うん、なんか隙を見て襲うようなことを考えてた自分が恥ずかしい」

「きちんと相手のことを見極めないと取り返しのつかないことになってしまう事もありやす。それをわかってもらえたでしょうか姉さん」

「うん、ネギが言っていたのってこの事なのかしら…自分より年下に教えられるとは…」

「兄貴を普通の子供と見ない方がいいですよ。あれでもいくつかの修羅場をくぐっていやすから」

修羅場ね…まあ力モの言い過ぎかもしれないけどネギって強いよね。麻帆良四天王の古菲と長瀬さんを軽くあしらうほどの実力もあるけど、どこかアレなのよねエ…抜けているっていうか好戦的っていうか…まるで みたいなの

アレ？

？

ズキン

（嬢ちゃん名前は？）

そうだ。そういつてあの人に出会った。迫りくる巨大な手から私を守ってくれて

（ 人間をなめんじゃねーッ！！！

）

鎖でつながれた状態の私は外で起きている決戦を見ていて、 は

傷つきながらも　　を倒していた。

(うわすげー！見てみるよ　ちゃん、あの寺なんて金ぴかだぜ！)

(騒ぐでないわー！ドアホウ)

(ぬぶおるべら)

(ぎやははははは、見てみるよ　。あの鳥頭池ぽっちゃだぜ)

(やかましいー！京都で騒ぎ起こすなバカども)

京都で　　の実家に行って宴会して、馬鹿でかい鬼神が出て…

「姉さん！！」

カモの声で現実に引き戻される

「どうしたんですか？姉さん顔色が悪いですぜ」

「い、いやなんでもないわ」

今のは私の昔の記憶？いいんちよたちに会う前の私の記憶なのかしら…

…わからない。これ以上思い出そうとすると頭痛がする

「大丈夫ですか？アスナさん。ハンカチをどうぞ」

「ええ、だいじょうぶって！？茶々丸さん！？」

…いつの間に、っていつか何故ここがわかったし！？

「明日菜さんがフリーズしたあたりからですよ。ちなみに尾行はバレレでほぼ最初からわかっていましたよ」

うそーん

「まあそうだろうと思いやした」

「気付いてたのあんた？なんで言わないのよ…」

「聞かれなかったからですぜ」

うぐぐ、妙に意地悪ねこのオコジヨは…

「明日菜さん、この後の予定は何かおありですか？」

「ん？いや特にないけど…」

「でしたらご一緒にネコのえさやりでもどうでしょうか？」

ネコかぁ…そうね、たまには猫と戯れるのもいいでしょう

「それじゃあご一緒させてもらおうわね茶々丸さん」

「では、こちらです。あ、後私は呼び捨てでいいですよ？」

「なら、私の事も明日菜でいいよ茶々丸」

「了解です。明日菜」

茶々丸はニコリと笑い人気のない路地裏のぬこのたまり場の方へ案内してもらった。

・
・
・
にゃーにゃー

「もふもふ…ああ、そこ喧嘩しないのまだあるから」

「ぬこたんハアハア」

茶々丸は何やら鼻息が荒い気がするが気のせいだろう…

それにしても最近勉強やら吸血鬼やらで忙しかったからこつこついの

んびりした時間もいいなあ

「アー！！姉さんヘルプミィ！！ちょっとまじでやめて俺っちは美味しくないから！」

カモの方を見てみると猫に抑えられて今にも食べられそうな感じだった。ほほえましい光景だな

「茶々丸って休日はここに？」

「ええ、トモエや煉達と一緒にの時もありますし、幼稚園の方のボランティアに参加したりしていますね。その時に那波さんたちともよく会います。後はメンテナンスなどですね」

暖かい日差し、戯れる猫たち、癒されるわ

辺りのネコたちが何かに警戒するようにフーツ！と毛を逆立てて威嚇していた。橋の方を見てみるとスーツ姿の男性が3人ほどいた。

「闇の福音の従者……ここで死んでもらうぞ！！！」

「人払いもしないで奇襲とは質が落ちましたね雑魚ども」

茶々丸さんはうんざりしたような表情で構える

向こうは懐から杖を取り出して、呪文詠唱を始める。

あれ？私ってば空気？

「魔法のy」

「なんちゃってギヤラティツカファントム！！！」

あ、一人壁にめり込んだ…拳が当たった瞬間にロケットパンチで威力を高めたのかしら
つて残りが茶々丸の方に杖を向けているけど、私はノーマークみたいね…

「せいやあー!!」

「ガッ!!」

後頭部に回し蹴りを放ち前のめりに倒れ込む。

「もういつちょー!!」

倒れ込んだところで側頭部にボールを蹴るように蹴りぬく。
男はドブ川まで飛んでいき、プカ〜と流されていった。

「んな?! 貴様」

「茶々丸!!」

「OK!!」

私が乱入したことを予想していなかったのか混乱する男を挟み撃ちにする形になる

私たちは右腕を掲げ相手の首のあたりを振りぬく

「クロスボンバー!!」

某完璧超人のフェイバリットを決める。さすがに首の皮ははがれない、はがれたら大変だし…

「Nice boatです。アスナ」

「いや、それはダメでしょう茶々丸」

「失礼」

それだと私惨殺されちゃうじゃない…生首恐いです

「さて、そろそろ帰りましょうか」

「そうね、日も暮れてきた事だし…ん？」

対岸に何か光った？

ツなんかまずい気がする！

「ってい」

とつさに茶々丸に体当たりをして突き飛ばす。次の瞬間すさまじい衝撃に襲われた。

一瞬見えたあの姿は…どうしてですか…高畑先生

そこで私の意識は途切れた

・
・
・

茶々丸 In 路地裏

「アスナ！」

「姉さん!!」

対岸からの攻撃に気づくことが出来ず、明日菜が突き飛ばしてくれ
たおかげで避けることが出来たが、代わりに明日菜が攻撃を受けて
しまった。倒れた明日菜を背負い物陰に隠れる

油断していた…。いつもの小競り合いで普通に撃退できると踏んでいた。その結果がこれか？

「クソ！！」

「茶々丸の姉さん！今はここから脱出しましょう。姉さんの治療も
しなくては」

ネギ先生の使い魔の声に我に返る。

そうだ、ここで喚いても仕方ない。

治療できる人は？白花さんならできる可能性が高い！

「アルベール、マスターの家まで連れて行けますか？」

「兄貴から転移符をもらっているから大丈夫ですぜ。でもエヴァン
ジエリンは治療系の魔法は得意じゃないと聞きやすが」

「白花さんが得意ですから、たぶん今の時間ならマスターの家でく
つろいでいると思います」

「わかりやした。では跳びやすぜ！」

第29話 アスナの茶々丸観察録（後書き）

茶々丸は原作よりも人間に近い感じにしました。

第30話 高畑は大変な人を傷つけていきました(前書き)

短いです

第30話 高畑は大変な人を傷つけていました

???

ここはどこだろう…

森？

えっと、ここに来る前は茶々丸を尾行して、猫たちと戯れて、なんか変な奴らが襲ってきて、高畑先生が…

…なんだよ嬢ちゃん泣いてるのかい？ゲホ、涙を見せるのは…初めてだな

声が聞こえた。懐かしく、そしてもう会う事の出来ない人の声…

タカミチ記憶の事だが、俺のとこだけ念入りに消しといてくれねえか…これからのゴホ嬢ちゃんには必要のないもんだ

忘れなくなかった…みんなと過ごした日々を… トと一緒に暮らした日々を忘れなくなかった。

幸せになりな嬢ちゃん、あんたにはその権利がある

できるならばあなたと一緒に生きていきたくかったです

ガトーさん

・
・
・
遠い昔に感じる記憶の一片

まだ思い出せないことが幾つかあるが、自分の事やガトーさんの事は思い出せた。

私の本当の名前はアスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフユシア

黄昏の姫御子と呼ばれていて魔法世界の大戦時に色々されたんだよな

その後はガトー達に連れられて世界中回ったんだっけ
イスタンブールあたりで襲撃にあってガトーさんは亡くなったんだろっ…

んで、タカミチの方はどこをどう間違えたのか記憶の全部を消しちゃったんだよね…

まあ今のタカミチは私の幸せとか全然考えてない気がする…っっていうか利用する気満々だし

まったく何やっているんだか

それにしてもここはどこだろう

「アスナ！大丈夫ですか？」

「茶々丸、治療はしたけど一応安静だからね」

傍にいた茶々丸と白花ちゃんがいた

「えつとおはよう二人とも」

「はい、おはよう」

「おはようじゃありませんよ！まったく無茶をして……」

白花ちゃんは冷静に返事を返してきて、珍しく感情的になっている茶々丸に若干驚きながら体を起こす
アバラのあたりが少し痛むわね

「ごめん、なんか口より先に手が出たって感じだね」

「アスナ、私はガイノイドです、機械です。メモリーが無事なら破損箇所を修理すればいいだけです。でもあなたは人間なんですからもう少し自身の体を大切にしてください」

「私さ、頭が悪いからガイノイドとかよくわからないんだ。ただ、友人が傷つくのをるのが嫌なだけなのよ」

たとえ機械だとしても茶々丸が傷つく姿は見たくないわ…
もうガトーさんみたいになくなるのは嫌だし…

「負傷具合はアバラが折れてて左腕が骨折その他もろもろ全部治療しておいたよ。丸一日寝ていて学校の方は欠席という事になっているから。クラスのみんな騒いでたよ、『バカレッドが襲撃された』だの、『健康が取り柄の明日菜が休むなんて…明日の天気はメテオスオーム』だとかなんとか。いいんちよもだいたい心配してたよ」

「あははは、今まで休んだことなかったからなあ……」

手を握ったり開いたりして、軽く柔軟をしながらクラスの状態を想像して苦笑する

裕奈たちが騒いで朝倉に聞きこんでみんな変な方に想像してバカ騒ぎでいいんちよがたしなめていくんだらうな…

そう、これが今の……神楽坂明日菜の日常なんだろう

「そう言えば、ネギ先生もそろそろ」「もう来ましたよ」「ども」

部屋の入り口の扉が開くとネギがいた。ただ、いつもと雰囲気が違う。なんか笑顔なんだけど目が笑っていない。背後には青い髪のおっさんやドラム缶みたいなロボ、金髪のイケメン、人型の蟲？みたいななんかが見えた気がした。

「誰が襲撃したか大体予想が付きませんが、一応聞かせてくれますか？」

「わかったわ」

予想が付くか……それで私がけがをしたことに怒っているのかしら？さすがに美化しすぎね

少女説明中……

一通り説明し終わったところでネギは「はあ……」と大きなため息をついた

「全くやってくれたなタカミチ……」

「全くよ、文字通り骨折り損って奴かしら……でもどうして茶々丸さんを狙ったのかしら？」

「簡単なことだよ神楽坂明日菜」

「あ、マスター」

扉の向こう……居間の方から家主であるエヴァちゃんがやってきた

「奴らは坊やと私が戦うように仕向けたかったのさ」

ネギとエヴァちゃんを？

「なんでそんなことを？」

「英雄の戦歴に箔を付けたかったんだろ。ネギは私と闘い、そして勝利を収めるといった筋書だろう。最強の魔法使いに勝ったとなれば評価も高まるだろうしな」

「実際そんな事が起きたら秒殺されるのがオチですね、まあ油断してたなら少しはもつかもしれませんが…わかりやすく言えば冒険を始めたばかりの低レベル初期装備特殊な技なしのパーティがいきなりラスボスと挑む感じですよ」

うん、わかりやすい。そしてムリゲーそんなのに勝てるわけないじゃん。

そんな無茶なことをやらせるなんてどうかしてるわよ

「まだ言いたいことはありますがとりあえず今後の事を決めます。良いですか？エヴァンジェリンさん」

「構わん」

「まず明日菜さん、今回の件は戦闘は避けられませんなのげここでおとなしくしててください」

「できればタカミチをぶん殴りたいけど、病み上がりだからね…わかったわ、その代わり一発ガツンと頼むわよ」

「あとネギ先生、アスナの事が心配なので私は不参加という事にしておいてください」

「わかりました茶々丸さん。エヴァンジェリンさんたちは向こうの思惑通り闘います。ただし、偶然傍にいた魔法先生が巻き込まれるかもしれないね」

「そうだな、偶然なら仕方ない」
「そうだよな。ネギ先生偶然なら仕方ないよね。あゝもしもしトモエ？大停電の時殲滅戦やるから全員準備しておいてって言うておいて」

「「「あつはっはっはっは」」」

居合拳受けて負傷した私だけどこれだけは言える……

（襲撃犯の人たち御愁傷様……合掌）

第30話 高畑は大変な人を傷つけていきました（後書き）

細かな場面を書いていてあまり進まない気がする……
もう少し大雑把（キンクリしたり飛ばしたり）にするべきか？

第31話 断罪(前書き)

ちょっとTOXやってたら遅くなりました

第31話 断罪

高畑 In 世界樹広場

さて、当初の予定通りネギ君がエヴァと戦闘するみたいだ。果たし
状なんて持っていくなんて礼儀正しいな子だなあ

しかし、従者の一体でも減らそうとしてみたけど、アスナちゃんを
傷つけたのは失敗だったな…

まあ向こうが当たりに来たんだし僕は悪くない

「今宵我らの正義の象徴とも言えるナギ・スプリングフィールドの
息子……」

つと、演説の方はもうすぐ終わるかな？

現在、学園の魔法使いたちがここ、世界樹広場に集まっている

「未来の英雄であるネギ・スプリングフィールドが巨悪である闇の
福音を討つ。我らはそれをサポートしようではないか…」

エヴァには悪いけど未来の英雄を作るために討伐させてもらうよ
さすがの最恐の魔法使いでもこの人数に強力な魔法具があるしどう
にかできるだろう…僕の知らない従者もいるみたいだけどたぶん大
丈夫かな。

・
・
・
『との事ですわ』

大停電の2時間前、高音さんからの報告を受けてため息をつく。大

停電って確か学園結界が消えて関西の人とか外部の組織から攻撃を受ける日で忙しいんじゃないのか？

『全く大停電の日はかなりの数の敵が攻め込んでくるのにサボる気満々ですね』

「ご愁傷様です高音さん」

『そちらも結構な数が来るでしょうね。しかも身内だとは…情けない限りですよ。昔の私なら仕事を放り出して観戦の方へ向かっていたでしょうけど』

「まあ、無理しないでね。こっちはこっちでボコしておくから」

『余裕が出来ましたらそちらの方を手伝わせていただきますわ』お姉さまミーティングの時間ですよ』ええわかったわ愛依。では失礼いたします』

さて、此方も迎え撃つ準備もできてるし、歓迎しよう盛大にな

色々あって原作通りで結界につかまったところからまで

「や・・やったくひっかかりましたね。えヴぁんじえりんさん。もうごげませんよ。これでぼくのかちです！さあ、おとなしくかんねんしてわるいことはもうやめてくださいね（棒読み）」注：念話（うわぐめつちや恥ずかしいわぐつーか結界ひとつで浮かれるとかないでしょうエヴァンジェリンさん）

「ふっふっふこの程度で私を倒せた気か？片腹痛いわ！！」注：念話（一応初心者が犯した実例の一つなのだが：自分でもないわぐつて思ったすまん）

結界が破壊され慌てふためくネギと勝利を確信したエヴァであった

が裏ではエヴァのセンスのなさの会話が繰り広げられているな…原作ではまんまなだけどね

(そろそろくるぞ白花警戒しておけ)

(ラジャー)

そして砕けたはずの結界の上に新たな結界が発動して私たちの動きを止めた

麻帆良方面の方から数十人の杖を持った大人たちが現れていた。魔法使いであろう

そいつらは酔っているかのように興奮気味に叫んだ

「今だネギ君！闇の福音の動きが止まっているうちに悪を倒すのだ
！！！」

「え？！あ、はい。ラス・テル マ・ステル マギステル 来たれ
雷精風の精！雷をまといて吹きすべき南洋の風！！『雷の暴風』」

普段は持っていないナギの形見の杖から暴風が放たれた

魔法使いたちの方へ

「ギャー！！！！」

「な、何をするんだネギ君」

「すーいーまーせーん。なんかずれてしまっ…」

相手の魔法使いたちが騒いでいる間に結界を破壊しておく

「こ、今度はきちんと狙いたまえ…」

「うーい、ラス・テル マ・スキル マギステル 来たれ雷の精、
薬莢を打ち出し、その鉄槌似て、叩き潰せ！！轟・天・神・雷！！
雷神の鉄槌』！！」

魔力が集い光り輝き帯電する槌となった杖で柄が伸び、それに比例
するように頭部も巨大化した物で薙ぎ払った。

やっぱり魔法使いの方へ

向こうはもしものために障壁を張っていたみたいだが、ネギの雷神
の鉄槌はそれをお構いなしに殴り魔法使いたちは麻帆良湖へと落ち
ていった。

「これで全滅した？」

「いや、タカミチがいない。こいつらは先発隊だろう」

「その通りだ闇の福音」

先ほどと同じように麻帆良方面から杖を持った集団が現れた。数は
大体三十人くらいだ。おそらく外部からも増援をよこしたのだろう
その中にタカミチの姿も確認することが出来た

「まさか未来の英雄が裏切るとは、洗脳されたか…安心したまえ、
ネギ君。キミの洗脳は我々が解いてあげよう」

「最初^{ハナ}っから手前らの味方になったつもりもないよ」

(さて、トモエ、煉、ナビコ砲撃用意)

準備OKです

ステンバーステンバース

対象魔法使い一団、各機の照準システムにアクセス、目標クリア、いつでも行けます

たんまり食らわせてやりな…

「さあ、正義の魔法使い諸君我らが英雄W「撃て」グハツ」

時計塔から轟音と共に砲弾、弓矢、小型ミサイルが魔法使いの元へ殺到した

「どンドン撃つていきな」

ハッハ―逃げる奴は敵だ！！逃げない奴はよく訓練された敵だ！
！本当に麻帆良は地獄だぜ

ビューティホー

残弾0、これより補給に入ります

さて、残ったのはそんなにいないか……

残りは十人ちよつとつて所か

「つく、不意打ちとは卑怯な」

「どこかの悪役は言いました”勝てばいい、それがすべてだ！”」

「それじゃあみなさん残りもかたづけるとしましょう。あ、タカミチは僕の獲物ですからね」

「ああ、それじゃあ思いつきりやってしまえ」

「気を付けてねネギ先生」

さて、今回の主役はネギだし邪魔な奴は蹴散らしておきますか

「レギオン！小隊陣形『流星』」

前衛に銃士を3体、後衛に弓兵2体と新しく造り上げた魔術師を4体配置

銃銃銃	前
弓魔弓	中
魔魔魔	後

こんな感じ

遠距離攻撃を特化し、相手が攻撃する前に殺る『先手必殺』を目標とした陣形である

「さっそく派手にぶちかますよ！魔術師合わせろ」

『『『合炎の陣！現を為し此処に集え！！……集中！！』』』

4体の魔術師は地面に魔法陣を張り、巨大な火球を作り出し、敵の方へと落とした

数人は避けたみたいだが、残りはまだ数えるほどしかいなかった
とりあえず後は適当な魔法やら銃士と弓兵とかで攻撃させていれば
OKかな？

「さて、こちらは問題ないけど……まあネギの事だし大丈夫か」

・
・
・
「くたばれクソメガネエエエエエエエエ！！」
「ふ……」

手に持った槌（杖に頭部ハンマーヘッドを付けたもの）の一撃を入れ様とするが避けられる

「何故なんだい？ネギ君。。エヴァンジェリンを倒せば君は英雄としての第一歩を踏み出せたはずなのに…」

「まだそんなくたらない妄想に取りつかれてやがんのか屑が」

「くだらない無くなんてない！！君は君の父上のような…ナギさんのような英雄になるべきなんだ！」

「ねーよ、あんなダメ親父みたいなものになるとかごめんだ。それに、一般人を巻き込まなければなれない大量殺人鬼えいゆうなんて何の価値もない」

「そんな事はない！！」

あーもううざい。

こいつはいつもこうだ初めて会ったときは友達になろうとかなんとか言っていたが、それはくそ親父の息子だからだろう別にそれでもよかったが、こいつはいつも僕じゃない親父の面影を見ていただけで、僕の事は全くとっていていいほど見ていなかった。

「ラス・テル マ・スキル・マギステル、光の精霊10柱、集い来りて敵を討て魔法の射手！固定！！」

手前に魔法の射手を出す、それを撃ちださずに球体の状態で固定する

「何をやる気だい？」

「それは手前が直に味わいな！！シュワルベフリーゲン！！」

固定している魔法の射手をハンマーヘッドで打ち出す。

打ち出された魔法の射手は白い軌跡を残しながらタカミチへと殺到していく

「つくく?!居合拳!!」

タカミチは居合拳で迎撃するが、魔法の射手に気を取られていて、瞬動で背後に回ったネギの存在に気づくことが遅れた

「しまっ」

「ぶつとべええええ!!」

杖を思いっきり横へ振りぬぎ、頭部がタカミチの脇腹へと突き刺さる
あばら骨を砕いたような感触を味わうが、ネギは止まらない
殴り飛ばされたタカミチの足をつかみ地面に叩き付ける

「貴様を屠る、この一撃で!!」

叩き付けられバウンドしていたタカミチを槌と共に打ち上げ、空中
でつかみ気で強化された一撃を放つ

「クリティカルブレード!!!!」

振り下ろされた一撃は麻帆良大橋を揺らし、叩き付けた場所は大きく歪んだ。

「ったく、手間かけさせやがって、きちんと鍛錬していれば僕に勝てるはずだろうがバカミチが…一から出直せバカ野郎この野郎…」

そして、杖を肩に担ぎその場を後にするネギであった……

第31話 断罪（後書き）

飛んだタカミチをつかんだ場面はDMC4のネルVSダンテの所を
思い浮かべてください

New 人形

魔術師

攻撃魔法を使いこなす人形。見た目はとんがり帽子にロープといっ
た一般的な魔女のような人形である

小隊陣形の説明

9人一組といった隊で、そのうちの一体をリーダー機にしオートで
動き、考え、行動する。基本的に白花の命令には忠実である。他の
8隊はリーダー機の指示に従うといった形である。参考 ソウル
クレイドル 世界を喰らう者

ネギ&mp・アーニヤ + 使用魔法設定集(前書き)

ネギも色々な技を出したことだしそろそろ説明しようかと思って書きました。

杖の名前も付けた方がいいかな？

一々槌って書いても分かりずらいし

ネギ&アニーニヤ+ 使用魔法設定集

ネギ・スプリングフィールド

元 主人公 現 コスプレイヤー

使用武器 槌

技能

なんちゃってベルカ式、自己流格闘術、ネギま式精霊魔法（雷、光風）その他（占いなど）

ちよつとした説明

なんちゃってベルカ式：リリカルなのはのヴィータの戦い方を見て作り上げた魔法。既存の魔法を組み合わせ使っていて、これを使いこなすために格闘技能も身に着けた。（我流）

なんちゃってベルカ式魔法一覧

雷神の鉄槌：元ネタ「ギガントシユラーク」杖に魔力を集め頭部を巨大化させて叩き潰すという大技。

最近気付いたことだが光り輝くハンマーってゴルディオンの方が近い気がする BY ^{ハニウエイ}作者

シユワルベフリーゲン：元ネタ「シユワルベフリーゲン」魔法の矢をハンマーで打ち出す魔法。障壁貫通と接触炸裂が付加される。よりリアルにするために土属性の魔法を覚えようとしている。

(未使用) 雷風一閃：元ネタ「ラケーテンハンマー」ハンマーの後部に推進剤の代わりとなる風を噴射、打撃部分に雷を纏わせる一撃

自己流格闘術

クリティカルブレード：元ネタ「クリティカルブレード」(使用キャラTOD2のロニ)「槌ごと相手を打ち上げ、叩き付ける技。ちなみに叩き付ける際に気と雷を付加した武装感卦状態で叩き付けている。

アンナ・ユーリエウナ・ココロウエ

元 幼馴染キャラ 現 デビルバスター

使用武具 手甲

技能

魔界式魔法(火、水、風、補助) 魔界式戦闘術(拳、銃)、ネギま式精霊魔法(火、闇など) イノセント鑑定、魔神化

ちょっとした説明

魔界式：元魔界、現人間界のヴェルダインで身につけた技能。炎属性を得意としている、水と風は初期のみ。ちなみにWMは拳63、銃44、杖30魔法はファイアとヒールはオメガまで補助技は能力上昇系全般を使いこなす

魔神化：ヴェルダウムに転移した際、悪魔化した姿になる。魔王ゼノン討伐時に元に戻ったが、悪魔の姿にもなり、身体能力が大きくなる。

ヴェルダウムについて：人間界でありながら、降臨した魔王の呪いによって人間は悪魔に変わり果てるという出来事があった。元凶である魔王ゼノンを討伐したことで悪魔たちは人間に戻ることが出来た。

固有技

アーニヤ・ビーム：目から出る破壊光線。叫ぶのはお約束です

アーニヤ・ブラストナックル：拳に炎を纏い爆炎を放つ。

アーニヤ・ドラゴンメテオキック：空中に飛び上がり一直線に突っ込んでいくといった技。

奥義 烈火武神撃：アデルから教わった技。怒れる烈火、大地を揺るがす、武神の如く

ヴェルダウムに二人の弟子がいる。そいつらの職業は盗賊と侍

その他

ドールズレギオン新技能紹介

魔術師：とんがり帽子にロープを着た人形、ちなみに服の色は青。攻撃、妨害魔法を得意としているが耐久力、速度に難あり。あまり遠くには出さないようにしよう

小隊：最大9体まで配置することが出来、そのうちの一体をリーダー機にする。リーダー機はほかの人形の基礎能力の一部が加算される。また、特定の組み合わせで連携技もできる

連携技

インフェルノ：必要 魔術師×4、魔法陣を描き巨大な火球を放つ

他の技はそのうち書きます。ソウルクレイドルの技もいくつか書きますつもりです。

ネギ&mp・アーニヤ + 使用魔法設定集（後書き）

ソウルクレイドルのようにネギまキャラたちの人形も作ってみようかな？

ちなみに作者がソウルクレイドルで好きな必殺技は殺神遊戯、くる鈴斬、インフェルノ、アクアライドです。

まあともかく1、2話入れて京都に入ろうと思います。

それでは次回をお楽しみください。

第32話 ハッピーバースデーお姫様、そういえば本当の年齢って一体いくつ…
遅くなつてしまい申す仕訳ありません

最近仕事が忙しくて…

第32話 ハッピーバースデイお姫様、そういえば本当の年齢って一体いくつ…

白花 イン カフェ

大停電の時にあった襲撃に参加していた教師や魔法使いたちは一部を除いて本国の強制送還や減給などの処罰を受けることになってしまったみたいだ。

ざまあwwwでも軽すぎる気がするぜ……

別の持ち場に行ったのであればまだ救いはあつただろう……

しかし、勝手に持ち場を離れた者たちは闇の福音を集団ランチ（返り討ちにされたが）に行ったという事で、しかも理由が「正義の為」だとか「未来の英雄のため」だとかでガンドルフィーニ先生や瞳の色が反転した状態の刀子さんたちに凹られたみたいだ。

「あゝもうあの日は疲れましたわよ……」

目の前にはテーブルに突っ伏している高音さんの姿があつた
現在私と高音さんはお互いの情報交換を行っていた。聞いているだけの情報ならもう薬中みたいな言動だと思っただけだけど私だけかな？

「お疲れですな高音さん」

「私たちが担当していた地域の魔法教師は半分近くがエヴァさんの所に行ってしまった…もう激戦区でしたわ……」

「とりあえず何か食べましょうか」

「わたしはDCSドレーピングコンソメスープだけでいいですよ白花さん」

それ大丈夫なの？ なんだか血管に直接食べればすごいことになる気がするんだけど……

「そういえば白花さん、工学部の方でメダロットの主人を募集するよ
ようなチラシがありましたけど……」

「ああそれ？ 最近数がそろってきたことだしより多くの人たちを対象にモニターになってもらおうかと思って募集したんだ。とりあえずこれといった制限はないけど、あまりひどい扱いをするようならならちよつとOHANASHIになるけどね」

「あはは．．．それって私たちでも募集できますかね？」

「できるよ。とりあえず工学部の方に申込用紙があるからそれに記入してね」

魔法の修行の片手間にしていたティンペットとパーツの量産に成功していて、それなりの数が揃えてある。メダルの方はお爺ちゃん知り合いである地質学者の二毛作タメゾウさんが日本のとある遺跡にて発見したみたいだ。さらにはるか昔、それも魔法世界ができる前から古い昔にメダロットらしきものがいたと思われる壁画も存在していたらしい……

メダルのリミッターと三原則を導入済みである。ちなみに三原則というのは

- ・ 『第1条』 わざと人間を傷つけてはならない
- ・ 『第2条』 人間に危険が降りかかるのを見過ごしてはならない
- ・ 『第3条』 第1条と第2条を破らない範囲で他のメダロットに致命傷を与えないこと

ということである。

「とりあえず、報告ありがとうね高音さん」

「ええ、どういたしまして、そういえばそろそろ修学旅行ですわね
此方はクラスの人たちの話を聞く限りではハワイよりですけど、そ
ちらは？」

「あまり聞かないけど京都になりそうな気がする……………」

「そうですか… 京都は関西呪術教会がありますから、注意してくだ
さいね」

残念だけど高音さん、あの妖怪の事だから十中八九それに関係する
ことが起きるだろうさ

そういえば京都といえば月詠と素鶴せとつる青山姉妹元気かなあ…………

京都某所

「くへつくし！！！！」

世界のどこか

「くしゅん！！！！」

居たぞ ……！！

逃がすな ……！！

ぶち殺せ ……！！

「あかん… ばれてもうたあなんでこんな時にくしゃみなんか…
誰かがうちの事噂してたんかなあ？」

再び麻帆良

まあ元気であるだろうな

P i P i P i

ん、写真メール？誰だろ…柿崎から？なんだろ…

画像を見た瞬間飲んでいた紅茶を盛大に噴出してしまったというの
はまた別のお話……

ネギ In 商店街

現在僕は刹那さんと木乃香さんと共に明日菜さんへの誕生日プレゼント選びをお願いし、街の方へ繰り出している。明日菜さんにはいろいろとお世話になっているし、きちんとしたものを渡したいなと思ひ、木乃香さんにどのようなものが良いかと相談して木乃香さんの幼馴染の刹那さんと一緒にプレゼントを買いに行った。

それにしても学園長はまだ懲りてないみたいだな…あの妖怪

「それでどのようなプレゼントがいいですかね？木乃香さん、やは

り女性というのは貴金屬類がいいですかね？」

「さすがにそういうのは早すぎると思つて」

「じゃあ、料理？」

「先生、料理できるのですか？」

「これでも料理は人並みにできますよ刹那さん。でも、料理じゃあプレゼントとは言わないしなあ…此処はストレートに現金を…」

「そらあかんで先生」

木乃香さんは苦笑いしながらカチコンとトンカチで突っ込まれる。

あ、刹那さんは少し引いてる。

「H A H A H A、ジョークですよ」

結論としては店を回りながら決めることにした。途中背後から数人尾行しているような気配があつたが、多分敵ではないでしょう。ん？

(なあせつちゃん、後ろのは誰やる?)

念話？それにこれは木乃香さん？後、あなた気配がわかるのですか？

(ちょっと待つてえなこのちゃん……ああ、ステーキ柿崎さん、くぎみー、桜子大明神みたいやで)

(木乃香さん、刹那さん念話をするときは部屋を明るくして周辺に魔法関係者に傍受されないように注意しないと)

(あーやつてもうたー(棒))

(やつちやつたー(棒))

まあうすうす感じていました。木乃香さんは学園長の孫だし関西の長の娘さんだから必然的に関係者になりますし、刹那さんは以前龍宮さんにクラスの関係者のことを教えてもらったときに(情報

料として餡蜜を提供」とある人物の護衛という事でわかりました。
この茶番も内密に” 私たちも関係者です” って言いたかったのかな？
まあそれは後にして……

(どうしますか？巻きますか？)

(別に放っておいても大丈夫やる)

(多分デートか何かと思ってついてきているだけでしょう)

(例えば？)

(うちらが付き合っていると？)

(そ、そんな、私たちは女同士ですし、護衛であって、恋人じゃあ
……)

何やら刹那さんが暴走しているようだけどあえてスルーしておきま
しょう

(まあこちらは普通に買い物しておこうやネギ君)

「 それじゃあ、逝きましようか 」

「 字が違つえネギ君 」

・
・
・

木乃香

その後はなんかコギャルに変装した桜子と柿崎、なぜか男装してい
るくぎみーが買い物を妨害してくる程度のいたずらをしてきたくら
いでプレゼントの方はしつかり買えたえ。その後広場で休んでいた
ら、ネギ君が舟をこぎだして眠ってもうた。うちの膝の上で眠って
いるネギ君、せっちゃんは微笑ましそうな笑みを浮かべて見守って
くれる

いつもビシツとした雰囲気にいるけど、こないな寝顔見るとやつぱり子供やなネギ君は…

「ネギ君も普通に生きていたらまだ小学生やもんな…」

「そうですね……」

英雄だとか、立派な魔法使いだとかのくだらない思想に叩き潰しながらも生きていつているこの子は…

膝の上で規則正しい寝息をしているネギ君の頭をなでながら考えるそうこうしているうちに明日菜といんちよと白花がやってきた何やら白花の表情は怒っているのやら、祝福しているのやら、よくわからないといった表情、それを出すまいと笑顔でいるが汗びっしよりやで……

「こ、こここのかさん、ネギ先生と膝枕……」

「こ、このかあんたホントにネギと……?」

「あ、あはは、木乃香ツタら刹那ちゃんの目の前で浮気? 過激ネエエエ」

せやからうちも覚悟を決めなあかな……

修学旅行先は京都、おそらく向こうの人たちも何か仕掛けてくるやろうな

ネギ君か、はたまたうちの身を狙ってくる

「誕生日おめでとう明日菜」

「おめでとうございます明日菜さん」

そういつてラッピングされた箱を手渡す1日早いけどまあええやろ。ちなみに中身は明日菜の好きな曲のオルゴールや

その後は、柿崎たちもプレゼントを渡されて喜ぶ明日菜、デートだ

と勘違いしてそそくさと立ち去ろうとする3人組だったが、いいん
ちよに見つかり折檻される。

こんな騒がしくも笑っていられる日常を守りたいから…
きちんと話を聞かせてもらうつから覚悟してもらうつでお父様…

第32話 ハッピーバースデーお姫様、そういえば本当の年齢って一体いくつ…

はくか は こんらんした

白花自身はネギとは関係ないと思ってはいるが目が届くうちは守りたいとも思っている。

二毛作タメゾウさんの説明はWiki参照

第33話 それぞれの休日風景（前書き）

一週間も遅れてしまって申し訳ありません。

アサシンクリードも買ってしまいました。後悔はしていません。

これで更新が遅れなければ文句が無いのですが…

第33話 それぞれの休日風景

高音さんの場合

さて、いま私は以前申し込んだメダロットを引き取りに来ています。どんな子なのかドキドキしています。

現在はクラスターのコロシウムというところで遊んでいるみたいだ。それにしてもこの魔法球が自作と聞いたときは驚きましたよ。まったく白花さんの実力は計り知れませんか。

「ちなみにどんな子なんですか？」

「私が作った子はみんないい子だよ」

「親ばか乙」

コロシウムの方へ着くと、^{ナビ}Navisさんと数体のメダロット達が喧嘩？をしたり、短距離走のような競技でお互いを競い合っていた。ちなみにナビさんの体はREF型メダロット『J・バランス』という機体を作ったみたいです。両手に紅白の旗を持っていますわ

「ヴィルおいで」

白花さんが呼ぶと一体の機体がこちらに向かってきました。その姿は白い甲冑を身に着け、右腕に剣を、左腕に盾を装備している騎士の様なメダロットでした。

「この子が私のメダロットですか？」

「そうみたいだね、私はウィルだ。あんたの名前は？」

「軽いですね、私は高音・D・グッドマンです」

「おk、高音ね。それじゃあよろしくマスター」

「ええ、よろしく」

私は手を差し出して、ヴィルががちりと握手する。

「せっかくだからロボットルしていく？…ああロボットルっていうのはメダロット同士が戦う競技みたいなものね」

「ふっふっくん、初陣だね。あたしの實力を見せてあげるよマスター」

「やる気十分ですわね。では、あなたの力見せてもらいましょう」

右腕を突きだしサムズアップし、やる気十分をアピールするヴィルそうしているうちに相手の準備ができたみたいですね
私たちと相手の間にナビさんがやってきた。

「それではこれより模擬ですが本番は真剣ロボットバトル、ロボットルを開始いたします。私世界ロボット教会永久レフェリーのナビです。ルールは簡単、互いのメダロットを戦わせ先に相手のメダロットを機能停止させた方が勝ちです。そして、勝った方は負けた方からパーツを一つ貰い受けることが出来ます。OK？」

「ルールはわかりました。その前に質問なんです、世界ロボット教会ってなんですか？」

「そんなものはありません。雰囲気づくりに私が勝手に作りました」

雰囲気作りって…真面目そうな感じでしたが割とノリがいいです
すねナビさんは

やはり、ナビさんを基もと生まれたからこうなったのですかね

「それじゃあ、お二人さん始めるよ」

「ホールドアップ！！俺が保安官だ！！」

白花さんが持ち出したメダロットなぜかホールドアップ宣言をしたメダロットはすでに中央で待ち構えていた。ちなみに相手はRAY型メダロット『ロールスター』踵にローラーが付いており、高速移動と威力の高いレーザー攻撃を組み合わせた機体らしい。対してこちらのヴェル：VAL型『プリティプライン』の持つ盾は高い装甲を誇り、剣にはメダロットを一時停止つまりは行動不能にさせる機能が付いているらしいですわ。その間は行動が出来ないため止まっている間にフルボッコにできます。加えて、高威力限定ですが相手の攻撃を跳ね返すこともできるみたいです。使える回数が少ないため、使いどころが難しいですね。

「それでも勝つのは私たちですわ!!!」

「カマーン!!! 始めるZE!!!」

「みなさん元気ですね。では始めます。それではロボトルファイト!!!」

これが、私と私の相棒の初めての戦いでした。

木乃香さんの場合

「それにしても葉加瀬ってロボット系の事は好きなんやなあ〜」
「それあもう、小さい時からの夢だったんですよ! その点では秋葉原さんには嫉妬しますよ…簡単に人工知能を作り上げるほどの頭脳を持っているのですから」

うちは今葉加瀬の研究室でリモコンを直してもらってるついでに葉加瀬野口に付き合っているところなんや
確か葉加瀬って超さんの協力を受ける前からもう茶々丸のパーツが作っているって白花から聞いたんやけど…そういう意味では博士も天才やな相手が悪かったんや

「そついえば刹那さんはどうしたんですか？」

「ん〜？せつちゃんは久々に部活の方に顔を出すって言うってたんや。どないしたんやろな？」

「幽霊部員の刹那さんが部活の方に顔を出すという事は気になる人が出来たとか？そしてその人が剣道部員だとかだったりして…」

「それはそれで面白そうやなあ」

あの神鳴流一筋なせつちゃんが男を作るかあ……なんか嬉しい気もするんやけど、寂しい気持ちもあるなあ

「木乃香さん？どうしたんですか？ぼうつとして」

「ああ、なんでもあらへん！何でもあらへんでー！！」

とりあえず落ち着こうとして、何かお茶でも飲もうとしたがペットボトルの中身はもう空やった。

ふと、机の上に合ったお茶が目に入ったのでそれもおか

「葉加瀬、このお茶貰うで」

「お茶？そんなのあったっけ？」

ペットボトルに入っていたお茶を一気に飲み干す。

温ぬるっ！！！！

「つてあ
ですか!？」

!!!!!!木乃香さんそれ飲んじゃったん

なんや?いきなり叫んでただのお茶やるこれ

「これは超さんと白花さんが遊びで作ってとんでもない効果が出た
薬なんです」

「どんな効果や?」

「それは「葉加瀬さん、このちゃん居ますか?」あ、刹那さん」

説明しようとした博士の言葉を遮り、せつちゃんがやってきた。

?!、なんやせつちゃんを見てるとなんだか体が熱くなってきたで?

「あ、いたこのちゃん実は「せつちゃん」?なんです」

うちはせつちゃんの方へ歩み寄り、

「せつちゃんのパンツはみはみさせて!!!!!!」

その言葉を発した瞬間空気が凍った

一人称チエンジ 刹那

「は?」

「せやからせつちゃんの汗ばんだパンツを…」

「言い直さないでください!!!しかもなんか付け足されていますし
なんですかそれは!!!」

お、お、お嬢様が私のパンツを……
私に来る前に一緒にいた葉加瀬さんだけ…何かやりやがったかこの
アマー!!

「葉加瀬さん何やりやがったんですか!」

「超さんと白花の合作その名も『紳士薬』を飲んじやったんですよ。
あれ?この場合は淑女かな?」

紳士薬?名前を聞いたただけなら礼儀正しくなりそうなイメージなん
ですけど

「せつちゃんの脇スーハーくんカクンカ」

いま私の脇の匂いを嗅いでいるこのちゃんの状態を見る限り微塵も
そんな効力はなさそうなんですけど!!

「これのどこが紳士なんですか!!何処からどう見てもただの変態
ですよこれ」

「へんたいやないで、仮に変態やとしても変態という名の淑女や」

「まあこんな感じの紳士へんたいになる薬なんです」

「もしもし警察ですか?」

その後、このちゃんの身柄を麻帆良警察の方へ引き渡したのは割合

ネギの場合

カタカタカタカタ

薬味：それで修学旅行は京都になったんですよ

フ・アース：そうか、実は僕も仕事の関係で京都に行くのだよ。もしかしらばったり会っちゃったりして（笑）

薬味：ハハハ、それならコーヒーを過剰摂取している人がいたら声をかけてみようかね

（罪）：なんだ、お前らリアルで知り合いなのか？

フ・アース：君たちが入ってくる前にオフ会をやったね。薬味さんと今はいないー気飲みさんと顔合わせしたんだよ

俺参上：男か？それとも女なのか？

幼女撮影型ロボKTちゃん：シヨタの絡み……ありがた。でも至高は幼女！！

（罪）：おいおい、KTちゃん口リでもシヨタでもいけるのかよ
wwwwwwww

幼女撮影型ロボKTちゃん：いいえ、私にとってはカワイイが正義なのです。でも至高は幼女！！

俺参上：駄目だこいつ早く何とかしないとwwww

薬味：ここに病院を……いや、病院が来いwwww

フ・アース：誰か、阿部さんかアニキ読んで掘ってもらえwww

春ノ：そのネタいただき！今度の夏コミのネタに使おうかな？

薬味：やめいww

フ・アース：やめいww

幼女撮影型ロボKTちゃん：それは買わざる得ないwwwニアころしてでも うばいとる。でも至高は幼女！！

その後数時間はチャットをつづけたネギであった。

別世界のどこかの悪の組織の幹部の場合

「ハア・・・」

「ああ諸君みんなの悪の幹部デユナミスだ。今日もローブの下はマップで健康法。世界を救うために暗躍し続けています。しかし、そんな私にも悩みがあるのです。昔は一大勢力を誇る私の所属する組織『完全なる世界』今じゃ構成員は数えるほどしかいません。しかもそいつらときたら……」

「はあはあフェイト様……………ふう」

「おい、賢者してんじゃねえよ曆。おい焰こいつ焼け」

「あいよブリジット、キラッ」

「あ”あ”あ”あ”！フェイト様の胸元が肌蹴た写真が……くそう、後57枚しかないのに……」

「んなこたあどうでもいい……私の曲を聞け

！！！！！」

碌な奴がいねエ！！！！！！

なんだよ！！！！57枚もあるなら一枚くらい無くなったって大丈夫
だろ、っていうか曆は焰の爆炎を受けてもアフロになっている程度
のお前のスペックがおかしい件について語りたい。あれか？お前は
普通の亜人じゃなくて未来から来たネコ型の変態なのか？後調はも
う少し練習してから演奏しろよ！！その口調の人ならギター使えよ
！なんでバイオリンなんだよしかもそれアーティファクトじゃねえ
か！！ギィギィ言ってるぞおい……

ああ、ツッコミが追い付かない……そして今日も胃薬がうまい（泣）

トントン

「ん？」

振り向くとフェイトガールズの中で無口だが常識的な環が紅茶を持
っていた。

ス……

「ああ、ありがとう環」

けなげに働くこの子を見てみると泣けてくる。暴走特急名フェイト
ガールズで唯一のブレーキ役。たまに愚痴を聞いてもらっているの
はご愛嬌。ちなみの此処にいない栞はフェイトの盗撮、下着を盗ん
だり嗅いだりしている程度の変態だ。あいつのコーヒーはうまいの
に……残念だ

そんな日常の悪の組織だが、今日も世界を救うために頑張っています。皆さんも理想の部下に恵まれるように頑張ってください。

おまけ n 動を見てて思いついたネタ

裏世界で鳴らした僕たち魔法部隊は、濡れ衣を着せられMMに逮捕されたが刑務所（夜の迷宮）を脱出し地下に潜った。

しかし、地下でくすぶっている様な僕たちじゃない。筋さえ通ればその時の気分次第で何でもやってのける命知らず。不可能を可能にし、歪な正義を粉碎する、

僕たち、特攻野郎Nチ^{ネギ}ーム！

僕はネギ・スプリングフィールド、通称”薬味”だ

独自の魔法と変装の名人（女装であるが）

僕のような女性にしか見えないほどのシヨタでなければ（いろんな意味で）百戦錬磨の兵^{つわもの}どものリーダーは務まらない

うちは近衛木乃香、通称”お嬢様”だ

自慢の天然で一部の趣味の人はイチコロさ

衣服ひん剥いて、あの子のパンツから賢者しているときの写真も撮ってきたるで

私はネットアイドルの長谷川千雨、通称”ちうたん”

チームの（自称）常識人一点

情報収集はコスプレと変態な従者^{ナヒコ}でお手の物だ

おまちどう、フェイト・アーウェルンクス、通称”クレイジー3（テルティウム）”

魔法使いとしての腕は天下一品

人形？カフェイン中毒者^{ジャンキー}？だからなんだい？

秋葉原白花、通称”メダロット女史”機械工学の天才だ

私の邪魔をするなら造物主^{ライフメーカー}すら殴り飛ばしてやるよ。……でもトモエやお姉^{ナエ}ちゃんたちは勘弁ね

僕たちは間違った正義が蔓延する世の中にあえて挑戦する。
頼りになる神出鬼没の

「「「「特攻野郎Nチーム!!!」」」」

理不尽な目にあったらいつでも言うてね

第33話 それぞれの休日風景（後書き）

やっちゃったZE

さて次回はいよいよ修学旅行編です。原作と違った月詠も加わって
どうなるのでしょうか？それではお楽しみに…

ちなみにナビの機体である『J・バランス』は妨害重視のメダロツ
トです。

行動誘発やら、メダフォース制御などが使えます。

第34話 修学旅行編 出発前から不安ばかり(前書き)

始まりました修学旅行編

後、遅くなってしまって申し訳ありません

第34話 修学旅行編 出発前から不安ばかり

ネギ

数日後の修学旅行の準備を済ませて部屋で明日菜さんたちと談笑していた時に、突然携帯から学園長室に来るような連絡が来た。もう11時過ぎなんだけど…

そして学園長室

「それで何の用ですか？学園長」

クソが…もうすぐWORKING!!が始まっちゃうじゃないかこんな時間に呼び為すなよ妖怪爺が…

「ネギ君何やらものすつごく失礼なこと考えてないかね？」

何やら脂汗を書きながらあたふたしているがどうせわかって聞いているんだろうな……

だったらはっきり言ってやるよくそ爺

「いえ、見たい深夜アニメを見逃すかもしれないのでさっさと終わらせてくれないならオレはこの学園ほしを破壊し尽くすだけだ」

「フオオ!!何を言い出すんじゃないネギ君!!」

「ご安心を、要件を3行以内にまとめてくれてさっさと終わらせれば何も起こりませんよ」

「す、過ぎてもうた場合は……」

恐る恐る訪ねてきた学園長に向かって僕は口端を釣り上げた笑みを向けながら……

「今度、まほネットにぬらりひよんの頭部をすりつぶしたものが並べられますね」

「ひいひい！！勘弁してくれんか」

「要件を……早く^{ハリー}」

「京都行くついでに

関西呪術教会に特使として

新書渡してきて」

「うち、きちんと三行でまとめやがったか……」

「めんどいのでパスという選択は？」

「いやいや、これも東西の中を良好にさせるために頑張ってくれんかの？」

駄目だこの爺、もしかして呪術教会の人たち舐めてんのか？

いくら関東魔法協会のバックにMMが付いているとしても相手はこちらが介入するまで日本を守護してきた組織だ。そこにまだ子供の僕に親書を渡しに行く……しかも修学旅行のついでとか相手方を挑発しているようなものじゃないか。

妨害なしで修学旅行を送れるのは無理って所か……また英雄になるための試験だとかなんとかだろうな

それにしても呪術教会が使う符術とかの魔法は永久石化解呪のヒントになりそうで興味があるから関西とはあまり関係を悪くしたくないんだけどなあ

「はいはい、わかりましたよ。しかしそれだと向こうの妨害もあるんじゃないですか？」

「まあ此方の魔法先生がたちが来ることを拒んでいるが、大した問題じゃなからうに」

はあ、京都の観光したかったんだけどこりゃ無理かな……

魔法球『クラスター』 In 白花

『という事なので木乃香さん、刹那さん気を付けてくださいね』
「わかつたえ、ありがとなネギ君」

以前ネギに渡した通信機からの報告にそれぞれは呆れを覚える
ちなみにここにいるのは3-Aの魔法関係者が集まり駄弁っていた
ところだ。

「これって関西の方はどう思うと思う？」

「”よろしいならば戦争だ”でしょうね」

刹那もネタを使うようになってきたなあ……

まあそれは置いて、気になることを聞いておこう

「所でネギ先生、親書の中身はご確認されましたか？」

『あつ白花さんいらしていたんですか』

「ええ、修学旅行について木乃香たちといろいろ相談していたところ
です。今回はかなり荒れそうですから」

『少々お待ちを………』

親書を読んでいたのか、しばらく静かであったが突然ズガンツ！と何かを叩きつぶしたような音が通信機から出る。

「ネ、ネギ先生？どうしたんですか？」

『ああ、すいませんあまりにふざけた内容だったので叩き潰してしまいました』

やっぱり原作通りあれか？学園長の『部下を抑えられんとは何事じや』って奴か？

ていうかム力つくからって叩き潰しちゃ駄目でしょjk

『まあ向こう（学園側）には紛失してしまいましたと言っておきましよう』

「呪術教会の方は？」

『あまりに舐め腐った文章だったので破り捨てましたと』

「そか、まあこっちも手助けするから困ったらいつでも頼ってね」

『ははっありがとうございます。それでは失礼します』

通信機を木乃香に返してみんなを集める

「さて、修学旅行だけれど何か対策でも練っておく？」

「対策あったってどんな？」

「呪符やらなんやらの魔法具を持っていくとか？」

「そんなの『倉庫』から取り出せばいいだろ」

ああ、確かに千雨の言う通りかも……

ちなみに『倉庫』というのは魔法球を指輪程度までに小型化したものでそこからいつでも取り出せるという仕組みの者だ。

「とりあえず気を付けるべきことは相手の妨害だな。どのような規模で、どんな風に妨害してくるかよくわからんからな……この中で呪術教会の連中の使う魔法を知っているものは？」

エヴァの言葉を聞いて木乃香と刹那と私は手を挙げる

そういえば呪術関係は教えてなかったっけな

エヴァは侵入者撃退で知ったのかな？

「刹那頼む」

「はい、私は剣士なので詳しくは知りませんが『呪符使い』には注意しておくことが必要です」

「呪符使い？」

「はい、彼らは陰陽道を基本としていますが、呪文を唱えている間無防備になるのは西洋と同じです。それ故に上級の術者は善鬼と護鬼という従者のようなものに護衛をして戦っています。呪符使いが使用する魔法は符という特殊な紙で様々な事が可能です。」

そういつて刹那は懐から人型の髪を取り出して呪文を唱える
確かあれって式神だっけ？

『ちび刹那！参上、お嬢様とちゅて「帰れ」このままでは終わらんぞー』

「とこれが式神の一種です。他にも動物に化けるものもあります。後、特殊な配置で効果を増幅させることも可能なので特定の場所に罫として呪符が配置されている場合もありますので注意してください
い」

呪術教会本部の前の鳥居に配置してあった無間方処の呪法なんかも
それになるかな

「それでは各自……その場に起きたことに臨機応変に対応すべし以上」

さーて、京都といえば八橋だな

去年も行ったが白花の進めた蕎麦屋はうまいぞ

お父様にはOHANASHIやな

それを言っただけで各々が駄弁りながら魔法球の外へと出て行った。その中で刹那はボーっとしていたと思っただけで再起動して……

「えちよ、もう少し緊張感というものを持った方が」

「見えない敵に気を張ってちゃ疲れるだけだよ刹那。軽く警戒して起きたら全力で排除でいいんぢやマイカ」

メダロット達？誘って乗ったのはトモエだけだったZE

しゅんか〜んせ〜ん 車内 In 白花

「ゆけいHDMGゆ〜なにダイレクトアタック!!」

「甘いぜパール罫カード『クローン複製』で同士討ちだ!!」

車内ではパールとゆうーなお菓子を掛けた戦いを繰り広げられているのを横目に見つつ窓から見える景色を楽しむ。ちなみに私は6班だ。

「ま〜た京都だ〜」

「ああ、とても楽しそうなマスターマジ最高WWW」

「ZZZZZ」

隣に座るエヴァはご機嫌に変な歌を歌っている。寺などが好きなエヴァにとっては京都はまさに聖地なのだろ。

去年に行った時なんか大はしゃぎで大変だったよ。清水寺のあたりなんかフハハ！とか大声を上げて係員に注意されてたっけなあ
前の椅子をまわしてこちらに向き直っている茶々丸と千雨

千雨は着くまで起こすなという事で熟睡中

茶々丸は早速エヴァを録画している。今から録画してたらメモリが持たないんじゃないか？

「エヴァ又はしゃぎすぎて係員にお世話になんないでね」

「わ、わかつてる」

去年の失態を思い出したのか顔が少し赤かった。前は10年以上ぶりに外に出てテンション青天井だったんだろうから今回は大丈夫かな？

そんなとき突然甲高い悲鳴が上がった。

悲鳴の方に視線を向けると何やら魔力を帯びた蛙が大量発生していた。

「ん、なんだ？もう着いたのか？ってカエル？」

騒動に目を覚ました千雨は蛙の方に視線を向ける

そして何やら此方の方へ向かう小さな影をはたき落した。

それは手紙を加えたツバメで叩き落されてもとの紙型に戻った

「蛙の次はツバメか…これが関西の妨害って奴か？」

「多分ね……ていうか千雨ツバメって時速50キロで飛んでいるのになんで叩き落とせるの？」

「なんかできた」

「長谷川、お前もついに人外クラスか……」

「何言つてやがるこんな常識人を捕まえて」

お前のような常識人がいるか！！

そんな事を思っていたらネギ先生が息を切らせながらこちらの方へやってきた

「あ、皆さんすいません親書を取り戻してもらって」

「あれ？親書って粉々にしたんじゃないですか？」

「一応形だけで中身はどこかで燃やすつもりです。ちようど言ていき訳もありません」

「それにしても気を抜きすぎじゃないですか？ネギ先生」

「ははっ面目ありません」

一方刹那は普通に用を足しただけのようです。

「な、なんなんやあのメガネの嬢ちゃんうちの式神をあつさり叩き落とすなんて何者や……」

新幹線の販売員が動揺しているのもまた別のお話……

そんなこんなで京都到着

清水寺

「京都　！！！」

「これが噂の飛び降りるアレ」

「誰か飛び降りろ　！！！」

「では拙者が……」

「おやめなさい！！！！」

最初っからハイテンションな3-Aのクラスメイト達
でもいくらなんでも飛び降りろはないでしょjk

「イケシキダナー」

「そうですねマスター」

エヴァはのんびりと景色を楽しんでいるようだ。これなら大丈夫だ
ろう

そういえば昔は下の柵はトドメ指す用に用意したって考えてたなあ
そんでそのあと飯屋を探して月詠にあっただっけ……今頃何して
いるかな

次に向かったのは恋占いの石

目をつむって向かいにある石にたどり着ければ恋が成就するという
逸話があるものらしい

それを実行しているのはいいんちよと本屋、まき絵の三人が挑戦し
たみたいだ。

周りは誰がつけるかかけているみたいだけど新田先生に見つかった
らどやされるぞ……

「今こそ雪広流合気柔術最終奥義を使う時ですわ!!」

おいおい、こんなのに最終奥義なんて使うなよでもどついう技なのかは気になるところだな…
何やら両手を合わせて前へ突き出して…

「ヘル・アンド・ヘブン!!」

おい柔術はどこ行つた

そんな事を思っていたら薄目を開けて石の方へ目指していたまき絵と一緒に消えてしまった。

あわてて駆け寄ってみると落とし穴に嵌ったみたいだ。しかもまた蛙が入っているというおまけつき

ちなみに本屋は周りの誘導によって石までたどり着けたみたいだ。

音羽の滝

健康・学業・縁結びのご利益があるという滝である。大半は縁結びの方へ殺到していったが何やら変な匂いがした。少なくとも水ではない何かが……

「この匂いは…酒だな」

「なんで酒が流れているんだよ」

「知るか」

そういつつエヴァは龍宮と一緒に水筒に組んでいる始末である。酒飲むならばれないようにしてよね

靈感がありそうな味だとか言って飲みまくったクラス名とは酔いっぷれる始末。ネギ先生が屋根の上のぼり酒樽からホースで流れているのを見つけたようだ。騒ぎを聞きつけ新田先生としずな先生、瀬流彦先生がやってきた。

「ネギ先生、いったい何の騒ぎですか!？」

「あつ新田先生音羽の滝の水にお酒が交ぜられていたみたいなんです」

「な、なぜお酒なんかが…生徒たちは気付かなかつたのだろうか？」

「靈感がありそうな味だと言つてがぶ飲みしていました」

「みんなお酒の味なんて知らないだろうからねエ」

「む、しかたないですね。ネギ先生、瀬流彦先生体調を崩された生徒を頼みます。私は事務所でバスの手配をしてきますので」

「すいません、新田先生」

そういつて新田先生は清水寺の事務所の方へ向かい、残された教師組は酔いっぷれた人たちの介抱をしつつ、飲んでいなくなつた人たちに協力を仰ぎバスの到着地点まで誘導してもらつたみたいだ。

私？健康の方を飲んでいたら大丈夫でしたが何か？

「なあせつちゃん、関西の人の妨害つてこんな嫌がらせばかりなんかな？うちちよつと悲しゆうなつてきたわ」

「ノーコメントで…」

若干呆れたような声色でつぶやく木乃香と刹那であつた…

第35話 修学旅行編 夜 気になるあの子もメダロッター（前書き）

今年最後の投稿どうか楽しんでいただけると幸いです。

第35話 修学旅行編 夜 気になるあの子もメダロットー

嵐山旅館 In 白花

「シロちゃん、うえへへ」

「白花、シロちゃんって誰だ？」

「私の昔の呼び名、子供の頃の夢でも見ているのかな？」

酔いつぶれた生徒たちをバスへ押し込み旅館の方で各々の部屋に寝かしてやっと思

音羽の淹の酒を飲んで酔いつぶれた千雨は昔の呼び名で読んでくれている。

懐かしいなあ…千雨が引越して麻帆良に住み着いてからその名前と呼ばなくなっちゃったんだよね

トントン

「どしたのザジさん」

「（・・）／」

ザジさんが時計の方を指さしていた。そして、時間を確認するとすでにうちの班の入浴時間になっていた

「（・・）？」

「ああ、はいはいわかったから裾を引っ張らないでね、それじゃあ温泉の方に行こうか」

「私も行こう。茶々丸、トモエ、長谷川を頼むぞ」

「わかりましたマスター」

「あいよ」

心の洗濯中

「いい湯だったね」

「さて、風呂上がりの一杯でも…しまった、つまみが無い」

「飲むならばれない様にしろよ」

本来の年齢ならエヴァは飲酒しても問題ないから大丈夫かな？

「そういえば刹那は？」

「さつき風呂入りに向かったみたいだ」

「この時間だと教師と鉢合わせるんじゃないか？」

「うん、問題ないな」

つまりは原作の様に刹那がネギに襲いかかる…あれ？今のネギに襲いかかったら返り討ちにされないか？でも刹那も強化されているし……同士討ちになっちゃったりして

「ひゃああ〜っ！！！」

「このちゃんになにするんや、エテ公が！！！」

「わっ！！刹那さん、サルを斬るのはいいけど私たちの衣服は切らないで！！！」

脱衣所の方から悲鳴が上がるが、続けて聞こえてきた声で判断すると無事にサルたちは撃退できたのだろう。

「向こうは大丈夫みたいだな」

「むしろ、やりすぎているみたいだね…」

おおおおおお

P i ~ にネギをぶっ指すぞ

この着信はネギ？そう思いながらエヴァをひん剥くのを中断して電話に出る

「どうしましたネギ先生？」

『木乃香さんがさらわれました！』

！？ 木乃香って結構強くなっているから大丈夫かと思っただけだ…甘かったか

「今どこに」

『敵を追いかけているところです。いつもの速度なら追いつけそうなのですが、神鳴流剣士たちの妨害もあって距離を詰められません。つてうぜえぞ雑魚どもが！あ、すいません話の途中に、それで応援をお願いできないでしょうか？』

「神鳴流が！？」

ネギは西の情報をある程度持っているので神鳴流の存在も知っていたが、なんで神鳴流が出てくるんだ？原作ではこんな展開はなかったはずなのに…

……考えていても仕方ないか

「すぐにそちらに向かいます！それまで持つていてください」

『その前に倒してしまつかもしれませんが、かまいませんか？あ、水がゴボボボ…』

「ちょ！？ネギ先生？ネギ先生！！」

何かあったのか突然電話が切れた。水がどうか言っていたから多分電車の中だろう

「どうした白花」

「木乃香がさらわれてネギたちが追っかけているみたい。私とトモエが向かうから留守番よろしく！」

「了解です白花さん」「わかりましたお嬢」

「ちよつと待て何故私たちが留守番なんだ!!」

「マスター拠点を開けている間に罠を設置されてはこちらが不利になってしまいます。敵は複数犯のようですし」

「エヴァの悪名が関西にも届いているなら下手に手を出せないと思うし抑止力にもなるからここにいてくれないかしら…」

「うっっ、わかった…無事に帰ってこいよ」

その言葉に頷き私たちは旅館の窓から京の町へと飛び出していった。

・
・
・
飛び出した後はビルの屋上から屋上へと飛び移りながらネギが戦っている場所へと向かう

「このまま行けばあと数分で到着するぜ!!!」

「うし、急ぐぞ!!」

一緒に来ているトモエの脚部は隼になっているのでちよつとハイになっっている

しかし……隼で飛行するトモエをちらりと見てため息

「風の翼でも作っておけばよかつたかな……」

「ヒハッ！！あれかい、あれならお嬢も一緒にhighになれるぜ
！！！！」

帰ったら手を付けてみよう……トモエのこれは置いて……
目的の場所までもう少しといったところで……

上空から数十本に及ぶ『石の槍』が殺到した

「お嬢！！」

「大丈夫、防ぎ切ったから」

「ふむ、魔力量にしてはなかなかの強度みたいだね」

立ちふさがる少年はある意味この旅行の最大の敵といってもいいか
もしれない人物、完全なる世界所属のフェイト・アーウェルンクス
であつた

「あいにくあんたみたいな豪勢な障壁はないんでね、工夫をすれば
この通りって感じだね」

「障壁を圧縮して強度を高めるか……確かに有効な戦法だね。ところ
で君は僕とどこかで会わなかつたかい？」

「何？戦闘開始前からナンパ？」

「いや、割とマジで」

うーん、フェイトと会っているなら結構印象に残ると思うんだけど
……原作でも上位に位置する人物だし

あれ？でも少し前に似たような容姿の人でコーヒーをがぶ飲みして
いる女の子がいたけど

……もしかして

「ウサオちゃん喫茶の黒髪の女子に着せ替え人形にされていた女の子？」

「正確には男の娘になるね。ああそうか、あの時の」

「なんですか？お嬢、ネギさんと同類の人ですか？」

「そうかもね」

「そうだね、割と楽しんでいるよ。ただ、下の妹はちょっと冷たいんだけどどうしてかな？」

そりゃ常識を持っている娘なら女装趣味の兄に対してはつめたくもなるのかな？

まあ、それは置いて…

「知り合いのよしみで通してくれないかな？」

「悪いけど仕事なんでね、いくら知り合いだからって通すわけにはいかないよ」

「2体1ですけど、まさか卑怯とは言いませんよね？」

「問題ないよ、しかしメダロットがこっちにいるとはね」

「え？」

おいちょっと待て、なんでフェイトがメダロットの事を知っているんだ？

「メダロット転送」

フェイトの目の前に光が集まり一人のメダロットが現れる。

黒く、そして丸みを帯びた鎧のような四肢
鋼鉄の鎧をまとう北の聖獣玄武を模したメダロット

GEN型機体名『バサルト』

「おおおおお呼びでしょうかマスター」

「ロボットだ、やるぞグラン」

相手方は準備OKか：ならこっちもやるしかないな

「トモエ」

「はい。此方もOKです」

まったく、こっちは忙しいってのに…

相手は防御型普通なら僚機を守るようなメダロットだけど…これは
ゲームじゃない何をしてくるかわからないし注意が必要だな

「そちらの準備もできたみたいだね」

「ああ、じゃあやろうか」

「ロボットファイト!!」

先に動いたのは相手のバサルトであった。トモエに向かってシヨル
ダータツクルで一直線に突っ込んできた。

「トモエ回避に集中しろ」

「了解」

鉄柵に激突したみたいだが、ぶつかった鉄柵は無残にひしゃげてい
た。

あんなの当たったらひとたまりもないな。

「このおおおー!!」

隙を見てバサルトに斬りかかるトモエ、しかし堅牢な装甲の前にわずかにひっかき傷をつける程度であった。

「硬い…」

「うおおおらあああああー!!」

体勢を崩しているトモエにバサルトが思いつきり殴り飛ばされる。

「トモエ!!」

「隙ありだよ」

「?!っちい」

トモエの指示に集中しているあまりフェイトの『石の槍』に見舞われる

やっぱりメダロットだけがやっているわけにもいかないか…テラカド君いないし…

「レギオン!!」

「このくらいじゃあ傷つけることもできないよ」

弓兵や剣兵で仕掛けるもダメージが無い

やっぱり固い…まったくメダロットも硬いし、マスターの方も硬い…両者が性質は似たようなものなのかね

「ヴィシユ・タルリ・シユタル・ヴァンゲイト 小さき王、八足の

蜥蜴、邪眼の王、その光、わが手に宿りし災いなる眼差しで射よ」
「なんの！エストウス・レグナス・アエストウス、邪眼の蛇よ、その首刈取り厄災を除ける盾となれ！！」

石化解呪ではなく、石化返しの呪文・・・ちょうどいい実験台だ
成功してくれよ…！

「石化の邪眼！！」
「災厄返しの魔鏡！！」

眼前に出現した透明な障壁に石化の邪眼が当たると邪眼の光は辺りに拡散し、光が当たった壁は石になっていく

「全くそんな呪文聞いたこともないよ…」

「使えそうだから作ってみた。以上」

「全く大したものだねキミは」

どういたしまして…といってもフェイトはどこも石化していないな。
まっ当たり前か

石化程度でどうにかできれば苦労しないっての

「うがああああああア！！！！！！」

叫び声の方を見ると、バサルトが片膝をついているトモエの頭部を潰そうと両手を合わせて体重をかけて振り下ろす

「横だトモエ！！」

私の言葉に反応してサイドステップをしてバサルトの攻撃をかわす。
思いつきりやりすぎたのかバサルトは体勢を崩している。今がチャ

ンス…！

「射抜け！トモエ」

「おおおおおおおおおおおお！くたばれ鈍亀！！」

弓を引き絞りバサルトの目に突き刺さる

「がああああああ．．．」

バサルトは倒れ、メダルが排出される。これが機能停止したあかしだ。

「まさか、グランがやられるとは」

「うちの子舐めんなや」

「今回は引かせてもらうよ。雇い主も撤退したみたいだし」

「その前に聞きたいんだけどさ、メダロットって魔法世界では普通にいるの？」

「ほう、僕が魔法世界出身だとよくわかったね」

「鎌掛けただけだよ」

嘘だけどね、原作知識ウマ

「そうか…君の問いの答えだけど『NO』だ。アリアドネ のあたりでメダルは発見できていてもそれをどう使うかは理解できていないみたいで音、メダロットを扱っているの僕たち完全なる世界くらいだよ」

「いやに饒舌じゃないか、良いのかい？そんなにべらべらしゃべっちゃって」

「なに、現実世界でメダロットを作り出した秋葉原博士にはこれく

らしいのことは言ってもよいと上司がね。後楽しませてもらった礼だよ」

「…私たちってば有名人？」

「組織ではわずか数年でメダロットを仕上げた天才たちと結構話題になっているよ」

「そりゃどうも」

敵対組織に評価されるってなんだか複雑な気持ちだ……

「それじゃあ失礼するよ、できればまた戦いたいものだね」

「ロボットなら大歓迎なんだけどね……」

「ふふ、ではまた会おう」

そういつてフェイトは消えた。フェイトにいた場所には小さな水たまりがあるだけであった。

「あ〜くそ、向こうへは間に合わなかったか……」

「その割にはうれしそうですね」

「ん〜そうかも、ロボットやれてよかったからかな？」

やっぱりこの世界に転生してもメダロットは好きなんだな私は……

実際にやると手汗握るものだな…中盤はロボットそっちのけで戦っていたけど

さて、ネギ先生たちには増援に行けなかったこと謝っとかないとなあ

第35話 修学旅行編 夜 気になるあの子もメダロッター（後書き）

オリジナル呪文設定

災厄返し の 魔鏡：状態異常系の呪文を跳ね返す円形の障壁を前方に展開し跳ね返す魔法。ただし、欠点も多々ある。まず前方にしか転回できないため、石化の息吹など広範囲の呪文を防ぐことが出来ない。さらに反射時に拡散してしまうため任意の場所に反射させるには技術がいる。

後、バサルトは本来、防御と体制破壊しかできませんが漫画版のメタビーはぶん殴って相手を倒していた（そして殴った腕のパーツは壊れたけど）みたいなので通常の格闘技を使っても大丈夫だろうと思いはんなふうになりました。

第36話 修学旅行二日目 千草の憂鬱、白花たちの状況確認（前書き）

皆さんあけましておめでとございます。今年もよろしく願います。

と、正月中旬に書き上げたかったけどこのまです！

マジですいませんでした。

第36話 修学旅行二日目 千草の憂鬱、白花たちの状況確認

??? In 千草

「くそ！なんて様なんだ貴様ら！」

隣の部屋から怒鳴り散らしている無能がうるさい……

部屋の真ん中あたりを陣取り、蛸のように顔を真っ赤にしている協たす力者の頭目……確か木原何とかやったっけか……

何年か前はそれなりにいい地位にいたらしいんやけど、あの鬼神にケンカ売って惨敗してからどどん落ち目になっていったって最後にはどこかに逃げたんやけど

「我ら神明流はあのような邪悪な存在を許してはいかんだ！」

もうかれこれ数十分、九官鳥のように同じような事ばかり繰り返す木原はんにはうんざりや

ちなみに内容を簡単に説明すると……

- 1・麻帆良なんて雑魚だろ。そんなに手間取るなよ
- 2・無能な長の言う事に耳を貸すな
- 3・神鳴流サイコ W W W W
- 4・俺たちツエー W W W W W

を延々と繰り返しているようなもんやな

まあ長が無能なのは同意やけど

「相変わらずうるさいやつちゃの〜」

「それだけしかできないんじゃないかな？小太郎君」

「なんやあんたらまだ起き取ったんかいな、さっさと寝て体力回復しといたほうがええで」

今回の仕事に雇ったの犬神小太郎と新入りでカフェイン中毒者のフ
イト・アーウェルンクスや

本当やったら、この二人と今、外で素振りをしている月詠の三人で
襲撃やらなんやらを計画してたんやが

あいつらが突然やってきて「呪術教会を正すためにキサマラを使っ
てやるありがたく思え！」とか何とか言っ居座りおったんや

今思えば月詠はんの警告を聞いておくべきやったな…最初の方はた
だで使える駒としてみておったんやけど、こいつら使えなさすぎや
壁にもならへん。

むしろ邪魔や

「戻りましたよ千草さん」

「ああ、お帰り月詠はん」

外で鍛錬をしていた月詠はんは隣の部屋まで聞こえてくるバカども
の説教に苦虫を潰したような表情になってるわ

「あの人たちまだあんなことしているんですか……変わりませんね」

「そういえば月詠はんは鶴子様んとこに着く前はあいつらの道場に

いたんやっけ？」

「ええ、ちょっといじめられていた時もありましたから。あいつらの顔を見ていたら…ばらばらにしてしまいたいそうやなあ…」

「変わっているで月詠はん」

月詠はんは自称多重人格らしく、とりあえずうちは『陰月詠』と『陽月詠』で分けて判断している

両者の判断の仕方が一番わかりやすいのは口調で『陽』の時は標準語を、『陰』の時は関西弁をしゃべるくらいや

ちょっと変な子やけど実力は教会内でもトップクラスの傭兵や

件の鬼神（鶴子さま）に神鳴流を教わり免許皆伝後、世界を旅して回って数多くの仕事をこなしてきたとかなんとか……

そんな有名な人を雇えたのは鶴子様のおかげや

鶴子様はうちがクーデターを起こすことを見抜いていて、それを承知で月詠を紹介してくれたんや

正直意外やった…あの人はこういう事には興味が無いと思っていたが、さすがに関東の連中に好き勝手されるのが頭にきたのだろう

『あの阿呆（詠春）にきついのをお見舞いしてやりなさい』とも言つてたし…

きついのどころか呪術教会を乗っ取るつもりなんやけどなあ…

剣術に月詠はんだけが使える固有の魔法？のようなもの…西洋の魔法とも違ってるの焼けれど回復、強化、攻撃と汎用性の高い魔法み

たいや

「それじゃあ、汗流してきますね千草さん」

「わかったわ」

うちらは決して弱くはない…だけど警戒するべき要素は多々にわたる

ツバメの式神をはたき落すメガネの女子生徒、新入りが戦ったという剣士と機械人形（新入りに聞いたらメダロットとかいう奴やっただけ？）、杖をぶんぶん振り回す子供先生、式返しの剣士、バーニング幼女、後お嬢様の護衛の神鳴流剣士やな…

極めつけは青山姉妹の弟子、こいつが要注意人物や…

ていうか麻帆良はこのクラスもこんな人外魔鏡なんかな？

そんな学校は嫌やわ…

・
・
・
白花 In 嵐山旅館

「へーつくし！…！」

「（ ）（ ）」

「なんだ？朝っぱらからでかいクシャミだな…風邪か？」

起床と同時にくしゃみ…これはどこかで私の噂をしているに違いない…

ジョースター貴様見ているな！！

某所

「へっくし」

「千草姉ちゃん風邪か？」

「ちゃっわボケ」

よしこれでどこかの誰かはクシャミしているに違いないだろう…
さてもう一眠り……

「もうすぐ朝食の時間だ。とっとと起きろ馬鹿」

「いやぶ〜まだ眠いのでお休み〜」

「あ、おい白花起きろ」

うるさいにゃ〜エヴァは……何人たりとも私の眠りを妨げることは
…っん、まあできるけどな

「ならば仕方ないな…」

やっと諦めてくれたか…

「よし、そのまま寝ているよ」

言われなくとも寝ておくさあ

つて、ん？なんか布団にもぐりこんできて後ろから抱きしめられる

「ハアハア…」

なんだか息遣いが荒い、首筋辺りに息がかかる
腕はがっちりと抱きしめられて動けない

この展開ってM A S A K A・・・

「いただきます」

喰われる
！！！！

両方の意味で喰われる
！！！！

え？ちよっ！？こんな朝っぱらから何発情してんの？バカなの？死ぬの？

引きはがそうにも動けない！HELP！！HELP！！

「ん、ちゅっ」

「あ、いや、やめえ」

首筋に吸い付いてきて

吸われる、血と一緒に何か理性のようなものも一緒に奪われる！

「よし覚めたな。さっさと食堂に行くぞ」

「はあはあ……………へ？」

「聞こえなかったのか、食堂へGO。それとも続きがしてほしかったか」

……………なんとという生殺し

いや、助かったんだけどさあ

「眼福、眼福」

「最高画質での録画完了」

「（（（人）」

とりあえず馬鹿どもに拳骨をお見舞いしてやったのは「愛嬌

キングクリームゾン

さて、朝食を食べ終えて自由行動になる

6班のみんなは特に行きたいところはなかったので普通に寺を回ってみることにした。

奈良公園

辺りにシカの姿がちらほら見える

「ほぐらせんべいだよ、って右にも左にも鹿!? しまった囲まれた!! HELP!! HELP」

ついで早々、鹿せんべいを上げて鹿に囲まれる…というか埋もれているトモエ

ははっ、何やってんだか…

「トモエ、そいつらは油断しているとすぐ囲まれるから注意しておけよ」

「おせえよ!! もうとっくに囲まれてるよ! そして助けて!」

「だが断る」

おいおい…

でもこのままじゃトモエが獣臭くなっちまいそうだしそろそろ助けるかな

「ホントに鹿がいますね」

ん? この声…ネギ先生?

振り返るとネギ先生と5班の面々の姿があった。向こうも奈良公園を回るんだ…

あ、ネギ先生が噛みつかれてるわ

「あ、白花ちゃん…6班もここを回るの？」

「ん、まあね。よかつたら一緒にでもよろしいかな？」

いろいろ聞きたいことがあるし

「構いませんです。その代りちょっと協力してほしいことが…」

「のどかの恋路に協力してくれないかな？」

「協力つたって何すればいいのよ」

「いえ、ただ二人きりの状況にしまえばよろしいです」

二人きりにねえ…

「それなら私たちと会ったので少し話してくるといっことはどうでしょう」

「うへえい！？茶々丸さん!？」

「それでいつか。おーいアスナ！刹那さん!」

その後、私たちと少し話してくるといっ事で宮崎とネギ先生の二人きりにすることに成功した。

「さて、付けるわよ」

「ガッテンです！」

おいおい…

でも、二人に意識が言っているなら此方の内緒話はあまり耳に入らないかな

「それで明日菜、刹那さん、敵はどのような人たちでしたか？」

「相手は眼鏡の呪符使いに神鳴流剣士（雑魚）数人に月詠という少女です」

月詠か……鶴子さんに師事して皆伝後に世界を回っているって聞いたけど。聞いてる様子じゃ元気そうだね

「でも、私たちだけで何とか撃退できたわよ」

「それでもまだ隠し玉を持っているかもしれないから注意が必要です。そちらは？」

「私の方では白髪の西洋魔法使いが一人出てきたんだけど…かなりの実力の持ち主だった」

「まじで？」

フエイトについてかくかくしかじか

「アーウェルンクス…なんでこっちに来てんのよ」

「釣り針にコーヒー豆を付けたらつれたりして…」

「ねーよ」

うん、無いね……ないよね？

「そついえば明日菜はどのような戦い方をするんですか？徒手格闘？」

「修学旅行前にネギと仮契約してね。それで出る大剣を使って戦っているの」

なるほど仮契約か……どっちでしたんだろう

「今いえることといえば各自要注意人物の月詠とフエイトには注意することだね」

「そついえばのどかとかはどうなったの？」

「どうやらのどかさんは告白して立ち去ったみたいですが、ネギ先生は倒れてしまいました。どうやら知恵熱の様です」

知恵熱っておい…

それにしても月詠か、運よく当たることがあるなら全力で戦ってみたいものだな

第36話 修学旅行二日目 千草の憂鬱、白花たちの状況確認（後書き）

仮契約カードに関しては原作通り『破魔の剣』です。

後書きが寂しいのでこんなことを始めてみようと思います

あの人ならこのメダロットを使いそう

とりあえず今回からこんなことを考えてみました。

様々な作品の登場人物たちがメダロットを持つならこれになるかな
…と思うものを書いていこうかと思えます

もし、『いや、こいつならこれのが合うだろ』と思う人は感想に入れてくれればうれしいです。

まず初めにリリカルなのはから

高町なのは：WEA型『ビーストマスター』

フェイト・テストアロツサDOG型『シアンドッグ』

理由：なのはは全力全壊、フェイトは使い魔関係で思いつきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3202v/>

魔法先生ネギま 魔法と転生だ！メダロット

2012年1月12日01時59分発行